THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十月號

第三十一年第十一號 第三百三十六號

嬉しい中にも嬉しい事は
しらが赤毛染ナイスで
染めた
美はしい黒髪の艶。

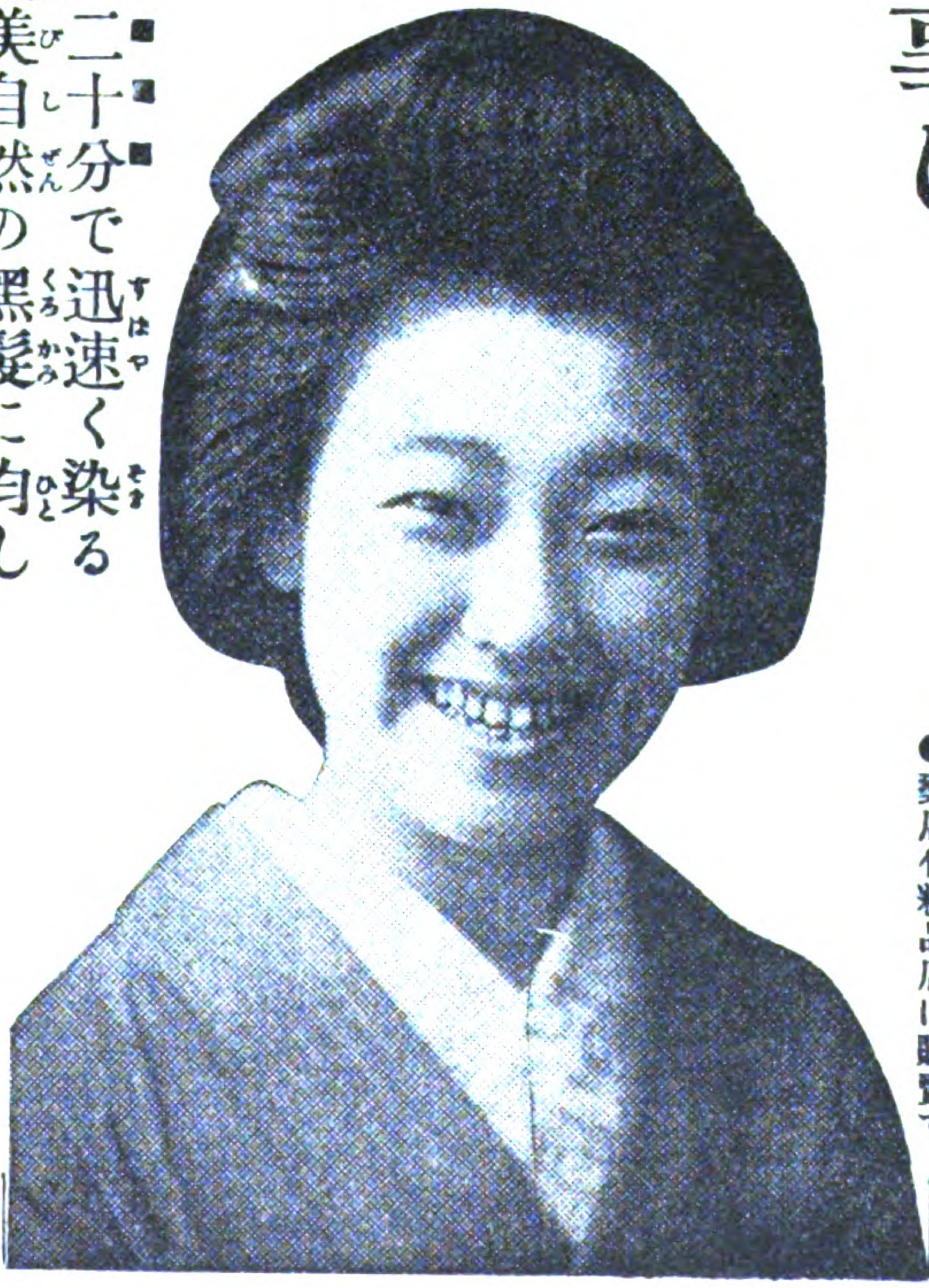
登録商標



白毛赤毛染
ナイス

五大特長

■タツタ二十分で迅速く染る
■染色艶美自然の黒髪に均し
■サラ〳〵として襟、枕に汚染せず
■一度染で洗ふも剝ず永保し
■用法至極簡易便利なり



價
大瓶 六十錢
小瓶 三十五錢
男子用 二十五錢
●薬店化粧品店に販賣す

大阪
東京
發賣元
丹平商會薬房

ノベル賞金を得たる、白耳義文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城先生譯

新刊 萬有之神秘

四六判總クロース
全一冊
正價壹圓貳拾錢
郵稅十錢

神秘、神秘、神秘、これ單に人間好奇心の一要求としてのみ看做さるべきものではない。物質萬能、人力萬能は古き十九世紀の夢想と化して、幾倍か合理的なる**非物質主義、心靈主義**（オイケン然り、ベルグソン然り、）は今や全歐の思想界、文藝界を風靡して居る。而してイブセン逝きトルストイ既に世を去れる今日、**世界の最大文豪**として何人も異論なきマーテルリンクこそ、實に其の神秘主義、心靈萬能主義に於て**歐州新人の代表者**とさへ云はれて居る、本書は其の神秘主義を尤も明快に、尤も徹底的に論述せる著者の**社會觀、人生觀、運命觀**で、毎頁殆んど無限の興味と教訓とに充てるベリット・テンプル（埋宮）の全譯也。

參版

英國 デゼルチス著
高橋五郎先生譯

心靈學講話

四六判總クロース
全一冊
正價金八拾五錢
郵稅八錢

東京本郷西片町 玄黃社
電話下谷一三九番
振替東京七九九五番

英雄國民の絕好讀物たる稀有の快著出づ

桂月先生一流の雄健暢達の快文に成れる『八犬傳』の新面容を看よ

大町桂月 八犬傳物語

初版再版即日賣切 **三版**出來

▼中版本製極美大 紙數四百三十頁 定價九十五錢 送料……八錢

▼口繪 鈴森の復讐戰（大森正行氏畫）

著者馬琴に私淑多年八犬傳を廣く讀ましめんが爲め此の物語を作る馬琴の構想桂月の文章眞に雙絕也

南總里見八犬傳は文豪馬琴が二十餘年の心血を灑げる大作。仁義禮智忠信孝悌の八德を體現せる八犬士を主人公とし、房總武野關東諸州を舞臺とせる傳奇小說にして、義士、節婦、美人、英雄相集りて縱橫に活躍し、一條の因果幾多の紛糾を貫きて窮する所を知らず。波瀾の重疊と結構の複雜とは、日本文學史上空前にして亦絕後たり。而して馬琴のこれを描くや、**日本武士道の理想**を掲げて一代人心の弛廢を救はんとしたるもの。巍然たる大節を、其の藝術的大手腕に寓して描ける雄篇也。而も浩瀚實に五千餘枚、**世界第一の大作**にして是を讀破すること固より容易にあらず。大町桂月先生此の大傑作の廣く讀まれざるを慨し、椽大の筆を揮つて之れが物語を作る。よく原文の冗を省きて其の要を摘み、先生一流の雄健暢達の大文章を以て之を叙す。原作の趣さながらに傳ふるも、面目更に新たにして、別様の興趣あり。大正新時代の絕好讀物たる可き『**桂月八犬傳**』として大方の熟讀を待つこと切也。

東京市牛込區矢來町中の丸 **新潮社** 電話番町二二三三番 振替東京一七四二二番

「大學出の兵隊さん」著者 奥野他見男氏著

（最新刊）

おへその宙返り

犬山嶺夫書伯裝幀

大評判〳〵

面白い！面白い！なんとも云へぬ面白い、佛頂面で名高い某博士も之を拔くが早いか思はずプツと噴き出し「成程へそが宙返る哩。」筆致の輕妙、着想の奇拔、例に依つて天下一品なり、敢て江湖に薦む。

挿畫六枚入 定價四十錢 郵稅四錢

發兌 東京市中澁谷町 振替東京七八六四 東文堂

黑岩淚香先生序
高桑白峯先生譯
◁町田歌三氏裝幀▷

縮刷 後ノ巖窟王

總色刷クロス金文字美麗函入袖珍、總ポイント三組三百六十頁

■□定價金八十錢送料六錢□■

現下の小説界に於て最大の**賞讃**を以て迎へられつゝある巖窟王の續編縮刷されて提供せられたり。曩に痛快なる復讐を喫せられし人々が、更に一團と成りて復讐の復讐を企み、一紳士別に出でゝ輛繪姫に戀着するあたり又一段の**興趣**を添ふ。巖窟王愛讀の士に**切**に本篇を**薦**む。晝は蟬時雨、夜は蟲の樂音を浴びつゝ、油然たる興味に醉はれんことを乞ふ。

發行 東京京橋 振替一五四七 扶桑堂
發賣 東京神田 東京堂

(前付一〇四)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

怪傑南光坊の眞面目始めて炳乎！

三上博士序　辻博士校閲　須藤南翠先生著

最新刊

大僧正天海

古來德川家康の黒衣宰相として傳へられ、史上疑惑の妖僧として扱はれたる曠世の怪傑南光坊天海は、今や始めて假面を脱し、覆被を拔きて、純乎たる眞面目を暴露し來れり。曦暾曉霧を照破し、魑魅影を潜めて魍魎形を沒す。天海史家を誑きし乎、史家天海を誣ひし乎、請ふ本書を繙きて百年の疑問を解け。

本書目次

菊判美本六百八十頁
口繪コロタイプ二枚
寫眞版二十枚
挿圖寫眞五十

定價貳圓廿錢
郵税　内地十二錢　臺樺鮮支廿錢

東京　神田　冨山房　振替一〇五

賣捌全國書店

新歴史派經濟學の代表 世界の權威的大著の譯補愈々完成

文學博士 澤柳政太郎先生序

伯林大學教授グスターフ、シュモラー先生著

文學士 山田伊三郎先生譯補

國民經濟學原論

全部九册 菊判上製紙數約四千二百頁

第一册概論（四八〇頁）壹圓六拾錢
第二册要義（四〇〇頁）壹圓五拾錢
第三册組織（三六〇頁）壹圓四拾錢
第四册（四八〇頁）壹圓六拾錢
第五册（六二〇頁）金貳圓
第六册（二五〇頁）壹圓六拾錢
第七册（五三〇頁）壹圓八拾錢
第八册（三四〇頁）壹圓四拾錢
第九册（四四〇頁）壹圓六拾錢

送料 内地十二錢 臺樺卅五錢 鮮支四十錢

原著は多年獨逸大學に教鞭を執り、特殊國民經濟學に就て幾多の研究業績を發表し、常に新進路を開拓して青年學生を糾合し、新歴史派の統領として名聲世界に隆々たるシュモラー氏が幾十年の觀察と思索との結果にして現に學界の大著たるのみならず、永く社會科學の權威として不朽の書たるべし。譯補者は深く原著を究め、シュモラーの名譽を尊重し、その文章を愛して一言一句苟もせざると共に會心の著として多年之を教壇に講じたる間に自家の識見を以て補説する所少からず、譯述懇切嚴正にして行文暢達流麗、寔に我邦經濟學書中の白眉たり。

今や物質的文明に眩惑せられて天下の青年滔々相率ゐて唯物主義的潮流に拉し去られんとし、競爭劇甚の結果貧富の懸隔益々甚しく、資本家對勞働者の間屢反目衝突を見んとす。是等の弊を矯め社會の健全なる發達を圖らんにはシュモラーの唱導する國民經濟學に依るの外なし。即ち慣習及法律の意義を明かにし遂に道德に進み、個人たると團體たると將た國家たるを論ぜず、道德と結合し、遠く道德の根本より愛して修身齊家より以て治國平天下に至るべきなり。且や歐洲大戰は世界の經濟狀勢を破壞し、戰中の恐慌寒心すべきものあり。此時に當り社會經濟を深く研究して萬一の悔なからしめんは、單に學者爲政者の責任に止まらず、一般國民の義務にして、之が唯一指針なるは本書を措いて他に有ることなし。茲に山田學士の絶倫の熱誠と奮勵とにより補譯の完成せるを祝し、敢て江湖に薦むるものなり。

發行所 東京神田 冨山房 振替一〇五

賣捌 全國書店

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長　男爵　中島久萬吉
專務取締役　小原元美
專務取締役　鈴木市之助
常任監査役　安達仁造

本店　東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話本局一五六、五一一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店　大阪市東區本町一ノ一三（電話長本局二三一一番）

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり



中央公論第卅一年十月號目次



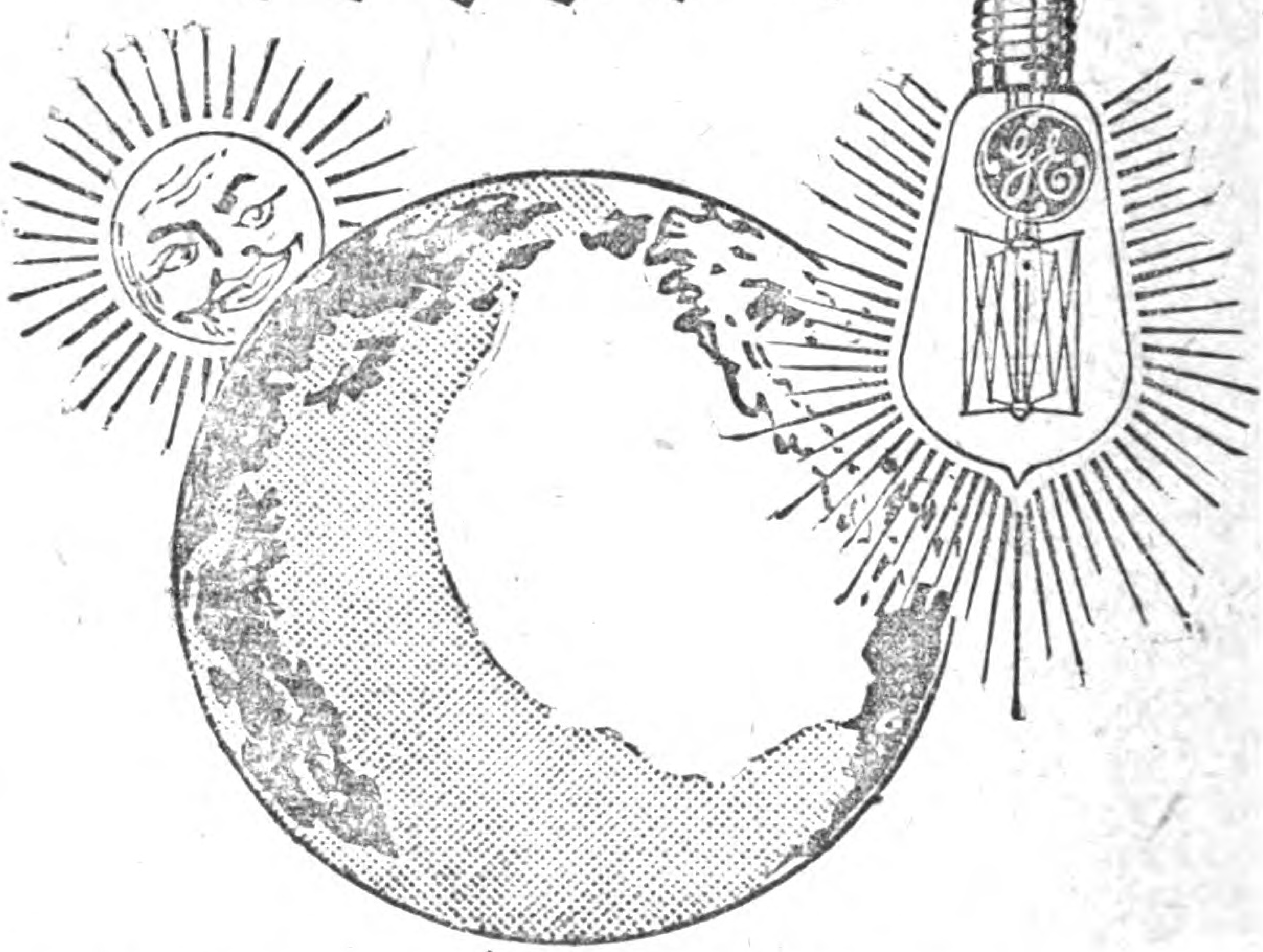
GARI MELCHERS



The young maid of Brabant

日とのみ競ふ

マツダランプ



□……五拾燭光迄長型壹個金五拾錢……□

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目 電話新橋一九三・三二一二 長一〇五九

橫濱出張所　橫濱市伊勢佐木町一丁目 電話濱一七一一

大阪出張所　大阪市西區[illegible]通一丁目五番館 電話長四一〇九五

[illegible]には此點線を切取りお送り下されば綺麗な說明書を差上ます

御住所

御姓名

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（前付二の一）

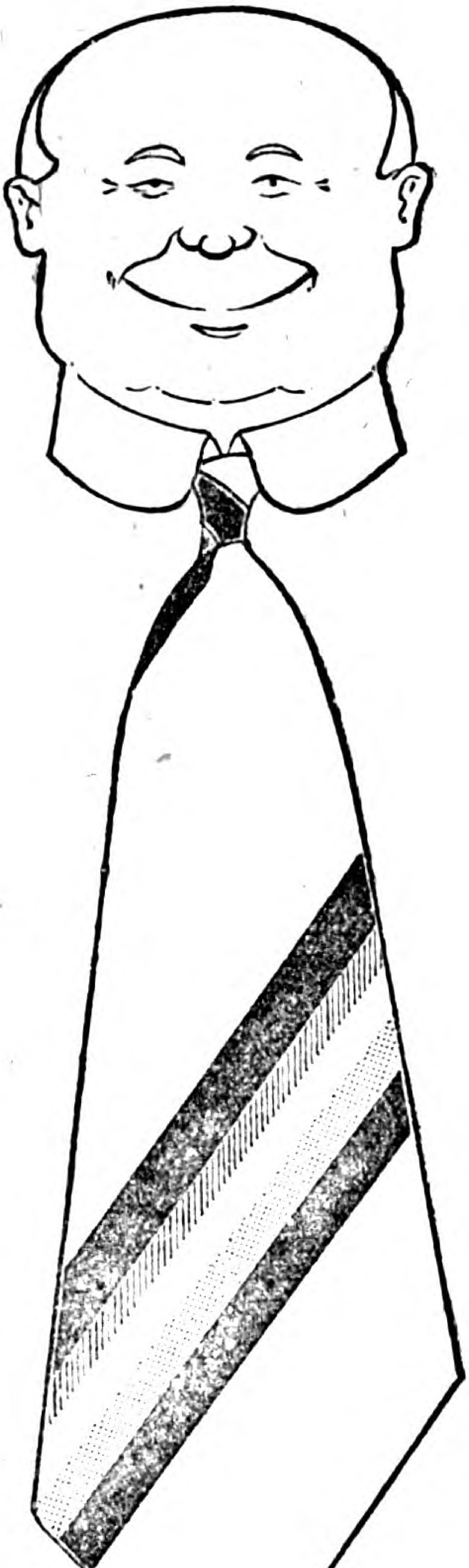
登録商標

BEST MADE

RED HAT

WEAR GUARANTEED

どんなネクタイが今秋流行ります？



赤帽印ネクタイを御覧じろドコへ行つて見ても氣に入つたのが無いといふお方の必ずお氣に入る一九一七年式の斬新な健實なそして優秀な品が有ります

東京　**南文藏商業部**　大阪

赤帽印ネクタイ發賣元

中央公論



十月號
第卅一年第十一號
第三百三十六號

日支親善の現今及將來

(一)

近頃南支著名の領袖梁啓超氏は上海に於て日本官憲及び新聞記者を招筵し其席上の演說に我邦の支那に對する好意を謝し且從來日支兩國の間に親善なるべくして其然る能はざりし點を擧げ、第一に故袁世凱氏の遠交近攻を指摘し此れ袁氏が世界の大勢と日本の世界に於ける地位を知らざりし爲なりと斷じ、今袁氏去りたるが故に此原因は去れりと仄めかし、第二は日本の政策の支那人より見て不定なるが爲め迷ひたるに因るものと爲し、今や支那國民は今回の政變に於て袁が皇帝たらんとせる時日本が如何なる條件をも支那に提議し得られざるに非ざるに關はらず之を爲さゞりしが爲め一般に日本の精神を了解し

感謝し居れり、第三には支那に必要なるは人材と資本にして支那は遠く之を歐米に求めずして日本に求め、而して日本も亦支那と經濟上の關係を密接にすべく連絡を取るに努められたしと說けりと云ふ、梁氏は多年我邦に優遊して能く我國情に通ずる耳ならず、其文章に至りては現代多く比儔を見ずと稱せらる、曾て袁世凱の下に一大官職を占めし際には排日論者を以て目されしことあるも、梁氏をして辯ぜしむれは是れ唯支那の爲に謀りて忠ならんと欲したるに外ならずと云はゞ其迄なり、今や梁氏の地位は北方の武斷派と南方の革命派の中間に在りて、頗る穩正の見を持し、南北を親和し支那統一の業を成すに於て有用缺く可らざる人として知らる、吾人は斯人の口より親日論の高調せらるゝに對し、之を支那政論進轉の一特徵と見做し大に日支關係の前途を祝せずんばあらず。

　梁啓超氏の演說は簡單なる電報により傳へられしのみ未だ其詳細を悉知するに至らずと雖も、其趣旨や甚だ明瞭にして亦た頗る要領を得たりと謂はざる可らず、曰く從來日支親善を防害せしは故袁氏の遠交近攻の責に歸すべく、日本が支那に對し暴戾飽かざるの野心なきは袁氏帝政運動に際し之を利用して野心を遂げんとせざりし一事を以て證すべく、今後は人材と資本を日本に仰ぎ支那統一自强の大業を成就せんと欲すと云ふに在り、想ふに梁氏は袁大總統時代の北京の政情に精通するもの、茲に當時を回顧し現在の形勢に對照し、益々日支提携の必要を認むるに至れるなきを得んや、抑も遠交近攻は支那傳來の政策にして獨り之を袁世凱氏に歸するは聊か酷なり、李鴻章氏の如き最も此術策に長じ、我日本の勃興を抑ゆる爲めに或は英と結び、露に依り、更に獨逸を引援するの策を取り、甚だしきは例の三國干涉を歡迎して遼東半島を回復して得々たりき、此結果獨逸の膠州灣の租借となり露國の滿洲南下となり、更

に英佛は南支那に租借地を獲得せり、斯くて新興の日本を幾分か制抑し得て自ら慰むる處ありしならんも、極東事局を煩雜ならしめ、日露戰爭を誘致して必然的我帝國の擴大を遂げしめ、從つて滿洲朝廷の威信の失墜を來たし、終に五年以前の大革命勃發を促がすに至れり、即ち李氏の時に於ける遠交近攻は其初め頗る成功の觀ありしも遂に社稷の覆滅を來たすの勢を馴致したりと云ふも不可なからん、當時淸朝の威望尙ほ中外を壓するの概ありしに關はらず遠交近攻の結果已に斯の如し、此實例を目擊せし耳ならず李氏の此政策に參畫せし袁世凱氏にして遂に其非を悟らず威望實力に於て遠く前年の淸廷に及ばざる新民國大總統の身を以を尙ほ遠交近攻の策を弄せんとす、端なく帝政計畫の爲め脆くも蹉跌するに至れる素より其所なり、而して李氏に對する袁氏と略ば類似の位置を袁氏に對して占めし梁啓超氏が遂に遠交近攻の非を悟るに至れる頗る遲きに失するも亦た之なきに勝るや萬々なりと謂ふべし、然れども之を思ふに此際梁氏が飜然悔悟して日支親善を唱へ人材資本を日本に求むべしと云ふもの亦た是れ歐洲大戰爭の間接の影響なりと見るを至當とすべく、歐洲の列强龍鬪鮫戰して全力を傾倒し亦た事を極東に構ふに餘力なきに對し我帝國の威風は比較的に隆々たるものあり、加ふるに山東省よりは獨逸の勢力を驅逐し滿蒙に露國と協定して事實上日露同盟の締結を見るあり、此際獨り北米合衆國の名聲甚た熾にして支那に對し隱然我邦と威力を競ふありと雖も、其國遠くして貿易の關係頗る薄く、且彼れが外交政策動もすれは系統を缺くの嫌あり、例せば曩きに四國借款を主唱しながら後に六國財團を脫し最近或一部に於て再び政治借款團加入を企圖せるが如き、支那の後援者として之を觀れば稍々賴み甲斐なきの感なくんばあらず、唯た支那に於て米國の特に重きを爲すは社會、宗敎、敎育の點に在り、例せば團匪事變の賠償金

の一部を支那に返還し之を米國留學生の費用に充つる一事の如き支那開發の前途に取り測量し難きの大影響あらんことを察するに足れり、又富豪ロックフェラ氏が其無盡藏の財布を開きて北京に一大醫學校と病院を建設せんとすると云ふが如き到底米國に非ざれば得て望む可らざる所たらずんば非ず、然れども政治上支那の危殆を救ひ其國柱の傾倒せんとするを支持せんことは之を米國に求む可らずして獨り我日本にのみ期待すべきなり、故に聰明鋭敏なる梁啓超氏の能く此間の形勢を看取して假に日支親善を高調せる亦故なきに非ず、然れども固と是れ一種の事大觀に基づける識見に外ならざれば歐洲の戰塵一朝收まりて列强亦た爭ふて極東に干與するに至らば梁氏一派の態度は或は一轉し再轉し今日の親日は中間一時の夢と消去らんことあらんも亦知る可らず、抑も吾人が最も深く感興を引くは同種同文の日支兩國が互に相携へて有色人種の爲めに大に氣焰を擧げんことに在り、蓋し人種問題は世界的の根本問題にして白皙人種が世界の優等人種なりと自ら標致する間は黄人其他有色人種は容易に之に齒せられざるは覩易きの道理にして、有色人種が隱然團結して最惠特權を要求する迄は白人の僻見は到底消滅し去る可らず、而して日支兩國の提携は則ち有色人種が一般に團結せんとする前提なりと云ふを至當となす、然れど斯の如き理想は現在の支那人間に之を求め易からず、殊に梁啓超氏の如き事大黨には斯る理想論は到底眞面目に理解せらるべきようなし、唯だ賴みとすべきは支那人一般に於ける人種的自覺の今後大に勃興せんことに在り、何となれば宛も猶太人が其人種見に執拗なる如く支那人亦大に人種觀念を發揮するに至らんも未だ知る可らず、但し是れ前途の希望にして、現在の支那人は多くは事大黨のみ、故に現在歐洲列國が將に戰爭に共倒れせんとするに際し獨り我が日本の羽振り好きを觀れば前年の排日家乍ち彪變し

て親日を説くに至る。吾人は支那人の事大主義に對し毫も異議を挾まず、只だ鐵は其白熱せる間に之を槌するを要す、今親日論の將に大に流行せんとするあり此の機會逸す可からず、大に日支親善の根蒂を深ふするに努め、假令他日國際間の形勢如何に變化することあるも日支關係の基礎を動すこと能はざる程に至らしめんことを要す、是れ吾人が更めて日支親善を論じ今の時に於て兩國提携の基を定むべきを高調せんとする所以なり。

(二)

何故に同種同文にして最も親善なるべき日支兩國が容易に親善ならず、過去數十年間國交を開始して以來の兩國關係を觀れば日清戰爭北清事件と云ふが如き大事件の外、明治九年の臺灣事件、十七年の朝鮮事件、更に小なる一昨年の南京事件、最近の鄭家屯事件に至るまで年々歳々の交渉案五指に屈するに違あらず、一事件去れば又一事件生じ、我北京公使館は眞に寧日なしと云ふ亦た過張ならず、是れ果して何等の理由に因る乎、素より兩國民の性情の相違より自然に紛爭を生じ易きは一理由と爲すに足らん即ち支那人は老成にして實利的なれども日本人は新鋭にして感情的なり、加ふるに兩國疆域を接して兩國民の相接する範圍極めて廣し、多く感情、利害の衝突を生ぜざるを得ざるは看易の理ならずや、然れども只だ此の一事を以てしては未だ問題を解くに足らず、日支兩國の容易に親善ならず、僅かに一紛爭問題を片付くれば又新問題を生じ殆んど停止せざる所以のものは根本論として之を兩國の政治的地位の變化に歸せざるを得ず、抑も日支相互の地位は頗る英國と北米合衆國との關係に髣髴たるものあり、米國と英國とは素より母國と殖民地の關係にありて人種言語制度文物殆んど同一にして區分す能はず、但

だ一方は共和政治にして一方は君主政治なりと雖も英國の總理大臣は米國の首相よりも遙かに勢力あり米國の大統領は英の皇帝に比し遙かに權力ありて、民主國たるの點に於ては兩國撰む處なし、斯る關係なるにも關はらず兩國最も親善なるべくして親善なる能はざること終に百有餘年の久しきに及べり、是れ主として政治上相互の地位の變動に歸せざる可らず、即ち米國は殖民地にして英國は母國たり、子國が母國に反き七年の戰爭を敢てして獨立を成遂げ、從來殖民地として一歩下級を占めしもの乍ち平等の地位に立ちて平等の交際を求む、母國の英國は勢止むを得ずして平等を認識するも心中常に平ならず、米國人の野粗にして文雅なく、稚氣衒氣を遺憾なく發揮し、其計畫の多くは徒らに尨大突飛にして精妙巧緻を缺くを愚弄嘲笑せり、之を以て兩國の關係到底圓滿なること能はず、一八一二年即ち獨立後三十年の後ち米國は英國に對し其海員强徵法の執行を憤慨して戰爭を開始せり、此より以後兩國兵火相見るの不幸なしと雖も合衆國が英の殖民地カナダと數千里に亘り疆土相接するの結果として大西洋方面に於てはニユウフオントランド漁業問題あり大平洋沿岸に於てはコロンビヤ州國境問題あり兩國の紛爭結んで解けざるや幾十年、時に開戰の叫びを聞く一再ならず、殊に米國南北戰爭に際しては英國の輿論は寧ろ傲慢なる米國が南北に二分して共に國力を削くに至らんとを喜ぶの氣分なきに非ずして多くは南方に同情を表し、北方に於ては南方政府の注文に係るアラバマ艦の英國造船所を無難に出帆するを得たるは一に英國政府の片手落の處分に因れりとなし大に人心の激昂を來せり、然れども時已に內亂最中に屬し空しく怨を呑みて機會の來るを待ちしが戰塵一たび收まるや乍ち英國との交渉を開始したれば英國も終に其非を認め一千五百五十萬弗の償金を支拂ひて平和に局を結べり、是れ自强尊大なる英國の最も苦痛と

せし處なるべきも當時(一八七一年)グラッドストン內閣の下にありて苦痛ながら正義を踏み罪科を償ふを潔よしとなせり、若しも然らざりしならば此際英米また重ねて砲火相交ゆるに至りしも亦知る可らず最近數十年間英米の關係は根本に改善せられ同文同種の意義國交上にも頗る發揮せらるゝに至れり、我讀者中青年者の如き或は英米兩國は始めより今の如き親睦の關係にありしならんと想像すべきも、歷史の語る處は吾人が既に說明せし如くにして、今の親善は最近二三十年間の現象に外ならず。

今翻りて我邦と支那との歷史關係を見るに、我邦は建國の始めより皇統連綿として存續し曾て支那又は其他より獨立を侵害されしことあらず、金甌無缺の我國體こそは實に吾人が全世界に向ひ大に誇となす處にして、素より曾て英國の殖民地たりし北米合衆國と同日に論ず可らずと雖も、文明史上に付て觀れば我邦が曾て支那の指導に服せしことあるは否む可らず、又歷史上或る時期に際し(例せば將軍足利義滿の時代)支那が我邦を一種の藩屬の如く觀しことあるは爭ふ可らざるに似たり、少なくとも支那は我邦を以て後進の小國として取扱ひ我亦た支那に對し先進國の敬禮を拂ひしことは數百千年來の慣習にして、一朝此の日本が支那に對し平等若しくは優勢の態度に出で、更に偶々支那人の卑下したる西洋文明の吸收に成功して一日の長あるを以て却て自ら先覺者を以て誇るが如くなるを觀たる支那人が大に不快を感ぜしは蓋し想像に餘あり、況んや日本、支那に兩屬せし琉球群島の主權を收めて之を合併し、韓半島に對するに權力を支那と爭ふて亦た遂に之を合併し、日清の役に臺灣を獲得し、日露役の結果南滿洲に對する露國の租借地及び利權を收め、更に今次の戰爭に由り我勢圏を遠く山東に擴大せしに於てをや、是れ皆な支那人に取りては自ら憤慨の因たらずんばあらず、又た況んや日本の勃興は支那の衰勢と

反比例を示せるをや、支那人たるもの此の較著なる對照に向はゞ一は以て慨歎し、一は以て羨望嫉視するあるべきは人情の自然にして毫も怪むを須ゐざるなり、茲に於て支那人の我邦に對する感情は宛も英人の米國に對せし感情の如く容易に釋然たること能はざるなり、但し英國は其國勢益々隆盛にして必ずしも米國の勃々たる進運を羨やむを須ゐず、支那人の其故國の年々衰況に陷り國運挽回の難きを歎ずると同じからず、是れ英國が近年遂に米國に對し大に讓歩すべきは讓歩し飜然その態度を一變したるに對し米人亦報ゆるに吝かならず、遂に大に兩國親善の實を擧ぐるに至れる所以なり、之に反して支那の積弱は容易に恢復し得べからずして、支那人の我邦に對する英人の米國に對する如く局量寛大なり難き事情ある亦察するに難からず、然れども輓近列國の形勢と極東の事情は益々日支親善の必要を明かにし、支那の有識者亦頗る感悟せるものゝ如くなるを以て觀れば日支の關係は將に是より大に改善せんとするものに非ざるなきか、吾人は切に其然るべきを信じて前途に望を屬するや少なからざるものあり。

（三）

舊英國が新米國の興隆に對して羨嫉の心なきに非ざるも尙ほ能く克己して之と現在の親善なる關係を結び且つ將來益親善を加へんとする所以のものは該舊英尙ほ未だ老朽せず本土及び帝國の基礎頗る堅固にして人文富强優に世界に冠たるものあればなり、我邦と支那とが現在、將來に益親善の關係を保たんと欲せば其第一要件とすべきは支那國家の改造、其の變法自强策の成功に在るべきは多言を待たずして明白ならずや、世人或は支那の衰弱を奇貨とし濁流捕魚の惡戯を爲すを樂とするものあれども、其は大なる心得違なり、領土の延長、疆場の擴張可ならざるに非ずと雖も隣邦の虚に乘じて得たる一寸の土、

一尺の地は往々にして綿々百載の恨を買ふを免れず、又は利權獲得と云ふが如きも深く隣邦の反感を惹起するに於ては利權必ずしも利ならず寧ろ變じて國家の一大災禍たるなきこと能はず、韓國合併、南滿經營の如きは極東の平和と帝國の天職に對して眞に避く可らざる擴大なりと雖も、一定の地歩に止まり足れるを知らず飽くことなきの擴大は吾人の大に誡むべきものならずや。例せば露西亞が芬蘭を併合せしは假令那威の深怨を買ふも亦た必要止む可らずと云ふべきも、獨逸がアルサース・ロルレーンを割取せしが如きは取りも直さず千秋の禍根を養成したるなり、今次の大戰に於て若しも遂に獨逸が其國家大破滅の悲運を招くべしとせば是れが主たる一原因と爲れるものアルサース・ロルレーンなりと謂はざる可らず、比公の明其禍因たること全く知らざりしに非ずと雖も軍人派の强要を制止すること能はざりしは返へす〲も獨逸に取りて遺憾のことなり、若しも此二州の合併さへなかりしならば七十年役の遺恨は已に遠ふの昔に消失せて、獨逸は背後より偉大なる佛の資力に支持せられつゝ、其世界政策を提げて横行濶歩するを得たりしなるべし、バグダット鐵道の今日尚ほ竣工せず、阿弗利加東西兩殖民地の開發毫も其成功を見ざるが如き資本國佛蘭西を終天の仇となせるが故ならずや、領土擴大の得失亦實に深慮なくんばあらざるなり。

倩ら〱支那の現狀を觀るに大革命以來國民は到る處に自覺心を發揮し、之が指導統率の任に膺るを得べき人材亦た實に乏しからず、一般民間の心理頗る我邦に於けると異なるも、自ら支那一流の愛國心なきに非ず、近年日貨排斥の頻煩なるが如き素より支那市民の誤解に因れるも亦た是れ一種國民的意識の勃興を示すものと云ふ可らずや、論者往々支那政客の操守なく、政黨の腐敗せるを說く、蓋し之あら

んも之を我邦の現狀と對照して果して多くの優劣ありと爲すを得べきか、若しも吾人をして無遠慮に云はしめんか吾人は云はん支那の憂は人材の缺乏にあらずして唯だ中心たるべき一大人物の存せざるにあり、故袁世凱氏の尚ほ在世するや一派の論者は往々多年の愛憎に驅られて彼れを痛罵攻擊して止まざりしと雖も、吾人は彼れを以て當時の支那に於て唯一の統率的巨人なりと認め常に支那の爲めに其成功を祈れり、不幸にして帝政復活の一擧彼れ亦た其器に非ざることを示したり、今若し康熙乾隆兩帝の如き一偉人出づるありて天下の人材を糾合し支那改造の籌策を回らすに於て蓋し十年を出でずして國家の面目を一新するに至らんこと何の疑かあらんや、然れども徒らに大豪傑の出づるを待つは雲を摑かまんとするに等しく、其未だ出でざるに當りては寧ろ寬宏の長者を得て人心の歸向を定め政治の統一を謀るより外なし、現大總統黎元洪氏は即ち此點より觀て頗る適任者なりと云ふべく、若しも此際北方軍人派の棟梁段祺瑞氏と南方革命派の首領唐紹儀氏と能く協心努力するを得ば庶幾くは新支那の基礎を定むるの一端を爲すを得んか、然れども二人者の聯盟一致は甚だ容易ならず、恐らくは明治初年の木戸大久保の關係に髣髴たる者あらん支那電報に據れば過般外相に追認せられし唐氏は五箇條の就任條件を提出して段總理の承諾を求めしに總理は其中陸軍及財政に關する二箇條は氏が北京着の上協議すべしとなし他の三條を容れたりと傳ふ曰く駐外公使及領事の選定は外交總長の專斷を許す、曰く外交問題に付ては外交總長に一任し閣議を以て掣肘せず、曰く對外借款は外交總長に協議し外交總長をして議に與らしむ、之に因て觀れば唐氏一たび外相の椅子を占むる曉には北京の外務部は國務院より獨立せる官衙を爲し、對外公使領事の任命は云ふに及ばず對外政策を初め各種交渉問題に對し段總理の容喙を許さず、他の同僚の

干與す可らざるは勿論なり、例せば現に日支間懸案となれる鄭家屯事件の如き全然唐外相の專斷にて決せらるべく、其決定に臨み段總理は盲印を捺して直ちに黎大總統の裁可を仰ぐことならん、殊に借款問題に關しても唐外相を之に參畫せしむべく、遂に唐氏の希望を納れて陸軍にも參與せしむるに至らんか、斯の如くなれば唐氏は隱然政府內に自己の主宰する獨立政府を置かんとするものと云ふべく、是より北京國務院中には二個の頭目ありと云はざる可らず、斯の如くして鞏固なる政府の組織せられやうなく、現內閣は必ずや兩氏の衝突より遠からず一大危機に接することを避くる能はざるべきなり、斯くて政府內別に政府ある耳ならず、政府以外にも亦他の政府あり、他なし總統府是れなり、總統府は大總統直屬の官衙にして恐らくは主として典例交際の事を司どるものなるべきも、總統府書記官長は亦た大總統政治秘書なるが故に政務の一部は往々にして國務院を經ず直接に大總統の耳に入り而して大總統は或事件を先づ裁可して後に之に國務院當局の副署を求めしことあるに似たり、是れ即ち政府以外別に政府あるの形を成すに至れる所以にして、先般總統府國務院間に權限の爭あり妥協の結果として前に國務員副署署名して後に大總統の裁可を求むべきことに決定し、又た大總統は國務院會議に參加するを得ることを得と云ふに決定せしは大總統と政府を聯結し常に意志の疏通を謀らんとするものにして目下の政情に於て極めて緊喫のことに屬す、已に兩官衙の間妥協成りて前途衝突の憂なきが如きも內閣(國務院)が今日の如く大總統に對して一種獨立の地歩を占むる以上(即ち國務員任命が立法府の承認を條件とすること)は兩者の衝突は全然過去に屬すと云ふを得ず、實に立法府が其職權の主として法律の制定に在るに關らず、行政の監督に關する權限頗る廣く、大公使の任免は素より國務員(內閣員)の任命に對しても追認追

否の權あり、又た外債借入に付ても其の都度之を可否するの權ありて、根本に政府の自由行動を拘束して行政の秩序ある運用を不可能ならしむるものなり、世界の三大平民主義國たる英佛米に於ても曾て國務員の任命を議會の議に附することあるを聞かず、孰れも皆な元首の任命を最後とするものなり、假令行政府と議政府との關係を圓滿ならしむる爲めの必要上より首相は必ず多數黨の首領たるべしとするも首相及び閣僚の任命は議會の投票に左右されず全く元首の鑑識に基づきて任命を受くるものとす、若しも然らずして一に國會の投票に由り任命を可否せらるゝものとせば、總理は元首の信任を得る能はず閣僚は總理の信任を得る能はずして政府の統一を保ち責任を聯帶にすること殆んど不能事とならん、現在實施中の民國元年の臨時約法は頗る不完全にして、今や北京に於ては憲法制定會議開かれ盛んに討議され居れるが、國務員任命の問題は蓋し最も愼重の考慮を要する所のものなるべし。

次に北京政府に取り焦眉の問題は借欵に外ならず、袁總統就任の年即ち一九一三年四月五國財團と支那政府との間に二億五千萬圓の大借欵成立せしより玆に三年此間多少の實業借欵成立せしとするも其金額多からざる耳ならず、袁氏の晩年帝政運動の爲め數千萬圓(或は云ふ一億圓)を消費せしが如き今日の財政困難を來たせし一大原因たらずんばあらず、近來支那事情に通ずるもの丶云ふ所に由れば今後一年間の政務を運行するには少なくとも八千萬圓の外債を要すと、是れ或は然らん、而して列國財團は必ずや之に應募の法を講ずるに至るべし、然れども玆に一考を要するは支那の財政今日の如き不始末の狀態にありて年々歲々外債に重ぬるに外債を以てするに於ては支那は國家として果して其負擔に堪ゆべきや否や、此問題を解決せんと欲せば支那外債の總計に對し人口の割合を求めざる可らず、試に一九一三年

末に於ける支那外債の計數を擧ぐれば大略左の如し、

一、政治及軍事外債	七一八、〇八九、七〇〇圓
二、鐵道及實業外債	三八三、二八四、一四〇
三、地方外債	八一、九三〇、〇〇〇
四、北淸事件賠償金	六三一、三八四、六一〇
五、祕密契約に屬して世間に知れざるもの	五〇、〇〇〇、〇〇〇
計	一、八六四、六八八、四五〇
是に對する毎年利子	九三、〇八七、〇九〇

今支那の人口を四億と假定して右の元利額を割當てんか、元金に對しては一人前四圓五十錢利子に對しては二十錢、合計四圓七十錢に相當す、而して支那に於て內債は殆んど不可能なるを以て右外債額は概して支那債務の總計と見做すも可ならんか、今之に對し我國の內外債に對する人口割前如何と觀るに一人に付き四十七圓餘に相當す即ち支那と比較して約十倍の多きに居る、是の對照は支那に取り頗る意を强ふするに足れるに似たり、然れども日支兩國の人口割富力をも參考に加へざれば未だ眞の對照を得可らず、但だ玆に兩國とも富力統計の據るべきなきが故に止むことを得ず外國貿易額の人口割を對照に供するに止めん、即ち外國貿易の人口割は支那の三圓四錢に對し日本の二十二圓十二錢たるを見る、是に由りて觀れば支那は日本に對し四分一の富力ある割合なるが故に日本と同一程度の債務を負はんとせば現在の負債額を増して二倍半となすを要することとなる、故に今回八千萬圓の新債を起すが如き毫も

爰とするに足らず、然れども支那の富は散漫にして組織的ならず獨り民間に離布して政府の手に集收され居らず、此れ政治組織の不完全なる結果に外ならざれば、吾人は支那人たるものが能く時局艱難の由て生ずる所を察して小故に齷齪たらず又は私利功名に拘束せられず、能く大局に着眼して南北東西和衷協同して國家改造の業に從事せんことを切に希望するものなり。

鄭家屯事件の首尾能く落着せんことは希望すべきことなり、然れども一鄭家屯事件去りまた他の鄭家屯事件起らん、要は新支那の國家的基礎成り支那人間に自重心を生じ今の恐怖的にして且つ猜視的なる狐疑心を一掃して鷹揚たる大國の氣分を回復するに至らんことに在り、青木中將の軍事顧問たる頗る可なり、然れども他日中將の功を嫉んで反對する一派を生ぜんも圖られず、支那人が自らの力量と知識とに由り其國を維持し得る日の來るまで眞に同文同種の意義を解して日支親善の慶福を受くるの日來らざるべし、吾人は此高き意義に於て支那の啓發を希望し、我れの彼れを援くる、彼れの自ら努力する總て此高處の見に基かんことを要す、若夫れ我邦の對支態度、政策に至りては朝野の當局たるもの能く過去現在の狀態に鑑み今の局面を刷新し改めて日支親善百年の基礎を定むべき必要なしとせんや。

與黨三派の合同

立憲同志會、中正會、公友會の三派が大隈內閣の與黨として政界に重きを爲すこと一年有半此間三派合同の企てられたること一再ならずと雖も每度成功せず、同志會側に於ては其地盤の廣き其黨員の比較

的によく訓練あるに顧み、自ら解黨して他の訓練なき地盤なき多數の異分子と合同するを危險なりとして頗る躊躇する處あり、左ればとて他の二派に於ては自ら解黨して同志會に加入するほどの勇氣もなく又た中正會方面に於ては所謂中合同即ち中正會と公友會を打て一團となさんと計畫されしことあり、然れども是れまた實現を見るに至らず、何となれば三派合同ならば自ら意味あることなれども、二派を合して一派となすは殆んど其意味を爲さず、與黨として三派あるも二派あるも眞に五十歩百歩なればなり斯くて與黨合同談は每度失敗に終り、世人は終に合同談を以て言ふべく行ふ可らずと爲し、之を觀る田舍役者の一枚看板として多く意に介するものなかりしに、最近に至り又々合同運動起り、遂に大隈首相自ら合同劇の勸進元となり高田文相を以て專ら公友會に對する斡旋の勞を執らしむるに至れり、而して尾崎法相及び中正會の多數亦た熱心に贊成し、加藤子及び同志會に於ても自ら解黨して合同に參加するの決意を示したれば、今次こそは是非とも三派合同の成功すべき段取りとなれり。

此に於て世人は疑ふ是れ何の爲めの合同なるかと、二大政黨の理想を實現せんとする即ち是れ今次合同運動の目的なりと云はゞ其までなれども、斯の如き高遠の理想よりは尙ほ更に手近き邊に眞の理由を求むべきに似たり、即ち大隈首相が今春の議會以來幾度か官僚の要所に與へたる『近き時機に辭職すべし』との言質に對し、殊に畏き邊りに對し奉り老齡重任に堪へずとの申出に對しては何とか近々に其『けり』を付けざる可らず、茲に於て元老の異議ある加藤子を推薦せんと欲せば絕對多數黨の後援あることを示すを便なりとなし、又加藤子終に元老に納られずんば老侯自ら四度の居据を爲すにも便なりと爲し此の理由より今次の合同は計畫せられたりと見る蓋し中らずと雖も遠からざるべきか。

新政黨果して幾許の頭數を纏め得べきか、一時は二百三十名の多數を集め得べしとさへ吹聽されしも最近傳ふる處に據れば百九十六名以上二百名の間にあらんとするが如し、百九十六名は五名の絕對多數のみ、未だ以て大に天下に誇るに足らず、素より與黨中合同に參加せざる人々も依然政府を支持すべしとは彼等の言明する處なれども、今次の合同を政府の最高所より餘りに强壓せられし結果彼等の胸底には隱然反政府の萠芽已に發せるものと推測する必ずしも不當ならず、然れば政府としては危急の場合に臨んでは依賴すべきは新黨の百九十六乃至二百名と覺悟せざる可らず、試みに新政黨以外皆な一致の態度を執るものと假定せば百九十六名の絕對多數は六名を失へば直ちに破らるゝものなり、甚だ心元なき次第と謂ふべし。

大隈內閣が現在の如く鼎足の優勢なる絕對多數に因り支持せらるゝと甚だ覺束なき一足の絕對多數の上に立ち傍ら新政黨以外小數者の松葉杖に倚るとは孰れが利孰れが不利、果して幾許の相違あるか、是れ近々又起るべしと豫想さるゝ政變の成行に就き之を驗するを得んなり。

藝術化せられたる

惡魔主義の傑作出づ

■谷崎潤一郎氏作■

名取春仙氏挿畫拾數葉入（最新刊）

小説 鬼の面

四六判表紙總黑クロス
本文五號總振假名付
裝幀瀟洒紙數三百七十頁
定價金八拾五錢
送料金八錢　海外廿二錢

現文壇唯一の惡魔主義唯美主義の作家として我が創作界の權威たる谷崎氏の非凡の才能と藝術的思想はこゝに「鬼の面」の創作となつた「鬼の面」は嘗て東京朝日紙上に連載されて頗る高評を博したる大正五年度の傑作である

本書は青年の春機發動期に於ける生の誘惑と肉の衝動歡樂に荒んでゆくデカダン生活の學生壺井を主とし其周圍には紳士としての津村家の紊亂せる家庭や、令孃や小間使の心理描寫を氏一流の筆に描きたる一大長編小説である

弊社發行書籍二部同時に御注文の時は送費無料ハガキにて御注文第次直に郵送す

■近代傑作叢書■

第二編　巫女殺し

上司小劍著■小寺健吉氏裝幀

菊半截判表紙布裝
本文六號徳振カナ付
天金紙數二百餘頁
著者肖像挿入
定價金五十錢
送費四錢・外國拾錢

本書目次■巫女殺し■春の悲しや■雀の巣■第三の母■最近傑作の短篇集である。何れも關西を題材としたもので氏一流の皮肉もユーモアも殊によく表はれてゐる『巫女殺し』は大阪のある神社の神樂師が同じ神社の巫女と通じての波瀾情調がよく描寫され、其他何れも新しい創作である

第一編　神童

谷崎潤一郎著■山村耕花氏裝幀

菊半截判表紙布製
本文六號天金紙數
二百十頁
著者肖像挿入
定價金五拾錢
送費四錢・海外十錢

（內容）神童　饒太郎

■大阪朝日評、神童と饒太郎の二篇を蒐めたるもの（中略）神童には春機發動期に變化して行く青年の心理がよく描かれてある饒太郎には此一流のダヤボリカリズムが發揮されてマゾヒズムの傾向あるデカダンの生活が寫されてある…………………（下略）

■發行所　東京日本橋區濱町二ノ二十　須原啓興社　電話浪花三二八八　振替東京三〇五〇〇■



天然甘味
サンラヘール藥用葡萄酒
販賣店ハ到ル處ノ藥店食料品店和洋酒店ニアリ
是れ眞に補血强壯劑を兼ねたる天然甘味藥用葡萄酒にして貧血性の人又は産前、産後の御婦人が用ふれば其功一層偉大なり、サンラヘール葡萄酒は彼の有名なる佛國巴里病院にて日々老衰疲勞者等に此酒を施すこと實に三十年來其功能一つも誤る事なく快癒せり之れ「タンニン」（タンニンには大量なる機那を含みしもの）の最大量を含みたるサンラヘールなればなり、此の「タンニン」を得るには葡萄液の生質と調合法より生ずる無形の物質なるが故に和製機那鐵葡萄酒等の企て及ばざるは勿論他の「機那」酒の如く苦味なく味淡温にして天然の甘味を有す
御一報次第攝生、療法を詳述せし説明書贈呈す
VIN SAINT-RAPHAËL
YOKOHAMA
日本代理店
合名會社
尾張屋本店
横濱市境町
電話三一〇番

(中付一の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

史壇の隨一人 福本日南先生新著

定價一圓二十錢 送料八錢 四六總布函入

清教徒神風連

涙紙上に溢れて痛恨淋漓！

□明治の四十五年間は、一面、歐洲最新の文明を導入し、國勢進轉の基礎を建設したるも、他面、我國古來の風教を放擲し、國民道德の根柢を破壞したる、建設と破壞とを同時に隨伴し、悠久なる我大日本帝國史上に一紀元を劃したる驚心駭目の世代なり。然して吾人は深く過去日本の偉業と將來日本の危殆とが繋りて此に在るを思はざるべからず。

□明治九年、熊本に於て發生したる清教徒神風連の神愁鬼哭の擧は、慥に此動機に觸れ、吾人と憂國の情を等しうす。清教徒に尙ぶ所のものは主として其敎義の篤信堅持にあり、而して其の個人としてよりも一黨としての行動にあり！

□史壇の巨匠福本日南先生、居常之を憶ひ、深く彼等の忠愛の精誠に感激し、茲に普く文獻に徵し、之を一黨の遺老後裔に質し、參勘推考して本書を作り、稿を改むること三度に及ぶ。史實正確、內容豐麗、感興筆と共にいたり、彼等が眞骨頭を描破して聲涙共に下る。蓋し！稀世の傑著也！

東京市京橋區南紺屋町十二番地 **實業之日本社出版部** 振替口座東京三三六番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

縮刷 荷風傑作鈔

永井荷風著

永井荷風氏は文壇の先覺者なり。本書は時代的に荷風氏が著作を分類拔摘し附記するに又氏が騷壇の閲歴を以てす。彼の漫に數節の作品を輯めて傑集と題したる類のものにあらず。編を、習作時代、外遊時代、歸朝後、最近の四に分ちて、小說、戲曲、小品、紀行、評論、隨筆等、氏が代表的傑作は、ほとんど餘すところなく網羅し盡くされたり。今次縮刷廉價版を發行し、以て汎く讀書子の座右に勸めんと欲す。

縮刷發行
三五型總布裝三方色
總紙數七百二十餘頁
定價壹圓貳拾錢
送料金八錢

◆すみだ川 縮刷六版
◆新橋夜話 縮刷六版
◆冷笑 縮刷三版
◆紅茶の後 縮刷四版
◆牡丹の客 縮刷四版

定價各冊金六拾五錢

東京市丸の内三菱廿一號館
籾山書店
電話本局二一三二番
振替東京二四一七一番

(中付一の四)

信用なき店舗及び猥なる賣藥品の廣告は掲載を謝絶す

公論

天を仰いで大笑す

福本日南

秋天漸く寥廓なり。爽氣坐ろに地に生じ、木末淡として黄を潮す。天を仰げば、鴻雁北より來り、地に俯すれば、蟋蟀屋を繞る。是れ謂ふ所の天言はざるも、四時行はれて、百物成るもの、禽蟲草木皆時を知り、未だ曾て其節を愆らず。獨り笑ふ、我當局、自ら智として大政に任じながら、時務を知らざるの一に何ぞ其れ甚しきや。

袁慰亭斗筲の才を以て、清朝の末造に際會し、一國の紐を解き、人心の歸を失ふに乘じ、人の寡婦孤兒を欺いて、一朝大總統の地位を履み、由りて以て帝號を僭せんことを企つ。是れ神人の倶に與みせざりし所。且つ渠常に我國を讎視し、我敵國を引きて自ら援けたれば、其れをして志を得せしめん乎、獨り禹域を擾亂せしむるのみならず、併せて東洋の平和を危殆ならしめんとするものありき。我政府の之を坐視せず、私には江南の共和黨を扶持し、公には慰亭の僭稱を控制したる、是れ内は帝國の自衛に資し、外は善隣の厚誼に培ひたるもの、正義の舉たるを失はず。世界列強の環視して、以て正當の國爲となしたるもの、抑亦偶然ならず。

既にして慰亭は斃れ、禹域の國家は當初共和の政體に復歸し、南北の政權を爭ひし者も、亦漸く其舊憾を釋きて、一國の再造に協力し來らんとす。是に於て乎我國の誠意始めて彼國の人心に信孚し、謂ふ所の「日支親善」の實、開端の途に就く可きを庶幾したり。何ぞ圖らん、蒙古の一隊、宗社黨の一隊と滿洲鐵道の沿線に見はれ、新共和政府の官兵之を邀擊せんとして、端なく我駐屯軍の一部と接近密邇し、忽ちにして郭家店の事あり。忽ちにして鄭家屯の事あり。忽ちにして朝陽坡の事あり。忽ちにして長嶺子の事あり。漸くにして相合せんとせし兩國の歡心再たび將に疎隔し來んとす。

嗟乎此責任果して何れに在る歟。蒙古の諸汗慰亭の驕傲を惡み、淸朝の宗室世凱の簒奪を慨し、相呼應して、兵を擧げたるは、其の謂ひ無しとせず。然れども世凱既に斃れ、當局其人を改むれば、擧兵の目的は已に渙散せり。其れにして尙ほ兵を解かず、進みて更に新共和政府を敵とし、淸朝の恢復を期するとせば、我國たるもの、何を以て其兩間に處せんとする。共和政體は我の助けて、彼國に復興せしめたるものには非ずや。之を復興せしむる所以は、日支親善の爲なりしに非ずや。然るに今若し其共和政府を敵とする朔北聯合の二叛軍を援助し、設ひ自ら手を假さゞるも、其れの行動を自由ならしむるものは、我日本政府なりとの嫌疑の因を、一分たりとも存するあらば、共和政體に忠順なる禹域本部上下の感想は其れ果して如何と爲すや。

我天皇陛下の統御したまふ軍隊の高揭する軍旗に對し、敢て發砲の無禮を與ふ。帝國の侮蔑以て焉に加ふる莫し。是れ皇赫として爰に怒り、玆に其旅を整へて以て膺懲に出づ可きに直す。然れども萬一我軍旗にして揭ぐ可からざるの地に揭げられ、萬一我軍隊にして保護す可からざる者を保護し、而る後ち發砲の褻辱に遭へるが如きあらば、怒らんとして怒り能ふ可き歟。我之を一世に問はんと欲す。

秦皇黔首を愚にするも、黔首終に愚ならずといふ。二千載の上すら且つ然り。而るを況んや二千載後の今

日に於てをや。社會に對する政府の權力は以て其國の一社會に加ふ可し。之を第二第三國の社會に及ぼすを得ず。一國一社會の耳目は以て掩ふ可し。第二第三國求社會の口舌は奈何ぞ之を鉗するを得んや。

右顧して、仁義を稱へ、左眄して盜跖を學ぶ者、是れ現獨帝カイゼルなり。列强合從して今日之に當るものは、便ち是を以てに非ずや。我國の東海より起ちて合從の一に列するものも、又是を以てに非ずや。然るに今や尤めて其尤めに倣ふの疑を我親愛する與國の上下に懷かしむ。此責果して誰にか歸する。

言はんと欲して、言ふを得ず。怒らんと欲して怒るを得ず。燃ゆるが如き忠愛の國民をして、髀肉を秋風の前に撫し、天を仰いで空しく大笑せしむ。吁、此責果して誰にか歸する。

巴爾幹の形勢一變を說いて戰局の大勢に及ぶ

法學博士 吉野作造

（一）

八月二十七日羅馬尼亞の對墺宣戰によつて、戰雲再び巴爾幹の空に動いた。斯くして今や半島に於て渦亂の外に立つものはたゞ希臘のみとなつた。而して其希臘の態度も亦昨今甚だ動搖して居る。最近の電報によれば、首相ザイミス十一日(九月)を以て一旦辭表を呈したが、聯合國使臣の勸說によつて之を思ひ止まり、新にヴェニツェロスを擧げて陸相の地位に置いた。而して軍器彈藥の十分なる供給をさへ得ることが出來るなら、近く適當の時機を見て聯合軍側に加擔して起たんとすとのことである。希臘が若し起つてサロニカなる聯合軍と共同して勃牙利の後ろを衝き、以て羅馬尼亞

の作戰行動を大に自由ならしむることを得ば、今日將さに大に動かんとしつゝある戰局は、更に一層その面目を改むることであらうと思ふ。兎に角希臘の態度は今日最も吾人の注目を要する。

巴爾幹の形勢の變轉如何が戰亂の全局面に多大の影響を與ふべきことは、固より言ふを俟たない。然しながら巴爾幹に於ける勝敗の數が、直ちに全局の勝敗を語るものと說くのは、是れ必ずしも正當ではない。少くとも理論上、戰爭の本舞臺は、西の方獨對英・佛の方面、東の方獨・墺對露の方面であらねばならぬ。巴幹爾に於ける勝敗は、此東歐西歐の局面に著しく影響するといふ意味に於て固より重大の關係はある。然し巴爾幹に於て負けても、本舞臺の戰爭で勝負がつかない以上は、また〳〵何とか持ち堪へて戰爭が永びくものと觀なければならない、少くとも聯合國側にとつては、巴爾幹に於ける失敗は決して致命傷とならなかつたことは、去秋以來の經歷に徵しても明白である。若し巴爾幹に於ける勝敗の數が、著しく全局の勝負に影響する場合ありとすれば、それは獨・墺側が巴爾幹で失敗した場合でなければならぬ。何となれば、其結果獨・墺は三方に敵を受けて、全然包圍せらるゝの極めて不利なる形勢に立つのみならず、更に一つには外部よりする食糧供給の道が絕たれ、又一つにはダーダネルス海峽を聯合國側の自由支配の下に置き、黑海と地中海とを連絡して、露西亞に直接西歐と交通するの便宜を與ふるからである。加之獨・墺が巴爾幹を支配することによつて達せんとし、而かも尙十分に之を能くし得ざりし所の、西方亞細亞並びに印度方面の攪亂といふことも亦、英露に取つて全く懸念するを要せざることになる。此等の點を考ふれば、巴爾幹半島に於ける勝敗の決は聯合軍側にとつてよりも寧ろ獨・墺側にとつて致命傷的である。

されば巴爾幹を手に入れるといふことは、獨・墺に側とつては自衞上絕對に必要な仕事であつた。英・佛にとつては、進んで獨・墺を大に苦しめ得るといふ意味に於て必要なるのみである。巴爾幹に對して附する價値

は、兩者に於て自ら同一ならずと見るべきである。從つて聯合國側に取つては、若し兵力に於て又其他の準備に於て、敵に對して未だ遜色ありといふならば、彼は暫く東歐西歐に戰線を局限して、ひたすら自衞防守の策に出でゝも大なる苦痛はない。これで持ち堪へる事が出來るなら、巴爾幹は暫く之を敵手に委するも不可はないのである。諸般の準備に於て劣る以上は、暫く巴爾幹を放擲して、專ら本舞臺の戰線を堅むることが尊ろ賢明なる策略といふべきであらう。然るに開戰の當初聯合國は此策を誤まつた。ガリポリ半島に於ける失敗は即ち此過誤に對する苦き報酬であつた。斯くて去年の十二月、散々巴爾幹半島で遣り損つた揚句、サロニカの一角を他日の足がゝりとして占領し、玆處に堅牢なる防備を施し、巴爾幹の大部分は全く之を敵に委して引揚げたのであつた。當時一部の人は、聯合國の爲すなきを笑つたけれども、吾人は密かに其賢明なる果斷に敬服したのであつた。

巴爾幹を手に入れることが獨逸側に取つて、自衞上絕對に必要である以上、此際彼は戰勝の勢に乘じて全然サロニカをも攻略すべきであつた。而かも策玆に出でずして、之を今日まで殘して居つたのは、實力の及ばざりしによるか、又は外交上の都合によつたのか、何れにしても獨逸にとつては非常な失策であつたと謂はねばならぬ。惟ふにサロニカを攻略するには、勃牙利の力をからねばならず、勃牙利をして此要港の攻略に當らしむるは、著しく希臘の民心を激昂するの結果を來たし（先年の巴爾幹戰爭の際、希・勃二國は殆んど同時に兵を此港に入れて占領の先後を爭ふた事があり、又土耳古より割讓を受けたる土地の分配を決める際にも、兩國は此港について大に取り合ひを爭つたことがある。それ丈け希臘人は勃牙利の此港に對する態度について神經過敏である。）爲めに或は却つて希臘を驅つて敵に就かしむることなきかを恐れたのであらう。況んや英・佛側は頻りに海上より希臘を壓迫して居るものあるに於てをや。故に獨逸としてはサロニカにはらつかり軍が出せぬといふ事情もあつたらう。又一つに

は聯合軍は到底サロニカ以外には發展し得まいと見縊つて居つたかも知れない。

然るにサロニカは昨今に至つて遂に動き出した。是れ何を語るものであるかといふに、恐らく最近聯合國側に相當餘裕の出來たことを證明するものではあるまいか。最近聯合國側は、西歐に於ても、東歐に於ても著しく攻勢に出でて獨・墺と將に攻守の地位を顚倒せんとして居る。之れ已に聯合國側の大に餘力に富むに至れるを示すものであるが、更にサロニカにも一層の兵員を增派して、之より北上して獨・墺を側面から壓迫せんとするの概あるは、よし一勝一敗戰局の進展に捗々しきものなきにせよ、少くとも聯合國側の餘裕大に綽々たるものあるを思はしめて、甚だ内外の人心を强うせしむるものありと言はざるを得ない。聯合國側の全局面の攻勢は、六月初旬の東歐に於ける露軍の活躍に初まるが、元來此方面の露軍の活動を有効ならしめんとせば、是非共羅馬尼亞と默契するの必要があり、羅馬尼亞をうまく手に入れんとせば、必ずや勃牙利をして其後ろを窺はしめざるやうに豫め工夫するところがなければならぬ。而して此目的の爲めにはサロニカを一層有力なものにすることが必要であるから、最近此地に手を入れたといふことは、或は東歐露軍の行動に策應する爲めに非ずやと思はれぬでもない。が然し昨今の情報によれば、サロニカ方面の活動は、何てれ以上の積極的の目的を有するものゝ如くにも見える。何故なれば聯合國は、去年十二月以來塞耳比亞の殘兵十二萬をコルフ島に集め、主として佛國の世話で専ら訓練其他の準備をして居つたが、今年五月一切の用意を了つて新に塞國皇太子を指揮官に舉げ、いよ〱之をサロニカに送つたのみならず、八月の末には伊太利の兵を送り、又佛國へ應援に來て居つた露西亞軍をも續々送つたからである。要するに最近聯合國は、いろいろの方面に於て、獨逸を凌駕するの自信を得、獨り東歐西歐に於てのみならず、更に巴爾幹に於ても積極的の活動を試みんとしたものであらう。

(二)

巴爾幹本島及びガリポリに於ける失敗後、聯合軍が兵をサロニカの一角に集めて大に防備を堅うしたのは去年十二月の事であつた。其後兵器彈藥の充實を計り兵員も亦之を補充しつゝあるといふ說はあつたが、然し積極的に進出するといふ氣配は久しく見えなかつた。然聯合國がいよ／＼サロニカを根據として北進するの勢を示したのは、この五月央ば過ぎよりボツ／＼塞耳比亞の殘兵を此地に送り出した頃からである。然るに之を見て取つた獨・墺側は、素破こそと機先を制して例に依りて我より活動の歩を進めるの戰法に出でた。それの具體的にあらはれた初めは、五月廿六日勃牙利軍をして希臘領内の一要塞を占領せしめたことである。蓋し獨・墺は先づ勃牙利軍を南下せしめて、カヴァラ湖に至る一帶の地方を占領し、以てサロニカを抑へんとしたのである。

此報道に接して、第一に驚き且つ憤つたものは希臘の人民である。カヴァラはサロニカと同じく勃牙利の久しく垂涎措かざりし處で、第二次巴爾幹同胞戰爭で兩國の開戰を見たのは、一つの原因としては、希・勃兩國各々の此要港を爭ふたが爲めに起つたとも言へる。故に希臘の人心は、此港と勃牙利との關係については自ら非常に神經を過敏ならしめて居る。然るに今や勃牙利軍は希臘領内に侵入し恣に其要塞を占領し、而かも向ふ所の目的地はカヴァラであるといふ。民心大に激昂して政府に迫つたのも怪しむに足らない。此民間の激昂を和らぐる爲めに、政府は一應は勃牙利に抗議を提出した。けれども實は之れ一片の虛飾に過ぎずして、實は政府は密かに勃牙利に此事を默許して居つたらしい。否、更に一歩を進めて勃牙利軍隊の侵入と引換えに、希臘兵をして要塞を撤退せしむべきことを約束して居つたらしい。此事を感附いて民間の激昂は益々甚しくなり、爲めに久しく政府側の壓迫に屈して鳴りを鎭めて居つた民黨も、頓に頭を擡ぐることを得るに至つた。ミチレーヌ、カヴアラの二區に於ける補缺選擧に於て、ヴェニツェロス及び有力なる彼の一派の某氏が當選したのは、一面に於て當時反政府熱の勃興

の凄まじかりしことを語るものである。然し斯くても政府は國王の庇護によつて仍ほ安全であつた。扨て政府は斯く民心を激すべきを知りながら、何故に勃牙利軍南下の認許を敢てしたのであらうか。是れ思ふに一つには獨逸の壓迫にもよらう、又一つには獨逸より他日勃牙利をして必ずカヴァラを撤退せしむべしといふ保障を得て居つたからでもあらう。が、然し全體として此時の政府は獨逸と極めて親善の關係にあつた。現に塞耳比亞の殘兵をコルフからサロニカに送る時でも、初め聯合國は希臘領を經て陸路直にサロニカに送らんと欲したが、希臘は之を承認しなかつたが爲めに、止むなく海路を取つたのであつた。當時の内閣は、極端に獨・墺派なるスクールーヂス内閣である。彼は表面一旦は勃牙利に抗議を提出した。獨・墺側よりは、敵國兵のサロニカに據ることを默許しながら、勃軍の一要塞を占領するに抗議するとは不公平だなどゝ反對抗議を申し込むあり、且つ又邊境の希臘守備軍が、撤退の命令に接するに先つて勃牙利軍の侵入を見た爲めに、一時兵器を取つて反抗を試みた事があつたので、輕躁なる操觚者中には希・勃兩軍の開戰を想像した者もあつたが、事の實際は當時の希國政府は好意的に勃軍の行動を默許して居つたのである。否當時他の一面に於ては希臘は勃牙利より共同して聯合軍に當らうとの提議に接したとか、又は希・勃兩國の間に一の協約が成立したなどゝいふ噂さへ傳つた。要するに、希臘がその頃勃牙利に多大の同情を表して、英・佛側の活動を妨げたことは疑を容れない。

此希臘の態度に對して、聯合國は嚴重なる共同抗議を申し込んだ。只一片の紙上の抗議のみではない。今度は英佛側もよく〳〵決心するところあつたと見え、軍艦を以て海上より封鎖を行ひ、食糧石炭等の輸入を禁じ、又希臘商船の歸航をも妨げた。之は實に希臘にとつて非常な打擊である。後日の報道によれば、之が爲めに食料等の大缺乏を來たし、中にも東のカヴァラ地方、西のエピルス地方の慘狀は、非常なものであつたといふことである。而して希臘の政府は此抗議に對

し、一應は中立嚴守の聲明をなし、聯合國側の不利を故らに計るものではないと辨明したけれども、實は暗に下級の警察官吏などを使嗾してアゼンス市に反聯合國の大示威運動を起さしめ以て之に答ふる所があつた。當時我國の新聞が反英・佛若しくは、ヴェニツェロス排斥の大示威運動があつたといふ西電を傳へたのは即ち之である。而して之には希政府も陰密に關係があるといふことが明瞭であつたので、それ丈け英・佛側の追窮も嚴重であつたと思はるゝ。希臘政府は封鎖によつて蒙る苦痛の大なるに苦んで、一度詰問的に訴ふる所あつたが、之に對して英・佛側が、希臘が其の現に行ひつゝある動員を止め、且つ我々の方に敵意を有する一部の役人を免職するまでは、現狀を續くるの外はないと斷然たる返答をしたのでも決心の程は分る。此答辨にもあるが如く、希臘政府は實は月の十日過ぎより一般動員令を下して、イザと言はゞ聯合軍に當らんとするの氣勢を示して居つたのである。

さてこの英・佛側の强硬なる壓迫に對して、希臘に多少困憊の色なきに非りしも、當時宮廷内には獨逸派の跋扈甚しかつたので遂に其態度を改むるに至らない。そこで英・佛側は更に一歩を進めて、六月央ば過ぎ次の四ヶ條の要求を提出し、即刻之を容れずんば輙ち自由行動を取るべきことを聲明した。曰く、(一)政府は現に行ひつゝある動員を速に且つ現實に止めること。(二)現内閣を更迭し、中立義務を忠實に遵奉する者をして、後繼内閣を作らしむること。(三)議會を解散し相當の時機に於て總選擧を行ふこと。(四)外國の使嗾の下に働く一切の官吏を罷免すること。是に於て流石の希臘宮廷も遂に屈し親獨派のスクールーヂス内閣は倒れ、ザイミス代つて其後を受けたのは六月廿一日であつた。議會も直ちに解散された。斯くて希臘の態度は餘程公平になつた筈ではあるが、然し此後とても政府は矢張り全く獨逸派の壓迫を脫することが出來なかつたと見えて、頻りに一方に民論を壓迫しつゝ、他方獨・勃側の便利を計つた形跡がないではない。

其中に前陳の如くサロニカの聯合軍が動き出した。

七月下旬からそろ〳〵攻勢を取り、八月十日頃の電報は、已にサロニカ北伐軍の先鋒がドイラン湖右岸の地を占領したといふことを告ぐるに至つた。之を聞いて獨逸側は固より默つては居ない。彼は先きに五月末勃牙利軍の一部をして希臘領内に入らしめて居つたのであるが、今や此報に接し更に機先を制せんとして、八月の廿一日再び勃牙利軍の大部隊を促して、南下遂にカヴァラ港へ向はしめた。(カヴァラは九月十三日遂に勃軍の占領する所となつた)當時の電報によると、此日勃牙利公使は希臘政府に向つて、軍略上の必要より此度貴國の某々地方を一時占領すべきにつき、惡しからず御了承を乞ふといふ樣な意味の事を通告したとのことであるが、事實に於ては、勃軍の南下するや、希臘の駐屯兵は先づ穩かに退却して、スツルマ河東岸の諸要塞は之を穩に勃軍の手に委ねたのであるから、或は多くの人の想像するが如く、勃・希二國の間に已に何等かの脈絡があつたのかも知れない。八月の末よりはいよ〳〵獨・勃聯合軍とサロニカ軍との衝突を見んとすとの報道があつたが、希臘の此際に於て以上の如き態度をとつて居るといふことは、英・佛側にとつて兎に角一つの苦痛である。之れ英・佛側が、先づ羅馬尼亞を制し續いて希臘に向つて辛辣なる高壓手段に出でたる所以であらう。

(三)

八月廿七日、伊太利の對獨宣戰と共に羅馬尼亞の墺太利に宣戰したのは、一つには英・佛殊に佛蘭西の外交の成功ではあるけれども(佛は從來の公使ブロンデルに代ふるにサン・オーレールを以てし、極力羅馬尼亞の宮中府中を動かすに努めたのであつた)、實は六月以來の露軍の頽勢挽回の當然の結果である。從來世人の羅馬尼亞の態度を論ずる者、動もすれば古來の歷史を援引して、或は彼が獨・墺側に近いとか、又或は露西亞に動さるゝとか言ふ。然しながら、歷史上のことを言へば、成程久しく露西亞と仲が惡るかつたのであるが、然し最近に至つては墺國とも決してよくはなかつた。國内に親露・親墺の二派あるは事實であるけれども、一

昨年十月の國王の交代以來、何れかと言へば宮廷の形勢は聯合國側に傾いた。現王は先王の甥で、矢張り獨逸皇室の支族たるホーヘンツオレルン・ジグマリンゲン家の出であるけれども、皇后は、父方の系統を言へば英國ヴイクトリア女皇の孫にあたり、母方の系統を言へば露西亞の亞歷山二世の孫即ち現露國皇帝と從妹の關係になる。民智開けざる同國に在つては、宮庭の態度は案外に國家の進路を決定する上に有力である。併しながら此等の關係にあるからと言つて、羅馬尼亞が輕々しく英・露側につくものと速斷するのは正當でない。羅馬尼亞の如き小國の常として、殊に巴爾幹の一隅に位して强大國から從來揉みに揉まれた國としては案外に利害の打算には敏捷なものであるから、此等の國の去就を判斷するに方りては吾人は先づ情誼よりも利害といふ點に主たる着眼點を置かなければならない。此着眼點からして、予輩は當初から羅馬尼亞は場合によれば聯合軍側につくだらう、獨逸側には容易につくものではないといふ見解をとつて居つた。何故かと言ふに、如何に獨逸軍側が當初の景氣がよかつたと言つても、大勢の彼に幸せざるべきことは初めから明白であるからである。若し大勢に於て獨逸の勝利が明白なものであるならば、彼は夙うの昔に勃牙利と運命を共にして居つた筈である。四月七日穀物賣却の約束が成つて、伯林で調印を終つたといふ報道は、必ずしも羅の獨に親附するの意味を語るものではない。獨の景氣のよい間は彼は局外に中立して居る方が利益なのである。之れに反して若し戰爭の局面が一轉して露西亞側が少しでも景氣がよくなると彼は到底孤立傍觀の態度を取り得ざる理由がある。何故なれば、露西亞の景氣がよければ、彼は自ら洪牙利方面に進んで行く。さうすれば羅馬尼亞が多年垂涎措く能はざりしトランシルヴアニアは、遂に露の占領するところとなつて仕舞ふからである。トランシルヴアニアには三百萬の羅馬尼亞民族が居り、之れを併合するを以て羅馬尼亞は建國以來の大理想として居る。然らば彼は洪牙利征伐の進軍には何うしても參加せざるを得ないのである。從來

同一の機會に羅馬尼亞が斯の決定をなすのを躊躇したりしは、一つには巴爾幹に於ける獨・墺の勢力を恐れたのと、又一つには之に附隨しては勃牙利より蒙るべき所謂後顧の憂の爲めであつた。此二つの懸念さへなくば、羅馬尼亞は時期の到來と共に、自由なる行動を取るに遲疑するものではないのである。而して今や露軍は再び東歐に於て活躍を始めた。是れ即ち羅馬尼亞の起立を促す好機會である。加ふるにサロニカ軍の活躍は又以て勃牙利の行動を牽制するに足る。露軍よりは應援の約束もある。ソコで羅は少からず其安心を强めたものと見えて、玆にいよ〳〵戰爭參加といふことに決したのであらう。

　露西亞と羅馬尼亞との接近に關する報道は、六月央ば過ぎよりぼつ〳〵我國の新聞に表はれた。十八日の電報は羅馬尼亞政府の露軍隊に許すに自國内通過を以てせる（表面は之を否認せるも）の事實を傳へ、之に引續いてまた戰爭參加を要求する人民の示威運動は同國の各地方に於て大に起て居るといふ報道が到來した。七月の下旬には餘程機運が熟したものと見えて、墺は羅馬尼亞の非友誼的態度の到底之を黙し得ざるに氣附き、昨今頻りに對墺國境の防備を堅めつゝありといふ報があつた。斯かる形勢のいよ〳〵絕頂に達したのを示すものは八月十三日の電報であつた。曰く羅馬尼亞政府は聯合軍側と協商を遂ぐるにつき、國王の特許を得たり。協商の目的は八月末を以て聯合軍側の爲めに總動員を行ふを約するにありと。此頃より羅は遠からずして獨・墺に對して宣戰を布告すべしといふ說が頻々として傳へられたのである。之には獨・墺側も餘程焦慮したものと見える。之より先き八月十六日の電報には獨逸は如何にもして羅の中立を買はんと欲し、墺を說いて其領土の一部を羅にさかしめんと努めつゝあるとあつた。墺が斷りしか羅が應ぜざりしかは能く分らないけれども、兎に角此等の苦心も終に羅の蹶起を妨ぐることは出來なかつたものと見える。月の末に至り各方面に於ける一般聯合軍の活躍とともに、羅馬尼亞の決心はいよ〳〵定まれりといふ報道があつた。一說に

よれば、十五六日頃獨逸皇帝は「特に協議したき件ありメ・クレンブルブ大公を特派せん」と申込んだのに羅馬尼亞王は「御協議は普通の外交機關によつてなされたい」と言ふて、特使の接受を婉曲に斷つたと傳へられて居る。斯くして羅馬尼亞は八月二十七日を以て公然墺太利に對して宣戰を布告したのである。而して之と同時に直ちに兵を進めてトランシルヴァニア方面に向はしめた。

(四)

羅馬尼亞蹶起の報道が希臘に於て、國內の不平黨に著大の刺戟を與へた事は言を俟たない。希臘に於ける大多數の人民は、言ふまでもなく所謂ヴェニッェロス派にして、此際聯合軍側に加擔することを欲するものである。只最近宮廷の勢力が一部の軍隊と結托して親獨主義を標榜し、高壓的に民論を抑へて居つたから、國內の不平は表面に表はれなかつたのである。然るに今や羅馬尼亞は起つて、巴爾幹の形勢は將に一變せんとして居る。是に於て不平黨は俄に元氣を恢復して、再び表面に活動するやうになつたのである。八月の末から九月の初にかけて、頻々として傳はつた各地方の革命的暴動は、皆現政府に反對して親聯合國側の政府を作らんとする運動である。尤も之には聯合軍側の隱密なる援助も加つたのではあるまいかといふ疑がある。各地に起つた革命運動の策源地がサロニカにあるといふが如きは、大に此想像を確める材料である。聯合軍側としても、羅馬尼亞の行動を有效ならしめ、勃牙利の對羅進擊を牽制する爲めには、希臘に一ト騷動を起すも必要であつたのであらう。それは此際希臘を動かすことが出來なければ、羅の後方に於て勃を活動せしめ折角の羅の蹶起をして十分なる効を奏し得ざらしむるの惧あるからである。希臘を動かすことは實に聯合國側に取つて非常に必要なのである。されば聯合國側は啻に裏面に於て之等の隱謀をめぐらしたのみならず、なほ表面に於ても駐在使臣をして連袂希臘政府に對して一大活動を開始せしめた。其活動の如何に激烈にして、且つ單刀直入一刻の猶豫をも許さゞる底のものな

りしかは、三十日には聯合國使臣の希國首相を訪ひし結果、首相は直にヴェニツェロスを招じて密談をこらしたといふ報道があり、卅一日には首相ザイミスの辭職を報ずるのみならず、希臘王までが退位したとか、又は俄かに病を得て危篤であるなどいふ報道の傳はつたのでも分る。退位說も危篤の說も、其後引き續いて之を確かむべき報道がないから、眞實ではなかつたのであらう。けれども內閣の大に動搖したことは疑を容れない。ザイミスがいよ〳〵辭職をしたとか、或は辭職を思ひ止まつて內閣改造に着手中だとか、正反對の報道が同時に着するので、眞僞の取捨に迷ふのであるけれども、希臘國政府が著しく聯合國側と民論との壓迫を蒙つて、今や將に中立の態度を捨てんとしつゝあること丈けは明白である。

之を要するに、七月の卅日頃から八月の初めにかけての希臘全國の形勢は、著しく聯合軍側に有望なものであつた。マセドニア地方を初め、主として希臘の東北部に起つた革命的暴動には、一部の軍隊の之に加擔するものもあつて、激しく現政府の親獨的態度を難じ、殊に首府アゼンスに於ては、八萬五千の民衆が市中をねり步いて、王政府を呪ひ、ヴェニツェロス萬歲・聯合國萬歲を連呼したといふことである。獨人の逃亡する者も亦少からずあつた。而して此等の革命運動の主動者の必ずや聯合國側と結托して居つたことは一點の疑を容れない。彼等は場合によつては進んで政府を乘取り、其命令を以て聯合國の爲めに總動員を行はんとさへ聲言したといふことである。之と相應じて英・佛・露の公使も亦頻りに希政府に迫る所がある。二日夜には共同して希政府を訪ひ、(一)國內の通信機關は從來獨・墺の利用に供せられて居つたが爾今は一切聯合國の支配の下に置く事。(二)秘密運動に從事しつゝありし敵國人をば即刻追放する事。(三)希臘國臣民にして獨探たるの證歷然たる者に對しては直ちに必要なる手段を取る事の三點を要求した。此爲めにや有名なるシェンク男爵を初め、數名の獨逸人は拘禁されたといふ報道も傳はつた。而して希政府は他に如何とも仕樣がなく九月四日此要求

の全部を承認するの意を表した。

斯くて希臘に於ける聯合國側の勢力は依然として盛になつた。然るに幾くもなくして十日前後から其反動が起つた。獨逸派の勢力も實は宮廷並びに一部の軍人の間に案外に強いものがある。十一日の電報によれば聯合國側の公使が佛國公使館に集つて會議中、ヴェニツェロス反對派の者廿五名突如館内に闖入し、希臘王萬歲を連呼しつゝピストルを發射して逃亡したとある。十二日の電報にはグーナリス派及び豫備兵同盟團隊の反抗にあつて、首相ザイミス大に進退に窮すといふ報道があつた。思ふに初め革命的暴動の突發にど膽を拔かれて暫らく啞然として居つた親獨派は時を經て茲に陣容を整へ決然反抗の運動を開始したものであらう。かういふ譯であれば假令如何に聯合軍側の勢力が振つても、希臘が羅馬尼亞の如く容易に起ち難い事情のあることは初めより覺悟せねばならぬ。去年の暮、佛のコシャン、英のキッチナーさへ、希を動さんとして無駄骨を折つたのであつた。只最近の報道によれば、首相ザイミスは聯合國及び國王の勸說によつて漸く辭表を撤回し、爲に希は軍器彈藥の十分なる供給さへ得れば遠からず聯合國に味方して起つだらうといふことである。別說にはザイミスは辭職を許され、前法相デミトラコプロス其後を繼ぎ、羅馬尼亞の軍容にして確實に勃を壓するの見極めがつかば、直ちに中立の態度を捨てゝ、起つだらうといふことである。斯くして早晩希の態度も決定するであらう。果して、希が聯合國側に味方して起てば巴爾幹の形勢更に一進展すべきことは、固より疑を容れない所である。直接軍事上に表はるゝ影響も大なるものがあるが、參戰諸國の民心に及ぼす精神的影響に至つては、更に大なるものありと云はねばならぬ。

（五）

羅馬尼亞蹶起の報が、大に獨・墺側を驚かしたこと、是れ亦極めて明白である。固より全然豫期しなかつた事柄ではあるまい。然し敵國側と同樣に、自分の方からも色々運動して居つたのであるから、萬一の希望には

かけて居つたかと思ふ。けれども八月の卅日、從來の參謀總長フアルケンハイムを罷めて、ヒンデンブルグを其後に据ゑ、西部戰場を重視したる從來の態度を改めて、之より東部戰場により多くの力を注がんとする戰法に移つたのは恐らくは、羅馬尼亞の問題と何等かの關係があるのではあるまいか。世人はフアルケンハイムの引退について、色々の批評を試むるけれども、假令彼にヴエルダン攻擊を固執せるの失敗ありとはいへ、開戰の當初佛のジヨツフル將軍と相並んで、今次大戰の兩大立者であつたことは、何人も之を爭ふまい。斯かる功臣を動かしたのであるから、獨逸の方にも非常な決心のあつたものと見なければならぬのである。又墺太利に於ても羅の進擊に接し、トランシルヴアニア一部の拋棄を顧みず、直に戰線を短縮するの策に出でたとの事である。又九月一日の報道によれば、勃牙利に於ても、羅の蹶起の結果俄かに親露派の活躍を見たので、政府は急遽高壓手段を以て之に望み、捕縛せらるゝ者頗る多かつたといふことである。此等は孰れも皆此警報に對する獨・墺側の警戒を語るものである。而して前にも述べたが如く、巴爾幹に於ける形勢の變轉は、即ち獨・墺側に取つては其の死命に關する重大事なるが故に、彼等は直ちに此新形勢の發展を阻止すべく、全力を注いで大々的の活動を初めたのである。其の活動の方面は二つある。一つは希臘の牽制で、一つは勃ををして羅を逆擊せしむることである。希臘の事は先きに說いた。勃を出兵せしむる事に就いては、獨・墺よりも相當の援兵を送つたものと見えて、彼は羅の大兵を西方に送れる隙に乘じて、南方より之を衝くの策に出でた。從つて羅は開戰の當初トランシルヴアニア方面に於ては著々戰勝の功を收めて居たに拘らず、南境殊に東南部に於ては、殘念にも獨・勃軍の進軍を食止めることが出來なかつた。トルツカイは間もなく占領され嘘か本當か二萬人の兵が敵の捕虜になつたとある。ドブルヂヤ方面にては、羅・露兩軍陣容を整へて、南下勃を侵さんとして居つたのであるが、却つて敵に機先を制せられ、其逆擊に堪り兼ねて退却を餘儀なくされて居る。

尤も九月十日過ぎのロイテル又はタイムスの報道によれば、獨・勃軍の攻勢は阻止せられたとか、又羅・露聯合軍は先に勃に奪はれたところを取返したとかいふ報道がある。が、併し他の一面に於て合同通信社の報によれば、羅・露聯合軍等は依然として、敗退しつゝありとか勃は先年の第二次巴爾幹戰で失つたものを奪還せりとかいふて居る。今日までのところ此方面に於ける形勢の眞相はまだ分らない。何れにしても、勃牙利に斯く機先を制せられたといふとは、羅・露兩國の一失態である。或は想ふに當初羅が宣戰を布告する際には彼は何等かの理由により希の必ず勃を牽制すべきことを豫期して居たのではあるまいか。然らざれば彼は勃に對する準備まだ十分ならざるに何等かの事情に促されて輕々しく宣戰したものと觀ねばならぬ。何れにしても玆處に思はざる不覺をとつて、却つて希をして態度の決定を遲疑せしめた結果に了つた失態は、何と云つても之を認めざる譯には行かない。けれども露西亞の方面から、其中段々援軍が來るといふことであれば、或は早晩勃を壓して攻守其地位を顚倒するを得るかも知れない。が、若し玆に至るまでに勃からブカレストでも侵されるといふことになつては、折角西方トランシルヴァニアに勝つても、何にもならないことになる。

もし羅が假りに之等東南方面に失敗したとしても、此方面丈けの小失敗は實はまだ以て全局の勝負を動かすには足りない。何故なれば、今や聯合軍は、其戰爭の本舞臺に於て已に優勝を維持し得たるのみならず、サロニカ軍亦着々進出して獨・勃軍を確實に壓迫して居る。而かも希臘も亦近く起つて聯合軍を助けんとして居り、トランシルヴァニア方面でも、羅軍の進出は恰度同地の眞中頃を東北から西南に貫流するマロス河方面まで墺軍の退却を餘儀なからしめたといふことであるから此勢で進めば、如何に個々の小ぜり合で勝つても、羅・勃國境の獨・勃聯合軍は到底自ら孤立の形に陷るの外ないからである。若し夫れ吾人の期待するが如く、幸に羅露聯合軍、更に準備を完全にして、勃軍を有效に南方に壓迫するとを得るならば、巴爾幹は最早や獨・墺

のものではない。而して巴爾幹に於ける斯の如き形勢は又自ら土耳古に於ける形勢の一變を促さないとも限らない。土耳古に於ては元來親獨派の方は少數である。只此少數者は目下實權を握つて、私かに多數民心の動搖を恐れて居る。ソコデ政府に反對する者には極端なる迫害を加ふので、其有力なる者は今や多く外國に亡命して居る。而して此等の亡命者中には、聯合軍側と秘密の聯絡をとつて、故國に事を起すべき機會を窺つて居る者も少くはない。此等の危險分子と懇談協定を遂ぐるの目的を以て、七月初め下院議長アーメット・リザ・ベーは瑞西に赴き、有力なる亡命者と數回の會見を重ねたが、彼等は現內閣の卽時の辭職、親獨的外交政策の一變といふ二條件を容れなければ斷じて協定に應じないといふ、斷乎たる態度を毫末も變へなかつたといふとである。然らば土耳古の形勢の如きも亦實に風雲頗る急なるものありといはざるを得ない。巴爾幹周圍の形勢にして一變せん乎、土國の內外に於ける政府反對者は、聯合國の助けを籍りて何ういふことを起すか測られない。聯合國の活躍によつて獨・土の交通遮斷せらるゝの日は即ち、吾人の特に刮目して土國の風雲を注視するを必要とするの日であらう。

(六)

孰れにしても最近の戰局は、從來勝味に行つて居つた獨・墺をば一轉して受身の地位に置くとになつて居る。尤も之を以て主客の地位全然顚倒し了せりと論斷するのは早計であらう。けれども巴爾幹今日の形勢が確かに聯合軍側に多大の光明を約するものたることは明白である。況んや肝腎の本舞臺の戰場に於ては、今や東西共に聯合軍側の活躍を見て居るに於てをや。卽ち西歐佛國方面に於ては、五月の初めまでに或はアルカンゲルを經由して露本國より、又或は印度洋を迂回して西比利亞方面より若干軍隊の露國の增援を受け(第四回目の露國軍隊の輸送船のマルセーユに着いたのは五月二日である)たるに拘らず、常に敵の壓迫を蒙り、中にもヴェルダン前面の防備は着々獨の侵略を蒙り、朝に一城を失ひ、夕に一塞を陷れられて、六月央ばには

危機いよ〳〵迫るの報があつたが、六月の末に至つて此形勢は漸く轉回し、英・佛聯合軍はいよ〳〵容を改めて攻勢を開始することゝなつた。七月の一二日頃からは、歩兵の大進擊を始めたが、此等は確かに英・佛側が多少の自信を以て行つた攻擊であることは、七月十五日陸相ロイド・ジョージが倫敦に於ける聯合軍事會議での演說によつても明かである。七月の末からは危機全く去り、再びヴェルダンの陷落を說く者はなくなつた。八月の三日からは、佛軍が却つて多少獨逸に向つて踏み出して居る。獨りヴェルダン許りではない。ソンム方面に於ても、英・佛側の攻勢は最近着々獨を壓して居るやうだ。塹壕戰であるから、其進展の捗々しくないのは固より止むを得ない。けれども予の手許に到着せる七月末迄の獨逸の新聞雜誌を前後對照して見ると、此頃の記事の題目は「ソンムに於ける英・佛の攻擊」とか、「英・佛襲擊の失敗」とか、「英・佛の攻擊總て擊退せらる」とか、「敵の攻擊更に發展せず」とか、「英・佛新進擊の失敗」とか、數へ立てると際限が無いが、皆英・佛の攻勢といふことを主題とした書き方が著しく多くなつた。我より進んで敵を壓迫したとかいふやうな題目は全くないでもないが、以前に比すると非常に其數を減じた。此種の獨逸側の材料によつて見ても、英・佛の攻勢が今や少からず獨逸を苦めて居ることは、略ぼ之を觀取することが出來ると思ふ。若し夫れ東歐に至つては、早く已に六月六日を以て攻勢を開始し、十一日には首府チェルノヴィッチを占領してブロビナを略し、七月十日前後には一時露軍の守勢に轉ぜるを見しも、央ば過ぎよりは再び攻勢に復して、而かも其攻勢は南方許りではない、北方のリガ方面にも及んで居る。最近の報道によれば、獨逸は各種の部隊を合して、十二三師團を西部戰場より東部に移したとのことである。之れに依つて些か露軍の行動は牽制されたかの觀もあるがそれでも未だ十分に攻守の地位を顚倒するまでには至らない。而かも手薄となつた西部戰場に於ては、英・佛の壓迫に苦めらるゝこと前述の通りである。更らに進んで伊太利の方面を見るに、五月の央ばから

墺軍の大擧して、南下するありて、チロールの全線に亙つて一時伊軍の旗色更らに揚らず、月の末頃最も不振の狀況を呈したのであつたが、六月七八日頃に至り、露軍の攻擊開始と共に墺軍の攻勢の衰へたると共に、伊軍は再び盛を勢り返した。時恰かも同國總選擧終り、有力なる內閣の出現を希望するの聲高く、國民の元氣大ひに振ふたので、十二日には伊軍却つて攻勢に轉じ、二十日成立したるボチェリー內閣は、一層積極的の態度をとる事となり廿六日には墺軍の總退却を見たが、遂に八月の九日に至つて、首尾よくギョリッチの占領を見た。廿七日改めて獨逸に宣戰を布告し、サロニカに兵を送つて、巴爾幹に於ける英・佛軍との共同策戰に當らしめてことは先に述べた通りである。

斯くの如く觀察して見れば、今や獨・墺側は前日の如き勇往邁進の元氣がないことは明白である。尤も獨逸側は、近頃に至つて急に人命を重んずるの態度に出でたといふことであり、殊に今年の收穫期までは、多數の人命を損するやうな積極的策戰は特別に之を避ける方針だといふことである。果して然りとすれば、或は獨の今日の退嬰的態度は、收穫を收むる時までの我慢に過ぎないのかも知れない。只一般に人命を重んずるといふ佛國流の戰法が、如何に漸く兵員の供給に不足を感じて來たとはいへ、獨逸としては決して採り得ざるところの方策である。なぜなれば、人命を惜むといふ戰法は自ら持久戰に傾き、持久戰は即ち獨逸に損で聯合國側の利とするところであるからである。要するに、今日輕々と獨・墺の衰兆を語るのは或は早計といふべきであらう。併し一葉は既に落ちた。天下は最早秋らしい。遠からず收穫期を終つて獨・墺が更に如何なる態度に出づるであらうか、又巴爾幹に於ける勃・土の困憊に對して彼はどれ丈けの有力なる援助を與へ得るだらうが、之等の點も其中明かになつたならば、其時こそ我々は初めて確實に獨・墺の實相を斷定するとを得るだらう。然し孰れにしても、獨・墺側が今日段々に困難の地位に陷りつゝあることは言ふまでもない。何故なれば、先づ第一には物資と人員との缺乏があるからである。世

上の論客の間には、獨逸は容易に物資殊に食料の供給には事缺かないと、色々精密の材料を擧げて說く者がある。吾人の常識は固より之を其儘に承認するを許さないが、假りに事實どうかかうか間に合ふものとしても、色々面倒な規則を作つて每日食糧制限したり、肉を食ふなの、卵を食べるなの、甚しきに至つては五月末二三の大都市に行つた如く、官設炊事場を設け、そこへ集つて一定量の食物を受けよなどいふことを遣つては、如何に食料の供給は大丈夫だといつても、一般の人民が承知しない。食料缺乏といふ各個人の主觀的の危惧の念は到底打消すことは出來まい。斯かる夢にも想像しなかつた出來事が目前に存し、而かも戰爭が此儘何時までも續くものなら、此先きどんなことになるかと非常な不安を前途にかけるといふのでは、如何に戰時人心昂奮の際とはいひながら、民心の動搖不安は之を免るゝことは出來ないと思ふ。現に物價騰貴の結果各地に所謂食糧暴動なるものが起つて居るといふではないか。これでも民氣沮喪することなしとは、我我何うしても考へられない。其上差當つて兵員に缺乏せることは、着々目前の急となつて居る。統計の示すところによれば、獨逸一國についていふに、男子の數三千萬、其中廿一才以上四十五才以下の者が一千二百萬ある。此中諸般の國内の事業に從事するもの（之も女で出來るものは出來る丈け女に代へたとして）を除かねばならぬから兵としては八百萬人以上を動かすことは困難だらうといふことである。開戰當時は六百萬を動員したとの事であるが、其中死傷者の全數は、獨逸の公報によるとして九月十三日の東京朝日新聞に掲ぐるところによれば、三百二十七萬六千（内死亡八十萬餘）を超えるといふことである。此計算によつて見ても、兵員の缺乏は最早疑はない。猶又聯合軍側の最近の活躍に對して獨逸の感ずる苦痛は、獨り戰場に送るべき兵員の缺乏ばかりではない、國内にあつて兵器彈藥を製造するものにも亦不足を告げて居る。之が亦少からず民氣を沮喪せしめて居るに疑ひない。更に之に加ふるに、五月卅一日の海戰の結果は、海上に於て

英國を破ることの絶望なることを明かにした。且つ今日まで敵國側が毫も屈せず、而かも最近に至つて却つて其活躍を見るに至つたことも亦、人心に多大の不安を與へたに相違ない。十四日の我國諸新聞に獨逸に於て新募公債に應ずるもの、極めて少かりしを報ずるものの如きも、這般の消息を語るものであらう。予の手許に到著した七月六日の新聞には、南獨逸バーデンの首府カールスバーエに於て、六月廿二日の祭禮に多數の老若男女の集れるを見濟まし、午後突如數臺の佛國飛行機が出現して、十五分間引續き爆彈を投下し、爲めに百十七人（男三十、女五、兒八十二）を殺し、百四十人（男四十八、女二十、兒七十二）を傷けたといふことを報じて居るが、其中には罪なき非戰鬪員を慘殺せることの横暴を說いて、盛に佛人の暴逆非人道を叫んで居る。然し斯くの如きことは、寧ろ獨逸が本家で、此種の人道論は寧ろ從來屢々英・佛より獨逸に加へられた所であつた。それが一轉して獨逸の新聞に此種の心細い弱音を聞くに至つたのは、一つには佛國の飛行機が此方面に於ても近時大に活動して居るの事實を示すと同時に、又一つには獨逸の民心がまた大に敵の威嚇に恐れ出したことを語るものである、それかあらぬか、獨逸には最近非戰論的運動を隱密に企てゝ居る者が少くないらしい。予は議論の公平を期する爲めに全然獨逸側の材料によつて判斷をするが、五月十四日には戰線に於て危險なる印刷物を頒布したるの罪によつて、死刑を申渡された者が三十五人あり、而かも其中に三人の將校があつたとのことである。又夫の獨逸で一番過激な非戰論を唱へて政府を苦しめ、且つ一時は官命に反いて兵役につくを肯んぜなかつた爲に、銃殺の刑に處せられたといふ訛傳の傳はつた有名な社會主義者のリーブクネヒトは、兼ねて重大なる國事犯人として審問を受けて居つたが、六月廿八日の宣告に依つて最少刑の二年半の禁錮に處せられた。官憲が特に最少限度の刑に處し、而かも之に伴つて公權を剝奪せず、依然國會議員としての地位を有せしめて居つたに就ては面白い解釋が付いて居る。即ち獨逸新聞自らの註釋

するところによれば、右の不思議な判決の理由は、彼を死刑に處する時は却つて彎屈して居る民間の不平を激發せしむるの恐があり、又彼の公權を剝奪すれば自ら國會議員の補缺選擧を行はねばならぬ結果を來たし、其補缺選擧には必ずリーブクネヒト一味のものゝ當選を見るの恐れあるからとの事であると。是れ偶々獨逸民心の今日如何なる狀態にあるかを語るものではあるまいか。予は獨逸民族の偉大なることを疑はない。殊に獨逸の政治家の常に難關に際して巧みに之を切り拔けるの技量を疑はない。けれども民心將に戰に倦み茲に變調を來たさんとするの危機に際して、今や聯合國側の一大奮躍を見る。獨逸にとつては今や實に危急存亡の秋である。只此形勢を如何に展開するか。是れ今後聯合軍側の如何に戰局を進展するかといふ問題と共に、吾人の興味を以て觀察せんと欲する所である。

（七）

尙序に他方面の戰場についても一瞥を加へて置かう。主として西亞細亞地方をいふのであるが、之は目下のところ餘り大勢には關係はない。一時獨・土の勢力が小亞細亞から波斯にかけて張つて居つた際には、遠く印度を脅かして事態頗る重大なるものあるを思はしめたけれども、最近形勢は一轉し、幾分聯合國側に有利に發展せんとしつゝある。何れにしても此方面は一々之に力を注いで居つては本舞臺の方が疎そかになるを恐るゝものと見えて、今日のところ聯合國側は、大體波斯、印度及び埃及の安全を保障し得たるに止めて、それ以上更に十分の力を注がないやうだ。茲處に注ぐの餘力があるなら、之をサロニカの方面に加へた方が寧ろ得策だといふのでもあらうか。

今此方面で戰爭の舞臺となつて居るものは、一つはミソポタミヤ、アルメニア方面で、他の一つは小亞細亞の南部からアラビアの方面である。前者は波斯より獨・土の勢力を驅逐し、以て同國並びに印度の動搖を防ぐを主たる目的とするもので、初め南北兩方から手が加へられたのであつた。即ち北は高加索より露軍が南下し來り、南は波斯灣より英軍が兵を進めた。此方面の運

動は四月上旬クト・エル・アマラの英軍が、タウンセンド將軍以下九千の兵卒を以て、土軍に降服せるが爲め一時大に蹉跌したけれども、北方の露軍がエルゼルムを占領して以來は着々土軍を壓迫することになつた。一時多大の獨・墺援軍を得たるに勢を加へた土國の逆襲によつて逡巡ろいたが、七月央ばより露軍再び元氣を恢復し、西歐戰場の一般形勢の變化の結果、土の獨より最早多くの援助を期待し得ざるに乘じて、七月廿五日彼は長驅して土軍の根據エルチンガンを占領した。之が軍事的に非常な成功であることは、已に當時多くの人々から論じられたところである。斯くして一時動搖した波斯の如きは、英・露側から見て、絶對に安全となつた。其結果として表はれたものは、八月八日の英・露・波の三國協約である。倫敦發の電報によれば、北部波斯に於ては、軍事上の全權を全然露西亞に委任し、南波斯に於ては、全然英國に委任するといふことである。其外財政上についても、特別の條項が結ばれたやうである。尤も此協約は、從來の波斯に關する英・露兩國の協約の主意を一層確實にしたものに過ぎないとも見らるゝ。一九〇七年八月の英・露協商は、兩國の勢力範圍を南北に分ちて、其間に中間區域を定めたものであつたが、然し之は波斯の事に關しての英・露兩國間丈けの約束である。此約束を波斯が承認するとせざるとは、之れ全く別問題であつた。然るに今度の協約は、從來の約束に更に一歩を進めたものを、波斯自身も亦參加して約束を堅めたのだから、最早土・獨の勢力の入り込む餘地はなくなつた。從つて波斯は全然英・露の勢力のものとなり、印度、アフガニスタン等の安寧も亦之によつて殆んど絶對的に確實にされたと言つてよい。之れ豈聯合國側の一大成功ではないか。

次に亞細亞の西端に於ては、土・獨の尚此方面に勢力を振つて居た頃、動もすれば砂漠を横ぎつて埃及を脅かさんとするの意氣込を示した。陸上よりする埃及攻撃の極めて困難なるべきことは、予輩嘗て『歐洲動亂史論』中に之を論じたことがある。然しながら獨逸側の大いに振つて居た際には、其萬難を排して爲し難き

を爲さんとするの元氣と努力とは、吾人をして時に埃及攻撃の或は不可能にあらざるべきを思はしめたのであつた。現に英國自身も一時不安を感じたものと見え、西歐戰線より多數の印度兵を割いて、埃及の防備に當らしめた事もある。然るに今年春以來の形勢は、段々に此方面の形勢を變へた。而して六月廿二日突如として吾人を驚かしたアラビア人叛亂の報道は、正に同地方に於ける形勢の急變を吾人に告ぐるものである。其報道に曰く。アラビア人はメッカの大僧正を戴き土耳古に對して叛旗を飜し、西部及び中央アラビアの各種族を團結して其獨立を宣言したと。猶後報によればアラビア人と土耳古人との衝突は、六月九日から初まつたとの事である。尤もかゝる報道は今日突然我々の耳に達したのであるけれども、此の地方に於ける不穩の兆は爾く決して新しいものではない。去年の五月已に、メッカ駐在の知事ガリップ・パシャが土人の襲撃に逢つたとか、又久しく土民怨嗟の的となつて居るジッダの知事イブラヒム・パシャに對する暴行の計畫が發見されたといふ類の報道があつて、吾人をして此地方の民心の土耳古に對して不滿を有するを想像せしめたのであつたが、更に去年の夏には、シリアの總督が管內の動搖を鎮めんとて、武力を用ひ、捕獲絞殺頻々として行はれたといふ報道があつて、餘程事態の輕からざるを告げたのであつた。けれども此方面の報道は、連續して新聞に載ること極めて稀なので、去年以來今日迄の經過は、十分精密には分らない。けれども六月の末を以て、メッカが全然叛徒の手に入つたといふ確實なる報道と、又七月の央ばメッカ附近の總ての城砦が皆降服して、今や同地方には土兵の隻影をも見ざるに至つたといふ報道や、獨立宣言以來野砲山砲各十門、機關砲十五門に多量の彈藥を捕獲し、捕虜としては官吏百十五名、將校百、兵卒二千五百を得たといふ報道は、土耳古の同方面に於ける策戰の根本的に打破されたことを推斷せしむるものである。さればにや八月七日の電報には、スエズ附近に於て英・土兩兵の間に小鬪あり、土兵は其四分の一を失つて潰走したとある。此アラビヤの

叛亂が聯合國側の煽動に出でたのか否かはまだ之を判斷するの確實なる材料を得ないけれども、兎も角も之によつて、土耳古を通じて英・露領土内の回々教徒を起たしめんとするの獨逸當初の計畫が、全然失敗に終つたことは疑を容れない。アラビア族の獨立が、今後どれだけ發展するやは、材料の乏しき今日、輕々に之を明言することは出來ないけれども、土耳古が先づ之を打破するに成功せざる以上は、埃及方面の英人は當分枕を高うして眠ることが出來ると見て差支はあるまい。果して然らば、英・露兩國は西方亞細亞の兩戰場に於て亦著しく優勝の地位を占むることになつた。假りに此方面に於て未だ餘力を生ずるまでには至らないとしても、全く後顧の憂を絶つて安心して本舞臺の戰爭に從事することが出來る譯になつたのは、戰局の大勢を論ずる上に、決して見遁してはならないと思ふ。(九月十五日記す)

附記　本文起稿後の西電に依れば、(一)西歐戰場に於ては、英佛軍は益々攻勢を續けて居る。(二)伊太利も亦十五日よりトリエスト目がけて進軍を開始し多少の成功を收めたとある。(三)獨り東歐戰場の發展に就ては、目新しい報道がない。(四)巴爾幹半島に於ける勃・羅兩軍の對陣に就ては、合同通信社の報道と其他の電報とは、例に依て全然相反して居る。此方面の戰勢が明白にならなければ、(五)希臘の去就の判斷もつけにくい。十五日の倫敦電報は、新首相に擬せられたデミトラコプロスは、其政見聯合國側の滿足を得ざりし爲め、大命を辭せるを報じ、十八日の電報は遂にカロゲロパウルスが内閣を組織したことを報じた。彼は中立を標榜して居るけれども、聯合國側に接近せるものたることは、今日の場合固より言ふまでもない。近く國民大會を開き、其決議により、國民的利益に一致する新政策の採納を國王に請願するといふ手續を取つて、結局の態度を決すべしといふことであるから、希臘の去就の決定するのも或は遠いことではあるまいと思ふ。

文展院展を觀に行く人の爲に

笹川臨風

一　藝術鑑賞の普及

文展見物の案内と云はうか栞と云はうか、さう云ふやうなものを書けとの瀧田君からの注文である。尤も案内や栞やの爲には目錄もある、新聞紙の紹介もあるが、それ丈では普通の觀者に取りては唯一切無我夢中で、藝術上の智識を養成する上に於て何等の利益がない、もう少し內面に觸れて、觀者の知識やら趣味やらの上に多少の裨益あらうと云ふのが、注文の趣意らしい。しかし文展ばかりではない、どこの美術展覧會を見るにも多少此方らの素養が入らう。たゞ文展は東京京都の年中行事の一つとまで云ひ囃される所で、あらゆる階級の人が上野へ〱と、春の花同樣秋の藝術を鑑賞しに行くところであるから、殊に文展期に際して此注文も出たのであらう。ところが文展に對立して院展と云ふものがある。官の文展に對して野の院展は、殆ど對峙の姿を持つてゐる。內部の充實せる點から云ふと、點數は少いが、文展よりは院展の方が立ち優つてゐると云ふ、黑人評のあつたにも似ず、今までは一般公衆には認められてゐなかつた、院展が、本年第三回を開會すると、非常に人氣を集めて、外形からも優に文展と頡頏する姿に立ち至つた。多い時は一萬餘少い時も三千を下らざる日々の觀者を吸收した現象に對しても、文展見物だけの心得では濟まされなくなつた。よしや本年の院展は此雜誌の出る頃には東京では閉會しても、京都の開會もあるとであるから文展院展双方を引括るめて、此に其心得を書くのが觀者の爲に忠實であらう。又よしや文展だけ書いたところが、勢院展に及ばなければ、畫界の趨勢を理解することは難

い。

昔から日本は美術國であると、誰が云ひ出したのか、さう云ふ評がある。推古天皇頃から、觀るべき美術の優秀なる作品が傳はつて、歴代に多くの藝術家やら其作品やらを出したのであるから美術國と云つても差支はあるまい。けれども古い時代には美術は貴族級の愛玩するもので一般の民衆とは緣がなかつた。若しありとすれば、それは信仰の對象であつて、佛像や佛畫やであるから、之は決して美術品として見たのではない、有難いから拜むのであつた。藝術家の努力も信仰の爲に一向專念となつたので、其結果が優秀なる美術品を留むるに至つたのである。信仰以外になると、美術品は全く貴族級の愛玩を目途としてゐる。作家は必ずしも之を目途として畫き作つたものでなくとも、之を鑑賞する人は搢紳社會であつたから、美術は一般民衆と風馬牛の有樣になつてゐた。美術が一般民衆と相接觸するやうになつたのは、東山時代より始まると云つてよからう。

東山時代は我が國民の趣味や氣質や風俗や文物やに一大變化をさせた一の紀元（エポック）である。支那の宋元の文明が將來される、其以前から傳來した禪宗が流行する、此等の上に基礎を置いた茶道が行はるゝやうになつて、今までは貴族級に限られてゐた、文物及び趣味が一般の民衆に行き渡ることになつた。伊勢や源氏に限られてゐた文學が、保元平治、平家、太平記と變つて來て、遂にはお伽草紙になつた。舞樂にのみ耽美してゐたものが、幸若舞能樂を好むやうになつた。それが狂言になると、一般民衆にも善く會得される。朗詠や催馬樂を歌うたものが、謠曲を唸るやうになる、猶進むと小唄を歌ふと云ふ風になつた。繪卷物などは貴族級の居間か、寺院の藏の中に飾られ若くは仕舞はれて平民社會の窺ふ所ではなかつた。それが、床間が出來て掛物がかゝるやうになると、美術鑑賞の範圍が擴大されたわけになる。此傾向は江戸時代になると猶一層進で、藝術の愛玩者はもう貴族若くは僧侶に限られない。總べての階級を通じて之を愛好することゝなり、

繪畫の如きものも平民級を目的とする世態風俗を畫くものなどが出來るやうになつた。又平民級の經濟狀態が好況に向つて、元祿前後になつて、多くの成金が生ずるとゝもに此成金の或ものは藝術家の保護者となつたがために、藝術の進步は著しくなり、藝術趣味も次第に普及さるゝ運に向つたのである。

二　狩野の流

江戶幕府の御用繪師に、狩野家と云ふものがある。狩野家の先祖を祐勢正信とする。世々伊豆國加茂郡狩野村に住んでゐたから、取つて以つて氏としたと云ふことである。傳ふる所に依ると、正信の父景信も畫を善くし、永享年中將軍足利義教が駿河の國守今川範政の亭で、富士見物のとき、景信を召して御前で富嶽の圖を認めさせたと云はれてゐる。正信は東山時代の藝術全盛期に生れて、將軍義政に仕へた。正信は曾て其殿中の障子に瀟湘八景を畫いた。畫法は周文を師とし、又小栗宗丹を師とし、人物は宋の梁楷に倣つたと云ふことだ。周文は我が畫史中のエポック、メーカーなる雪舟の師で、宗丹は周文の弟子である。畫史の傳ふるところに依ると、正信は始め宗丹に師事したが、宗丹は其後、正信をして周文の弟子とさせたと云ふ。蔭凉軒日錄と云ふ當時の日記に、「宗丹の畫表神妙、古の牧溪に比す、然るに愚老一日室の名を求む、彼墨筆の妙を稱して名けて自牧と曰ふ、牧の字は牧溪に准擬して多く讓らざるなり」とあるを見ても、宗丹の當時に推重されたことが分る。此人に從つて其畫技を磨き、更に當代の巨匠周文に師事したから、正信の技能は着々として進步向上したのである。しかし此人は延德二年七月九日に三十七歲で歿したから、未だ狩野流を作るに至らず、たゞに宋元の畫風を紹繼したと云ふに過ぎぬ。

狩野派が一派をなして、畫界の重鎭となつたのは、正信の子永仙元信に始まる。此時土佐の末流は甚だ振はずあつたが、元信は土佐光信の聟となつた。宋元畫派と土佐派とは、元信に至つて、相融和する氣運に立到つたと云つて善い。元信の長所は彩墨兩つながら得

手たる點にある。畫史に彩翠其美を盡くし、和漢其宜しきを得たりと推賞してゐるが必ずしも其の好む所に阿ねつてゐる評ではない。元信は八十四歳の高齢を保つたが爲に、狩野派勃興の因を十分に作り得た。元信の子に雅樂介之信あり、祐雪宗信あり、松榮直信があつたが、三十九歳で歿したれど、之信が最も其技に卓越してゐた。直信の子が永德重信で、安土桃山時代の藝術界を代表する唯一の大家であつた。織田右府の爲には安土城に其の掣鯨の手腕を顯し、豐太閤の爲には、聚樂桃山大阪城の金壁粉障に畫いた。永德の子が右京光信で、其弟に孝信がある。光信の子安信の系統を中橋狩野家と稱して、之が總本家である。孝信の後が鍛冶橋狩野で、探幽守信は此孝信の子である。又孝信の二子を主馬尙信と云つて、之が木挽町狩野の祖、尙信の子に常信がある。常信の二男を岑信と云つて、之を濱町狩野とする。以上四家が幕府の奧繪師である。元信の門人木村永光の子で永德の養子になつた山樂光賴、其養子山雪の派を京狩野と稱する。此他に狩野の門人は狩野派の全盛に伴れて、隨時隨所に盛んで、殆ど天下の畫權は狩野派の獨占する傾きであつた。探幽常信を始めとして、狩野家にも名手があり、其派にも山樂山雪興以守景探山のやうな大家もあつたが、官僚派の藝術家であるから、唯型や形式のみに囚はれて、生命もなく精神もなく粉本の模寫のみを以つて能事とするやうになつた。之が爲に狩野家は幕府の奧繪師ではあつたが、次第に畫技の凋落を來し、達者には畫くものはあつたが、眞に畫を描くものはなかつた。此形勢は次第に幕府の末迄に及で、藝術界の不振とともに狩野家は見る影もなくなつた。此衰へた狩野家の一なる木挽町家の勝川雅信の門人に狩野芳崖と橋本雅邦とが出でて、明治畫壇の爲に其門を開いた。

此二人者は我が新畫壇の開拓者で、東京の畫派は全く其力に依つて成立したと云つて善い。芳崖の結構は狩野の規矩を出でゝ極めて創造に富でゐた。勁拔なる筆致に奇矯の弊なきにあらず、やゝ未成品の嫌ひはあるが天才者であつた。雅邦に至ると渾然玉の如く、畫

に柔味があつて、氣品も饒かである。作家には此兩人あり、フエノロサ、岡倉天心兩者の識者が之を啓發せしめたから、畫壇復興の氣運は勃然として起つた。美術學校の成れる時にも雅邦は入つて敎授の任に當り、日本美術院の分離した時にも、雅邦は院長となつて、明治畫界の爲に波を揚げた。

東京畫派と稱するもので、雅邦の感化指導、若くは影響を受けないものは殆どないと云つて可なりである。今日の東京畫家の大なるもので、陰に陽に雅邦の影響を受けないものがあらうか。雅邦は新藝術の源泉と云つて善い。とりわけ日本美術院の一派は皆其流を汲だものである。今日の院派は波流浸漲、海の若くあつても、其水上は、觴を濫べる雄邦の溪流であつた。文展派の審査員川合玉堂も四條派から出て、同じく雅邦の流を汲んだ。寺崎廣業の如きも其感化を納受してゐることは明かである。此うして見ると、今日の繪畫を觀て批評的に鑑賞せんとするには是非とも雅邦に遡らねばならぬことになる。

雅邦は狩野派に出たけれども、狩野派の典型に囚はれた人ではなかつた。規模の廣大なことは此人に望むべからずあつたが、腕も達者で頭も善かつた。其大幅ものには、往々ばさけて、纏りのつかぬものもあるが、小點の優秀なるものになると、殆ど東山の名畫を見るやうな心地がある。狩野の長所ばかりでなく、四條派の妙所をも參取して、雲烟糢糊たるところを描くなどは、又なく上手であつた。まして雅邦と提携する人にはフエノロサあり、岡倉天心あり、此等の人から西洋畫の妙諦をも皷吹したから、雅邦は縱橫に其才筆を發揮し得たのである。

雅邦は腕で敎へたが天心は頭で敎へた。腕の雅邦と頭の天心とが相待つて、今の院派を作り上げたのである。天心と云ふ人は新藝術の大恩人で、藝術界の偉人である。併し根が天才肌で、天馬空を行くやうな人であつたから、羈束し難くあつた。從つて謀叛心に富でゐた。そこで美術學校長の職を抛つと、直に日本美術院を起した。それればかりではない、文展の組織に當り

ては重なる人として參加したにも似ず、久しからぬうちに分離して、國畫玉成會を起し、反抗の旗を樹てた。けれど天才と云ふものは我儘であるから、人を容れる度量も乏しく、又人を統御する才にも缺乏してゐる。それで、日本美術院も一味徒黨譜第の郎黨ばかりで、遂に常陸の國五浦に屏息して、あるかなきかの如くなり、國畫玉成會も僅か二回ばかりで、内訌につぐに内訌を以ってして、其極有耶無耶の裡に消えてしまつた。今日再興日本美術院の勢力が次第に隆々として、文展と頡頏するやうになつたのは、天心の遺志を繼承したもので、天心在天の靈も定めし滿足であらうが、天心が生存してゐたならば到底此隆運は見なかつであらうと思はれる。天心靈祉として谷中の美術院内に藝術の神といつき祀られてゐる方が、美術院の爲には幸福であつたらうと臆測するのである。天心と云ふ人は活動家であるから、決しておつとしてゐることは出來ぬ、何か畫策する、何かやつて見る、けれども天才の常として、理想が高くて、現實とは兎角離違勝ちである。若し岡倉氏が美術院を再興したならば、又々次第に小さくなつて遂には屏息するのが落であつたらう。

藝術界の爲には此天才第一人を失つたと云ふことは返す〲も遺憾であるが、再興日本美術院の爲には其本尊はなくとも其精神を紹繼して、主義の普及をつとめた方がよいのである。即ち岡倉天心が纒め得ず、盛大にし得なんだ院派は其歿後に於て却つて非常な好氣運に向つたと云ふ奇なる現象を呈したのである。之は云ふまでもなく岡倉氏が播いた種子の繁殖したのではあるが、人を統御すると云ふことになると、岡倉氏は餘り天才肌であつたからである。

雅邦天心から流れ出た院派は今院展を作つて、文展なる官僚派に對し、野の聲を揚げてゐる。一たび國畫玉成會分立の際に文展から失はんとした院派は、再び之を文展なる大傘下に糾合したが、横山大觀を審査員外に排斥した處から、遂に一昨年の分離を來した。院派から云ふと、恰も日本美術院と云ふものが再建されやうと云ふ時であつたから好都合であつた。文展派か

ら云ふと、大觀を失つたところが、觀山は失ふまいと高を括つたのは目先きの利かぬことで大失敗である。文展から院派を除くと、あとは京都畫家獨占の壇上と云つて差支ない。とにかく頭は發達して、新奇〱を求めてゐる院派を失つては、文展は技巧本位の展覽會とならねばならぬ。斯うなると、一般民衆からは迎合されようが、識者は眉を顰める。

舊の日本美術院時代には、古社寺保存の修繕費は岡倉氏が之を院の手に收めて、院派のものをして其局に當らしめた。それで舊の院派の新進氣鋭の士は、盛に古藝術を研究する機會を捕捉した。奈良京都の古藝術品に接して、十分に之を鑑賞し、討究するの好都合を得た。されば自から院派は古藝術の上に立脚して、新しい途を開からんとつとめることになつた。朦朧派だなどと云ふ惡評を受けてあらゆる冷嘲熱罵の裡に奮鬪してゐたが、畢竟り此時代は猶彼等の試み中に屬してゐたのである。其試みから向上し洗錬して來ると、驚くべき新藝術を胚胎し來たのである。古藝術の上に立脚すると云ふことは、今の院派の若手連にも信條として奉ぜられてゐる。安田靫彦の如き、小林古徑の如き、前田青邨の如き皆然りである。古藝術品を模倣するのではなくて、其うちから新しい試みを發見しようとするのである。下村觀山が土佐派から出でたる、横山大觀が新南畫に向はんとする、一に古藝術に立脚して、新しい試を爲さんとするに非ざるはない。批評家は大觀が近日使ひつゝある暈ある弧線を後期印象派から得たものとしてゐるが、大觀自らは信貴山縁起から會得したのだと云つてゐる。

院展を見た素人評にはよく西洋臭いと云ふことを聞くが、之は今までの南畫や雲谷派やの模倣品ばかりを見たからのことで、それ等は既に生命なき泯び行く藝術である。新しい生命ある藝術は内に向つて、何ものかを求めんとしつゝあるのだ。洋畫の影響もないではないが、古い藝術を取扱つて見ると、充實せる生命ある力ある藝術なるものは、常に模倣でなくて建設である。院展の作品も建設し、若くは建設せんとしつゝある

ものである。

光琳の作品を見ると、人は無上に感服する。併し土佐の末流から見ると、光琳は異端に相違ない。光琳にしても、光悦にしても宗達にしても、土佐派から起つたので、今日では古いが、あの時代には驚くべき新しいものを作つたのである。纎巧にして萎靡振はざる土佐の末派と全然異つてゐるのは、建設と模倣との相違から來たに外ならぬ。

文展に曾て一科と云ふものがあつた。之は日本古來の畫派を其儘に繼承したもので、師法傳受の一派である。古法を墨守して更に新意を加へぬものである。一定の典型形式に囚はれて、一畫一線をも苟もしないものである。それ故或細部分になると、多年練磨の功が現はれてゐる。例へば米點を打たせると、新しい連中などは到底及ぶ所でない。しかし、其畫は千篇一律で前人が新しく畫いたものを、今人が古く襲いでゐると云ふに過ぎぬ。藝術は死物でなくて、活物である。模倣傳承の藝術に何の生命があらう、何の精神があらう、斯うなると南畫も死んでしまふ、土佐派も遺骸である、雪舟派も木乃伊に外ならぬ。疑はゞ去つて、蕪村大雅竹田の南畫を見るがよい、土佐名匠の繪卷物を見るがよい、雪舟雪村の遺作を見るがよい。そこに溌溂たる生氣と、枯渇したる死氣との差別がある。

斯う云ふ連中に限つて斯う云ふことを云ふ、東洋畫の尙ぶ所は氣韻にある、氣韻浮動でなくてはならぬと。如何にも其通りで、東洋畫の特色の一は氣韻であつたが、今の模倣畫に果して氣韻なるものがあるかどうか。之に對すると、索然として興の盡きるを覺えざるを得ない。奥行がなく、含蓄がないものに何で氣韻があらう。氣韻は自ら生ずるもので、他から作られるものではない。枯渇なる死氣に何の氣韻が求められやうぞ。

又此連中は日本畫の亡び行くを慨すると云ふ西洋人の言を聞いて無二の味方としてゐるが、此う云ふ西洋人は今の藝術を博物館の中で見たいと云ふ手合である。古いものならば博物館で見るがよし、新しく生き

んとする藝術は博物館に陳列するものではない。子供が可愛いからとて、其子供を生長させず、其儘にしていつまでも見ようと云ふのと何の選ぶ所があらう。そんならば人形を見てゐる方がよい。我等の藝術を東山の昔に返したり、德川の中世期に返さうとするのは、進歩を眼中に置かぬ世迷言である。斯る西洋人に悦喜されようとしてゐる中には藝術が亡んでしまふ。我等の今の藝術はポンペイや燉煌の發掘品ではない。

此古畫派は善く不平を鳴らす。本年も文展を離れるとか出品せぬとか云ふさうだ。離れるもよし、出品せぬもよし、別に一展覧會を起して、古畫派末流の形勢を見せるもよい。餘り大した問題でもないやうだ。

三　京都畫派

院展を除いた文展は殆ど京都畫派の獨占場と云つてよい。それでも授賞の場合などには、東西均衡の問題がないでもない樣子であるが、事實之れを主張するに於て東京派は餘りに勢力が弱い。大頭から云つても固より東京派は京都派に及ばずであるが、中堅になると、東京派は遙に及ばざる遠しである。京都の菊地契月や、木島櫻谷や、土田麥僊・橋本關雪・川村曼舟・小村大雲などの花形に比較すべきものは、東京に殆どないと云つて善い。唯俗衆に喜ばれる浮世畫家がちとばかりあるだけだが、實は云ふに足らぬ。鏑木清方が審査員の候補に擬せられてゐるとか、ゐないとかと云ふのを見ても、東京派の貧弱さ加減が分る。清方に比すると、女ながらも京都の上村松園の方が遙に技巧が優れてゐる。少年高科に上つて、有頂天となり過ぎた結果奈落の底に失脚した尾竹兄弟、舊に依つて葫蘆を畫く池上秀畝田中賴章の徒のみで、未來の望ある少壯者は心細いほど少い。寺崎廣業の天籟畫塾にも、川合玉堂門にも俊髦は缺如してゐる。小手先の器用なる者はあるけれども、大なる希望を屬すべきものは、先づは寥々と云つて善からう。梶田半古門や、松本楓湖門に幾多の才俊を出したこともあるから、どこからどうずば抜けたものが出ないとも限らないが、文展の出品を見渡して將來の測り知るべからざるものは、まあ此所一寸種

切れのやうに思はれる。どうしても、京都の壇場と云はねばならぬ。

京都で最も勢力あるは四條派の流れである。四條派は呉春に創まるが、實は圓山派から出たのである。圓山應擧は我が藝術史上の巨匠の一人で、一紀元を開いた人と云ふべしである。もとは狩野派の石田幽汀に從ひ、又雲谷派をも學だが、意に滿てりとなさず、之より支那の元明諸家の畫法を研究した。彼が獨立に翻へした旗幟は寫生畫であつて、寫生の眞髓に穿ち入り、殆んど當時の畫壇を席捲する勢があつたのである。呉春は應擧門の高足であつたが曾て蕪村に學だが爲に此兩者の長所を取つて、此に四條の一派を起したのである。四條派は京都に生れただけあつて、雄放豪快の風に乏しく溫潤にして閑雅、小さく美しいものであつた。又圓山派の流を汲んだために寫生を重んじた。呉春の派に岡本豐彦・松村景文あり、豐彦の門に鹽川文麟あり、幸野楳嶺其門に出で、又圓山派の中島來章門にも遊んで、名聲京都に嘖々たるものがあつた。今日京都畫派の巨擘として知られたものには楳嶺門が少からずある。竹內栖鳳・菊地芳文・都路華香・故谷口香嶠等は皆此門の逸足である。四條派と圓山派とはもと之れ同根より生じたものであるから、此二派のものは殆ど相彼此來往してゐるが、同じく此二派の流を汲んで、之に多少文人畫をも參酌したものに鈴木百年があつた。今日の松年は其子で、今尾景年も亦此門に出てゐる。圓山派の後を承けて、曾て京都に其壘を守つてゐたものに森寛齋があつたが、山元春擧は其門から出たのである。

之を要するに京都畫派は田能村直入の系統をついだ南畫を他にしては、殆ど圓山四條の餘風を承けたものと云つて差支がない。圓山四條が京都に適じてゐるばかりではない、京都が圓山四條に恰好な處であつた。併も今日の圓山四條の流を汲む人々の中では之を同派の前人に比して勝るとも劣らざる地位に到達したものが少くない。竹內栖鳳の如きは正に呉春以上と稱しても決して其の好む所に阿ねるものではなからう、實に

四條派中第一の大家で、前を空うする此派隨一の巨匠である。

今日の京都畫派の若手で、文展の花形とも稱せらるべき人は、芳文門に非ずんば、栖鳳門か、春擧門、若くは畫學校の出身者で、いづれも圓山四條の血脉を受けついでゐる。であるから、文展の京都畫一體を通じて見ると、寫生を重んじ、技巧を尙でゐることが分明に了解されるであらう。

院展派が理想畫を主としてゐるに對して、文展派は寫生畫を重なるものとしてゐる。院展派は岡倉天心の東洋理想を土臺として、よしや寫生をなすとも、之れを想化せずんば已まざる有樣がある。文展派は應擧吳春からの寫生寫實を信條として、忠實なる寫生をつとめる。よしや理想畫を描くとしても寫生寫實を脫せぬところは、此派の特色である。天人や傳說やを主題として描く場合に於ても、其天人は現在の女人をモデルとしたもので、其傳說の人物も風景も一に寫生から來ないものはない。之を想化すると云ふことは單に其形式のみで、內實は依然として、寫生の範圍を離れ得ぬのである。院派によると、歷史上の人物を描いても、之を想化し、總べてを自己の頭で作り直すと云ふ傾向がある。若し其適例を求むると、第三回院展の安田靫彥の「項羽」の如きは其一である。作者は氣分を出さんとつとめるが爲に、項羽も虞美人も盡く作者の頭で作り直し、寫生を離れた一種の理想人物として表現させてゐるのである。京都派の土田麥僊は京都に珍らしく理想畫に奔らんとしてゐるが、やはり未だに寫生に囚はれてゐる處がないではない。昨年の文展で見た「小原女」は餘程寫實を離れて來たが、一昨年の「散華」の如きは、理想畫を作らんとして、寫實に拘泥したのである。

寫實を主とし、技巧を尙ぶから京都畫派の描く所は、如何にも其手際が美しい。殊に之が展覽會物となるから、色彩も派手に、其描寫も周到を極めてゐる。四條派は元來用墨の妙を得たもので、煙雨の狀を描くに極めて適當したが如く、自由に濃淡を描いたもので

ある。栖鳳の如きは最も此長所を發揮してゐる。しかし京都畫派の若手になると、未だ此境に到達せずして、殊に展覧會張りのものを描くが爲に、畫面が大きい割に局促として、又雜駁に、いつでも畫き過ぎると云ふ感じがする。從つて四條派に見るべき餘情が甚だ乏しくなつて來てゐる。畫面に現はれたものより外に觀者に何等の默會を許さぬ。

特に近年の京都畫派は成るべく自然を寫さんとする傾向がある。其自然も山水ではなくて、多く手近に見るべき自然の景色である。野に生へる桑の木や茶畑や、大根畑、茄子畑、菜園の類である。即ち田園生活を主題としたものが多い。忠實に之を寫生して、其儘に描き出すか、若くは之を装飾風に化せんとつとめてゐる。併し此う云ふ傾向は果していつまでつゞくべきか、もう京都派も田園生活ばかりでもあるまい、同じ田園生活を寫すにしても、之を想化するの必要はあるまいか。技巧を見るより外に何等内容の空疎なるものはもう排斥して、他に着眼し轉化せねばならぬと信ずる。

京都畫派の爲に云ふと、圓山四條派は功をなしてゐると同時に過ちも殘してゐる。技巧を重んじ過ぎるために内的考察が甚だ乏しい。形式ばかりで、内容が充實せぬ。寫實に忠となり過ぎるがために精神に寫し到らず、氣分を畫き出すことが出來ぬ。淺くて廣いが、深みがない。あゝ奇麗だと見る外に、そこに何物をも見出し得ぬ。

けれども京都には羨ましいほど若手の腕達者が揃つてゐて、文展の花形となつてゐる。しかも此腕達者の連中は努力して製作する。若し此等の花形がなかつたならば、文展は卑近なる浮世畫の陳列場に過ぎぬ。

京都畫派に忠言を試みたいのは、寫生寫實を土臺として、寫生寫實を離れよと云ふことである。形の上に齷齪せずと、内へ向つて突進せよと云ふことである。内的生命を捉へよと云ふことである。其手段として、古藝術の研究をやつたらばよからうと思ふ。圓山四條を棄てゝ、古土佐に走ることを勸める。獨り古畫ばかりでなく、古彫刻品をも研究し、古建築物をも洞察し

たらば、畫に一轉化を見やしまいかと思ふ。斯う云ふと、京都畫派は笑つて、そんなことは夙の昔にして居ると云ふかも知れぬ。しかしあんな研究洞察では何の役にも立たぬ。現在の畫が明に其不徹底を證明してゐる。一體京都それ自らが古藝術の都であり、其附近には大和河内を有してゐる所である。上は推古期より下は桃山江戸初期までの古藝術の名品を藏してゐる。其寶庫は殆ど無盡藏と云つてよい。然るに今の京都畫家の若手も圓山四條に囚はれて古土佐まで返り得ぬのである。善く返つた所で、浮田一蕙や田中訥言冷泉爲恭の復古派位である。之れでは返り榮がせぬ。隆能光長隆兼の古土佐に返らねばならぬ。名匠が彫み成せる古彫刻を見よ、神采奕々として、内容の立實なるを示してゐるではないか。古建築の優秀なるを見よ、不調和の中に調和があり、細緻と豪快とが並び行はれてゐるではないか。ゴーガンやゴッホにかぶれたりする前に、我が古藝術の神と相通ぜんことを希望する。

一體文展ばかりではないが、展覽會を見に往くと、

おしなべて其畫風が纖巧で、弱々しい感じが觀來の心に起りはせぬか。興國の氣象ある明治大正の藝術としてふさわしからぬ氣がしはしまいか。けれど一面から云ふも之れも時代相である。之が明治大正の世相ではあるまいか。安土桃山の豪放な面影は見るに由なく、同じ裝飾畫にしても宗達光琳の樣な濶達な者はなくて、せゝこましく、こましやくれた感じがする。才筆ではあるが、名手ではない。器用ではあるが、規模が小い。のんびんとした點があつてほしい、器局の大があつて欲しい。今後の藝術は此世相時代相に打勝つて、更に新しく建設せねばならぬ。文展などと云ふ官設の展覽會などは此う云ふ風に向はせるやうに力めねばならぬが、さてお上の仕事となると、とかくこせこせしたもので、文展型と云ふやうな、ゆとりのない、せゝこましい、けば〳〵しいものを作り上げてしまつた。文展改造論の出るのも已むを得ぬ。

四　裝飾畫と風俗畫

宗達光琳の裝飾畫は寫生を忘れてはゐないが、直に

古土佐の畳に迫つて、其筆法、傅彩を此に求め、更に其非凡な能力を以て新意を加へ、其掣鯨の手を以つて大膽に豪放に思ひ切つた裝飾畫を試みたのである。されば不調和の裡に調和があり、不用意の裡に苦心の跡が漂つてゐる。宗達光琳には殆ど纎巧なものがないと云つて善い。若しありとすれば大概僞物である。世に光琳は纎巧細緻から豪放濶達に移つたと云ふ評者もあるが、光琳の跡を辿ると、さう云ふことはなかつたと斷言し得られる。ところが文展にて見る裝飾畫は甚だ纎巧細緻を極めて、それで一體の調子が上滑りをしてゐる。のみならず畫の捉へ所が甚だ惡い。滿幅裡に草木花卉を絢爛なる色彩に依つて一面に塗り潰せば、それで畫の能事が終つてゐるかのやうに考へてゐるが、之は畫趣を心得ぬの致す所であらう。同じ裝飾畫家であつたが、故菱田春草は見所が旨く、捉へ所をちやんと心得て之を畫に作り上げたものである。文展には裝飾畫風が多いが、胡粉を盛り上げたり、砂繪具で塗抹したりするのみで、努力は努力であるが、一向に其效果がないものが少からずある。此う云ふ繪に對すると、見物は疲勞するばかりだ。作家も定めて疲勞したであらうし、見るものも亦同樣で、しかも何等の印象が殘らぬ。

風俗畫は近來場中第一の呼物で、文展の人氣者であるが、果して作家に藝術的良心があるかないかを疑はざるを得ない。風俗畫は低級趣味に投ずるもので、奇麗だから喜ばれるのである。併しあゝ云ふ卑俗なる調子の低い風俗畫が歡迎されるのは、藝術の爲に決して喜ばしくない現象と云はねばならぬ。必ずしも風俗畫を落し卑むではないが、惡寫實に囚はれて、更に氣品の見るべきもののないは唾棄すべしである。雜誌の口繪や、繪びらのやうな畫が横行するやうでは、文展は寧ろ藝術を過つの罪を甘受せねばならぬ。況や肉感を挑發するやうな、けば〱しいものを陳列するに於ては、藝術を玩弄視するものと云はねばならぬ。

古浮世畫の大家の作品に接すると、氣品があつて、どことなくゆかしい所がある。寫實を離れて氣分を畫

き出さうとつとめてゐる、其藝術的良心があり〱と見える。春信や文調や湖龍齋や榮之や長春祐信に於て之を觀取し得るのである。風俗畫と云ふと、寫實のやうに思ふが、古の浮世畫大家は其形骸を寫さずに、其精神を捉へ畫いたものである。市井の美女笠森お仙を畫くにしても、遊女を寫すにしても善く其氣分を寫した。であるから氣品があつて、韻致が深かつたものである。鏑木清方などは近時漸く此に思ひ到つたかのやうであるが、そこへ往くと、上村松園の畫は流石に描く所を知つてゐる。其他の風俗畫になると、畫家に藝術的良心が乏しく、題は異つてゐても千篇一律で、俗惡の氣臭紛々としてゐる。それで作家の手腕も頭も一向に進歩が跡もない。今も昨も又來も年々歳々同じで、多少の上つたり下つたりをする位に過ぎぬ。一體に鑑別が手緩くて、情實だの均衡などの弊害に囚はれてゐるから、斯う云ふことになるのである。群俗に媚びんが爲めの文展ならばいざ知らず、藝術に貢献とするを目的とすれば、今少し何とか取締りがあつてよいと、しみじみ思ふのである。

五　文展功過

彫刻や西洋畫には新しい傾向を求めんとして、新奇の手法に走るものもあるが、畢竟內的生命を現はす工夫に苦心するものが多い。西洋畫にしてもセザンヌやマチス、ゴーガン、モネーの形式のみを模倣すると云ふ風もないではないが、如何にすれば、其氣分を現はし得るか、如何にすれば其精神を捕捉することを得るかと工夫するものが少くない。もとから寫生を基礎として、デッサンを尙ぶ風であるから、其形式に於ては苟くもせぬ。けれど近來西洋の本元でも、氣分論精神論が盛になつて來たから、日本の洋畫も其手法に於ては餘程變調を呈して來た。文展などでは餘りに新奇を求め過ぎたものは入選して居らぬが、それでも、各種の手法を看取するに難くはない。チャールス、カッフィンの近代畫研究法にもれい〱しく橋本雅邦の蓬萊山を挿圖にしてゐる處を見ても、日本畫の手法やら精神やらは西洋畫に影響する所が少くない。我が西洋畫

家も近來日本畫を描くものもあるし、日本畫の手法を採用するものもあつて、東洋畫と西洋畫との距離は次第に接近する傾きがないでもない。西洋畫も唯裸體畫の習作ばかりやつて、題は違つても主は變らぬと云ふやうな所に徘徊してゐるのは決して能でもあるまい。道釋人物や傳說などを畫いて理想を現さんと試みてゐるものもないではないが、之は作者の手腕の未だ到らざる爲めか、十分なる效果を獲取して居らぬ。それよりは裝飾風にして色彩や調子に依りて、寫實を離れて氣分を現はさんとしてゐるものが次第に成功しつゝある。

文展も十年になつた。文展功過論と云ふものが大分やかましいが、世間をして藝術に親みを起さしめ、作家をして奮起せしめた所には確に功がある。型に陷り過ぎて、俗衆に媚びんが爲に藝術的良心を失はしめやうとしつゝあるは其罪過である。けれども所詮は官設である。官設は得て、斯う云ふ弊になり易い。それを濟うて、藝術界の革新を計るのが、野の藝術家の任務である。官設だけが藝術界を獨占して太平を謳歌しては腐敗するばかりである。絶えず之を刺戟し、反省せしめる野の藝術團があつて、そこで始めて藝術の新領土が開拓されるのである。

近世史及び現代史に於ける澁澤翁の位置（中の一）

山路愛山

（一）翁の建策は空想に基く

中央公論記者足下。海濱書肆に乏し、前號の中央公論未だ落手せず。それを見るを得ざれば筆硯多忙の近狀とて何處まで書きたるや些か迂論になりたり。されば大抵は重複せぬ積なれども左樣の過あらば僻地に居る

の罪なりと恕したまへ。さても澁澤翁と同姓喜作氏とはとう／＼一橋家に出仕したり。翁自身の言に依ればそれには大分理窟もあり、出處進退を苟もせざりし譯にて、實際又其に相違なきことなるべけれども、史家より言へば是れ浪人の時代既に過ぎ藩士、準藩士で無ければ埒の明かぬ時代になりたると、翁等は關東にてこそ一方の餓鬼大將たるを得たれ關東べいを以て上方に乘り出しては一個の旅鴉たるに過ぎず、恰も水を離れたる魚の如く、手も足も出でざる境界に陷りたる其所へ關東に於て同志尾高長七郎縛に就き、二人の身も危き場合となり進退全く窮したるに、幸にも平岡圓四郎の薦ありたれば、つひ其甘言に誘はれて一橋家と云ふ圈套に巻き込まれたるものなり。印旛沼にグレと云ふものあり、葦などを立て廻はして魚蝦を誘ひ、自然に其中に巻き込みて出ること能はざらしむ。翁等は一橋家と云ふグレに巻き込まれたるものにて畢竟は時勢と、地理とが指示したる豫定通りに動きたるだけのことなり尤も我等が此時を以て浪人の時代既に去りたりと云ふには史家、或は異論あるべし。さりながら事實は明かに之を證す。たとへば出羽、淸川の淸川八郎などは同地の豪家に生れ、江戸に於て劍術の門戸を開き、學問文章も平凡ならず、尊王攘夷の烈志を懷きて四方に奔走したる其境遇は稍や翁に類したり。唯だ八郎は翁よりも十歲ばかりの長者にて國事に奔走したる時機も少しく早かりし故、西國まで遊歴し、同志を結び、京都に於て島津三郎を擁して大芝居を打たんとし、やり損ひたれども兎も角も浪人を以て日本の政局に大建立か大破壞を試み得べき意氣を示すを得たり。翁等の京上りしたる時代は之に反し、五條、生野の兩戰にて浪人の能く爲すなきを事實に於て立證したる後なれば人氣も一變し、浪人にては面白き幕の見せられぬ場合となりたり。其場合に翁等が柳の下には何時でも鰌が居ると樂觀し、浪人を以て都上りしたるは畢竟若氣の過にして一橋家のグレに捲込まれたるは餘儀なき次第なりと謂はざるべからず。さりながらどうせ大名の蔭に依りて事をせねばならぬ時代となりたる上は何處かの厄

介にならねばならず、それには一橋家などは必しも無價値なる主人に非ず。當時禁裏御守衛、攝海防備の總督に任じ、朝廷の御覺もめでたく聲望、江戸の將軍に迫り、天下の政務に於て口を利かんと思ひて利かれざることなきは慶喜公の好位置なれば、此主人家を得たるは翁等に取りて良禽は木を擇んで住みたりとも謂つべし。されば翁ゝ慶喜公に初見の日、今日は幕府の命脈既に滅絶に近づきたりと申しても過言に非ず。滅亡すべきに定まりたる幕府を御彌縫遊ばさんと思召すときは一橋の御家も共潰れとなるべし、それよりは先づ一橋の御家を堅實に御持ちこらへあり、遠く離れて外より宗家を御助けあるに如くはなし。此外に宗支兩全の長策は候まじ。一橋の御家を堅く御持ちなされんとならば天下の志士を幕下に集むる御工夫ありて然るべし、天下を亂だす程の人物は他日、天下を治むる力量あるものなれば左樣の人物を御館に御集めありたし。萬一の場合には幕府に對して天武、大友の亂のやうなる仕打に出るは已むを得ずと御覺悟あるべき歟。畢竟徳川家を潰すは則ち徳川家を中興する基にて候はめと言上したりと云ふ。此意味を露骨に言へば、本家は兎ても救濟の道なし。それを救濟せんとして共倒れとなるは恐なり。それよりは新家を培養して祖宗の血脈を維持し、新家の力に依て逆まに本家を維持するに如かずと云ふことにて一言にして曰へば一橋家を以て獨立すべしと云ふ論なり。此說、一橋家と徳川宗家の關係より見來る時は隨分橫道の申分のやうなれども、其時代には天下の事に眼の開きたるもの丶眼中には全く幕府なし。薩摩は會津に結び長州を京都より追出したれば佐幕黨のやうにも見ゆれども薩人の心は薩藩を以て天下の事を擔當するに在りて幕府の爲に獵犬の役を勸むるを屑とせず。肥前の江藤新平なども幕府の勢力を復活するは不可能なれば今は肥前も大割據の志を定め四方經略の處置こそ大切なれと云ひたり。天下遂に亂世となるべし。暴風雨の日には我屋根の保存こそ大切なれ銘々自己頭上の火を拂ふ必要ある場合に宗支の腐れ緣に拘泥して共倒れとなるは愚なり。それよりは京都御

守衛、攝海防禦總督として朝奢も厚く、源烈公の愛子として天下の人望を集めたる一橋家の位置を確實にし、天下の人才を收攬して新德川家の基礎を培養し、群雄割據の時代に活躍する謀を爲すべしとは翁等ならずとも思付そうなることにて、畢竟は是も時世が翁に言はせたる建策なれば、不實にも薄情にも非ず、時に取ては已むを得ざる立言なりと謂つべし。但し慶喜公が果して此の希望に沿ひ得べき位置に在りしや否や。若くは其位置に在りとも其位置相應の仕事を爲し得べき人物なりしや否やは別問題なり。一橋家は所謂御三卿の一人にて、幕府の公子も同樣の家柄なり。慶喜公は源烈公の子にて久しく賢名あり。翁等の所期を行ふに於て位置、聲望、固より不相應なりと云ふべからざるも是は唯だ表面のことなり。若し其裏面より云ふ時は一橋家の臺所は僅に十萬石の身上に過ぎず、其兵力に至ては殆ど皆無に比し。其上三卿の格式なれば諸事鄭重にして冗員冗費甚だ多し。先づ以て公家の位倒れと云ふ諺に均しく秋の田の案山子同然なり。然らば幕府に謀りてその知行を增し、名實相應の處まで進め得べきかと云ふに慶喜公と幕府との其頃の關係は左樣の都合に運ぶべき情況に非ず。十萬石の身上を、何程遣繰りしたる處にてやはり十萬石に外ならず。一升の瓢に入れ得べきは水一升と相場の極まりたることなれば、それにて群雄割據の時代に押しも押されもせぬ實力を養ひ得んことは殆ど不可能と謂つべし。さりながらそれにても慶喜公が若し非凡の人物にて天下の群雄を統轄して能く其節度に從はしめ得べき技倆あらば翁の希望も徒爾ならざるべけれども、是も亦左樣の注文に箝まらぬ仔細あり。然らば則ち翁等の一橋家出仕の始に於て慶喜公に向て期待したることは先づ以て空想に過ぎずと云ふの外なし。

(二) 貴人の不人情

慶喜公の人物論は當今に於ては實は口を開て容易に言ひ難し。今日にても德川家は日本帝國の大族なり。或人の說に德川一家にて日本の政務に盡力する志あり

皇室に御忠節の爲めとて働き出したらば貴族院は優に徳川本支、並にその親族の勢力を以て壟斷し得べしと云へり。是は少々誇張に過ぎたる申分とも思はるれども徳川一家が今日と雖も陰然日本帝國の大潛勢力たるは勿論なり。富士山とてもまんざらの死火山に非ず、時としては寶永の噴火のやうなる大活動を演出す。今日は徳川一家も政治上に於ては枯木死灰も同然、全く他人の舞踊を棧敷より見物するに過ぎざれども、何程穩和なる若旦那にても三味、太鼓の亂聲を聽きては時としては格を破り、座を起ちて踊り出さゞるを得ず。天下の勢、諸公の座視に堪へざる有樣にもならば英雄家康の子孫は再び關ヶ原に躍出し來らんも知るべからず。現に少しは左樣の氣振りも見ゆるなり。よし見へざるまでも徳川家は今日に在りて猶ほ天下の大族なり其大族の中心たる慶喜公に就て薫狐の筆を揮ふこと容易の業に非ず。況んや我等も幕府家人の子孫なり。たとひ自身は其祿を食まずとも餘りに極言するは情に於て些か忍びざる所あり。去年徳川家康を論じて一書を著し、其題名を『徳川家康』としたるに幕末の故老來りて予を訪ひ何故に『徳川家康公』とせざるやとて少々不平の色ありき。人情は斯樣のものなれば我等の位置としても慶喜公に對して齒に衣着せず正直の評論を試むるは些か苦慮せざる能はず。さりながら古人も道に當ては師に讓らずと云へり。我等は多少の苦痛を忍んで此に無遠慮に我等の慶喜公論を陳述すべし。慶喜公に就ては世間既に色々の說あり。會津人の著したる守護職始末には『自ら信じて決する後、更に他言を容れざるは公の特性なり』とあり。是は公に親しく接したるもの丶毎度迷惑したることなりと見て、土佐の容堂侯も公を稱して剛情子と云へり。剛情甚だ好し。特立獨行思ふまゝに振廻はゞ是も亂世に處すべき一策なり。さりながら不幸にして公の剛情は何處までも一本調子にて押通すと云ふ大信を建て、大義を伸ぶる剛情に非ず、往々にして前に勇にして後に怯なる中途の挫折に終ることとあり。此段又守護職始末の作者の數ば事實に依りて暗示したる所なり。公、聰明なりと雖も、やは

り深宮に育ちたる貴公子に相違なければ斯かる短所あるは免れざる所なるべし。さりながら我等の公に就て最も言ふを悲む所は此等の點に在らず。公の心の常に寂寥なりし一點に在り。境遇は人を造る。公は其父源烈公との關係に依り幕府よりは何時も繼子扱にされ、島津久光、勅使を擁して江戸に下り、公を起して將軍後見職とせんとしたりし時も幕府の役人は容易に其說を容れず

「橋公の御事は人望は有之候得共、夫は內々の御樣子、承知不致より起り候說にて彼卿は殊に權謀智術を彼用候御方故、大政御參預にては御爲不可然」

と云ひたる位にて幕府は始終此疑心を以て公に對したれば公は唯だ嫌疑を避くるのみにて其同情の幕士全體に及ぶべき餘裕を生せず。第一御三卿と云ふが天下の政事とは全く無關係の公族にて江戸の登城も一年數次に過ぎず、それも諸大名の登城の樣に大手門より乘込みしにも非ず、言はゞ後門より出入するだけの內輪の子弟に過ぎず、勿論老中用部屋を始め諸役人出仕の席などに顏を出すべき身分に非ればたとへば體の善き押込同樣の身分なり。三卿の貴きを以て押込同樣の身分なりと云ふは些か倫を失するやうなれども事實其通なれば致方なし。斯かる境遇に育ちたる人の、時運を得て政界に乘り出せば直ちに幕府の猜疑に逢ひ、頭を畏れ、尾を畏れて何事も遠慮勝ちに世を渡らねばならぬ境界に押し据ゑらる。公、何程聰明絕倫なりとも、其同情の區域大ならずして心事常に寂寞たらざるを得ざりしは誠に已むを得ざる勢なりしと謂つべし。シェーキスピーアの戲曲に貴人の不人情を歌ひし名句ありしと覺ゆ。貴人必しも不人情なりとは言ひ難けれども同情の範圍局限したる結果は其跡自ら不人情とならざることを得ず。幕末の世と雖も天下の大諸侯を以てして此病に罹らざるものは甚だ稀なり。唯だ薩摩の島津齊彬侯長門の毛利敬親侯、肥前の鍋島齊正侯、土佐の山內豐信侯などは流石に不人情の病なく、癢き所に手の屆く仁惠を現はしたり。水の心は魚に非れば知る能はず、庶人の心は唯だ人海に浮沈したるものにして始て之を

知る。何時も高士間に安座して人間の芝居を見下すものは人間の同情に住み、人間の同情を指揮する能はず。此點より言へは貧乏人に生れたるも因果なれども貴公子に生れたるも更に因果なり。慶喜公の境遇も此意味に於て眞に因果の次第なりと言はざるを得ず。論じて此に到れば我等の讀者に暗示したる意味は既に明白なるべし。則ち慶喜公の聰明を以てすと雖も其境遇の結果として不知不覺、所謂貴人の不人情に陷りたることなきに非ることと是なり。

(三) 見殺しに逢ひたる筑波の義徒

我等は既に明かに慶喜公を以て貴人の不人情に陷りたることありと斷言せり。是には翁等必ず異論あるべし。さりながら事實は翁と雖も掩ふ能はざらん。たとへば翁は慶喜公が武田耕雲齋等を見殺にしたるを辯護し

一橋公が水戸浪士の軍門に降服したるを其儘直ちに幕府に引渡したるは人情を酌量せぬ處置なりと云ふものあるは難きを公に責むるもののみ

と云へり。此說に依れば慶喜公が波山の義徒を幕吏田沼の手に委したるは公に取りては已を得ざる處置にして、それを彼是言ふは難題を公に言ひ掛くるものなり。公は此不人情の行爲に關して全く無責任なりと謂ふものゝ如し。翁の慶喜公傳編輯所にはどれ程の材料ありて此問題に關する慶喜公の道德的完全を辯疏し得るやは我等の闚り知らざる所なれども我等の學ぶ所を以てすれば此事に於ては慶喜公の不人情、實に言ひ遁るべき途なし。仔細は慶喜公の武田等を殘忍なる幕吏の手に渡したるは田沼の一言を浮かと信じたるに依れり。此段近頃史談會にて發行したる波山始末に明白なり。慶喜公若し「吾既に征討の任を受けて出陣し賊我軍門に降る。其處分は京都に於て天朝の思召を窺ひ、而る後に決すべし。我軍門に降りたるものを、直ちに卿に交付するは道に非ず」と正言し田沼の要求を拒絕したらば其までなり。それ程にきつぱりと行かずとも、一應京都にて會津藩にも相談し、禁裏に申上げ朝裁を待ちて而る後に卿に引渡すべしと穩かに斷り

たりとも田沼の位置として、それを押し切て直ちに受取るべしとは言ひ得べからず。たとひ言ひ得たりともそれこそ持前の剛情を現はし一言の下に叱り付けたらば、柔弱の幕士、何をか爲し得べき。それを浮かと田沼の言を信じ、何の遠慮もなく、折角、自分を慕ひて萬山を渉り、千辛萬苦して來り投じたる節義の士を見殺しにしたること何程公の爲に辯疏せんとするも其途なしと謂つべし。或は公の位置、幕府の嫌疑甚しく、そんな事をしたらば、それこそ燕王棣に均しき大野心を現はしたりとて幕府の反感甚しく德川氏は遂に内輪喧嘩に亡ぶべし。大の虫を活かす爲には小の蟲を殺さゞるを得ず、公の爲に謀るに大人しく筑波の義徒を田沼の手に渡したるは至當の處置なりと云ふものあらんさりながら左樣の氣兼ねをする位ならば何とて朝裁を請ひて義徒を自身の手に受取り、正々堂々其罪過を鳴らし、信賞必罰、斷然として德川氏の爲に恩威を示さゞるや。田沼に義徒を渡し、宗家をして殘忍酷薄の名を得せしめ、自身は予は當然の順序に從ひ宗家に彼等を引渡したるのみ、禁裏御守衛の任は幕府の反徒を刑殺すべきものに非ず、予は合法の仕事を爲したりとて自身の名を潔くし、宗家をして獨り天下の望を失はしめたること、是れ果して人情に合し、公道に協ひたる處置なりや否や。成程其時代にても職制もあり、法律もあることなれば道理の表面より論じたらは慶喜公の處分は完全なりとも云ひ得べし。さりながら人情の世界には表裏あり、表面だけ道理に協ひたりとも、公の田沼に與へたる輕卒の一諾に依りて義徒を見殺にしたる事實は掩ふべからず。我等は武田、藤田の末路を思ひ其慘刑を思ふ時は今にても、公に對して不快を感ぜざること能はず。當時も此感情は識者の間に存せしものと見へ、公の帷幕の臣と聞こへし原市之進が、同じ水戶人にてありながら其朋友の死を救ふ能はざる不實不人情を攻撃したるものあり。それをいや／＼原は左樣の冷酷漢に非ず。其證據には武田の戮に就きしとき原は內々にて人を遣し、其遺孤を匿したるに非ずやとて、原の人物を辯疏する舊友もあり。さりながら僅に

遺孤を匿したりとて、それが何程の功德ありや。親類朋友數百人の盗賊に殺さるゝを見殺にし、僅に坊主に依賴して經を讀ませたりとて之を友情の人なりと謂ふべきや。さりながら原は公の參謀なりとも卑官小祿の吏に過ぎざれば、公に於て斷然義徒を救はんとの決心なき上は原何程煩悶したりとて致方なかるべし。さらば原の爲に謀るに百方公を諫めて義徒を救ふの計を講ずべし。公、終に其計に出でざれば潔く自殺して以て同志に殉すべし。自殺も野暮なりとあらば高踏勇退して以て不幸の慘死を遂げたる友人を弔ふべし。それ程の腹なければ原も亦是れ勝伯の所謂小才子に過ぎざるのみ。

（四）政權奉還

論者或は謂はん。筑波の義徒を殺したるは成程君の說の通りにて貴人の不人情とも稱すべきものならん。さりながら唯だ此一事に依りて慶喜公を左樣の人物なりと斷ずるは大早計なりと謂つべし。弘法にも筆の過あり、孔子も丘や幸なり、過あれば人必ず之を言ふと云ひたり。慶喜公なりともやはり弱點多き人間の習なれば多少の過なきに非らん。唯だ是だけにて其人と爲りを評論するは酷なるべしと。勿論其通りなり。我等は幾たびか公の爲に辯疏の道を考へたり。幾たびか公の爲に其人と爲りを善解する道を求めたり。さりながら公が數々所謂貴人の不人情を現はしたるは近世史の歷々證する所にして、何としても之を辯護し得べからず。たとへば政權奉還の一擧の如きも公の皇室に對する忠誠の至情を見るべきものにして流石は源烈公の子なりと我等も感服する所なれども、公は此大事を斷行するに就て江戸の閣老には勿論協議せず、在京の閣老にすら豫め打合はせず、卒然獨斷して之を發表したり。斯樣の大事は閣老などに協議しては異論百出して之を收むるに所なからん、因て已むを得ず獨斷に及びたりと云ふも一理なり。實際左樣の意味もなきに非りしが如し。さりながら政權奉還論は其時代に於て必しも珍らしき議論に非ず。幕吏の中にすら識者は早く之を

引へたり。されば公たるもの若し秘密に閣老、有司に相談し、善く〳〵内輪を極め、而る後に之を發表せんとせば其事、必しも難きに非ず。毛利家などは藩の大事を定むる時は、何時も豫め政府の議を定め、三支藩並に吉川氏の同意を求め討論研究の結果、此處ならば一同異論なしと云ふ所まで推し詰め而る後活動したりたとへば一家の家政なりとも、家には氣の小さき女房もあり、血氣にはやる太郎もあり、小理屈を言ふ末子もあり、譯の分らぬ繰言を並ぶる保守主義一方の老婆もあり、世事に無頓着なる隱居爺もあり、「ハイカラ」娘もあり。手前勝手の下女もあり。此種の人物を支配し、一家を繰り廻はす主人の苦心決して容易に非ず。何程善き思付なりとも家内の納得せざる大事を卒然斷行して善く齊家の實を擧げ得べきや否や。羅馬人には羅馬人の如くし、希臘人には希臘人の如くすと云ひしやうに、情を抑へ氣を下し、忍耐、持久、或は怒りもし、或はだましもし、教諭百端、一家擧て成程と合點したる所にて事を行はねば氣も揃はず、仕事もはか行かず、折角の善き思付も、一同に其の意味が徹底せねば徒らに極端なる癖の發作と思はるゝまでならん。政治も是と同様なり。公、與に政權奉還の實を擧げんとならば豫め先づ其趣意を以て幕人を教育すべし、教育などゝ云ふ氣の長きことをせずとも要路だけには一應納得するやう君臣の大義、世界の形勢を諭して相談に及ぶべし。さる場合には卿等若し我言を聽かざれば予は當職に居るを欲せず、斷然退隱すべしとて一身の進退を繫けて其主張を敢言するも善し、是に依りて公若し宗家の當主たる位置を抛つに至るも、源烈公の子にして尊王一途の忠臣孝子たる公の心事は益々明白ならん。さりながら公、若し此手段に依りて内輪を纏めたらば大抵は約得すべし。幕府の要路、略ぼ公の心事を解したる所にて、扨正々堂々として政權返上に及はゞ、それこそ徳川氏の尊王主義を確實にして家康の事業に異實の終あらしむるを得べし。公の擧、此に出でず、殆ど何人にも相談せず、卒然として政權返上の擧に及びたれば幕人の大に驚き、是れ一種の狂言に非ず

やとすら思ひたり。内輪の幕人すら既に公の心事を猜疑したる程なれば薩長の徒の公を信ずべき筈もなし。されば公の折角の勇斷も、事實の上より言へば成程狂言のやうになり、狂言のやうに取扱はれ、同年十二月九日の京都政變に於て公は全く除物にされたり。公は此政變の起るべきことを内々越前の松平慶永より報ぜられたれども是も、其の報知を受けたるまでにて重臣の何人にも示さず、何等の用意にも及ばざりき。是にも論あれども暫らくは言はず。公が所謂貴人の不人情を最も明白に示したるものは實に戊辰正月の敗戰後遽かに大阪城を棄て去りたる一事に在り。

山路愛山先生の「澁澤翁論」益々佳境に入り、本號に執筆せられたるもの卅頁の長きに亘り、翁が洋行より歸つて初めて我實業界の人となつて活動せんとする所まで叙論しあれども、又々頁數超過の爲め、僅かに(中)篇の三分の一より掲載する能はざりしは先生及び讀者諸君に對して申譯なき次第也。深く謝す(編者しるす)

次號に發表せらるべき「米國の研究」

「米國の研究」について寄稿せられたる大家の卓論何れも皆長大論文となり、全部本號に掲載する能はざりし爲め、次號に發表することゝなりしもの左の如し。乞ふ本號の分と併せ讀みて、膨脹又膨脹、世界の各方面に向つて壓力を加へんとしつゝある米國の眞相を研究せよ。

米國の對東洋政策　法學博士　吉野作造
何事も「新」と「大」の米國……　若月紫蘭
米國海軍の大擴張…海軍少將　佐藤鐵太郎
米國陸軍の大擴張・陸軍將校　匿名氏
米國の政黨と輿論…マスターオブアーツ　島谷亮輔
米國の富力…男爵　澁澤榮一

太平洋及び東亞大陸にも膨脹の翼を張りつゝある
米國の研究

アメリカニズムとパンアメリカニズム

早大教授　大山郁夫

(上) アメリカニズム

神話を持たぬ國、世襲君主及び一切の貴族を持たぬ國、ラスキンの所謂城郭(キャッスルス)のない國、—斯の如き新世界の新國民が、社會生活のあらゆる方面に於て、傳統と迷信とに絡まれて居る舊世界に見るべからざる一種の合理主義を發揮して居ることは偶然ではない。

其産業は機械主義と勞力節約(レーボア・セーヴィング)との結合である。其教育は職業的智識の傳授である。其道德觀念の根本は獨立生活の維持の能力である。其處世の方針は猪突衝進主義— Devil take the hindmost. —である。其外交は無遠慮主義である。其政治は極端なる民聲即神聲主義— Vox populi, vox Dei. —である。斯の如きものは皆是れ新世界一流の合理主義の發現である。

米國には文化がないと謂ふ。是れヤンキーが舊世界の冷嘲冷罵—多分の嫉妬を含みたる—の標的となつて居る所である。トライチュケの如きも此點に於て、ヒドク米國を擯斥して居る。けれども文化とは何ぞや。普通の解釋に從へば、文化とは或る各國民若くは各民族獨特の趣味風尚、是非善惡の判斷等に關する遺傳性若くは習性が、其内部及び周圍の物質的資料を通して表現せられたる精神的産物である。此意味に於て『文化』は、寧ろ物質的乃至機械的意義に附與せられる所の『文明』と區別せられ、此意味に於て『文化』は地方色(ローカル・カラー)を有する特殊的のものであるに反して、『文明』は地方色を有せざる普遍的のものであると謂ふことが出來る。文化と云ふ語を斯く解釋すれば、歐洲文化が文化の總てゞなく、各國民若くは各民族は、それぞれ固有の文化を有して居るものであることが判るのである。成る程亞米利加一般より云へば、歐洲文化は稀薄である。けれどもヤンキイズムその物は、即ち亞米利加の文化ではないか。

歐洲文化と米國文化とは、全然其出發點を異にするものではない。米國文化は歐洲文化が新大陸の新環境と新空氣に觸れて、新なる方向に發展し、新なる變形をなしつゝあるものであると謂へる。歐洲文化は其本

來の郷土に於ては、殆ど其行き着く所に行着いて、今や停滯の域に在る樣に見える。故に完全であるが爛熟して居る。(丁度德川治世の全盛期に於ける我國の文化の樣に)。之に反して亞米利加の文化は、今尙ほ進化の途上に在る。謂はゞそれは一種の半成品である。まだ描き上がらない繪である。故に粗野であるが、潑溂たる新鮮味(フレッシュネス)を持つて居る、同じ亞米利加でも、東部に於ては歐洲文化の痕跡が著しく現はれ、英國の貴族趣味がそのまゝに殘つて居るボーストンは例外とするも尙ほ、工業的亞米利加のシムボルとも云ふべき摩天樓(スカイ・スクレーパース)に蔽はれて居る紐育市に於てすら、ホテルや、公園や、邸宅に於て歐洲生活の匂ひが非常に高いのを認めるが、西部に行けば行く程、粗野(コース)であるが新鮮(フレッシュ)なアメリカニズムが到る處に橫溢して居るのを見るのである。余は南加州のロースアンジエリース附近の田園の旅宿にして粗樸な野趣と、ニース、マントン、リヴィエラなどの佛伊の沿岸地方の人工の加味せられた淸麗細緻な風光とを思ひ較べて、さながらに歐洲文化と米國文化との對照を象徵化したものでないかとも考へたことがある。

アメリカニズムを愛すると愛せざるは、多くは趣味の問題である。併し乍らアメリカニズムに多大の嘲罵を浴びせ掛けて居る歐羅巴人が、動もすればそのアメリカニズムのあちらこちらを少しづゝ削り取つて、本國へ逆輸入して居るのは注意すべき現象である。此事は殊に獨逸人が最も甚しく之をなし、又同じ獨逸のうちでも、伯林に於てそれが最も甚しく行はれて居る。同市内のヴァーレン・ハウス(デパートメントストアー)に行けば、米國靴の陳列棚が著しく目に立つ。ホテルの設備には、表にも裏にも米國式の便利品が多く用ゐられて居る。獨逸の甘黨な米國人若くは米國で修業した獨逸人の齒科醫の手に掛るものが多い。American Dentist と英語で書いた黑塗金字の小看板は、獨逸の各市で澤山に見受ける。婦人は米國製のコーセットやストッキングスを愛用し、紳士は米國製のタイヤーを其自働車の車輪に施すものは少くないさうである。又商工業界に於ては米國式工場商店管理法が歡迎せられ、どこであつたか忘れたが、米國人を聘して Scientific management(此語も亦飜譯せられないで、原語のまゝ屢ば獨逸の新聞紙や雜誌の上に用ゐられて居る)を講義させて居たことを聞いた。米國の文學者たるマーク・トウェン(故クレメンス氏)や、富豪たる故モルガン氏が屢ばカイザーの食卓に招かれるが、此同じ陛下が、Seine Majestät(陛下)と隔意なく協語したことは、人の周く知る所であるが、此同じ陛下が、獨逸の音樂者や歌劇役者が頻々米國に流出するのを見て、金がある所へ人が行くのは堰き止められぬと歎息したのは、これこそ眞にアメリカニズムの三昧に悟入した言葉ではないか。

初代の大統領華盛頓は、車馬衣帽に寧ろ歐羅巴風の儀容を愛したけれども、三代目の大頭領たるトマス・ジェフアソンは性來の虛禮嫌ひで、國會(コングレス)に出て演說するのが厭やさに(尤も吶辯でもあつたが)、教書を代用したのが慣例となつて、現大統領ウイルソン氏が再び國會に立つて演說する樣になつたまで、大統領教書は百餘年間も繼續せられた。此ジェフアソンの質朴無雜作は極端であつて、彼が大統領在任中は、宴席に席次

を定めず、誰でも行き當りばつたりに着席することゝして、之をPell-Bell rule と稱し、ために外交團一部の憤激を招いた。又或る時英公使メリーが、英米間の重大問題に關し彼と會談するために白堊館(ホワイト・ハウス)に來た時、彼は上衣を着ずに足にはスリッパーを突ッ掛けた姿で出逢つた。之がため英公使は大に感情を害したが、これが後に英米戰爭を惹起した原因の一だと傳へられて居る。

ジェファソンの簡素無雑作は、アメリカニズムの一面を遺憾なく發揮して居る。是は若き國民の無經驗より出でた罪惡か、但しは虚禮を憎み舊慣に泥まず、眞率直截に立脚する偶像破壞主義か。理窟はどちらにでも附けられる。現今でもローズヴェルト氏が、其名のTheodoreを約めたTeddyで群衆の歡呼を受けるのを喜んで居るが、WilliamをBillyと呼ばれるのを嫌がるタフト氏は、華盛頓の儀容主義と好一對である。けれどもウッドロー・ウィルソン氏は、單にWoodyと呼棄てにせられるのに反對しない樣である。日本のアメリカニズムは『ビリケン將軍』の好綽名を産んだが、尖頭伯の之に對する感懷如何を聞きたいものである。

アメリカニズムの一面は粗野であるが、それは一種の合理主義より來て居る。米國の大學には弟子三尺去つて師の影を踏まぬことを學生道とする習慣はないが、師弟の間柄には眞情の抑て掬すべきものがある。余がシカゴ大學在學中、夏日の聽講の際には、授業中にも教師も學生も上衣を脱いで着席して居るのを見て、咄、この非禮！と東海君子國一流の慷慨をして見たが、しまひには自分も一寸試みて見ると、誠に涼しく爽快で、並々倦怠を覺えなかつたので、成程と思つたことがある。簡単を生命とし、迷信と無意義な傳統と神話と貴族と城郭とを有しない國民にも亦、捨て難い長所がある。盆栽の植木がともすれば日光を趁うて延びたがる樣に、封建時代の遺習で縛られて居る獨逸人が、無 識に、日頃Ungebildete Amerikaner（不躾な米國人）として卑んで居るヤンキーの風に染まりたがる樣に、我等の魂も動もすれば、抑へて居てもアメリカニズムに共鳴しさうになる。

米國の大規模の工場では、機械に勞働者が捲き込まれて、其儘罐詰の肉になることがある。アイダホーやアリゾナあたりの新開地で工夫が喧嘩して殺されても、シェリッフ(警官)が來て檢視の上、人であつたことが判明すれば、誰であるかと云ふ事が判明しなくとも、屍體はどこかへ運ばれて、事件はその儘になつて、生活は平日のまゝ繼續すると聞く。米國の―殊に西部の―勞働者は日本人の競爭を恐れ、黄人が來つて賃銀を低下し、延いて彼等の生活の標準を低下すると云ふを口實として之を排斥する。我等は我國民的名譽に係ることゝして、之を憤慨せずに居られない。

けれども米國人内部だけを利害關係なき第三者として觀察すれば、粗野撲朴の底に道義と人情とが流れて居る。無遠慮の外皮の下には、ヒューマニチーの血が包まれてある。米國人の理想中には、人類將來の文明の利濟論を指示する指針がある樣に思はれる。米國が現今軍備熱に浮かされ 半ばは欧洲戰爭に依つて暴利を占め、同時に戰後の事業喪失の憂

き日を豫想する武器彈藥製造者の使嗾煽動に依り）て居る事、及び其陸海の防備充實計畫の大規模な事に我等は傾倒して居るが、同時に米國内に平和主義の運動の激烈なることを忘れてはならない。日米の將來は決して樂觀することを許さないが、去りとて過度の悲觀のために平地に波瀾を起し、若くば藪から蛇をつゝき出しては猶更いけない。我等は日米に於ける正論をして暴論に打勝たしめる工夫を講じなければならぬ。

ヤンキーは鬼でも惡魔でもない。我等と同じ血肉で造られ、同じ美點と弱點とを有する人間である。只彼に在つては、新國民として確立的傳統が少く、固定的階級の習慣が稀れで、美しき迷信がなく、幽渺なる神話がなく、煩瑣な禮義がなく、萬事彼等一流の合理主義一遍で打算するため、屡ば舊世界の目より見れば無鐵砲なこともやれば、無遠慮なこともやる。併し此等の事は彼等の立場より見て遣らなければならぬ。尙ほ歩を進めて論ずれば、彼等は合理主義の上に立つが故に、合理主義の上から彼等の誤謬を指摘すれば、中々分りがよくて、直にこちらの言ひ分に同情し、それに應じて相當の讓歩を輕くすることは、米國人を相手にして居る者の常に經驗する所である。米國人相手の個人の私的外交も、國家の公的外交も、常に此呼吸を忘れてはならぬ。舊世界で効能のある辭令の妙や、虛禮の巧は、彼等には通用しない。彼等には眞率と道理とを以て臨まねばならぬ。—併し舊世界が或る朝夢覺めて、多くの煩瑣なる傳統の無價値を悟つた時、そして解放の欣びと新建設の負擔とを意識した時、その時舊世界の耳は暫く新世界の合理主義の福音に傾くことはないであらうか。

米國の合理主義は、全然人情を無視した合理主義ではない。米國の禁酒主義運動は合理主義の結晶であるが、其根柢には宗教的大慈愛心がある。製造家が食物を粗惡にすれば、政府は人命の貴重を主張して純良食品委員會(Pure Food Commission)を置く。資本家が森林の保育(Forest Conservation)を唱道すれば、社會改革家は直に之に呼應して人命の保育(Human conservation)を絕叫する。商人が營利に自働車を飛ばす樣になると、都市の當局者は通行人の危險を慮つて速力規定(Speed regulation)を遣れば、母の會(Neighborhood Mothers' Societies)などは更に、小兒の危險を除くために、或る區域間の徐行を要求する。公安十字軍は安全第一主義 (Safety first) を傳道する。公園委員は境內の鳥獸愛護を公衆に哀願する。ユニヴァシチー・セットルメンツは、新來の歐洲移住民を米國の良民に仕立上げるために犧牲的努力をする。惡風紀矯正委員會(Vice Commission) は都市の陰翳なる賣淫窟廢除策を講究する。アメリカニズムの合理主義の半面には、斯の如き道義的人情的部分のあることを忘れてはならない。

デモクラシーを否認する人は、人間としての民衆の本性に信用を持たぬ人である。我等は此點に關してもつと深く亞米利加を研究したい。

デモクラシーの言葉の序に一言したいことは、亞米利加の政治は舊世界の人々の研究すべき多くの方面を持つて居ることである。聯邦憲法は所謂「硬憲法」(Rigid constitution) であつて、修正困難のため社會の進

運に應じて自由に變更することの出來憎い窮屈なものであるが、それでも憲法及び法律の解釋權を持つ司法部の、聰明なる解釋によりて漸次進化しつゝあることは、米國の法制を研究する者の熟知する所である。我國の憲法の『千載不磨の大典』たる成語を妙に解釋して、國民の憲法批評の精神を抑壓せんと試むる學者があると云ふことを聞いたが、我等は憲法批評の精神は、憲法尊重の精神の半面と心得て居る。憲法を高閣に束ねて顧みない樣な冷淡者に、憲法批評の精神などが起りさうな筈がない。若し夫れ『柔憲法』(Fluid constitution)を所有する米國の各州に至つては常に憲法の修正を試み社會の進歩と法制との間の調和を自由自在に計つて居る。故に政治上の新實驗は、常に各――殊に西部の各州に行はれて居る。サー・ジェームス・ブライスが阿米利加を呼んで、『政治上の實驗室』(Political laboratory)と稱して居るのは、誠に理由のあることで新世界は仔細に其各種の實驗を研究すれば、大に啓發する所があり、政治思想を豐富にする所があるべき筈である。イニシアチーヴ、レファレンダム、及びリコールの制度の實驗などは我等が大に參考とすべきものであつて、又殊に都市制度に於ける自治問題 (Municipal home rule question)や、委員政治(Commission government)の問題に就て、我等は米國より學ぶべきものを多く有するのである。

米國に於ける將來のデモクラシー、及び社會改革運動の中堅となるべき見込みある米國大學の現在及び將來も、大に我等の研究に價するものであると思ふが、今は何も言はない。

我等は太平洋彼岸の若き共和國民の生活上の罪惡を知らぬではないが、其光明面を愛する餘り、右の記述が當初の豫期に反して著しく偏頗に陷つたことを自白する。此點は切に讀者諸君の諒恕を願いたいのである。

(下)パンアメリカニズム

パンアメリカニズムに來ると問題の局面が少し變るが、其重心點は依然としてアメリカニズムの膨脹である。一體國民の膨脹慾の根柢には、或る種の人道上の理想が潜んで居ることは認めねばならぬ。斯る理想は屢ば偏狹な、得手勝手な、僻見と狂妄に滿ちて居るものであることを常とするが、併し乍ら之を主張する當該國民より見れば、極めて至當な宇宙の眞理に冥合する樣に見える人道上の理想である。白人が世界が白人の統治下に來ることは、人類の幸福であると、思つて居るのも、此範疇に屬するものである。近世の日本の國體振興論者が、屢ば皇國を世界の中心とし、皇軍を進めて六合を統略し、皇道を四海に布くべしと主張したのも、一種の人道思想より來つたものである。其外パンジャーマニズムとか、パンスラヴイズムとか、パンイスラムとか、パンアングリズムとか云つた樣な、苟くもパン……の附くニズムは、孰れも皆誤れる――若くは正しき人道主義の立場の上に居らぬものはない。無論斯の如き人道主義の裏面には又、各國民若くは各民族の自己保存慾乃至自己擴大慾が貫流して居るが、表面上は僅に人道主義の色彩を帶びて居ないものはないのである。

併し乍ら人道主義の主張は、パン何々ズムの唯一の要素ではない。此

外に尙ほ、少くとも國民全體若くは國民中の一部の自己保存慾の直接の表現たる經濟的利益觀念が加味せられて居る。『國旗は投資家に隨伴す』(The flag follows the investor.) の警句は、最も簡明にパン……イズムの經濟的方面を抉ぐり出して居るものではないか。人道主義が經濟的利益觀念を誘き出したか、但しは經濟的利益觀念が人道主義の看板を借りて居るのか、兎に角現代の—否古來の帝國主義には、此兩要素が相糾纏交錯して居るのを見るのである。パンアメリカニズムとて此例に漏れるものではない。

總てのパン……イズムに通じて、普通之を主張する人々の間に完全に合意せられたるプログラムがないが、此事はパンアメリカニズムに就て殊にさうなのである。此點よりすれば、單にパンアメリカニズムの實現が將來の事であるのみならず、其成案その物の成立までが將來の事である。或る者はパンアメリカニズムは、合衆國をして南米の通商權を獨占せしむることを目的として居るものと考へて居る。或る者は新世界の宗教及び道德が、舊世界のそれよりも優越なる狀態を指示して居るものと考へて居る。或る者は合衆國が南、中、北米(英領たる加奈陀を除き)の同盟の覇權を握り、舊世界(東は英佛獨、西は日本)の勢力に對抗し、米大陸に他の大陸の政治的及び經濟的勢力の侵入するを防ぎ止める目的を有して居るものであると考へて居る。或る者は合衆國が弱き南中米の共和國を外界の勢力に對して保護することを計るものであると考へて居るし、又た南米の諸共和國民は、合衆國が羊皮を被れる狼の故智を學んで南米諸國民を壓服せんとする侵略的計畫であるとも考へて居る。是れパンアメリカニズムが、合衆國の平和主義者の間にも、武力主義者の間にも、資本家の間にも宗教家の間にも、それ〳〵の理由に依つて其支持者を有する所以である。

パンアメリカニズムは、斯の如く朦朧不透明のものであるけれども、大體の上より見れば、加奈陀を除きたる以外の北米と、中米と、南米との諸共和國を聯繫して一の政治的及び經濟的單位を作り、合衆國が其中堅となつて、東は歐洲諸國西は亞細亞諸國殊に日本の政治的及び經濟的勢力の侵入を防止することが、其主眼であると言へば、少くとも米國以外の世界に於て最も普通に行はれて居るパンアメリカニズムの觀念の說明になるであらう。

此主義は其根源をモンロー主義に有して居ることは、極めて明瞭であつて細說を要しない。一八二三年に時の大統領ジェームス・モンローが國會に送つた敎書の主意は、一は米大陸の各共和國の領土を歐羅巴の勢力の侵略(殖民、讓與、征服等)に對して保護すること、及び一は新舊兩大陸の間に相互的干涉をなすことを假借せざることを聲明したものである。爾來モンロー主義の內容は非常に擴張せられ、合衆國が他の大陸の事に干涉せぬと云ふ主義も、米西戰爭(一八九八年)の當時より拋棄せられた譯となつたが、米大陸の諸共和國の領土保全、及び非干涉主義の根本たる共和制度維持の主張は、幾たびも機會の起る毎に反復して表明せられ、以て今日に及んだのである。而して今日に於ては、米大陸の領土

保全主義は、當然經濟的利益觀念と混融し、共和制度維持の主張は、自由民主制度の優越を絶對に信仰する人道的要求と合體し、斯くて上に定義して置いた通りのパンアメリカニズムは、此等の二思潮を抱擁する姿を呈する樣になつたのである。

右の意義に於けるパンアメリカニズムは、現今に於ては全然其主張者の意識中のものたるに止り、毫も事實となつて現はれて居ない。然らば其將來は如何と云ふ問題になるが、此點に於ても其實現は殆ど不可能と云つても差支ない程の困難が其前途の上に置かれてある。今其二三を極めて手短に左に述べて見やう。

第一、現今に於ては、パンアメリカニズムの中堅たるべき合衆國は、南米に對して以前程の絶好地位を占めて居らぬ。九十三年前に大統領モンローが其主義を宣した時は、事實上大西洋は歐洲と米國との間に横はる交通上の大障壁であつたが、第十九世紀に於ける機械的文明は地理的障害を征服して、今日に於てはリヴァプールよりリオ・デ・ジャネイロへ行くに要する日數は、紐育より同地へ航するに要する日數よりは少くて濟む。加之合衆國は其船舶の數に於て、英國や獨逸のそれとは、比較にならぬ程隔絶して居る。

第二、合衆國と南米との經濟的關係は、從來はパンアメリカニズムの註文通りに密接ではなかつた。需要供給の關係から言つてもさうであつたが、金融上の關係に至つては更に甚しかつた。即ち英獨佛の如き投資國の資本の南米に於ける活動は、到底米國の資本の比ではなかつた。米國は歐洲戰爭開始以來、鬼の留守に洗濯の格で、盛に南米の事業に投資して居ると云ふことを聞くが、英獨佛、殊に前二國の既投の資本を驅逐することが出來ない事は言ふまでもない。又代替の關係上、南米の諸市は倫敦の取引所と密接なる連絡を有し、紐育に對する支拂 受渡しを倫敦で濟ませて居るものであると傳へられる。斯の如き狀態は、世界の金融市場が全然倫敦より紐育に移動するに非ざれば、之を打破することが出來ないであらう。

果して然らば、米國が南米より歐洲の既得の經濟的勢力を驅逐することとは、尋常手段では實行が出來ないことになる。若し尋常手段で之を實行することが出來ないとすれば、餘す所は合衆國が主動となつて南、中、北米の政治的同盟を作つて之を實行するか、或は合衆國單獨の力で之を實行するより外はない。所が此方面にも亦大障害がある。即ち——

第三、北米と中、南米との間の人種上の相異は、全米同盟の一大障害である。中米及び南米の重なる人種は、西衛種の拉丁系種族、ニグロー及びインヂアン種族、若くば以上のものゝ混血種である。此等の諸種族は歴史上及び文化上の理由に依り、合衆國に對して好感を持つて居ない。彼等は人種としては寧ろ佛蘭西、西班牙、伊太利に對して同情を有し、又合衆國の文化を以て佛蘭西等の文化より劣等なものと思つて居る。而己ならず彼等は合衆國に對して、弱國には無理もない猜疑心を抱き、殊に一八九八年の米西戰爭以來、それが甚しく募つて來た樣である。合衆國の名士が南米へ行つてパンアメリカニズムを鼓吹する際は、彼等は陽

に之を歡迎して居るが、其歡迎は純粹無垢のものでないらしいのである。

第四、人種上の障害は獨り、北米對南米の關係に於て之を見るに止らず、北米合衆國自身の內にもある。米國は誰しも知る如く、世界の諸人種の坩堝(The melting pot of races)であつて、其社會生活の中堅たるアングロ・サクソン種は、米國全人口の僅少部分を占むるのみで、此以外には獨逸人、愛蘭人、伊太利人、其他各種の人種を包容し、ニグローの問題さへ容易ではない。勿論米國政府は其傳統的政策として、盛に同化政策を行ひ、或る程度までは成功して居る。彼等移入民は直に合衆國のシチズンとなることを喜び、且つ之を誇り、又容易にアメリカニズムの熱心なる信者となるは事實である。併し彼等が吸收するアメリカニズムは、コスモポリタン・ナショナリズムであつて、ナショナリスチック・ナショナリズムではない。百年前の移入民は、ナショナリスチックにも直に米國人となつたであらうが、近來に於ける移入民は、本國に於て既に十分に國民主義の洗禮を受けたもの許りであるから、アメリカニズムの人道的自由主義、開放的合理主義には極めて迅速に感染するが、國民的回顧の感情は常に本國に引かされて居る。最近の米國に於ける獨逸種の歸化人の活動は、最も明瞭に此點を例證して居るものと謂へる。斯の如き事は、合衆國の世界政策(ヴエルト・ポリチー)上の弱點であり、從つて全米同盟の前途の大障害である。

第五、合衆國は其國初に於て採つた他の大陸に干渉しないと云ふ政策を抛擲し、殊に極東に多大の利害を感ずる樣になり、今後は益す此方向に經營の步を進めんとして居る。然るに一方に於て自由に國外に驥足を伸べ乍ら、他方に於て南米を塞ぐが如き我儘をすれば、世界も之を默認しないし、合衆國內の識者も之を正當なる權利の行使として許すことはあるまい。茲にもパンアメリカニズムの障害が潜んで居る。

第六、結局全米同盟が成立しないとすれば、合衆國が單獨の力を以てパンアメリカニズムを實現しなければならぬ譯であるが、此方面に於ける困難は前の場合に於けるよりも更に苦しいものがある。合衆國が若し之を强行せんとせば一方に於ては南米を征服し、他方に於ては南米に利害關係を有する自餘の諸國と戰はねばならぬ。然るに自然の天險に倚る南米を征服するさへ大事業であるに、其上世界を敵として戰つた日には、米國が如何に大全力を揮つても勝てる見込は更にないのである。之がパンアメリカニズムの徹底的實行上の最後の障害である。

近年パンアメリカン・ユニオンが組織せられ、本部を合衆國の首府華盛頓に置き、中、南米の有志を糾合して盛に活動して居るが、其事業は商業上及び科學上の範圍に限られ、米大陸の富源の開發、人種風土及び史蹟の研究、及び各共和國民の意志の疏通と云ふが如き平和的方面に限られ、又合衆國墨哥西間の調停の如き政治的活動もあつたけれども、それは寧ろ消極的性質のもので、上述の如き積極的成案には何等の關係もなかつた。

合衆國に於ける今回の軍備大擴張に對しては、日本を始めとし、現今交戰中の歐洲各國も皆、重大なる利害關係を有して居るのみならず、パ

ンアメリカニズムの前途にも幾分の影響がないとは言へぬ。併し乍ら我等は合衆國が結局に於て實行不可能の企圖を畫策して、無益に世界を騷がすことのなからんことを希望して已まぬ。合衆國は世界に於て平和主義を高唱するに最も好都合なる地位に在る國である。而已ならず合衆國内には、ピユリタニズムの精神尚ほ死せずして、正論正議の人士が比較的に多いのである。我等は此等の人道の戰士に依つて唱へらるゝ穩健說が、私慾飽くなきの一部の企業家が製造する誤謬なる輿論に打勝つて、此偉大なる Pilgrim-fathers' Land が、永久に世界の Peace maker として殘らんことを希望する。此希望が空望になるか否かは、第一には合衆國民の意思の決め方にも依るは無論であるが、第二には外部の諸國民の合衆國民に對する態度も、全然之に關係がないものとすることは出來ぬ。人類の向上は世界各國民の合同事業に依るに非れば、之を實現することは不可能であらう。

附記。本文(上)篇で單に阿米利加若くは米國と云つて居るのは、合衆國を指したものである。又(下)篇に於て單に北米と言つて居るのは、常に加奈陀を排除したる北米全土を指して居るものであることは、言ふ迄もない。尙ほ一言加へて置きたいことは、本文で取扱つた樣な大問題の一圖を、僅かな頁數のうちに纒めたものであるから、重大なことで言ひ漏らした事が甚だ多いのは、余が慚愧と遺憾に堪へぬ所である。切に讀者諸君の寛容を乞ふ。(大正五―八―二〇)

▽日米間に横はる三大問題

法學博士　末廣重雄

一

日米親善と云ふことは、日支親善と同樣、吾人の常に耳にするところであるが、實際に於ては、之と反比例に日米間に於ても日支間に於ても紛擾が中々多いやうである。而して日米關係に於て、米國は主として能動的地位に立ち、我國は之に對して受動的地位にあるのであるから、日米間に横はる三大問題に關し、米國の我國に對する態度如何によりては、將來日米の外交上に如何なる重大なる危機を生ずるやも測り難いのである。然らば其の三大問題とは果して如何なるものであるか。以下少しく之を述べたい。

二

其の一は、我國が目下占領中の南洋諸島に關する問題である。此の島は米國本土と比律賓との間に介在する關係上、我國が之を占領することは、米國に取りて軍事上重大の意義を有するから、米國人中には我國が占領せないことを希望するものが少くないやうである。然し眞逆我國は之を獨逸に返還することはあるまいから、場合に依りては、將來日米間の葛藤の種になることとあるを豫期せなければならぬ。

三

其の二は、支那問題である。支那問題に關し米國の我國に對する態度は、常に高壓的であつて、吾人をして甚だ不滿の念に堪えざらしむるものがある。其の一例を擧ぐれば、明治四十三年の滿洲鐵道中立に關する米國の提議である。此の提議は南滿及東清兩鐵道を日露英米佛獨の六ケ國が平等の出資を以て組織すべき一つのシンジゲートに於て買收し、之を清國の手に收めしめ、清國海關に等しき一つの官廳で經營せしめやうとするものであつた。傳ふるところに依れば、米國の此の提議は、日露戰爭後間もなくのことであるが、今は故人となつた某元老が當時來朝した米國の某實業家に對して南滿鐵道を、日米の資本を以て經營すべきことを相談したのに起因するさうで、果して是が事實ならば某元老は不注意不謹愼の言を爲したものと云はなければならぬ。兎に角話の口を切つたのは我國の方にあるとしても、單に一元老の私の考に出たに過ぎないのであるから、米國が此の提議を爲すに當りては、此の問題に最大利害關係を有する我國に對して、豫め同意を求むべきであるに、何等の交渉あるなくして先づ第三國の意嚮を糺したと云ふは、如何にも我國を踏付けた處置であると云はねばならぬ。當時我國は勿論のこと、露國も亦此の米國の提議を拒絕した。而して米國の此の突飛なる行動が動機となつて、第一日露協約を締結するに至つたことは、廣く世人の熟知するところである。

更に昨年春の日支交渉に對し、何又今次の鄭家屯事件に關する日支交渉に對して、米國の態度は常に我國の對支外交を監督するかの如き調子を示してゐる。尤も明治四十一年の日米協約がある以上は、米國は爲すべからざるを敢て爲して居るのではない。我國が米國に對し該協約に依りて、支那の現狀維持並に商工業上の機會均等主義を擁護すべきを約する以上、米國の態度は理由のあることであるとしても、米國が兎角設文を振廻はして、支那の現狀維持並に、商工業上の機會均等主義の保障者は自分一人であると云ふやうな態度を示すは、吾人の甚だ快しとせざるところである。米國の我國に對する此の態度は、日米親善の爲めに悅ばしくない。我國民の米國に對する反感が甚しく、其の間に蟠りが强くなると軈て日米の間に鴻溝が穿たれることになる。斯く觀察して來ると、日米關係の將來は懸念に堪えないものがある。而して此の關係をして猶ほ更に險惡に向はしむるものは、今後の支那に於ける日米の經濟上の競爭であらう。

四

今次の戰爭に依りて漁夫の利を獲たものは、日米の兩國であらう。我國の獲たる利益は決して少くはない。戰前に甚だ悲觀された我經濟界は聯合國よりの軍需品の大注文を受けた結果と、更に又米國及東洋市場に於て歐洲品の代用として我商品の需用が大に起つた爲めに、非常なる活氣を示し前途洋々たるものがある。然しながら米國は國土の大なるだけ其の利するところも亦從つて大にして、我國とは桁違ひの利益を占めて居る。最近米國經濟界の好景氣であることは實に驚くべきものがある。米國の大正元年度と同五年度と比較するに、其の國富は三千七百四十億

圓が四千五百六十億圓となり、貿易は輸出入總額八十五億圓が百三十億圓に增し、而して歐洲諸國に對する債務は百三十億圓であつたのが、僅か六十億圓に減じたと云ふ狀態である。此等を悉く戰爭に歸すべからずとしても、大に戰爭に負ふところあるは否むべからざることである。米國は其の新に得たる大なる富、大なる資本を以て、戰後は工業國として世界市場に活躍すべく努力するであらう。

五

目下のところ獨墺國側に於て中歐同盟を組織し、聯合國側は之に對し經濟同盟を締結する相談がある。若し此等の同盟が成立すれば、同盟諸國間に於ては相互に其の同盟國の商品を、關稅上敵國及び中立國の商品よりも優遇するであらうから、同盟以外に立つべき米國に取りては不利を生ずることになる。同盟が成立せざる場合にも、歐洲各國は戰後國庫收入を增加する爲めにも、國內產業を保護する爲めにも、必ずや關稅の障壁を高くし、戰後米國の歐洲に於ける發展は甚しく阻害されるに相違ないから、米國は自然羅甸亞米利加諸國と支那とに向つて、市場の擴張を計るべく努力するやうになるであらう。羅甸亞米利加二十ケ國の一ケ年の貿易額は何程であるかと云ふに、今次の戰爭の起る前年卽ち大正二年度に於て、貿易全額約五十七億圓中、輸入總額は約二十六億圓であつて、米國よりの輸入額が約六億圓である。同時に英佛獨等の諸國よりの額は約十五億圓、卽ち米國よりの輸入の約二倍半である。今後米國は、英佛獨等諸國が、戰後經濟上非常に不利なる事情の下に立つを奇貨とし之に乘じて彼等と競爭し、羅甸亞米利加諸國の市場より彼等を驅逐することに努力するであらう。羅甸亞米利加諸國の市場に於ける米國の將來は大に有望であるけれども、米國は單に此の方面に於ける經濟上の勝利者たるを以て滿足せず、新銳の意氣を以て支那市場にも殺到し來るであらう。

六

米國の支那に對する輸出額は、大正三年度が五千五百萬圓で、同年の米國の輸出總額四十七億圓に比して僅かに其一步強に當るに過ぎない。今日のところでは羅甸亞米利加貿易と支那貿易とは、其の輕重が到底比較にならないのである。然しながら支那は、羅甸亞米利加の人口約七千五百萬人に比べて貧なりと雖も約三億の人口を有し、其の土地は無盡藏の富を藏して居るから、將來有望なる市場、有利なる投資の場所として、米國は既に今日より支那に對する發展の準備を着々進めて居るのである。米國が經濟的に支那に侵入するに伴つて、日米間に經濟上の競爭が甚だしくなるは避け難いが、彼に大資本と、大仕掛の生產組織の長所がある代りに、我にも我の長所がある。同文同種の關係上我は支那の人情風俗に通じ、且つ勞働と勤勞が米國に較べて非常に安價であることが、我長所であるから、努力さへすれば支那に於ける米國との經濟戰に敗れるやうなことは萬々あるまい。然し經濟上の競爭が激烈になると自然、政治上の爭ひを惹き起すやうになる。日米關係は將來或る意味に於て、戰前の英獨關係の如くなることはあるまい乎。

日米衝突の危險を避くる爲めに、澁澤男爵は昨年米國訪問の時、日米合辨で支那に於て事業を起し、成るべく競爭や衝突を避けるやうにしたいと米國の實業家に說いたが、贊成者が餘り無かつたやうである。最近に來朝した米國の鋼鐵王ゲーリー氏も、日米親善論の立場より日米の經濟上の提携を主張し、第三國例へば支那に對し日米兩國が同一商品を輸出する場合には、取引の地域ヶ確定して、相互に利益を侵害せないやうにしては如何であらうと論じて居る。此の種の提携は、既に或種の事業に關して世界的に行はれて居る例があつて、必ずしも實行不可能のことでは無いけれども、實際上非常なる困難があるから、我實業家が果して氏の提言を容るゝや頗る疑はしい。

七

日米間に横はれる第三の大問題は排日問題である。ゲーリー氏は九月九日東京帝國ホテルに於ける日米協贊會の招宴の席上に於て、日米の間には現に爭ふべき何等の事情も無く、又將來に於ても兩國の親善を破るべき原因の發生が無いから、日米の關係は極めて樂觀すべきであると云つて居る。日米の間には相爭ふべき何等の事情も無いと云ふことは、日米親善論者の常に口にするところであるが、此の如きは事實を赤裸々に表明するものでない。支那問題に關しての米國の對日態度が、日米の國交を阻害する處あるは前述の通りであるが、更に米國に於ける排日も日米國交上容易ならぬ問題である。米國は日本移民の入國を甚しく制限するのみならず、既に入國居住を許した者に對し、歐洲移民と同一の權利を認めずして、激烈なる迫害を之に加へ、恰も犬猫同樣に逐はんとしつゝあるのである。米國としては我國に對して爭ふべき何等の事情もあるまいけれども、我國としては米國に對して爭ふべき重大なる理由を有するのである。

排日の本家である加州に於ては、排日は大正二年に其の頂上に達し、所謂加州土地法なる排日法を制定したる爲め、一時は日米戰爭の風說が起つたほど日米國交上大なる障礙を生じた。其の後排日は小康を示して居るけれども、排日派は加州土地法を以て滿足するのでなく、加州土地法が日本人に對して僅三年の農業地借用の權を認むることが不可であるとして、借地權を全然剝奪し、加州に於ける日本人の事業を根柢より滅絕することを望むで居る。昨年の加州議會に一議員より、此の趣意の新排日案が提出せられたが、當時恰も桑港大博覽會の開會前であつて、其の主たる贊同者たる我國の感情を害するは、同博覽會の經營上不得策であると云ふのと、今一つは當時米國と英獨兩國との間に種々雜問題が生じて居た際であつたから、更に我國と事を構えるは危險であると云ふので、排日に反對する者が多く、新排日案は遂に議會の議に上るに至らずして撤回することになつたのであつた。加州に於ける排日問題の將來に關しては樂觀する者があるけれども、予は後段に述ぶるをころの理由に依り其の前途を悲觀せざるを得ないのである。

八

米國の移民法改正は明治四十二年以來米國議會の問題となつて、既に

大正二年と同四年の二回に改正案が通過して居る。二回とも大統領の同意が無い爲に不成立に了つたが、又もや今年春の議會に問題となつた。例の如くに歐洲移民入國制限を目的とする語學試驗に關する規定と共に、市民たるを得ざる外國人（日本人は之れに屬す）の入國禁止に關する規定がある。尤も此の入國禁止の原則に對して、旅券に關する協約、現に行はれ又は將來締結せらるゝことあるべき條約及協約に反對の規定の無き限り云々といふ但書が設けられてある。そこで日米間に紳士的協約が存在する限り、日本移民は前述の原則規定の支配を受くることは無いけれども、兎も角日本移民は其の個人的資格如何を問はずして、單に日本人たるの故を以て半開國民と同樣、之を排斥することを原則とするのであるから、國家の體面上吾人は忍ぶことが出來ない。我政府の抗議の結果幸ひに米國政府及議會は反省して、上院移民委員會に於て修正を加え、市民たるを得ざる外國人の入國禁止に關する原則を削除し、而して排斥すべき亞細亞移民の範圍を經、緯度に依りて地理的に限定することにし、日本移民は比律賓移民等と共に入國禁止より除外せらるることになつたのである。此の修正せられた移民法改正案が如何なるか、其の運命は今日のところでは不明である。

九

米國に於ける排日の將來は如何であらう。排日の原因には種々あるであらうが、其の主たる原因である人種的偏見は、一面には米國の文明の進歩と共に輕減せらるゝであらうが、一面には日本人間の利害衝突の甚しくなるに伴ひ、之に刺激せられて一層甚だしくなるであらうから、今後之を全く除き去るを得るとしても一朝一夕のことでは無い。故に何か米國の事情に根本的の變化の起らない限り、近かき將來に排日が止み、紳士的協約も加州土地法も廢止せられ、白人と平等の待遇を受くる日あることを想像し難いのである。尤も此の見解には有力なる反對論がある。曰く、今次の戰爭の爲めに歐州諸國に於て壯丁の非常に減少する結果、戰後米國行の歐州移民が頓に減じ、米國に於て勞働の大不足を生ずるであらう。然るに一方に於ては非常に發展したる米國の經濟界は勞働の大需用を惹き起し、何處かに其の供給を仰がなければならぬから、排日と云ふ如きことは到底云つて居られなくなつて、米國は戰後日本移民に對する其の態度を一變し、望ましき移民として再び之を歡迎するに至るであらうと云ふのである。

戰後米國行歐州移民が減少するや否やは、今次の戰爭が何時終了するかの問題と密接の關係がある。極く近き將來に平和克復となる場合には戰前に比して米國行移民が非常に減少するやうなことはあるまいと思はれる。假令可なり減少するとしても、排日の本家たる太平洋沿岸諸州殊に加州行の歐州移民は、其の割合に甚だしく減少せないであらう。其れはパナマ運河開通の結果、從來歐州移民の米國西部行きを妨げて居た原因を除去するやうになつたからである。從つて戰後米國殊に加州の排日の緩和を餘儀なくさせる程、大なる勞働の不足を生ずることあるを想像

し得ないのである。之に反して戰爭が意外に長引き歐州の壯丁の缺乏甚しくなれる結果歐州移民の渡米する者極めて少く、已むを得ず補缺として亞細亞より移民を迎ふることありとするも、其の場合に米國は果して日本移民を迎へ、紳士的協約を撤廢するに至るであらうか。日本移民よりも或る意味に於て優良と認めらるゝ支那移民を歡迎し、其の入國禁止を解くやうなことはあるまいか。曩に支那移民に代つた日本移民は、更に支那移民に依りて代はらるゝやうなことはあるまいか。排日の前途は單り加州に於けるのみでなく、廣く米國全體に亘つて、毫も樂觀することを許さないのである。

然らば吾人は長いものには卷かれよで、米國の排日を忍ぶべきであらう乎。排日問題は獨り米國に於ける十餘萬の日本人の利害に關する問題で無く、世界に於ける日本人の將來に關し、且つ支那に於ける我國の地位に關する大問題である。我國は常に支那に對しては一等國の態度を持して之に臨むも、米國に於て日本人が恰も犬猫の如く逐はれ、甚だしき侮辱を被るも、奮然起つて之に反抗するの勇氣なき以上、支那人が我國を見ること白人諸國の如くで無く、常に輕侮の念を以て迎へるのは是非もない次第である。對支外交不振の原因は種々あらうが、米國の排日問題に關して實に意氣地なく、世界に對して恥を曝らし支那の尊敬を買はないのが其の一大原因である。我國の地位を白人諸國と平等の處まで高めざる限り、支那人の對日本觀は改まらぬであらう。如何に支那に對して高壓的に臨みても、支那人をして、白人諸國は日本以上の國であるとの思想を抱かしむる限り、對支外交は振はない。米國に於ける排日問題の根本的解決は對支問題解決の關鍵である。

一〇

序ながら述べたいは同志社大學教授ギユリツク博士の米國移民法改正案に就てゞある。ギ博士の案は元來は博士の私案に過ぎないけれども、今や米國に於て三十の宗派と、十三萬六千の教會と、千七百萬の信徒の聯合より成る米國基督教聯合會といふ大勢力ある團體を後援として居るのであるから、其の概要を述べて少しく批評を試みたい。博士の案は黃白二人種の平等を認め、一切の差別的待遇の撤回を以て其根柢として居る。外國人に市民權を與ふるには、現行歸化法の如く人種の差別に依らず、個人的資格を基礎にすることを主張し、移民の米國入國に關しては紳士的協約を撤廢して、人種の黃白の別なく適用する一般的新移民法を制定しやうとするにある。而して外來人の同化の必要上、一年間に入國し得る或る一つの國民の數は、既に歸化して米國の市民となれる同國民と其の米國生れの者とを合算した數の百分の五を超過してはならぬとするのである(博士は百分の五と云ふ率を固執するのでは無く單に一例として擧げたに過ぎないのである)。而して此の外に制限外として

一、三年以上米國に在住した者にして米國に歸り來る者、(以下之を再渡航者と稱す)

二、三年以上米國に在住する者の家族の全體、

三、本國に於て米國のハイスクールに相當する教育を受け三年以上或

一の外國語を學べるもの、等の入國を許可する。而して旅客官吏學生等にて本國の資金を以て渡米するものは移民として取扱はない。之に反して純然たる勞働者にあらずとも、米國に於て生活費を得る爲めに勞働する者は、其の何人たるを問はず之を移民として取扱ふと云ふのである（ギユリツク博士著アメリカンジヤパニーズプロブレム第二百八十一頁以下參照）。

明治四十三年度の米國の人口調査を基礎として博士の案を適用すれば、日本移民は制限外の再渡航者、呼寄の家族以外に、一年に千二百二十人の移民が入國し得る計算である（上掲博士の著書第二百八十七頁には入國し得る者の數一年二百二十人とあるも此の數字は誤つて居る）。紳士的協約の下に於ては再渡航者、呼寄家族以外には、移民としては一人たりとて米國に入國し得ざるに、博士の案に依れば毎年千二百二十人宛新に入國することを得、而かも此の數は米國生れの日本人兒童の數の增加と共に增加して行くのであるから、我國には有利なる案である。吾人は感情上よりすれば無制限の入國を希望するも、米國の立場を考ふれば、此の案を以て先づ滿足せねばなるまい。

然るに博士が最近に、我國の米國に關係ある方面の人々に贈つた Comprehensive Immigration Policy and Program. と云ふ小册子に依れば、博士は其の後自說を少しく改めたやうである。呼寄家族の男子を十四歲以下に制限したのは可なりとして、再渡航者を新入國者の內に計算することにしたのは、我國に取りて重大なる利害關係のあることである。

從來米國に住所を有する者が米國に歸る時は、居住權を有する外國人として、移民法に所謂移民にあらずとして、自由に入國を許可し來り、博士も舊案には再渡航者を新入國者の中に數えて居ないのである。且つ在米の日本移民に就て觀察するに、先年來盛んに行はれた寫眞結婚は其の弊害が甚だしいので、近時は結婚の爲めに、態々歸朝し、新婦を携えて再度渡航する者が極めて多くなり、米國にかける日本移民の夫婦關係は非常に改善せらるゝやうになつた。曩に寫眞結婚は非文明的なりとして反對した米國の宗教家連は、結婚の爲めの歸朝に大に贊成すべきであつて、從つて再渡航者を新入國者として取扱ひ、其の入國を不自由ならしむることには大に反對すべき地位にあらねばならぬ。然るに博士は案外にも新案に於て再渡航者を新入國者として計算することに改めた。其の結果は如何と云ふに、昨年の如き再渡航者の數は約三千人であつたが、若し博士の案に依り一年間に米國に入國し得る日本移民の數を千二百二十人に限るとすれば、結局二千人近くの超過を來たし、此等の人々は入國を許されないことになるのである。場合によつては眞の新入國者は一人も無いと云ふことになるのである。但し今後米國生れの日本人兒童が增加するやうにならば、之に伴ふて入國し得る者の數が增加するのであるから、紳士的協約の行はるゝ今日よりも有利となるの日があるであらうが、當分のところは前述の如く博士の新案を實行すれば、年々米國に入國し得る者の數は今日よりも減ずることになる。博士の新案は紳士的協約の行はれる今日よりも、一層我國を不利ある地位に陷るゝの結果を生ずることと

になるのである。尤も博士は新案に於て舊案の三年以上の在住者の代りに第一歸化證書を得たる者の再渡航を許さんとするのであるが、博士の主張の如く日本人に歸化權を與ふることを條件としても、第一歸化證書を得るには中々の困難があつて（少くも博士の案に依れば）實際之を得る者は多數であるまいから、此點より觀ても新案は舊案に比べて不利である。昨年博士の照會に對して贊成を表した人々は、新案に對し贊否を答ふるに先ち、十分此點に注意ありたいものである。（九月十八日稿）

▽米國的精神

早稻田大學教授 原口竹次郎

學事視察の爲め、文部省から選拔派遣せられたといふ某中學校長の歸朝談として、都下新聞紙に依て傳へられたる所に依ると『米國流の教育方針——個人主義的教育方針——には幾多の弊害がある。國民一般に國家的觀念の薄弱なのも其弊害の一つである』といふ事である。吾々も暫らく米國にゐたことがあるのであるが、吾等の觀たる所は、此校長の所見とは全然其趣きを異にしてゐる。此校長の意見は又、二十餘年米國にゐて、親しく彼地の人間と交り、能く事情を辨へてゐるとして知られてゐる、エール大學の教授朝河貫一氏の意見とも矛盾してゐる。朝河氏は『米人の中には、日本人の思議し難き程、自由に自國の政治及び社會を批評し、外人に向ひて其弱點を語るを憚らざる者ある事は、世の皆知る所也。然れども、之を見て、米人は自國に關し何事にても無遠慮に評論するものなりと思ふは正當ならざるが如し。余が見る所にして誤らずば國家創立の根本思想又は愛國心の根據及び性質等に關しては識者と雖、案外に之を議論せず、又國民の大多數に至りては全く之を評論せざるに似たり。是れ熟考せば何國にても然るべき現象にして、米國が此普通の法則に外るゝことなきは異しむに足らず。されば、史上及び現今の國事を自在に非難する人と雖、自國生存の根本問題に關しては、熱烈の信仰を有する事なるべし。是れ米人の國民的感情を論ずる者の須らく留意すべき點なりと信ず。又評論の自由なるより推して、米國人の愛國心薄弱なりと結論するは決して透徹の見解にあらず。余は幾度か此點につきて誤謬を重ねたる結果、米人の愛國心の極めて深厚なるを見得たりと信ずる也。』

と言つてゐる。例の校長——血祭にせられて氣の毒だから姓名だけは預りにして置くが——は、一體全體如何なる事實を根據として右の樣な立言をなしたのであるか。人の心を忖度するのは多少失敬だが、彼は米國は個人主義の國であるから、米國民は國家的觀念に缺乏してゐるに相違ないとか、寄り集りの國民であるから共同的精神を缺いてゐるだらうとかいふ世間一般の誤想に基いて右の如き結論をなしたのではあるまいか。兎に角、彼が言ふ所は、史上の事實、現在吾人の目睹する所と全然矛盾してゐる。

アインハートは、其著『獨逸史』中にマーチィン・ルッターがカール五世の面前に立ち昂然として『吾は此信念を奈何ともする事が出來ぬ』と叫んだ男らしき態度の中に、獨逸魂の永遠の相が見へてゐると言つてゐるが、かのエーブラハム・リンコルンが、所謂『奴隷採用州(スレーブ、ステート)』の者を皆殺さねばならぬ様な不幸を見るとも、米國の『統一(ユニオン)』は保存せられねばならぬとなした、誠に戰慄すべき愛國的決斷の中には、非常なる秘密が籠つてはゐないだらうか。リンコルンの此愛國的行動は、日本の一中學校長から物笑ひの種とせらるゝ程早く米國人から忘れ去られたであらうか。負け惜みもさる事乍ら、此頃米國から歸つて來る人々の話には、向ふの事實を曲解し公正な態度を缺いでゐるものか、然らずんば、淺薄皮相の見解を述べたものが多い。生意氣な田舍の若い士を東京見物に遣るのが危險であると同じく、文部省が僅かに一年か二年か視察旅行をなさしむるのには非常なる危險分子が含まれてゐる。例の中學校長の視察談なるものを讀んで、やつぱり中學の校長だといふ感じを禁ずる事が出來なかつたのは蓋し吾々のみではあるまい。

餘り近所に當つてゐると肝心な問題の方が御留守になるから、米國的精神の眞骨頂を現はしてゐると思はれる二三の點を左に書き連ねて見る

一、自主獨立の精神　米國民の祖先は、其一大部分は政治上宗敎上の自由を得んが爲めに、歐羅巴から米國に移住して來たものである。今日の米國人が自分の價値、權利、自由、獨立自尊といふ事に關して、極めて濃厚な考へを持てゐるのは敢て異しむに足らない。今日の米國人程セルフ・レライアントな國民は少ない。此自主獨立の精神を理解しないと、米國人の家庭社會等に於ける一切の行動が呑み込み惡くなる。今之を明かにせんが爲めに、一二の例を舉げて見やう。

本文の筆者が、まだ紐育にゐる頃、或善男善女が、電車の車掌や運轉手は薄給で『年の暮(クリスマス)』にも困る事であらうから、乘車する人は皆應分の金を惠んで遣る方が善いと言ひ出した。而して新聞の投書欄などを利用して一般市民を勸誘した。すると『紐育タイムス』は、約一段に亘る社説を掲げて之等善男善女――愚夫愚婦？――の意見を罵倒し『電車の車掌や運轉手のは薄給であるかも知れぬ。併し其だからと言つて心付けを遣るなどいふのは、車掌等を馬鹿にするの最も甚だしいものであるから、よした方がいゝ。車掌等が、自分等の給料は、他の階級の人々の其に比し割が惡いと思つたら、勞働には事缺かぬ處であるから他に轉業するも善からう、會社に向つて增給を請求するも善からう。若し聞き入れなかつたならば、男らしくストライキするも善からう。心付けなどを遣つて車掌等をして自分の位置と尊嚴とを疑はしむるのは斷じて善くない』と言ひ放つた。其結果、愚夫愚婦の企ては見事失敗に終つたのである。今此精神を獨逸あたりの郵便脚夫や電車の車掌が、外國人たる吾々日本人に臆面もなく心付けを呉れと暗示するのに比べると、雲泥の差があると言つて善い。獨逸の郵便脚夫――多くは軍人の古手――は、クリスマスの前には、各戸から心付けを貰ふ事にきめてゐるし、日本の學生などからは當留郵便を持て來る毎に二十五錢位はねだるのである。亞米利加には、威

嚇して取らうとするのはゐる。併し、哀訴的に、併し威嚇的に取るより以上の汚ない動機を以て目腐れ金を貰ふ者は先づ少ない。

米國民は人間生活の價値權威を信仰し主張するばかりでなく、之を實行するに足る堅硬なる意志を持てゐる。自分ばかり如何に偉いと思つて居つても、實際其偉い所を見せなければ、馬鹿殿様と何等擇ぶ所がない。彼等米人が、價値權威を實際に現はす一例として、最も能く筆者に知られてゐる事實を擧げる。十年程以前、吾輩と一緒に早稻田の大學附近に下宿してゐたWといふ一米國青年がある。彼は、日露戰爭後の吾が日本を見るべく、一年間滯在する豫定で東京に來て居たのである。東京にゐる時分、彼は早稻田大學や神田の基督青年會の夜學校に英語を教へ生活費を得て居つた。そして暇さへあれば日本の各地を巡歴した。吾々は彼が少なからざる補助を家郷に仰いで居つた事とのみ想像して居たのである。然るに、彼が後に至つて吾輩に語つたところに從へば、彼は日本滯在中殆んど何等の補助を國元から得なかつた。其れであるにも拘はらず、彼は米國への歸途、支那朝鮮を巡歴したのみならず歐羅巴をも見物したのである。尤も彼は東京にゐる時分教師として働く傍ら、ハーパース・マンスリーなどいふ雜誌に投稿して原稿料など得て居つた。本文の草者は渡米後、暇ある毎に彼の家を訪問した。いつか訪問した時に、彼が日本に於て用ひて居つた大形の辭書が父の書齋にあつたから『之は君のではなかつた?』と聞くと『僕のであつたが、日本から歸つた時に金に困つて父に賣つたのだ』と言つた。彼はニユー・ブリテンといふ町の資産家—二、〇〇〇、〇〇〇圓位はあるだらうと言はれてゐる—の只一人の愛息であるから、贅澤費位は譯も無く貰へるであらうと思ふのであるが、郷里の中學を出てプリストン大學に這入つてから以來は家から餘り補助を受けなかつたと言つてゐる。今日は、大學に於ける學科上の負擔も昔しよりは重くなつてゐるし、其に生活が昔時よりは、ずつと困難になつてゐるからW君の如くに自活して第一流の大學を卒業し得るものは至つて尠ない。殊にW君の如き堅固なる奮鬪的精神を持てゐる者は、世間に想像せられてゐる程多くないかも知れぬ。エールやハーバードなどに於ても成金主義を振廻してゐる學生もある。併し、W君の様に健鬪的精神に富んでゐる青年を比較的多數に持てゐるといふ點に於て、亞米利加は慥かに世界に誇るに足ると思ふ。

自主獨立といふ事は、米國民の根本思想である。此思想は、親は親子は子で獨立して自分の運命を開拓して行かんとする家庭の風の上に社會組織の上に、政體の上に現はれてゐる。此高尚なる個人主義の思想が充分に會得せらるゝ迄は、米國的精神が呑込めたとは言へない。例へば、民主的政治の如き、此個人主義の特產物なりといふべきである。何でも獨りで遣る、猥りに人に干渉せらるゝ事を好まない。さうなれば勢ひ自分で自分の政治を遣るより外致方がないのである。要するに、個人主義と民主主義とは、同一社會的事實の兩面たるに外ならぬ。米國の民本政治は、今日理想境に達してゐるとは勿論言はれない。紐育が、まだ和蘭人に支配せられてゐた時、スタイベサントといふ峻嚴苛酷な知事があつ

た。極端なる獨裁政治を行ひ、民主政治の缺點を指摘し『泥棒は泥棒を選擧し、密輸入者は密輸入者を選擧する—the thief will vote for a thief, and the smuggler for a smuggler』と言つてゐる。人民の權利自由を極端に主張する民主政治の缺點は、僅かに此スタイペサントの語に示されてゐる。現に、米國の市町村諸州にして此病ひに罹つてゐないものは殆んどあるまい。併し米國人が、人民の權利意志自由理性は尊重せられねばならぬ民主的政體の下に於て、理想的政治を行ふには、教育を盛んにして、國民の人格、理性を啓發指導せねばならぬといふ彼等の根本思想は間違つて居らぬ。故に表面に如何に多くの腐敗事件が漂ふて居つても、百のタマニー・ホールがあつても、米國民が此根本思想を忘却して居らぬ以上は、之を以て個性尊重主義民本主義の破産であるとは斷言する事出來ぬ。兎に角今日人を馬鹿にした樣な超然内閣を夢想する程間拔けてゐる吾々は、米國の政治を罵倒し非難すべき何等の理由と權利を有たぬ。

米國の歷史家社會學者は、一齊に『吾々米國民は高尙なる個人主義と民本政治とを以て世界文明に貢獻した』と言ふ樣な事を言つてゐるが、こは強ち誇大の妄想とのみは言へない。

個人主義の發現の諸方面に亘つて論ずるといふのは、本文の能く爲し得る所ではないから、右には只其が政治と關係してゐる部分のみを述べたのであるが、ウエスターン・ユニオンとかコムマーシアル・ケーブルなどいふ大電信會社、サウザーン・パシフィックとかグレート・ノーザンとかいふ大鐵道會社・アダムス運送店其他トラストなどいふものは米國民の

個人主義に理解が屆く迄は到底解釋する事出來ぬものである。併し、米國的精神の眞相を窺はんと欲するならば、吾々は彼等の積極的精神を見逃してはならぬ。

二、積極主義

個人主義は謂ふ迄もなく米國的精神の基調である。

米國に視察旅行する者は、皆紐育を見掛けて駈けて行く樣であるが、之は甚だ善くない事である。紐育には、米國の他の都市に於て見られない樣な大人物もゐれば仰天せしむるに足るほどの建築もある。併し、善良なる風俗、道德的反撥力は寧ろ米國の田舍に潜んでゐると言つて差支へない。紐育は、米國的精神の長所と短所——殊に短所——を極端に曝露してゐる。其故に、始めに米國の田舍若しくは田舍にある小都會に行かないで、紐育の西八十四丁目當りにある日本人相手の賓淫窟にいきなり案内せらるゝ吾が日本の紳士風の諸君——教育家をも含む——は、米國は魔窟であるなどいふ全く見當違ひの視察をなし易い。米國の世態人情を細かに研究しやうと思ふならば、先づ『新英州（ニュー・イングランド）』當りの大學に靜かに引込んで勉強し、土地の人にも交際して見ねばなるまい。其後ならば紐育に行つても差支へないかも知れない。兎に角、眞先きに紐育に飛び込んだ者の中には、米國人の生活に就て正當な見解を有てゐない者が多い。

さり乍ら紐育の生活を見ないで、歸るのは決して結構な事とは言へない。何となれば、紐育は、米國人の積極的精神、淸濁併呑主義、複雜性等を遺憾なく發揮してゐるからである。此處には英吉利人もゐれば佛蘭

西人もゐる、獨逸人もゐれば以太利人もゐる、希臘人もゐればアルメニア人もゐる、日本人もゐれば支那人もゐる、印度人もゐれば黒人坊もゐる。百萬以上の猶太人もゐる。ロックフエラー、バンダビルト、グールド、モルガン、カーネギー、アスターなどいふ世界の富豪がゐるかと思ふと、チャリティー・オーガニゼーション・ソサイティーの厄介にならねば生きて行けぬ様な貧乏人もゐる。ヘレン・グールドの様に高潔にして天女の様な婦人がゐるかと思ふと、アンナ・グールド見た様に、東が白む頃迄舞踏と飲酒に耽り、朝飯は床の中でなければ食はぬと太平樂を言つてゐる破戒無慚の女もある。モーニングサイド・ハイトの上に研究と修養とに餘念のない高潔無比の大學教授がゐるかと思ふと、ピストルで張番しながら賭博に餘念ない命知らずの無頼漢もゐる。若し紐育の暗黒面のみを見たならば、神經過敏な道德家は、直ちに病氣になつてしまふであらう。博徒の如き連中と跳、十階二十階の家根裏で、毎日何百人となく集まつて賭場を開いてゐる。そして、死の線(デス・ライン)などいふ物も設けて刑事巡査でも何でも、此線以内に這入つて來る者は、容赦なく射殺すと言つて威嚇してする。其でも、餘り警察が嚴重になれば、何千人となくボストン費府等取締りの八ケ釜敷くない所に逃げる。警察署長が代れば、又ぞろ〳〵と紐育に歸つて來るといふ有樣である。だからと言つて、何處にどんな人間がゐるといふ記錄も完全してはゐないのであるから、斯の如き不逞の奴等を芟除するに足るべき根本的方法も無い。紐育の無秩序不規律を最も遺憾なく發揮するものは居酒屋である。法律では居酒屋は、日曜には開く事出來ぬといふ事になつてゐる。然るに、日曜日に公然開かれてゐない酒屋といふのは、大きな紐育中、只の一軒もあるまい。紐育に行つて此不規律(ローレスネス)を目擊した者は、どうして社會が持つて行くだらうかと異しまぬ者はない。併し其が紐育の紐育たる所以、亞米利加の亞米利加たる所以で、彼等米國人の主義は人は人、吾は惡い事をしたい奴には勝手にさして置け、吾等は彼等の惡い事を補ふて餘りある程の善い事をするといふのである。惡い事をしてゐる者は山程ある。併し、善い事をしてゐる者は更に多い。何でも考へが積極的である。金を儲けるにしても、五十萬や百萬の金を儲けても上せあがる様な事は決してない。米國が富を擁して今日世界に雄飛してゐるのは、此紐育的精神、積極的精神があるからである。亞米利加人は、總じて清濁合せ吞むといふ風に出來てゐる。些細な事に角を立てゝ爭ふのは、彼等の最も厭ふ所である。日本人が米國人と折合惡しく、米國人に嫌はれるのは、餘りに日本人が、細かな事に角立てゝ八ケ釜敷くいふからである。米國人は日本人はコマシヤクレてゐていけないといふ。鹿爪らしく何でも批評するからいけないといふ。或日本の學生が『米國人が實際善くないと思つてゐる事でも「善し(オールライト)」「善し」といふのはよくない』と言つて咎めると、米人が『吾々はそんなつまらぬ事を善いの惡いのと言つて爭はぬのだ』と言つて答へたといふ話があるが、之は或程度迄呑氣な米國人の心理狀態を現はしてゐると言つて差支へない。兎に角、世の中には、少しばかりの收入で貧弱な暮しを立てゝ滿足する者と巨萬の財を積んで贅澤な暮しをしやうとする者との二種類がある。

前者はどこかの人間で、後者は亞米利加人である。

右は、過半數、金儲けのために來てゐる渡り者を以て塡められてゐる紐育市を中心として見た米國人の生活であるが、亞米利加の他の町に於ては、市俄古、費府の如き處と雖も、紐育に於けるが如きローレスネスはない。總理大臣の屋敷の側に、東京第一の貧民窟が出來たり、大學の周圍に賣淫窟が出來たり、町の眞中でも一寸人が見てゐないと放尿したり、褌の儘臀出して電車に乘つたり、夜の夜中書生つぽが高歌放吟したりする樣な事は全然ない。亞米利加の所謂『新開町(フロンティア・タウン)』と雖、帝座のある東京の町よりは遙かに整頓してゐる。流石は自治を以て誇つてゐる人民の國である。

三、自負心自尊心に富んでゐる事

此項は、本文の最初に於て鈴玉に擧げた中學校長先生に能く讀んで貰ひたい。

ワシントン・アーヴィングは、其歐羅巴旅行記中に、歐羅巴に行つて感ずる事は、歐羅巴のは一塊の石と雖、歷史的の意義を藏してゐる事であると言つてゐる。米國は高が知れてゐる。コロムバスに發見せられてから、まだ四百年餘りにしかならない。其であるから、森嚴にして冒すべからざる古城の如き面影は亞米利加の文明にない。そんなものは亞米利加人には見られない。米國人は歷史に依て神秘化せられてゐる物で誇るべき物は一も持てゐない。亞米利加に行つた者の感ずるのは、古色蒼然たる山水を外にしては、見る物一として透明ならざるはなしといふ事である。『之は「殖民時代の家(コローニアル・ハウス)」である』と言つて見ても高が知れてゐる。せいぜい〳〵三百年位にしかなつてゐない。併し、米國民は古い物で吃驚させる樣な物を持てゐない代りに、人間の理性に訴へて之は偉い、之は立派であると思はせる樣な偉い物を持てゐる。華盛頓とか、リンコルンとかローズベルトとか、トーマス　エディスンとか、カーネギーとか、モース教授とか、フランクリンとか、民主政治とか、コングレス・ライブラリーとか、巴奈馬運河とか、紐育とか、ウルウォース建物とか、大陸橫斷鐵道とか、コムマーシアル・ケーブルとか、世界一の富とか、何處へ突き出しても、誰に見せても、成程と思はしめる樣なものを澤山に持てゐる。亞米利加人は世界第一といふ事を欣ぶ國民である。彼等米人の自負心は神秘的惡しく言へば有名無實の理由の上に立てゐるのではなくして、理性に依て立證し得べき普通の理解力を持てゐる者には直ちに了解し得らるべき根據の上に立てゐる。自負心自尊心の根據が薄弱でないだけ其だけ彼等の自負心自尊心は强烈である。誠に近所迷惑だと感ずる程自負心に富んでゐる。米國人は、自國民を以て、世界中最も創造力發明力に富んでゐる國民であると信じてゐる。歐羅巴人や日本人は、因襲に囚はれてゐて、何事をもなし得ないものであると高を括つてゐる。併し、ちつとは賞めて遣らねば氣の毒であると思つて、吾々日本人にでも『君の國は古い(ユア・カントリー・イズ・オールド)』など人を馬鹿にした事を言つて賞める。賞めるからと思つて、圖に乘つて日本の話でもしやうものなら、二日目には欠伸をしてゐる。日光や中禪寺や富士山が佳いと言つて見たとて、グランド・キァニオンや、ロッキー山や、ミスシピイや、コンネチカット・バレイや、ナ

イアガラ瀑布や、西部地方の森林の壯大なるには遠く及ばないといふ事を能く知つてゐる。

『米國は寄り集りの人民で出來てゐる國だから、米人は愛國心に乏しい』といふ意味の語は、吾々が此頃新歸朝者から聞く所であるが、斯の如きは米國人の生活の表面だけも知らぬ所の人間である。吾々を以て見れば米國人は傲慢に見へる位愛國心に富んでゐる。彼等は、世界は米國を中心として回轉してゐると考へてゐる。米國人が、も少し自惚れを去り他の立場に同情する事が出來るならば、かの加州問題の如き、あんなに迄面倒な問題にならなかつたであらう。

四、剛健な氣風　亞米利加人が贅澤である事は誰も知つてゐる。此事實から推して、米人は柔弱であるとなすものがあるが、其は間違つてゐる。英人と米人とは、世界の富を集めて贅の限りを盡してゐるに拘はらず、剛健な氣風を持てゐる。彼等は危險なる運動を好む。彼等は戰爭を好む。平和運動が亞米利加に旺んであるから、人間が嘸女々しい事であらうなど思つてゐたならば其は大間違である。米國の大學などで行はれるラグビー式フットボールの危險にして、之に參加する選手の果敢にして、群衆の之に熱狂するの甚だしきを見たものでなければ、米國人の氣象を語る事出來ぬ。或米人が『戰爭は氣休(レツキゼーシヨン)めの爲めにするのである』と言つたさうであるが、米國人は戰爭を苦痛な事とも何とも思つてゐないらしい。日頃眞面目腐つた生活のみしてゐると窮屈で瘦せてしまうから時々は亂暴な生活をして見たくなるらしい。此氣風は彼等が印度人との戰に於て、佛蘭人との戰に於て、英人との戰ひに於て、南北戰爭の時に於て、西班牙との戰爭に於て養ひ來つたものである。如何に富を蓄積しても米國人に此健鬪的の精神が存在する間は、決して滅亡する事はない。

米國人の剛健な氣風を、最も能く代表する者はローズベルトである。彼は文學美術學問などに對して、人並以上の興味を持てゐる。讀書の範圍の廣い事に於ては、恐らくば世界に於て其比を見ないであらう。彼が亞非利加に狩獵に出掛けた時に携へて行つた、所謂『豚の皮圖書(ピッグスキン・ライブラリー)』は能く其事實を證明してゐる。併し彼は一方に於ては猛烈果敢な遊戲を好む。政界に出る前、彼は西部地方に於ける命知らずの牧者(カウボイ)の間に數年を過した。西班牙との戰爭の時に、彼は海軍次官の職を一拋して、所謂『冒險騎兵(ラフ、ライダー)』の一隊を組織し、サンテイアゴーに乘込んで大に武勇を發揮した。彼が紐育市に於て警察署長をしてゐた時分は、命知らずの惡人共が鳴りを鎭めて居たと言はれてゐる。大統領の職にあつた時、彼は參謀本部の將校を引率して遠乘を試み、將校連をして辟易せしめたのであつた。大統領を止めてから彼は亞非利加と南亞米利加に探險旅行を試みた。併し、ローズベルトがローズベルトたる所以を最も能く發揮したのは四年前總選擧の際に於てゞある。彼は選擧演說の爲め、ミルウオーキ市に行つた。そして演說會場に行かんとする際、一兇漢の爲めに自動車上に於て狙擊せられた。此馬鹿者はウオールドなどいふ黃色新聞の記事に誤られて、ローズベルトを國賊だと思つてゐたのである。ローズベルトの

演說を聞かんとて、會場前に蝟集してゐる群衆は此兇漢を捕へて殺さんと犇めいた。ローズベルトは胸に一彈を受けてゐるに拘はらず極力群衆を防止して暴漢を救はうとしたのである。全く意外の出來事にあつたに拘はらず、左迄之に動ずる色もなくて演說會場に入り一時間內外演說して立去つた。彈丸は今も尙ほ彼が肋骨に止まつてゐるのである。ローズベルトに關する右の話は、事件のあつた當時、獨逸の新聞で見たので些細の點に於ては、事實と相違してゐるかも知れない。

五、米國人のユーモア　『好笑の情(ユーモア)』に富んでゐるといふのも米國人の一大特色である。之あるが爲めに、米國人の生活には呑氣な所がある、餘裕がある。悠々として逼らない所がある。日本人などの樣にコマシヤクレてゐない。鹿爪らしくない。理窟ぽくない。歐羅巴人、殊に英國人は頗る好笑の情に富んでゐると自分も信じてゐるし、人も許してゐる樣であるが、米國人に言はせると、矢張り餘裕がなくていけない、鹿爪らしくていけない。之等の點から英吉利の學生が米國の學生に馬鹿にせらるゝのを筆者は屢々見た事がある。筆者が獨逸にゐる時分、懇意にしてゐた老人は、食事が濟むと、戸棚の中から諧謔(チョーク)の書いてある書物を取り出して來て、いつも同じ諧謔を讀み『可笑しいではないかハヽヽ・』と言つて大笑した。こんな事は米國人の能くする所でない。シムプリチズムスなどを見ても、其處に出てゐるヂョークは創見を缺いてゐる。米國人の好笑の情は多分彼等の生活に餘裕がある所から自然に生れ出たものであらう。

米國民は餘りに好笑的であるから、眞面目を缺いでゐると誤解せらるゝ事が往々にしてある。例へば、最も眞面目で又最も鹿爪らしと思はれる教師や牧師ですら、萬止むを得ない場合の外は學問上の話などしない。いつも可笑しな事言つてげら／＼笑つてゐる。併し、之を以て彼等が眞面目を缺いてゐるなど思ふのは大に間違つてゐる。好笑的な者が眞面目になり得ないといふのならばエーブラハム・リンコルンはどうであるか。

六、現實的傾向　米國人が現實的であるといふ事は否定する事が出來ない。彼等は現在眼の前の生活を擴張し、スティミュレートする或物――其或物は多く物質的のものであるが――を要求してゐる。此傾向は往々にして米國人をして非常に劣等ならしむる。此頃日本の新聞紙に廣告してある俗惡無比のチューイング・ガムは、能く一部米國人の劣等趣味を表現してゐる。併し、總ての米國人がチューイング・ガム式、刹那主義であると思ふのは誤りである。廣い米國の中には健全なる理想を持つてゐる者も多數にゐる。永遠といふ觀念を拔きにして紐育市の設計が出來やうか、セント・パトリック寺院が出來やうか、セント・ヂョーンス寺院が出來やうか、コングレス・ライブラリーが出來やうか、巴奈馬運河が出來やうかローズベルト等の『富源保存の大運動(コンサーベーション・ムーブメント)』がどうして生れやうか。兎に角、マッチ箱にも等しい家に住んでゐる吾々は、米國人を刹那主義であると言つて責むべき何等の資格を有たぬ。

最後に一寸述べたいと思ふのは、米國人が現實的であるが爲めに不身持でありはしないかといふ事である。筆者は、米國學生等と親しく交つ

て彼等が吾が日本の學生や獨逸の學生などに比較して、品行が正しい事を信ずるに至つた。米國人が常に元氣善く働くのは之等の點に源因してゐると思ふ。

英國人が『紳士(ゼントルマン)』と言はれるのを無上の光榮とする如く米國人は『强人(ストロングマン)』と言はるゝ事を最も大なる名譽としてゐる。米國人の理想とするストロング・マンといふのは、どんなものであるかといふに、先づ英吉利の紳士に酒精を注射して唐芥子を振り掛けた樣なものである。何處となく『ピリツ』とした所がある。ストロング・マンは、人に迷惑を掛けられても之を口外しない。何か人にして遣つても人に吹聽しない、强い者に食つて掛る事はあつても弱い者は少々危害を加へても見遁して遣る、餘裕あつて滑稽趣味に富める、現實に非常に執着するが併し何處迄も理想を忘れない、自分の事にのみ齷齪せず、常に元氣に滿ち、活動的氣分に富んでゐる獨立獨行の人間を言ふのである。(五・九・一五)

▽日米親交の二方策

子爵 金子堅太郎

世の人口を開けば、日本人と亞米利加人と同化して行かなければならぬ、然るに日米兩國民は人種も違へば言語も風俗も習慣も宗教も違ふ爲に、どうも同化し得ない。歐羅巴の人種が亞米利加に移住すると、同化して米人となるのに、米國に居る日本人は何時まで經つても少しも同化しないと云ふ。私も親しく米國に在つて隨分此問題を攻究したが、同化せぬに就ては種々の障碍物がある。一體歐羅巴から米國に移住する者は多くは紐育に來る。其處には歐洲各國の移民取扱所がある。英吉利なら英吉利の取扱所、佛蘭西なら佛蘭西の取扱所、獨逸なら獨逸の取扱所と云つたやうに、各自(それ〴〵)自國の移住民を取扱ふ會社なり事務所なりがある。で米國に自國の人民が入用だとすれば、千人なら千人、二千人なら二千人と必要な人員を本國に通知する。本國では移住を希望する人を募つて身許、財産、年齢、家族などを調べて米國に通知する。で所求の時日迄でに船で紐育に送ると、移民はエリス・アイランドと云ふ移民檢査所のある所に陸す。移民取扱事務所の者は其所で移民を査べ、檢閲が濟むと百人は南、二百人は西、或は農業を希望する者は農場へ、工場に働かうとするものは工場へ、鑛山行きを希望するものは鑛山へと、着く直ぐ移民を運搬する特別の汽車に分乘させて、各自(それ〴〵)目的地へ發足させる。目的地には移民受取人が居て、移民に其の希望する職業を配付してやる。而して家族のある者には住み家があり、家族のない一人者には合宿所などがあつて、順序よく少しも手違なく進んで行く。歐洲各國は多少異同はあつても皆斯うして順序よく移住する者に便宜を圖つて居る。で若し移民の内に不都合な事をして自國の體面を汚すやうなものがあつたり、病人があつたりすると移民の監督者が之を取締つたり世話をしたりするのである。

所が日本の太平洋沿岸に移住する者に取つては、そんな手續きや設備はない。移住するには移民會社などの手を經て行くのであるが、本國なり或は布哇なりから出掛けて、桑港に上陸すると多くは其先輩とか知人とかを便つて行く。宛然(まるで)千葉縣の鷄を籠に入れて持て來て兩國方面へ放

したやうに、何處彼處の用捨もなく出掛けて餌を漁ると云つた風で、一向取締りが濟いて居ない。而かも歐洲の人と異つて日本人の服裝は、和服でも洋服でも米國人には異様な風として目に着く。上陸した後でも農業に從事するやうな者は、暑い時は日本風に殆んど身體を露はして仕事をする。隣家に住む米國人は日本人の恁んな服裝を異様に感じ、細君や若い娘のある人などは殊に面白くなく思ふ。所が日本人の方ではそれが日本の農民の風であるから、少しも自分が變だとは思はない。却て外國に來て居る丈け本國に居た時よりも禮儀を正しくして、窮屈を我慢して一枚でも餘計に着物を着てゐる積りで居る。又言語が分らないから隣家の米人と朝夕顏を合せても、碌に挨拶もせず交際もしない。それよりも日本人同志の所へ行けば、何かにつけて便利で買物も容易く出來るし、互に故國の事も談り合ふ事が出來ると云ふので、どうしても足が向き易く遂には一團となつて日本人の部落を作つて了ふ。所が前に云つたやうに外觀が異つてゐる――髮の毛の黑い、皮膚の黃色い、變な言語の日本人同志の部落が近所に十も二十も出來上ると、米國人は飛んでもない奴がやつて來たと感じて厭はしく思ふ。所へ日本人の賣る物は米人の物より價が安いと來てゐる。米人なら一弗の物も、日本人の物ならば八十仙と云ふ風であるから、自分で農園を持つて農作物を作りながら外國の出稼人に顧客を奪はれるとなると、日本人は米人に取つては經濟上の敵ともなる。感情の上に既に面白くなく思つてゐる所へ、經濟問題から又厭やがられるので、眞に日本人の美德と云ふ事は少しも米國人に知られず、又知られる機會も失はれて了ふ事が多い。これが言語でも通じて、深く交際でもする事が出來れば、日本人は勞働者でも慈愛心に富み仲々勤儉で近憐を相助ける道德上の觀念が高いと云ふやうな美德も少しは理解されるのであらうが。然し美德などと云ふものは無形の事であるから、言語又は日常の交際の間に自ら現はれるのであつて、有形のもののやうに一見すぐ分るものではない。從て今日のやうな有様で兩方相距つて居ては仲々理解される筈はなく、却て動もすれば日本人はアンデザイヤブル、クラスとされて了ふのである。歐洲の南部又は北部から米國に移住した勞働者に比較して、日本の勞働者が人として品性の上に決して劣等なのではないと思ふ。然るに如何にせん皮膚の色とか髮の毛の色とか、又は服裝などの外觀が、歐州人と異つて日本人は餘程米國人と懸け離れてゐるから、宛然一種の變り者が天から降つて來たやうに米國人は考へるのである。之は人種や宗教や風習の違ふから已むを得ないとは云へ、又日本の移民が早く米國の風俗習慣に從ふやうに力め、成るべく隣人と交際し、日曜には寺へも行つて米國人と共に禮拜したり、夜分は訪問をするとか、農家なれば辨當の時間などに田の畝に腰を下ろして互に談り合ふやうにしたら、隨分兩方の意思も疎通し互に誤つた偏見を取去る事も出來やうと思ふ。又移民を送る手續や設備を整へて桑港には日本人倶樂部でも建てゝ、歐羅巴諸國のやうに移民の日常を監督し、米國人に嫌はるゝやうな者は訓戒し、若し聞かぬ時は歸國させて、米國人に嫌惡さるゝ要素を捨てるやうにしたい。さうして自然米國に同化して、其住宅や服裝も米國人並にしたならば宜しからうと思ふ。住宅や服裝を米國並にするには費用がかゝると云ふかも知れないが、それは食品を安く賣り壞さずに米國人の價と同一にすれば相償へるのである。斯うすれば外觀の問題も經濟の問題も解決される。さうなつて初めて日本人も米國人と同化して、彼等に嫌はるゝ事もなくなるし、從て市民權も投票權も與へられるやうになる。いくら國際法を以て議論しても、此方の主張に對しては先方でも充分なる理由があるから仲々解決は着くものではない。それよりも斯うして兩國民の感情の疎通を圖れば容易に圓滿に事が運べるのである。昔か

ら日本でも「鄕に入つては鄕に從へ」と云つてゐるし、西洋でも「羅馬に入らば羅馬人の如くせよ」と敎へてゐる。米國に移住したらば日本人も米國人ワ如くしなくては事毎に問題が起つて骨が折れる。

次には日米の經濟問題である。私が三十二年米國に行つた時、米國でクッタリー・レビユーと云ふ政治雜誌が私に日米關係に就ての所感を訊ねたに對して、私は日米の經濟同盟を說いた。以後今日に至るまで十七年一日の如く私は此所信を變へない。唯それが實現されないのが遺憾である。當時人は此說を一笑に附して日本の商人の商業道德の低い事、日米の富の相違、人種の相違、日米政體の相違等などから、如何しても說は善いが實行に不可能だと云ふ論が多かつた。然し私は自分の說が惡いとを發見する事は出來ない。試みに世界の地圖を展いて米國が其產物を賣込む處は何處であるかを査べて見よ！　歐羅巴では農產物以外に米國品は歡迎されて居ない。南米は英吉利、獨逸の勢力範圍にある。亞細亞へもさう大して輸出はされて居ない。が、然し將來太平洋を橫斷して米國が其產物を賣込む地は亞細亞殊に支那である。況んやパナマ・カナアルが開通したから、それを通過して來れば米國は歐洲の何の國よりも支那に近い、で米國が支那を市場として、支那に資本を投入して工場を起し、貿易工業上の事業をするに就ては、日本人と共同してやるのが兩國の爲めに利益だらうと思ふ。若し共同せずしてやれば競爭を生ずる。競爭は不利である。米國丈けでも南の方と北の方とが競爭して外國に其物品を賣込まうとして失敗し、遂に共同してアメリカン・トラストを起し共同して利益を儲けた例もある。支那で兩國が商賣上競爭すれば、自然何方か一方其賣品を賣くずして一方を潰して其市場を奪ふ事になる。假りに日本人が米國と同一の品物を價を下げて賣潰し、米國の物品を支那から驅逐するとなると、日本人は好いが米國人は氣持が惡い。其氣持の惡い感情が高じると日米の關係を外外上惡くする。だから商賣の共同をして競爭で商品を賣くづさず日米の關係を圓滿にして行くのが兩國の利益である。戰で國の消長を爭ふと同樣、經濟の競爭でも國の盛衰が定まる。かうして取つた所で逆な事は長くないから、寧ろ共同して商品の改良や賣込みの相談をしたら、日米商業が擴張される譯である。近い例が紙卷煙草を米國のヂーク會社が村井兄弟商會と提携して支那に賣込んで大變利益を得た。事でも分る。他の事も之に倣つて行けない事はない。例へば製鐵などでも日本は小さい金具類、米國は大きなレールや鐵管などを輸出したら日本と米國の製鐵業者は共同して行けぬ事はない。又紡績などにしても日本は工業がまだ米國程發達してゐないから荒手の大きいもの、米國は上等な精巧なものを賣ると云ふやうに協定したら、別に衝突せずに旨く行くと思ふ。然うすれば日本人は商業道德が低いと云ふが、道に武士道の國だけあつてエライ所もあると認められ、商工業の經濟同盟が出來れば自然國際上の問題も圓滿に解決される。斯うなれば黃色新聞が如何に日米開戰を絕叫しやうとも、如何に野心ある政治家が日米開戰を促すべく樂燃を煽動しやうとも、經濟上の同盟が鞏固なれは大丈夫である。又日米の親善は誰も異存のない事で、開國以來兩國が戰端を開くやうな問題は實際起つてはゐないのである。唯口で親善を絕叫するに先立つて、親善を妨ぐるやうな障碍物を根絕するやうに努力しなくては駄目である。それには前に述べた如く、移民を取扱ふ設備を完全にし、移民の外觀言動を改善して、力めて其鄕土の風に同化して日米兩國民の感情を疏通するやうに圖る消極的な方法と、第二に述べた日米兩國經濟の聯合を圖る積極的な方法とを以てしたならば、裂くは日米開戰などと云ふが如き云はれなき妄想を打破して、玆に兩國親善の實を上げる事が出來やうと思ふのである。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大内青巒先生序
笛岡清泉先生著

最新刊

禪の手びき

定價金六拾五錢
送料金八錢

四六判全一冊
總布綴特製

内容目次

禪とは何ぞ　禪の系統　禪の教理　禪の實修　禪の宗教
禪の道徳　禪の活用　禪と安心立命　禪と人格　禪と處世

方今禪を語るもの多し、而かも其の眞趣を捉へて之を平明に説話し得べきものに到つては容易に求め難し。著者は之を遺憾とし、禪を説きて俚耳にも入り易きを旨として、卑近の例を東西に示し、深遠なる禪道を取りて嚙んでくゝめるやう丁寧懇切に説き讀者をして豁然として光風晴月に對する思ひあらしむ。まさに之れ求道者に取りて一大指針たるを失はずと云ふべし。

貴族院議員
麻布中學校長　江原素六先生著

三版　通俗講話

浮世の重荷

中判布特製
價壹圓廿錢
小包料八錢

説く所多種多方面儒耶二道を經とし著者が經歷を緯として著者の人格言々句々の間に躍如たるものあり實に萬人必讀の人生訓と云ふべし。

文學博士　井上圓了先生著

茗溪會選定書

哲窓茶話

菊半截袖珍
價金四拾錢
郵税金六錢

教育上の議論あれば修養に關する説話あり高遠なる哲學上の意見もあり其の多方面にして多趣味なる言句共に奇警時に人の肺腑を貫くの概あり。

發行所　東京日本橋鐵砲町　振替壹五〇五六番　磯部甲陽堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

(中付二の一)

フランク・シルリー氏原著

文學士　若守義孝先生譯述

最新刊

古代より現代まで 西洋哲學史

◎菊判全壹册・總クロース製函入・紙數八百參拾頁・定價金貳圓五拾錢・郵税拾六錢

哲學・倫理・宗教・教育家・思索家の大寶典出づ

本書はシルリー氏の著哲學史を譯述せるものにして

一、各哲學思想を述ぶるに當り常に其背景たる時代人文に注意せること

二、一國又は一主義の思想に偏せず各思想を有機的の開展と見て之が比較論評せること

三、時間的には古代より現代に亘り、空間的には歐米各國に及び苟も一代の思想は悉く之を網羅せること

四、餘り專門的に入らず然も簡畧に失せず繁簡其宜しきを得たること

以上の**四大特色**を具備せる點に於て他に比類なく**譯文又流暢**にして明白、將に是れ**思索の方途**、**人文の趨向**を窺はんとする者の絶好指針たらん

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座(東京)二八〇九番　目黑書店

(中付二の二)

▼最新刊

吉井・勇新著

□□□□鰭崎英明畫――挿繪五人女極彩色木版手摺

小村雪岱装――艶麗極彩木版手摺箱張

西鶴五人女

菊半截版

五百餘頁

定價

金壹圓

送料八錢

西鶴の好色五人女は眞に戀に生き戀に死ぬる歡樂國の女なり!!!

□□おなつ清十郎は最近作お七吉三は最も凄絶の文字にて粧われたり

艶麗な英明筆の五人女と雪岱畫の裝幀は讀者を惑はしむ。

おまん。源五兵衞何處へいきやる薩摩の山へ跡はおまんが涙の海船も押されず櫓擢も立てず寄邊尋ねんたゞらからかと源五兵衞にこがるゝ、それ程焦れた源五兵衞におまんは切られた。

おさん。派手で勝氣な女振を都中に引廻された時おさんは淺黄地に蘆と鷺との裾模樣ある小袖を着てゐた。十二色のたゝみ帶して十四の春を人妻となつて其姿は消えぬ面影目に殘る。

おなつ。『清十郎殺さばお夏も殺せ生きて思ひをさしょりも』の流行小唄にお夏は淸十郎の死を知つた襟裏深く泣き入つた瞳の色から狂ひ初めて、いとしやお夏は管笠の唄を唄ふ哀れや。

お七。『いゝえ私は十六でござります。』五歳の年に湯島の天神樣へ納めた額がござります』と執着を離れて戀人をかばふ眞の情の思ひやりが、可愛さらでならないかわゆい暗の八百屋のお七よ。

おせん。世間が勝手に作つた窮屈な掟が氣に入らず戀ならぬ戀に情ならぬ情に命を棄てたおせん世間への面當と夫への復讎にそれを破つた。男は戀の意氣地なる千日前に晒されてもと覺悟して身を滅ぼした。

▼最新刊

駒形より

久保田万太郎著◎小村雪岱装畫

□□表紙木版數十枚手摺駒形の夜箱張秋草模樣姿

定價七拾五錢送料六錢菊半截版三百餘頁

淺草に生れ駒形に育ちた著者の美しき物語を集めたるもの!!!

半生以下長篇。短篇。隨筆。感想。芝居の立觀評。小品數十篇。一讀三讀必ずや、若き讀者に深く〱共鳴せしむ。

(中付二の三)

發兌

東京神田錦町三丁目六番地

平和出版社

振替東京八七八七番
電話本局三三六六番



現代の風潮に逆行せる 畸人列傳

田中貢太郎

曾て三田の福澤諭吉翁が、楠正成の戰死は湯屋の三助が首を縊つて死んだと同じ事であつて、忠孝節義など言ふ事は、今後の社會に用は無い、何でも人は物質的に發達せねばならぬと言ふやうな事を言つた時には、隨分亂暴な事を言ふ老爺だと言つて憤つた者もあつたが、それが僅に二十餘年にしかならない中に、物質的名利的の風潮は、我が國の上下を搖蕩して、福澤翁の言は遺憾なく實現せられた。それには經濟と言ふ大なる問題が背後に横はつてゐて、常祿の無くなつた社會には、當然來るべき筈の物であつたが、それかと言つて現代は餘りに物質的で、餘りに非詩的で、社會にも人物にも、大きい所も、美しい所も、面白い所も、皆無くなつて了つた。人は只だ生活の爲に齷齪して、斯う言ふ事をしては損だ、斯う言ふ事を言つては爲にならぬと言ふ、その損だ、爲にならぬと言ふ二つの言葉を生活上の大綱として、之に縋つてゐると言ふのが現代の有様である。

この情けないやうな物質的名利的の社會の中にあつて、斷々乎として時代の風潮に逆行してゐる畸人の世界がある。これ等の人々の外形から言ふと、時に或は

常規を逸し、或は風狂放蕩に類するものもあるが、併し名利を屑しとせずして、己れの性に率ひ、志を求めて世に處するの英雄的行爲に至つては皆その揆を一にしてゐる。

一、五圓紙幣の淡海公の身代りとなつた獨活大王

其所で私が畸人として第一にあげたいのは、獨活大王で通つてゐる瀨川雅亮翁である。上野公園の忍坂、忍坂と言ふよりは西洋軒の傍の坂と言ふのが寧ろ分りが早い。その坂の中程、下から上ると坂の左側になつた所に稻荷の社があるが、瀨川翁は、その社の左側にある枌葺の社務所に住んでゐる。痩せた脊の高い老人で、まばらな髯を生やし、頭髮を長くして束ねてゐる。

最初私が瀨川翁に逢つたのは、七月の三日で、梅雨曇りのした日であつた。上野公園を被うた青葉に埋められて、社も社務所も陰欝に見えた。入口の右側の柱に香人瀨川雅亮と言ふ表札をかけ、左側の壁には、竹の皮を貼つた陣笠のやうな手製の笠と、藁のカバンをかけ、鴨居の上には、刺股と木刀をかけてあつた。

その時通された六疊の座敷は、きちんと片付いてゐて塵一つもないやうに見えた。狹い庭に面して、二方に小緣が付いてゐた。天水桶のやうな大きな黃色な水盤が庭先にあるのが先づ眼に付いた。座敷の一方は、中床と平床になつて、中床には帙入の書物や手箱を置き、隅の壁には琵琶を立てかけてあつた。「今上陛下寶祚萬々歲」と黑い漆の地に金文字で書いた札も壁にかかつてゐた。柱の釘には、三つ四つの瓢簞を一所にしてかけてあつた。平床には可成り大きな青銅の虎の置物と、それと並べて笈摺を置いてあつたが、いづれも古色蒼然たるもので、笈摺の端には、大きな法螺をかけてあつた。壁には何人かの書いた瀨川翁の琵琶を彈いてゐる圖に、參謀本部の編輯長香川香南の詩を題した小さな軸がかゝつてゐた。

獨抱二琵琶一氣入レ神。不レ知痼疾在二其身一。空山淸水春千古。碧海靑天月一輪。自謂邦家有爲日。曾無二

涓滴效二君親一。庭前安置石三尺。題曰不忠不孝人。

私の行つた時には、瀬川翁は何處かへ行つてゐたので、四十五六に見える小作りな細君が呼んで來てくれた。筒袖の浴衣を著て、左の手首に螺鈿を散らした小さな黒い輪をはめた瀬川翁は、細君に呼ばれて戸外から歸つて來たが、玄關から上らずに潛りを開けて庭に這入つて、水盤で手を洗つて上つて來た。その狀が如何にも飄々として、咳拂ひでもすると、何處から來るともなしに猿などが出て來て、老人の傍に畏まりでもしさうな氣がした。

私は瀬川翁と向合つた所で、何處かで見た事のある顏だと思つた。青黒い光澤の無い顏で、それに右の眼に異常もあつたが、何處となく柔らかな光があつた。「明治四十二年でしたか、新しい五圓紙幣が出來る時に、博物館にある淡海公の畫像を寫眞に取らうとした所で、私の顏が似てゐると言ふ者があつて、私が淡海公の身代りになつて、印刷局へ呼ばれて、寫眞に取られました。」と瀬川翁が言つたので、はじめてその顏に親しみのある原因も分つた。「寫眞には五圓の價値がありますが、本物には五十錢の價値もありません。」と言つて瀬川翁は笑ひもした。話してゐる中に十一時半になると、縁側に出て、「人夫さん人夫さん、御膳をあがり。」と言つた。それは私の來る時に、赤い鳥居の下で草を挘つてゐた二人の人夫を呼ぶのであつた。

瀬川翁は、昨年まで五條天神の神官をしてゐたが、子供が國學院を卒業したので、それに職を讓つて、自分は其所に隱居した者であつた。長州の出身で、本姓は宮城、父の彦助と言ふのは、奇兵隊の頭領株で、高杉晉作と肩をならべてゐた者であつたが、文久三年八月十六日、馬關の教法寺で、奇兵隊と先鋒隊とが衝突して、死傷者を生じた爲に、その罪に座して切腹を命ぜられた。その切腹の始末を高杉から翁の兄正太郎君に報じた手紙は、卷物となつて翁の手箱の中にあつた。

「以二手紙一致二啓達一候、然ば御父彦助樣御事、只今教法寺において被レ成二御割腹一、御報國之御心底、一同奉二感佩一候、同盟之中河上彌市御介錯相勤、御遺書等御送

仕候間、御落手被レ下可候、先は爲レ右如レ此御座候」と言ふのがその手紙の文句であつた。

かうした家庭に人となつた翁の凡人でないのは當然の事である。翁ははじめ軍人を志して、今の參謀本部の所に陸軍幼年學校のあつた時、それに入學してゐたが、肺病になつたので、止むを得ず退學して、好いと言ふ醫師を尋ねて、片ッ端から治療を請ふたが、病氣は募るばかりで、とても全快しさうにもない。咯血ものべつにした。其所で愈々死ぬる事と諦めたが、死ぬるにしても、生きてゐる間は、少しでも病氣の事を忘れて、精神だけでも愉快にしたいと思つたので、形骸の事を忘れる工風に工風を重ねてゐると、不思議に病勢が衰へて、七年間苦しめられてゐた病氣は、何時の間にか癒つて了つた。

その當時、翁は池端の守田寶丹と近付きになつてゐたが、病氣が癒ると、その世話で五條天神の神官をしてゐる瀨川家の養子となつた。同時に翁は神道に志して、第一回の皇典講究所の生徒となつたが、講師と意が合はないので、二年ばかり行つて止して了つた。「それから書物なんかは一人で讀んで、自分一人の解釋をして居ります。」と言つた。翁は又日本の神道に淸淨の氣の缺けてゐるのを以て、神官の不純な食事をするにありとして、「獸肉鳥肉などの不純な食事をするものは血も不純になつて、とても淸淨の氣の起る道理が無い。食物と氣とは大關係があると言ふ事を感じてから、私はそれ以來不純な食事をしないやうにして居ります。」とも言つた。

翁には三男五女があつて、今歲は六十三歲である。嘗て皇典講究所にゐる時、宮城の御造營があつた。何かの用事で、和田倉門を通つてみると、澁染の著物を著た囚徒の一團が龍の口から土を運搬してゐる。翁は之を見て、甚だ怪しからん事に思つたので、意見書を作つて、翌日有栖川宮邸に行き、家從に面會して、その書を傳達せん事を請ふた。家從は事面倒と見て取つて之れを拒んで取次がうと言はない。それを漸つと說き籠めて、意見書を置いて歸つた。それが爲に宮內省で

も氣が付いて、調査してみると、工事を請負つた者が賃錢が安い爲に囚徒を雇つてゐると言ふ事が分つたので、直に之を禁止した。其所で翁は、土持ちの獻納と言ふ事を思ひ付いて、神道實行協會の幹長柴田花守翁に献言した。翁は涙を流して喜んで、東京近傍から富士講の講社二千人ばかりを招いで、二重橋邊の土持ちをやらした。木綿の黒紋付を着た講社の一隊は、「六根淸淨〳〵」と口々に唱へながら笊に入れた土を次から次へと送つて行つた。

大正博覧會が開かれた時、美術館の彫刻部に、左右に女を挾んだ裸體の男子の塑像があつた。翁は之を見て、「陛下の行啓でもあれば恐れ多い事だ。」と言つて委員の間を説いて廻つたが、「なるほど尤だ。」と言ふのみで、さてそれを取り除くやうな事はしない。其所で委員の方は諦めて、要路の大官の間に奔走したが、それも思はしくない。で、最後に有地海軍中將の家から電話をかけて、江木千之の許に行き、「要路の人々は、陛下の御寵愛になれて、陛下を疎末にするとは怪しからん。」と言つた。之を聞くと江木は勃然として怒つて、「何を疎末にした。」と詰問した。江木の怒るのは、翁の待つてゐる所であつた。翁は其所で、諄々として美術館の醜怪なる事を説いた。江木は感心して聞いてゐた。その後暫くすると、翁の許へ江木からの手紙が届いた。「皇太子殿下が、明日大正博覧會に行啓あらせられるが、彼の醜怪な美術館へは御案内申し上げない事になつたから安心せよ。」と言ふの文句であつた。

日露戰役の當時、國家の事や、知人の戰死などで、精神が動搖したので、癇疾が再發して、咯血もひどくなつた。翁は今度はもう助からないと思つたので、葬式から五十日祭に至るまでの儀式の様や心得を書いた繪卷物を作つた。繪は西田春行と言ふ友人が書いたもので、葬式の途中から五十日祭の献立表まで出來てゐる。そして墓石にするものは、怪しい形をした石で、その石に「はづかしや我は御國のすたれ人不忠不孝の瀬川雅亮」と辭世の句を刻つてあつた。石は今、庭の水盤の傍に据ゑてある。繪卷物は二卷になつてゐて、

一卷は葬式、次の一卷は五十日祭の事を書いたもので、その葬式の卷の終に、大槻如電翁に讀んでもらふ積りであつたと言ふ祭文が書いてある。

獨活大王この世を去りてあの世に逝けり。あの世とはいづくぞ。高天原にあらざるなり。極樂淨土にあらざるなり。天堂にあらず、地獄にあらず。抑々大王は長州武辨の家に生る。宮城氏、父兄共に勇名あり。王はやく病軀の事に堪へざるを覺り、明治辛己廿七にして瀨川第九世を繼ぐ。瀨川は五條祠官を傳ふる二百五十年、連綿たる舊族なり。王こゝに於て心を淨界に安んじ、身を塵外に置き、以て今日あるに至りぬ。其獨活と稱する所以は軀幹長大なるも世用を爲さざるに因り、宇度の大木なる俚諺に採れるなり。莊子の散木に同じ。此草また獨搖とも言ふ。風を得るも搖かず、風なきも自ら搖くよりとぞ。是れ大王の精神と境とを寫し得たる者歟。然らば獨活も亦獨立自活の義とすべし。此世既に己に獨立なれば、彼世も自活なるを證するに足る。神に依らず儒に賴らず、佛に歸せず基督に屬せず、幽明其境を同うせざるも、獨立自活の地、いかでか彼此あらん。大王とこしへに彼地に獨活あらん事疑ふべくもあらじかし。

翁の死後の用意は無駄となつて、病氣はまた癒つたが、二度と死後の用意をするのは面倒だからと言つて、獨活大王はその時もう死亡したものとして、會葬者の名簿を作つて、知己朋友の名を署名してもらひ、三年振には、三年祭を遣つて、會葬の人々を招いた。翁は晒木綿の帷子を著、額に三角の紙を當てて客をもてなした。『本人も定めて滿足に思ひましやう。』と言つたりした。そして自分の精神は既に死んでゐると言つて、拔殼道人とも稱した。

この瀨川翁、この頃、田舍へ行つて珍らしい釜を掘り出して來たので、某實業家が之を聞いて、使を以て三百圓に買はうと申し込んだ。瀨川翁とその實業家とは親しい間柄であつた。『來て欲しいと言へば、只くれてやつても好い物だ。若し賣るとなると、某君は天下

の實業家だ。その價二千圓。』と言つて頭を振つた。これを『ほんとですか。』と聞いて見ると、翁は『そんな事はない』と微笑して打ち消してゐる。

瀨川翁に向つて、畸人觀なる者を叩いてみると、二人の畸人の逸事をあげて、『この人などが異箇の畸人でしやう。』と言つて話した。一人は下谷にゐた旗本の老人と、一人は麻布にゐた彫刻師とであつた。

下谷の旗本の老人と言ふは、佐竹ヶ原から柳盛座に行かうとする傍に廣い地面を持つてゐた者だが、終に手入れをしないので、草は一面に生へ茂つて、家も荒れてゐた。垣根の破れは、其所此所刀の下緒で繕つてあつた。下谷の警察では持て剩して、老人を呼んで草を引かさうとすると、『拙者の領地だ。草を生やさうと木を生やさうと勝手でござる。』と言ふやうな事を言つて始末に行かない。地所を借りにでも行く者があると『その方の國は何處だ。』と聞く。若し薩長などの者だと言ふものであると、『御主君の德川に弓を引いた奴だ。以ての外だ。』と言つて貸さない。薩長以外の者だと借してくれるが、『借せとは何んだ。御拜借が願ひたいと言へ。』と言つて證書などが非常に面倒であつた。この中で老人の氣心を吞み込んでゐる新屋があつて、それは只同樣で其所の地所を借りてゐた。

麻布の彫刻師と言ふのは、竹が好きで、家のぐるりに竹を植ゑたので、竹は床下に生へ込んで、疊の合せ目からもすくすくと生えてゐた。彫刻師はその中で、コツ／＼と仕事をしてゐた。新らしく來た細君が、床に生え出てゐる竹を折つたので、怒つて離緣して了つた。

『この二人は異箇の畸人ですが、私なんかは凡々人です。』と瀨川翁は笑つた。私はその日は一時頃まで話して歸つたが、未だ聞きたい事があつたので、二三日して又訪うた。その時は霧のやうな雨が降つて、不忍の池の蓮は、大きな翠の團扇の間から、赤や白の花を鮮かに見せてゐた。翁は假睡をしてゐたらしかつた。私があがると起き直つて、白い衣をかけた括り枕を次の室へ持つて行かした。

座敷の隅に鳥籠を置いて、雀の子を入れてあつた。
『雀ですか』と聞くと、『鳥に追かけられて、困つてゐたからね、』翁は懐しさうに雀を見て言つた。

一時間ばかりも話した所で、白い洋服を著た客が來た。翁と親しい間柄と見えて、一寸目禮したのみで座に付いた。客の衣兜に這入つてゐた扇包のやうな紙包は、翁の手に渡つた。『や、有難う。』と言つた翁は、思ひ出したやうに、『好い石があつたぞ』と言つて、起つて庭に下りて、縁側の薄赤い盆に据ゑてあつた小さな石を取つて、一度水盤の水で濡らして來て、本の盆に置いた。何所となく峨々たる大岩石の趣を具へた物であつた。『なるほど好い石だ。』と客も縁側に出て、この石を弄りはじめた。

『天地自然をじつと見てゐると、何でも面白い姿を持つてゐるよ。この岩でも、じつと見てゐると、自分でこの邊に蹲んで魚でも釣つてゐるやうな氣になるからね。』と翁は指を岩の一端に觸れて、『一體自然に趣味のない者は淋しいだらうね、』と言ひ足した。客は柱に脊を凭せて、軒を被うた青葉の隙から少し晴れかゝつた空をすかすやうにして、『僕は雲を見るのが好きだが、雲ほど面白い物はないよ。』と言つた。名を聞き漏らしたが、この客も畸人の一人らしかつた。

二、飯は面倒だとて餅ばかり喰つてゐる青山碧山

類を以て集る瀬川翁の友人に、青山碧山と言ふ塗師屋がある。越後の人で、今は根岸の裏長屋に一人の悴と共に住んでゐる。矢張り結髪で、髯を生やした小さな老人で、隱者のやうな風采があつた。年はもう七十に近い。

その老人は、塗師として立派な腕を持つてゐて、仕事さへすれば、好い金が取れるが、氣が向かないと仕事をしないので、何時も貧乏に追はれてゐる。下谷の萬年町に住んでゐた頃には、蠣殼を屋根に置いた汚い小屋にゐたが、雨の日には、必らず雨漏がして、仕事が出來ないので、細君や悴に手傳はして、天井に板戸を釣したり、盥を釣したりして、その下で淋しさうに

仕事をしたものだ。その老人には、身に代へて大事にしてゐる觀音像がある。何とか言ふ名工の作で、萬年町にゐる時分、それを千圓に買はふと言ふ者があつたが、老人どうしても賣らない。併し雨漏のする陰氣な淋しい日などには、細君や伜が、『あれを賣つて、雨だけでも漏らない所へ移らうぢやないか、』と愚痴を滴した。『とんでもない事だ。雨が恐しけれや、皆出て行け。』と老人が怒り出すので、細君も伜も口をつぐんで寂寞として時の移るのを待つより他に途がなかつた。

其樣なに大事にしてゐる觀音像であるから、『見せてくれ。』と言つた所で決して見せない。是非之を見たいと思ふ者は、『私は年頃觀音樣を信仰して居る者ですが、あなたの所に、大さう立派な觀音樣がお在りなさるさうだから、一度拜ましてもらひたい、』と言ふやうに頼まねばならぬ。さうすると老人は機嫌好く、水で口を漱ぎ、それから肌拔になつて、袖を帶の間に挾んで、恭しく厨子の扉を開けてくれる。中には金色燦然たる觀音像が立つてゐる。それを見ると、はじめは好奇に一寸覗いて見る積りの人も、老人の眞面目さと、藝術の力とに打たれて、思はず頭をさげるのであつた。

老人、今は細君に死別れて、伜と二人で男世帶を張つてゐるが、飯の構へが面倒だと言ふので、『飯は面倒だ。お前が喫ひたいなら自分で炊け、乃公は餅にする。』と言つてそれ以來飯を喫はない。伜も變り者で、『乃公も面倒だ。』と言つて、これも今に餅で腹をこしらへてゐる。

三、淺野家を苦しめる帝國
洗濯部主人靑年團西洋

芝區田町の電車通りで、見上げるやうなセメント塀の長く續いた家は、淺野邸で、取付の通常門には、『淺野總一郎、』『淺野泰次郎』と言ふ二つの表札をかけ、平生は鎖してある離宮の門のやうな本門の門柱の上には、白い玉を口に喰へた金色をした二疋の鯱が向合つてゐるが、この邊は步道の端に植ゑた並木の柳が大きいので、夏はその葉蔭に被はれて、さほどにも思はれないが、冬から春にかけて、この莊麗宏壯な邸宅は、

隠す所もなくあらはれて見えるので、市民が嫉妬と憎悪の的になつてゐる。若し人があつて、札の辻から右側の歩道を通つて、品川の方に向つて歩いて行くなれば、直ぐ淺野の通常門を見、それから金色の鯱を見、それから二十餘間あるセメント塀の續いてゐるのを見るが、見て行く中に忽ちその塀が中絶して、トタン葺の小さな平家となつて、その軒に『帝國青年團西洋洗濯部』と書いたブリキの横看板をかけたのと、路次を隔てゝその隣になつた古道具屋を見るのであらう。其所には奥にも小さな貸家があつて、入口のとを合せて十軒になつてゐる。そして道具屋の隣はトタン塀となり、それから黒板塀となつて、その先に今まで消えてゐた高いセメント塀が思ひ出したやうに三間位姿を見せて、そのちぐはぐの様を前を通る人に不審さしてゐる。

それもその筈、この塀の事に就ては、數年に渉つて解決せざる問題があつて、今に天下の富豪淺野家が邸宅の美を誇らうとする傲慢の鼻を挫くと共に、そのセメント塀を中絶さしてゐるのであつた。今より六七年の前、淺野家が今の邸宅を構へたので、同時に塀を作る事となつたが、其所には同町四番地に住む上村龜吉の所有で、件の洗濯屋をはじめ十軒長屋の地所百二三十坪と、他にも一二軒の地所が挾まれてゐた。で、之を買潰しにかゝつてみると、他の地所は直ぐ買へたが上村の地所ばかりは急に運ばない。併し今に買へるだらうと高を括つて、塀を作りはじめた。江戸子氣質の上村老人は、『みくびつてかゝつたな、よし、』と言つて淺野からの使が來ると、『お氣の毒ですが、賣る事は廢しました。』と言つて放ねつけた。淺野では立ち往生をした。手を代へ、品を代へ、最後には上村老人を拜まんばかりに賴むと、『それぢやお賣り申しますから、相當の値段に買つて下さい。』と言つた。淺野では喜んで値段の交渉をしてみると、上村老人思ひ切つて高く吹きかけた。淺野の方では餘り高いと言つて、負けさせやうとするが、鐚一文も引くのは厭だと言ふやうな事で、今に交渉が纒まらない。安田か何人か、淺野と反

對の者で、その地所を三萬圓で買はうと言つて來た者があつたが、一徹者の上村老人は、『淺野より好い値だが、他へ賣る事は出來ない。』と言つて他へは賣らうとしない。

この淺野と上村との交渉を傍から見てゐて、憤慨したのが洗濯屋の石黒金助君である。『よし、乃公が加勢して、きつと淺野に買はしてみせる。』と言つて淺野を苦しめにかゝつた。裏庭に立てた二本の高い高い物干に、破れの猿股、褌、剝げちよろけた女の湯卷などを引かけて、品川の海から吹き上げる風に飜しはじめた。この石黒君の謀は圖に當つて、淺野家では、主人の方よりも、夫人の方が神經に病んで、出入の人々を指揮して、十軒長屋の買潰にかゝつたが、どうも折合がつかない。

昨年の夏になつて、泰治郎君が新夫人を迎へたので十一月の二日、その披露宴を張つて、大隈首相をはじめ、朝野の名士を招待した。その二日の朝の事である。三田署の巡査が突然洗濯屋に來て、『今日は淺野家に祝ひ事があつて、大隈首相をはじめ、朝野の貴顯が見ゑるから、今日の二時から五時までの間は、洗濯物を干さないやうにしてもらひたい。』と言つた。石黒君は、『私の家のお得意さんは、西洋人が多いので、約束の日限を違へると、出入りを差しとめられますから、それはどうも困ります。』と言つた。『洗濯物は多いのか、』『多くて手が足りなくて困つて居りますが、併し多くないと店が立ち行きませんので、』『それは左樣だ。ぢや、平生より二三尺位さげて、干してある物が淺野の方へ見えないやうにしてくれ。』と言つて巡査は歸つた。

その時店には、二三人の長屋の者が來て、もう淺野の噂をしてゐた。巡査が歸ると、『何んだ馬鹿にしてゐるぢやないか、』『今日は長屋中が總出で手傳つても好いから、構ふ事はない、うんとやらうぢやないか、』『よからう、夜通し騷ぎやがつて、氣の毒とも言はない畜生共だ。』と口々に淺野を罵つた。石黒君は默つて笑つてゐた。

やがて二時頃になつた。自働車が田町の通りに土煙をあげて、續々として淺野の本門を這入つた。邸內には紅葉の造花が一杯に並べてあつた。客は三々五々と打連れて廣い邸內を歩きはじめた。ふと見ると、庭の木立の先に、平生よりも二三尺高く、ぼろ〳〵した猿股、股引、褌、印袢纏などの類が、物干一杯にヒラヒラと飜つてゐるのが見えた。貴婦人などはハンケチで顔を被うて歩いた。

私が洗濯屋を訪ふた日は、六月の末で、顔の少さな石黒君は、猿股とシャツ一枚になつて、鐵格子の內の臺で、干しあがつた洗濯物を紙に包んでゐた。其所は店になつて、住居は裏にあつた。曇つた日で、物干臺の棒が二本立つてゐるばかりで、洗濯物は干してなかつた。其所の裏庭と、淺野の庭との境には、トタン塀があつた。『もつと、金があると、盛んにやりますが、金がないので、仕方がありません。』と石黒君は私を庭に案內しながら言つた。

時々其所の記事が新聞や雜誌に出ると、地方の青年で、一所になつて淺野と戰ひたいと言ふものが尋ねて來るとも言つた。現にさう言つて來たと言ふ青年の一人がゐた。不似合な帝國青年團西洋洗濯部と言ふやうな看板もかうした原因から出來た者であつた。深川の淺野セメントの降灰問題が八釜しい時には、大に淺野を苦しめてくれろと言ふ手紙が續々舞ひ込んで來たとも言つた。

二人が店で話し込んでゐると、肥つた八百屋が這入つて來た。肩に空になつた籠をかけてゐた。八百屋は私を新聞記者とでも思つたのか、淺野の吝嗇な事を訴へて、『夜奥様が女中を連れて出て、山積みの品を買つてゐるから、好い品が分らない。』などと言つた。

四、岩崎の力でもどうすることも出來ない金網屋

淺野の隣の洗濯屋と共に有名なのは、本郷切通の岩崎邸の隣にある金網屋である。

明治二十五六年の頃であつた。切通坂を切り擴げた時、岩崎では切通坂の左側を占領して、今のやうな大

きな土手を作りかけたが、それには、その地所の角になつた金網屋と、その隣になつた市内八十八ヶ所の中の根生院と言ふ太師堂を買潰さねばならぬ。で、岩崎の方では、出入の者に意をふくめて、之を買はせにかかつた。

その時、金網屋では、家を後の方へ引込めて、その工事も既に濟んだばかりの所であつた。主人は清次郎と言つて七十に近い老人であつた。岩崎の意を受けた出入の者は、この老人に逢つて、『あなたの所を賣つたらどうです。岩崎がきつと買ひますよ。』と言つた。老人にはその内心が讀めてゐるので、『べつに賣る考へもありません。』と相手にしない。出入の者は仕方なく、『實は岩崎の方に買ひたいと言つてゐるから、賣つたらどうです。好い値になりますよ。』と本音を吐き出したが、老人は頑として聞き入れない。老人の腹では、家を引込めない内ならば兎も角、家を引込めた後に言つて來るなどは、乃公をみくびつてゐると言ふ不滿があつた。根生院の住持も强情な男で、『金網屋さんは流石に江戸ッ子だ。乃公もこの太師堂を動かすやうな事があつては、佛樣に申し譯がない。』と言つてこれも賣らうとは言はない。

岩崎の方では大に困つて、いろ／＼考へたあげく、根生院の方は、本山があるので、それに交渉して、忽ちの中に買潰して了つたが、金網屋の方は如何ともする事が出來なかつた。

この金網屋は、清次郎老人の父の時代、何んでも安政の大地震の前あたりに、神田方面から移つて來たものであつた。今はこの清次郎老人も亡くなつて、息子の代になつてゐる。『お父さんは何故賣らなかつたでしようね。』と聞くと、『何も先祖代々住んでゐたと言ふ土地でもないから、岩崎から綺麗に言つてくれば何も讓らない事もなかつたでしようが、中に立つものが引ッ掻きまはしたから、おかしくなつたのでしやうよ。』と言つた。名を健と言つて、四十五六の人の好ささうな、話の度に右か左かの眼をびつたり閉ぢる癖のある男であつた。

金網屋の位置はと言ふと、上野廣小路から來て、切通坂を上つて行くと、右に鼠色の壁があり、その壁の外れから城の石垣のやうな大きな石を築き、その上に樫や小松を植ゑてある土手が續いてゐる。これが富豪岩崎家の本邸である。もと桐野利秋の住んでゐたもので、征韓論の破裂後、桐野が西郷と共に鹿兒島に歸る事となると、『賣家一金千圓也』と言ふ賣家札を貼つて賣家に出したものであつた。

路の左側は、湯島天神の崖で、崖の上には、楓や樫が靑々と茂つて、根本には石菖が一面に生へ、その中に白い晝顏の花が二つ三つ交つて咲いてゐた。路の中央は、電車がグーグーと音を立てゝ往來した。

天神の崖の方は、上つて行くと、靑葉の間から社務所の屋根が見え、それから『魚十』と言ふ料理家の建物が、高く崖の上に聳えて見える。その社務所と料理屋との間に向いた右側の岩崎の土手の石垣は、其所で急に鼠色の壁になつたかと思ふと、がつくり折れて、その折れた隙を埋めるやうにして、その石垣と同位置の所に入口を持つた、奥行の少しもない、背後の岩崎の塀に喰付いた三棟の二階屋がある。金網屋は、その取付の家で、土藏作りの二間間口の入口には、金網の鷄籠を三つも四つも積んであつた。上り口の臺には、大小の篩をかけ、天井からは、鼠取、小鳥籠、茶こし、茶ほうじ、鐵きうなどの金網細工の賣品を釣してある。

健君はその店先で、二人の小僧を相手にして客を迎へてゐた。『私は病身で、その時分は我家に居なかつたもんですから、何も知らないですよ、はい、はい、』と言ひながら、私の問ひに答へてぽつ〳〵話した。

『今でも未だ賣らない積りですか、』と聞くと、『へ、、、』と笑つて、『それはもう先代が賣らなかつた所ですから、』と言つた。私はふと思ひ出して、『近頃、君が弱つて、岩崎の方に買つて貰はふとしたが、今度は岩崎の方で買はないと言ふものがあるが、そんな事はないでしようね、又、あられる筈のものでない。賣る必要があれば外へ賣りなさい。決して岩崎なんぞに負けて

は不可ない。何かの時は僕の所の言つて來給へ、君の相談相手になるよ。』と言つて置いて歸つた。

金網屋の隣は、標本屋で、戸外に面したガラス戸棚の中には剝製の金鷄鳥、雉、山鳥の類を置き、それと一所にガラス壜を置いて、中に鯛や八目鰻をアルコール漬にしてあつた。野兎の剝製は、入口の右側の箱の上に出してあつた。

この隣の一棟は、金網屋と標本屋とを合せて、それを未だ二倍にしたやうな家で、入口が總格子になつた變な家で、中を二三軒に支切つてあつた。其所は皆根生院の境内であつた。天神の社務所に行つて、根生院の後を聞くと、入口で煙草を飲んでゐた瘦せてごつごつした老人が、『根生院は高田の方に移りました。』と言つた。この住持が生きてゐるなら當時の事を聞きたいと思つて、『住持さんは生きてゐるでしようか、』と聞いてみたが、それは分らなかつた。

吾が祖先の物語を鷗外博士に呈す

七代目の孫

己れの身の程をも省みず、徒らに祖先の手柄話を筆にするは、誠に恥かしき次第ではあるが、家の記錄に書殘された事績を見ると、世に有觸れた武勇譚や忠臣の話とは違つて、一種風變りな武士道を說明し、斯道研究者の參考と爲る一方に、封建時代に於ける大名の家名斷絕の場合の光景を示して、歷史家の爲めにも、幾分の裨益を供するものと思ふに就けても、之を其まゝ筺底に埋めるに忍びないので、其記錄と我家に傳はつた若干の口碑とも取合せて、一篇の物語りに綴つた譯である。

（一）

土佐國の西南端に、幡多といふ大郡がある。其昔、後醍醐天皇第一の皇子一の宮尊良親王が、北條氏の爲めに配流せられ給ひし土地であつて、郡に殘された御息所と、雲井を隔てゝ遣瀬ない御思ひを通はされたといふ太平記の一節は、同書中で最も感傷的な部分である。總じて土佐は、所謂『南を受けて』南國の氣分の漲ぎつて居る土地ではあるが、中にも幡多郡は西南に偏つて居るだけ、其氣分が特別に濃かである。源を伊豫に發せる四國第二の大河四萬十川は、緩やかな曲線を描いて、郡の直中をば、汪洋として徐ろに流るゝ。其兩岸は弘ろ／＼と沃野が開いて、季節／＼の野趣を溢れさせる。取別け夏から秋にかけては丈の高い甘蔗が、茂りに茂つて涼風に靡いて居る。冬から春にかけては、蜜柑、橙、柚、九年母などの橘類が、枝もたわゝに黄金を綴つて、河邊を彩つて居る。海邊に出ると、欸乃の□ましく隊を成して、三四十里の沖合までも漕ぎ出づる鰹舟、さては鯨捕る舟、珊瑚を涉る舟など、とり／＼に海の幸を頼つて居る。其海面には、南洋より流れ來る黒潮の暖流が、名の示す如き暗色をなして、東の方へ影を隱して居る。總ての風物が、とり／＼に南國の色彩を現じて、住む人に言ひ知れぬ緩ろぎと、懷かしみとを覺へさせるのである。

此幡多郡は、徳川時代に、山内氏の提封二十四萬五千石の一部であつたが、併し元祿二年までは、山内一豐の弟康豐の子孫が、分家として三萬石を領した其領地であつた。そして郡の中央なる中村に居城を持つて居た。此物語の起りは、其分家たる山内氏が故あつて家名斷絶した當時のことである。抑も山内康豐は、兄に劣らぬ立派な武士であつて、兄弟打揃うて織田信長に仕官した以來、關ヶ原の戰ひに至るまで、兄を助けて輕からぬ武勳を立てたから、一豐が土佐に封ぜられたとき、其武勳に酬ゆるため、一豐自身の望にまで、康豐を三萬石の一城主としたのである。此點は兄弟の間柄の、如何に親密であつたかを示すものである。然るに康豐から四代目の當主右近大夫が病死したとき、相續者

の國助なる者、まだ幼年であつたので、其叔父に當る山内大膳亮が、後見を勤めることに爲つた。此山内大膳亮は、其常時幕府直參の旗下に召出され、三千石を給はつて居たが、記錄に據ると、特別に才氣の逞ましい人物であつたさうな。其才氣を見込まれたものか、國助相續の後數年を經て、元祿二年になつた其年の四月二十四日、大膳亮は突然老中邸へ召出されて、奥御詰役を仰付けらるゝことになつたが、間もなく五月三日に及んで、若年寄の役に榮轉した。若年寄は幕府の内閣員たる年寄(老中)に次ぐ次官のやうなものであるから、外樣出の旗下たる大膳亮にとりては、破格の拔擢であつたのだ。

(二)

斯くも破格の拔擢を被むつた大膳亮は、喜んで御受けをすれば好さゝうなものであつたのに、如何な事情があつたものか(記錄には御用捨深き御方である故としてある)其辭令を受けたとき、老中に向て『無調法者、殊に病身に御坐候へば、御重職を蒙り奉り候ふ義は恐れ入り候ふ』と申出た。其言葉が果して原因を成したのか如何かは知らぬが、其月の十一日になつて『斷りがました儀を申出づる段上意に違ふ』との理由で、役目を免ぜらるゝのみか、旗下の身分をも奪はれ、家屋敷を取上げられると云ふ騷ぎに爲つた。折も折とて中村山内家の當主國助が急に病死した。若年のことゝて、世繼がない。幕府は直ちに之を理由として、三萬石の内、二萬七千石を沒收し、三千石だけを再び大膳亮に賜はる旨を申渡した。所が惡いことは累なるもので、右の御沙汰に對し、大膳亮から老中へ向け、御禮を申上げた其言葉に、不足の廉があるとて、又々三千石の御沙汰が取消しとなり、大膳亮は青山下野守へ御預けになつた。即ち中村山内家は、本家も分家も一時の間に斷絕した譯で、一家中途方に暮れ、進退に窮するといふ有樣になつた。併し其斷絕の原因は、淺野内匠頭の例の如き、非常の不埒不行屆があつたのでもない。當主が死んで世繼がないと言ふ斯樣な場合には、大概先づ養子の屆出をしてから喪を發し、滯なく家名

相續をするの例であつたのに、實際然うでなかつたのは、當時、何か特別の事情が、裏面に潜んで居たものと思へぬでもない。内所の話として、安岡の家に傳はる所では、山内一豊康豊兄弟の間柄こそ、非常に睦まじかつたが、其後四代もたつ間に、高知の本家と中村の分家との感情が、次第に阻隔し、高知の本家は、機會があれば中村を取潰して、三萬石を併呑しやうといふ意志を持て居た。其上に大膳亮が若年寄になり、幕政に參與する身分になつたのは、却て本家の不利益だと認めた。此間接直接の事實に基き、高知の山内家が幕府の要路に運動して、右の如き始末に立ち至らしめたと云ふことである。併し眞僞は固より不分明である。

（三）

時めいた大名でも、一旦家名斷絶と爲ると、邸宅は直ちに取上げられ、現金と家財諸道具との外、全くの無一物となるの例であつたから、其場合に家來の者共は勿論のこと、大名自身の一家族までも、殆んど皆自活の途なく、何れへか親類の厄介になるの外はなかつた。其れでも親切な親類があれば兎も角も、世間の義理で澁々ながらに引取られる人々の境遇は、慘めなものであつたに違ひない。(大名の家名斷絶の場合に於ける悲慘な狀態は、物徂徠の「政談」に委しく論議せられてある。)斯樣な譯だから、イザ家名斷絶となれば、一家中の善後の處分が、極めて大切な問題であつた。現金其他の動産を巧みに整理して、假令ひ主人筋の者は、親類の厄介になるとしても、當座の入費、相成るべくは賄料をも、不自由のない樣に取計らひ、又方々へ離散する家來にも、幾らかづゝの涙金を取らせて、差當りの活計を助けて遣らねばならぬ。此處分の衝に當る重役の苦心は、何時の場合にも、容易ならぬものであつたさうな。

中村山内家斷絶の場合に、此大役を引受けたのは、當時御仕置役として、家老の次位に立ち、一藩の實務を掌つて居た安岡久右衞門良儀なる者であつた。久右衞門は、過去帳を見ると享保八年に七十三歳で死んだとあるから、元祿二年には三十九歳だつた譯である。

當時久右衛門は、丁度江戸詰であつた。而かも此一大事から僅か二箇月前に、江戸へ着いた許りの赤毛布であつたから、一時は定めし氣も顛倒したことであらうが、多年の主恩に報いるは此時と、心を鎭めて、一生懸命と善後の處置に鞅掌した。其節主家では、先代の奥方も既に故人となり、舊主國助の姉に當る百姫と妹の伊豫姫といふ二人の女性があつた許りだが、百姫は前方から、板倉主殿といふ二萬石の大名へ緣付いて居たから、差當り伊豫姫は板倉家へ相談して、相當の緣邊のあるまで、預かつて貰ふことにした。併し是れには御付の女中もあるから、賄料其他相當の諸入費を付けねばならぬ。主人家の始末が是れ丈けに止まつたのは、マダシモ不幸中の幸ひではあるが、何分多勢の家來共に對する處分に、莫大な入費が要る。久右衛門の苦心は、一通りではなかつたのだ。

（四）

大名とは云ふものゝ、僅か三萬石の所領だから、現金が多分にある譯ではない。其れどころか、諸商人に對して少なからぬ負債があつた。（元祿時代には既に武家の經濟が著しく疲弊して、商人に債務を負ふ者が多かつた。此狀態は幕末に掛けて、段々ヒドク爲つたやうだ）併し久右衛門に取つて僥倖と思つたのは、恰も其際大阪の出入商人吹田屋理右衛門から、江戸の吹田屋仕拂として、六十貫目の爲替手形を送つて來たことである。（多分大阪で賣拂つた領地の運上米の代價であつたらう）久右衛門は此六十貫目の銀子を主もなる財源として、善後處分の費用を辨じやうと掛つたが、此時中村山内家の債權者たる諸商人は、家名斷絕と聞いて火のつく樣に貸金の督促をして來た。久右衛門は急場のことゝて、債權者に對しては、百方哀訴歎願して、債權を帳消させることに運動した。無論大阪からの爲替のことは、ヒタ隱しに隱して居た。平常の場合とすれば、誠に不德義な譯ではあるが、大名の一家が丸潰れに潰れたといふ場合、善後處分の苦心に日も亦足らない場合には、是れも已むを得ざる權道であつたであらう。然るに如何して漏れたか、爲替の一條が債權者

どもの耳に這入つた。彼等は大に感情を害し、晝夜を分たず、久右衛門の寓居へ推掛け、『無禮も仕るべき様子』(記錄に據る)であつた。併し久右衛門は、此爲替銀こそ、伊豫姫様の御一身を支へ、一家中を路頭に迷はせない爲めの命綱だと思ひ込んで居るから、如何に證據を擧げて迫つて來ても、飽くまで存ぜず知らずの一點張で押通した。武士の身として、聞捨て難い言葉見遁し難い動作をも涙を呑んで辛棒した。其强情さに債權者はます／＼憤つて、終に公儀へ向け訴訟に及んだ。其趣意は第一貸金の一條であるが、同時に久右衛門が爲替の金を隠した罪をも發き立てたのである。貸金の一條は既に斷絶した家のこととて、左まで憂ふるに足りないが、爲替の件は久右衛門の一身に取て、容易ならぬ大事であつた。今で言へば、横領か委託金費消か詐僞か窃盗か、何れにしても武士としての極刑に處せらるべき大罪であつたのだ。

（五）

併しながら久右衛門は、疾くより覺悟を極めて居た。公儀の調べを受けるとも、何處までも爲替の一條を白狀しまいと決心した。假令ひ相手方から、立派な證據を突付けられても、自分は只存ぜぬ知らぬを繰返さう、斯うなると公儀の御役人も、武士なればとて大目に見遁しはしまいから、自分は必定入牢の身となるであらう。或は拷問沙汰に及ぶかも知れぬが、其れも堪へ忍ぶであらう。主家の金を取隠した極惡人の汚名を被むつたまゝ終には牢死をも遂げずはなるまいと覺悟したのである。其れで爲替の金は、前に述べた目的に其れ／＼相違なく差向けるやう、家中の人々と豫め相談を遂げた。故郷中村に殘れる老母妻子兄弟に宛てた遺言も認めた。幸ひ親類に當る綸譽和尚といふ僧侶が、江戸へ修業に出て居たので、遺言狀と形身の品々を、和尚に賴んで故郷へ送り屆けさせた。愈々御差紙を受けて、天下の御白洲へ參上るの日を、今日か明日かと待受けて居た。

余は之に關する先祖の記錄を讀む毎に、坐ろ涙の催ほすを禁ぜぬのである。武士道の骨髄は忠孝節義の爲

め、一身を抛つに在ること勿論ではあるが、併し其一事を全うするの曉は、武士としての名譽は、立派に完成充實せられ、其名譽は大なり小なり、人口に膾炙せられ、或は後世までも傳へらるゝのである。之に反して久右衛門は、主家斷絶の跡始末をつけ、舊主の遺孤を守り立てる爲め、將た又一家中の窮苦を拯ふ爲め、獨り身命を抛つのみならず、其身命よりも遙かに〱大切な武士の名譽をば犧牲にしようとしたのである。後に殘れる老母妻子兄弟までも、盜賊同樣な者の親たり妻たり子たり兄弟たる汚名を被らしめると云ふ大苦痛をも忍ばんとしたのである。若しも今の世の中に、果して犧牲的精神、献身的行爲なるものがありとすれば、犧牲献身の意味に於て、此久右衛門の精神行爲に立優る者があるであらうか。之に比すべき者があるであらうか。余は斯くの如き祖先を有するを誇りとすると同時に、自己平生の行實に顧みて、轉た慚愧に堪へないのである。

（六）

久右衛門の運命が、其豫期せる方向に進んだとすれば、世には神も佛もないものとせねばならぬ。此犧牲的な献身的な心と行ひとは、只久右衛門自らの滿足に値するのみで、彼れの身命も名譽も、全く泥土に委したことであらう。其家族は言ふ迄もなく、子々孫々の末までも、極端なる汚名の下に埋もれて、恐らくば社會の最下層に沈淪したことであらう。併しながら何れの時何れの世に於ても、天道は自ら昭々たるものがある。久右衛門の孤忠は、暗から暗へと葬られはしなかつた。彼の運命は實に絶望の間際に救はれたのである。いよ〱法廷へ出たとき、其裁判を司る奉行は、双方の申立を聽取るや否や、直ちに簡單直截なる判決を申渡した。其趣意は、山内大膳亮なるものは最早や現存せざる人である。（記錄には『時世になき人なり』とある）其家來たりし者を相手に申出づるは、何事にもせよ、一切取上げること罷りならぬ。斯樣に筋道の立たぬ公事沙汰を起すとは、町人の分才として不屆千萬だといつて、原告側が却て散々に叱り付けられ、是れで

白洲は閉ぢられたのである。今の今まで牢死とまで思ひ詰めた久右衛門は、夢かと許り驚喜した。次では武士は相身互ひの義理合ひを斟酌した奉行の情けに、感泣措く所を知らなかつたのである。是れで左しもの難問題も、意外の上首尾の下に落着した。久右衛門は心を安んじて主家の跡始末をば、思ふが儘に片付けることが出來た。伊豫姫を板倉家へ預けるに就て、賄料其の他を、心殘りのないまでに整へた。家來共の處分も滯りなく濟ませた。勿論之を支辨するには、爲替の六十貫目の外に、刀脇差武具馬具茶具等、一切の家財を賣拂つて、其代價を役に立てたのである。斯くて漸く久右衛門は重荷を卸した心持ちに爲つた。主家に盡せる臣道が、能く始めありて能く終ありしを顧りみつゝ自ら言ひ知れぬ滿足を覺へたのである。其れで此上は己れ一身の處置を剩すのみだと認め、先づ板倉家に伺候して、奥方の百姫と伊豫姫とに御暇乞を申上げ、次に青山下野守の屋敷に赴いて、大勝亮父子にも同樣の挨拶を述べ、時しも三伏の暑さに、孤身煢然、東海道を上つて、故郷なる土佐國中村へと立歸つた。

（七）

『歸來池園皆依舊』とは、故郷に立歸つた久右衛門の哀情を唆る詩句に爲つた。昨日までは兎にも角にも三萬石の御仕置役として、時めいた身分が、今日は寄る邊もない一介の素浪人となつて了つたのである。無事な顏を見るのをば責めてもの慰めとした老母妻子兄弟に出迎へられた久右衛門は、我家の敷居を跨ぐと其儘、言甲斐なくも不覺の涙に暮れたのである。是れから先きは言ふ迄もない。只一家の零落あるみである。家祿に離れた久右衛門は、僅許りの知邊を頼りに、中村から一里ばかり川下なる間崎村へ引移り、刀の代りに鋤鍬とつて、他人の田畠を小作し、僅かに一家を支へたのである。此時流石に高知の山内家でも、分家の慘狀と家來の難澁とを見兼ねたものか、一二年の後、幕府へ上申して、大勝亮父子を引取ると共に、中村の浪人を大勢召抱へることになつた。（故國井陸軍中將の家も其一つであつた）無論久右衛門に對しても、其沙汰があ

つた。併しながら久右衛門は堅く其後を御断り申上げた。是れは単に忠臣二君に仕へざるの意味であつたか、但しは外に特別の理由があつたかは、今から推測することが出來ないが、兎に角彼れは再び武士と爲るの心を棄てゝ仕舞つたのである。只伊豫姫が板倉家の世話で他家へ縁付く場合には、貧苦の身ながら、遥る〳〵江戸にくだりて御祝儀を申上げた。高知に在る大膳亮父子の許へは、老年に及ぶまで、毎年一回は缺さず、伺候した。斯くて春風秋雨三十餘年を過ぎて、享保八年といふ年に、悴貞助に介抱せられながら、目出度く大往生を遂げたのである。其後安岡の家は久しく士民の境遇に在つた。見る影もない貧苦の間に、永の年月を送つたのであるが、茲に久右衛門の孫なる安岡貞助の代（寛延より天明）に及んで、世にも不思議な恩人の恵みに頼りて、家道再興の緒を得た。其れは佐野の鉢の木に多少似通つた話である。

（八）

四萬十川の河口に近き間崎村に詑住ひせる安岡貞助は、今日しも一日の野仕事を了へて、我家に立歸つた。秋の日影は薄れ果て、川の邊りは薄靄立ち籠め、蒼茫たる野色は、此零落せる一家の頼りない境遇を表徴せるものゝ様であつた。此時『南無大師遍照金剛』と、弘法大師の法徳を稱へつゝも、安岡家の門邊に訪づれた一個の四國遍路があつた。年の頃は八十にも餘り、俗體ながら、風體卑しからぬ老人であつたが、行き惑れし身の一夜の宿りを只管らに願求めると申入れた。四國遍路を接待するは、珍らしくもない事だから、直ぐと家中へ請じ入れた。有合せの食事など薦めて、主客四方八方の話を始めたが、遍路は家内の人々の風體を、ツク〳〵と打眺めながら、『御見受け申す所、滿更らの士民とも思はれぬ御一家の人々の物腰は、何か深い仔細ありての事であらう。御構ひなくば御身の上を承はりたい』と申出た。隠すべき事でもないから、貞助は祖父以來の艱難を、委しく語り聞かせた。遍路は何か思案しつゝ、暫時言葉もなかつたが、軈て膝を進ませて、『偖ても〳〵感じ入たは祖父の君の忠節であ

る。斯様な御方の御子孫が、時世時節とはいひながら、斯様に御不自由な活計に日を過さるゝとは、誠に御氣の毒なことである。就ては甚だ差出がましき次第であるが、私の家に傳はつた胎毒下しの妙藥がある。其藥法をお傳へ申すから、之を御家で製造され、弘く世の人に賣弘められたならば、或は御家運再興の足前にもなるであらう』とて、其藥法を委しく傳授し、翌る朝飄然として何れへか立去つた。其藥は虎膽丸と名づけられ、今日までも安岡家の家傳になつて居るが、ナンデモ不思議な奇効があると云ふことで、需要が却々弘くなり、其爲め貞助は何時しか貧乏な境界を免かれ、段々と田畑を手に入れて、富むといふではないが、左して不自由のない家柄となり、爾來七代を經過して、筆者たる余の代に及んだものである。(完)

次號小說豫告

本號に掲載せらるべかりし谷崎潤一郎氏の長編小說「異端者の悲しみ」は氏の從來の作に見るべからざる强烈なる道德的意識の潜流せる傑作なるも、當局の文藝作品に對する取締方針不明なるが爲め、或は一部の描寫によつて輕々しく全體の趣意のある所を沒却し、不當なる發賣禁止の厄に罹る危險なしとせず。因て

小說 **題未定** 谷崎潤一郎

小說 **暴風** 谷崎精二

該作は其部分的改作を終るまで之が發表を見合せ、次號には別に新なる題材を捉へて約百枚の長編を執筆すべく、令弟精二氏又五十枚の苦心の傑作を寄せ、次號の小說欄は谷崎兄弟の二作品を並載して江湖の清覽に供せんと欲す。唯美主義官能主義の兄と、理想主義人生主義の弟と各其特長を發揮せるは蓋し文壇の偉觀たるべきを信ず。

三派合同劇の作者・筋書及立役

鐵拳禪

一

年が年中同じ顔の座附作者でも有るまいと云ふので、政爭劇の筋書も、段々新しい顔の作者に由つて書かれるやうになる。夫れが絶えず目先の新しいこと、變つた事を欲求する政界の人氣に投じて、豫期以上の當りを取る事が往々ある。之までの作者で一寸名の賣れた所には、岡崎邦輔とか、秋山定輔とか、臼井哲夫とか云ふ政界の所謂策士が居るけれども、何れも座附作者の格で、今度は何う云ふ芝居を打たうかと、始終其の立役なり敵役なりを詮索して、夫れに當て篏めた筋書のみを作らうとする。一度や二度は政界の血を湧かすやうな、面白い筋書も出來るのだが、夫れが何遍となし蒸し返されるので、世人は又かと云ふ氣になつて、一向氣乘りもせねば、何の興味も惹き起さないのである。近くは陰謀團の筋書なども、何遍か書き卸され、書き換へられたが、愈よ舞臺に上せて見ると、不都合があつて旨く行かないのを見ても分る。

處で一つ新しい試みをやつて、機先を制さうと、年來鍛へた腕を揮つたのは文相高田早苗である。ヌーボー式の高田實は新劇の俳優だし、これは氣分劇の作者だけに、人間が少し薄ッぺらで、神經過敏ではあるが、溫厚な所があるから、氣まぐれに書き卸すやうな輕卒は無い。時代の趨勢を敏感すると同時に、充分に政界の潮流を觀察して、夫れに合ふやうな賑やかな筋書を書かうとする。おまけに大法螺侯の註文もあるので、種々雜多の人物を網羅し、陣貝笛太鼓は勿論洋樂まで

取り入れて、内容は兎も角も表面的に陽氣な、賑やかなものにする必要があるんであるから、才物の彼れには丁度手ごろな物である。近眼鏡の底から覗いた政黨觀は、ちと怪しいものだと貶するものあるが、葭の穂から天井を覗くよりは、其の眞相に、より善く觸れる事が出來る。元老などが火見櫓の天邊に立つて、政界の谿底に咲いてる瓜や茄子の花盛りを我物顏に眺めてるよりは、遙かに危險の少い遣り口である。俗劇界の連鎖劇は其の手輕な、金に於ても時に於ても經濟的な點で、大に歡迎され、流行もして居るが、官僚座の連鎖劇は、些の新味も興味も、時代に觸れた所も無いので、日増に凋落して行く。が、流石に年來培つて來ただけあつて、或方面には未だ根深い勢力を持つて居る。之を一氣に叩き潰して了はなければ、何時頭を擡げて來ずとも限らぬ。現に其の中での新しい分子は、何等かの新粧を施して、大に飛躍しようと、捲土重來の計畫さへ立てゝ居る。其の向うを張るには、早稲田座を擴張して、大きな氣分劇を見せるに限ると、斯う思案を定めて、三派同合劇の筋書を書き始めたのである。三派合同と云つても、實は大法螺侠の傘下に集つて居た同志會、中正會、公友俱樂部が、天下晴れての夫婦、いやさ一家族になるので、合同其物には大した興味も無いが、之からの芝居が面白からうと云ふ期待が、政界の驚異となつて居るのである。

三派合同の筋書を書いたのは、素より高田に始まつたのでは無い。之までも屢々書かれて居る。修正もされて居る。が、まだ公然と舞臺に上せるまでには至らなかつた。何かの機會を見出しては、合同談を持ち掛けたり、内談を極内に進行させたりしては居たが、何時も旨く纒らなかつた。解散後の總選擧以來、合同の聲のみ盛んで、誰一人肩を脫いで、眞面目に運動する者の無かつたのは、銘々の心の中に狐疑を抱いて、双方から近寄らうと仕なかつたからである。夫れが故う好い加減に凋落したと思つた官僚座が、何か新しい事を目論んで居ると云ふ事を嗅ぎ付け、其の目論見なるものが實現されやうとするので、現内閣を遠捲きに捲

いて、夫れを擁護するだけでは不安を感じて來た。と云ふのは、いつ何時政權を取り上げられて、之まで築いた地盤を突き崩されるのかも知れぬとの恐怖に萌したのである。現内閣を中心とした——換言すれば首相大隈を援護する—與黨の頭數は多いが、三派が離ればなれになると、至つて脆弱なものとなつて了ふ。同志會は最初から此の事を懸念して居る。機會さへあらば他の二派を併合しようと思つて居た。事實、併合を決行しようと瀨踏みした事もあつた。が、他の二派は少數ながら獨立して居れば、第三黨の權威を持つ事が出來ると、肩肘を張つて居た。併合は即ち併呑であると、其の併呑の字面を酷く嫌つて居た。同志會も亦解黨して迄も、異分子を包容するの必要は無い位に考へても居た。時々合同熱が昇騰したかと思ふと、直ぐ冷却して了ふのは、銘々の利己的な打算からであつた、夫れが官僚から襲擊されて見ると、一致協力せねばならぬと云ふ、共同の敵に對する擁護的な精神が燃え立つて來た。飽くまでも現内閣を支持して見せる—斯う云ふ首相大隈の執着も亦彼等の心に反映した。銘々の利己的な打算が、共同の利己的な考慮となつて、高田の筋書が公然と舞臺に演ぜられる事となつたのである。

二

神經質な、才子肌の高田がペンを動かす背後には、大隈が扣へて居て、巨きな口から熱烈な氣息を吹き掛けて居る。高田は從來に無い熱心と、感興とを以て、其の筋書を書き上げた。同志會から話を持ち掛けると、中正會や公友倶樂部は併呑されるやうな誤解をするから、黨派には何等關係の無い自分が主唱となつて、中正會を説き、公友倶樂部を説き、同志會を説く事とする。形式は時に感情を融和する道具となり、成し難いと思つた事も案外早く成し遂げることが出來ると、彼れは成功の權宜からして、斯の形式を取つて話を持ち掛け、反官僚感情を利用して事を運んで行く。然うすると、彼是二百名以上の合同が出來る。衆議院の大多數を以て、貴族院の反隈派に對抗する。官僚系を威嚇するの勢を示す。能ふべくんば、子加藤を後繼内閣の首相に

據ゑて、最う一兩年も我黨內閣を維持しようと云ふ樣な胸算で、快心の微笑を滿面に湛へた。彼れは大隈の忠僕だけに、大隈の政治的生涯の最後を、光榮な頁で飾りたいと思つて居る。自分も早稻田大學長の地位を捨て文相の椅子を占めて、再び政界に復活した以上、將來に意味ある活動を持續したいと思つて居る。一は大隈家の爲めに、一は自身の爲めに、彼れは其の復活の精神を一種の劇的に働かして居る。若し彼れの念頭に大隈家の爲めと云ふ事が無かつたならば、三派合同の試みに始から手を付けなかつたかも知れない。

首相大隈は、最う侯爵になつた。喋舌らうと思へば、貴族院で勝手に喋舌る事が出來るから、何時まで首相の椅子に嚙り付いてるでも有るまい。夫れに年が年であるから、最う圓滿辭職をやつても可からうと、世間でも云つて居れば、大隈家の人々、乃至其の周圍者も亦爾か望んで居る樣である。處が、侯は大した元氣で、謹嚴な公山縣や、傲岸な伯寺內を三寸の舌頭に飜弄して居る。適當な後繼者があらば、今にも內閣を抛げ出しさうな事を云つて居るが、容易に抛げ出す所か、却て理想の後繼者として彼れ自身を自薦して居るでは無いか。口には如何に旨い事を云つて、元老に迎合し、官僚系を牽引して居ても、其の腹では年來の仇敵たる長閥を根子倒ぎにしてやれと叫んで居るんである。陽氣な氣象の大隈は、其の氣象に於ても、陰氣な公伯の夫れと合ふ筈は無い。あゝ云ふ怜悧な、老猾な、そして才氣縱橫な老爺だから、表面上其の調子を合せてこそ居れ、心の中では絕えず限無く反撥して居る。又、伯の如き何等政黨の後援も無い、國民の信望も無い、憲政の理解もない一武辨に、內閣を明け渡して溜まるものかと云ふ侮蔑も持つて居る。どの途圓滿辭職をする位なら多數黨にして、且我が與黨の大將たる子加藤に讓りたい。——斯う云ふ腹で居るに相違ない。而して其の腹の底には、將來とも其元老樣でありたいとの欲望が湧いて居る。夫れには自分が政權を握つてる間に、三派合同を圖つて、其の地盤を鞏固にするだけは鞏固にし、反對派の突擊に會つても崩壞しない樣に用心しなけれ

ばならぬ。此の際夫れだけの事をやつて置かなければ、彼れ中心の三派であるから、彼れが内閣を去れば、其の勢力の統一は覺束ないのである。で、自分は總裁にならないでも、纒める事の出來る時に纒めて、人足的にもせよ、多數の結束がついて居れば、何時でも必要に應じて其の結束力を利用する事が出來る。公山縣は長閥の勢力で以て内閣の起仆をやつたが、侯も亦多數黨の勢力で以て同一筆法を試みる事が出來る。然うなれば縱令首相の椅子を辷り落ちても、木から落ちた猿のやうにならずに、政界に隱然重きを成す事が出來る。上院で得意の舌鋒を揮ふと同時に、下院の多數を操縱する事が出來れば、之れまで目白の大御所の持つて居た特權を、早稻田で引受けたも同然で、百二十五歳までも、權勢の地位に居ることを得るのである。其の健康にして許すならば、最う一度位は内閣を組織する事が出來るかも知れぬ。侯の三派合同に力瘤を入れて、一人でも多くの贊成者を得ようとするは、官僚系に當るの必要からでもあるが、他面より見れば又斯樣な長い先の事まで考へて居るんである。此の考慮通りに其の事が運ぶものとすれば、侯が薩長の勢力を排斥しようとする、年來の素志を達する譯である。侯自身に取つては、公爵になるよりも何よりも嬉しい事であらねばならぬ。果して其の素志を達し得るや否やは、後繼内閣の首相が子加藤になるか、伯寺内になるかに由つて決するであらう。

三

子加藤は後繼内閣の首相と云ふ好餌で釣られて、三派合同には別に反對もせず、不平も並べないが、さりとて微笑を禁じ得ないと云つた風でもない。二派併合ならば彼れは依然として總裁の地位を占め、三菱の愛婿たるの箔も落さずに、傲然と力味返つて居る事が出來るのだが、同志會を解黨して、三派合同となると、然うは行かない。大法螺侯を總裁とするなら異存は無からうが、愛婿子を總裁に推薦するには可なり異議があらう。恐らく總裁を置かずに、加藤、高田、尾崎の三總務で共和的にやる事となり、加藤の專斷は許さぬ

事となるであらう。今日でも同志會では、決して彼れの總裁振に服してるのでは無いが、彼れには金力が有る。其の金力を利用するには、彼れを總裁に祭り上げて置く必要はある。と云つた樣な輕薄な態度で、彼れを總裁に戴いてるのである。處が、合同となると、異分子の包容されるだけ夫れだけ統御が面倒であるから、大隈系を代表する高田、中正會を率ゐる尾崎をも加へて、暫くの間黨内の融合調節を圖らねばならぬ。縱令加藤に少しは花を持たせるにした所で、先づ總務委員長とする位が關の山である。彼れの氣象としては、其樣な所で甘んずるもので無い。公桂の同志會總裁の時男後藤の一枚上に据つて、副總裁の地歩を占めねば承知しなかつた。少數黨の尾崎や、横合から飛び出した高田等と、同一線上に置かれては決して喜ばう筈はない。必ずや内心不滿を抱いて居る事と思ふ。夫れでも後繼内閣の首相になれる見込があればだが、何うやら當になりさうも無いのである。侯が子を推薦しようものなら、伯を擁立しようとする官僚系は、如何なる反噬をやるかも知れない形勢が見える。折角黨勢を擴張して、大政黨の總裁で幅の利く此頃、其の總裁を棒に振つての上に、首相にもなり得ないとなると、彼れの贏ち得る所のものは不面目だけである。斯樣な考が胸に痞へて、臍の下の落ち著きが惡くなつて居るだらう。彼れは大人物であるから、區々たる感情に支配されはせぬと云ふが、其の感情があればこそ不平もあり、不滿もあるのである。又夫れがあればこそ總裁にもなり、得意にもならうと云ふものである。彼れは一面理智の人ではあるが、他面又感情の人である。彼れの負け嫌ひな、木で鼻を括つたやうな態度、皮肉な物の言ひ振は之を證して餘りある。

子加藤が額の皺を多くしたに反し、金の義歯をちらりと見せて笑壺に入つて居るのは法相尾崎行雄である。尾崎は憲政擁護神から一息に變説改論佛となつたので、明日の政治的壽命が保證されぬと云ふ險惡な狀態にあつた。法相の椅子に噛り付いてる間は、多少は持てもしようが、其の椅子を失へば生來の雄辯で存在を廣告

するより外無からうと思はれて居た。夫れが三派合同劇の立役となつて、一人一黨的氣焔を揚げて容易に納まりさうも無い中正會を、音もさせずに巧みに纒めて了つた。流石は狐面だけに何處かに魔力があると、今更のやうに其の凄腕に敬服した手合もあるやうだ。一體彼れは入閣當時の評判は餘り善くないばかりか、彼れは無能な伴食大臣のやうに思はれて居た。當時は確かに夫れに相違無かつたが、閣僚中の勢力家たる内相大浦、外相加藤等が去ると等しく、彼れは頭を擡げて來た。尤も大隈に居据りを勸めたと云ふ關係もあらうが、閣議でも彼れの說が通るやうになつた。以前は加藤に『君は言ふ事は巧いが行る事は拙い』杯と、鼻の尖で笑はれて居た。何う云ふものか、加藤は尾崎を嫌つて、目の仇のやうに扱つて居た。處が大隈は年來の親味はあり、喋舌る事の上手な點と、變說改論を厭はぬ共通の流動性とが合流、若くは共鳴するせゐか、其の遠近自在の耳を、彼れの言に傾けるやうになつた。で、彼れは第一次居振り後の働き手と目されてゐる。

彼れが現内閣に在る以上、何遍でも大隈に居据らせるだらうと云ふが、常に辭表を懷中してるので有名な彼れが、何故そんな心になつたであらうか。夫れには少くとも二つの理由があると云はれて居る。其の一つは變說改論の結果今後の立場を失つたと自覺せる爲めで、他の一つは新夫人の虛榮心を滿足させんが爲めであると、專ら世間の取沙汰である。或は其の爲めで無からうかとも思はれるが、三派合同が首尾よく出來れば、彼れは更に新に政治的立脚地を得るのであるから、第一の理由の爲めに居据りを固執すまいと思ふ。が併し天性の詭辯家だけに、自家辯護も旨いし、何等かの理由を發見することに於ても聰明であるから、舌の根の動くうちは事情の許す限り、第二の理由の爲めに勇退を敢てしないかも知れぬ。其處まで行つては人間も最う御仕舞だが、彼れは再び得意時代に入らうとする機會を摑んだのであるから、餘程愼重の態度を取つて、天晴理想政黨の首領株を以て任ずる事と思ふ。さすれば今後は餘り詭辯を弄せず、場當りの喋舌もやらず、

可成柔かな掌で以て、衆心を收攬する事に努めるだらうが、ともすると脫線する方だから、輙く保證することとは出來ぬ。近來鳴りを靜めて、政界の趨勢を凝視してる樣であるが、不思議にも口よりも手の方が動いてる處を見ると、例の野心がむら〳〵と起つて、加藤の一枚上に出ようなどと目論んで居るのぢや無からうか。

四

高田の言ふ所に據ると、『侯の理想を體現する眞個意義ある政黨を樹立しないで、其の地位を去つて了へば、之まで黨閥及び藩閥とを打破して、黨界並に政界の粛清をやつた其事が徒勞に歸し、黨界の前途大に憂ふべきものがある。或は之が爲めに往年の閥族政治の再現となり、憲政の逆轉を見ずとも限らぬ形勢であるから、邦家の爲め、憲政の爲めに、三派合同をやるのだ』と、意氣天を衝くやうな有樣である。公伊藤の模範政黨に對して、之は理想政黨とも言ふべきものだが、銘々の腹の中を讀んで見ると、以上のやうに色んな臟物が藏され居るのである。模範政黨の政友會が創立の其日から模範的で無くなつたやうに、理想政黨の三派合同も出來上ると同時に理想的で無くなるは知れ切つた事である。が、假令表面的の辭令だけでも、憲政の逆轉を阻止したいと云ふ言明は、決して惡い事では無い。官僚系の人々が蹶起運動を試みつゝある今日、其の喰止策としては、虎疫流行に對する豫防注射劑位の功能はあると云ふものである。

虎疫豫防員の格で活動してるのでは無いが、三派合同の爲めに必死の運動をやつて居るは、大隈系の人々か、乃至は現內閣の獵官派である。表面は三派合同と云ふも、內實は同志會を基礎として他の三派を包容するので、同志會は飽くまで主動の地位にあるのだから、下手に出娑婆るのが拙いと云つて、總務の安達謙藏でも、濱口雄幸でも、積極的運動は試みない。時々協議會に顏を出す位で、何處を風が吹くかと云ふ樣な顏をして居るが、內心は加藤に共鳴する悲哀を持つて居るに相違ない。折角總務の地位を占めたのが、合同後は

幹事格に落ちて了ふと云ふ様な、淡い不滿の無いでも無からうが、憲政の爲めには其様な慾張つた打算を捨てねばならぬ。其處が黨人のつらい所だが、閥族政治の再現を叩き潰さうとする興味が、政權慾と共に絶頂に達して居る今日、其の憂さも辛さも忘れて居る。高田から三派同合の正式交渉があり次第、何時でも頭數だけは纏めて見せると云ふ腹でゐる。實際合同後に、名を捨て實を取つて、黨の内外に辣手を揮ふ者は安達であらう。

公友倶樂部の下岡忠治は官僚系で、公山縣の手前もあると云つた風で、首鼠兩端を抱いて居る。三派合同に極力誹痒するやうな事々云つて、裏面では款を官僚と通じて、合同反對の氣勢を煽つて居た。主義として反對するのか、義理として賛成するのか、曖昧模稜の中にあるやうだ。尤も劇中には、斯様な役者も必要だが、合同熱心者から見れば、嘸齒痒い事であらう。何の運動にも拔目の無い賴母木桂吉は、東奔西走して、一人でも餘計に引張り込むに骨折つて居る。算盤に拔目の無い商工家は、勳章を頂戴して年來の願が達したので、俄かに鼻息が荒くなり、後足で砂を掛け乍ら、健全な第三黨を組織する積りだ杯と勝手な熱を吹いて居る。又然うかと思ふと、小さな地方問題を擔いで、夫れと交換なら相談に乘つても可い杯とほざいて居る。こんな手合を理想政黨に參加させようと云ふのだから、何程口錢取りに馴れて居る賴母木でも、話が容易で無い。口八丁手八丁の小山松壽ですら手古摺つて るのだから、大抵の者はうんざりして了ふのである。が、彼等は老侯の爲めとあつて、熱心に運動して居る。侯も亦彼等の手前、法螺ばかりも吹いて居れぬと云ふので、商工議員を首相官邸に引見しては、説法をやつて居る。副參政官の關和知や、小山谷藏等も、此處が必死の瀨戸際だと云ふ顏で、腰のふらついてる者を捉へては、新黨參加を强要して居る。處が、何でも反對と云ふ事を偉いと心得た連中は、上院改造の見込があるかと横槍を入れ、早急には出來まいと受け流されると、夫れでは參加反對などと、小鼻をうごめかして居るので、手の

付け様も無い。是等の人々に對しては條理を說いた所で仕方が無いので、此の合同さへ出來れば現內閣が永續するやうな事を云つて、權勢で以て釣る外に策が無いさうだ。最初は侯の御聲掛りならば、二百三十名は容易に結束し得ると思つて、總花主義の濫賞も早手廻しにやつて、人氣を引立てようとしたが、實際に當つて見ると、烈しい欲求に生きて居る商工家は直ぐ算盤の上の掛引に轉んで了ふので、纏まり相で却々纏まらないのである。夫れに現內閣が最ら危いと觀て取つた者もあり、官僚撲滅に膽を冷した者もあつて、日和見の衆が豫算外に增加した。一たびは中止の姿となつたが、高田の激勵や、尾崎の聲援に、俄かに陣形を立て直して、『閥族政治の再現を排除せよ、憲政の逆轉を阻止せよ』との旗指物を押立て、本山の大法螺を黎明の空に吹き立てた。政界の有象無象は、一齊に利耳を聳てた。(大正五、九、一七)

予の「遊蕩文學撲滅論」に對する諸家の批評に答ふ

赤木桁平

一

予の論文「遊蕩文學の撲滅」に對する反駁乃至批評と見るべきものにして、諸種の新聞雜誌上に掲載されたるものはかなりに多い。併し、それらのすべてに對して予の所見を述べることは、いろいろの意味に於いて到底不可能なことであるから、それらのうちにあつて比較的有力なものと見るべきものに就いてのみ、予の忌憚なき所見を述べて見ようと思ふ。

予の該論文が一度「讀賣新聞」紙上に發表せらるゝや、逸早く予の所

論を攻撃すべく現れたのは小山内薫氏である。

「時事新報」紙上に於ける小山内氏の「所謂遊蕩文學に就いて」を讀んで先づ最初に感ずることは、氏の態度の甚しく「驕慢」にして、且つ「姦譎」なることである。例へば、氏が予の所論を駁するに、何等明快なる論理と妥當なる說明とを以てすることなく（この點に就いては後に說明する。）、態々予の身分調べを試み、汝は帝大法科の一學生に過ぎないから、汝の議論は要するに一個の書生論ぢやないかと云はんばかりの口吻を以て、頭粉砕に相手を高壓して蒐らうとするやうな卑劣さを現してゐるのも、また、予の頭腦の善惡を問題として、予の言ふところが七分通りまで飲み込めんなどとしらばくれるやうな圖々しさを現してゐるのも、皆、その「驕慢」と「姦譎」とがさせる業である。假りに、すこし考へて見てもすぐ分るやうに、予の言ふところが果して七分通りまで飲み込めないものならば、眞當に分る部分は纔に全文の三分に過ぎないわけであるが、三分しか分らなくてよくあれだけの理窟が云へたものだ。思ふに氏の魂膽は、予のいふところを不可解だと強辯して置いて、後にそれを予の所論に對する「故意の曲解」に備へんと欲するところにあらう。駁論全體の調子がどこまでもかういふ風であるから、そこには氏の主張を裏書するに足るだけの眞摯も誠實もなく、たゞ單に氏自身の人格上に備はる醜惡が曝露されてゐるに過ぎない。

さらに、小山内氏の態度が甚しく「姦譎」なるを證する二つの事實がある。その一つは、予の云つた言葉を「故意に曲解」（予の文章が七分通りまで飲み込めんといふ氏の言葉が、豫めこの場合の伏線として敷かれてゐることは前述の通りである。）して、勝手に予の所論の焦點なる論旨を歪曲し、それを氏が反駁の對象として取り扱つてゐることである。今一つは、予の云つた言葉を知らん顏で聞き流し、それと同じことをさも氏自身が發明したごとく云ひ觸らしてゐることである。しかも氏の反駁は徹頭徹尾この二つの「姦譎」に立脚したものであるから、本來の氏自身には何物もないわけであつて、氏が自ら告白するまでもなく、氏の生活なり、氏の人物なり、氏の作品なりは「實に憫れむべきもので」ある。

予が指摘した二つの事實のうち、その一つに就いて云ふと、氏は予が恰も遊蕩文學を以て、單に藝者を書き、私娼を書いた小說であると云つたやうに曲解し、田山、正宗、森田、鈴木、武者小路、里見の諸氏まで引合に出して、予の論旨に從ふと、これら諸氏の作品もまた遊蕩文學ならずやなどと強辯してゐることである。全體、氏は予の論文の如何なる箇所を讀んでさういふことを云ふのか。予の所謂遊蕩文學の定義が田山正宗諸氏の作品に當嵌るとでもいふのか。田山、正宗諸氏が藝者を書き私娼を書く態度が、長田、近松諸氏のそれと同じだとでもいふのか。若くは、田山、正宗諸氏の作品なり、態度なりが、長田、近松諸氏のそれよりも低劣だとでもいふのか。その何れであるともはつきり說明することなしに、田山、正宗諸氏の作品ばかりか、武者小路、里見諸氏の作品まで、予の所謂遊蕩文學中に算入しようとするのは、そこに何等かの「たくみ」が伏在してゐなければならないわけだ。

試みに小山内氏に問はう。田山、正宗諸氏の作品には、何處に予の所謂「人間生活に於ける "Saufen und Huren" の一面のみに興味（乃至價値）を感じ、大體に於いてかゝる生活を肯定しよう」とするところがあるのだ。また、何處に予の所謂「假令肯定しないまでも兎に角 "Saufen und Huren" に人間生活に於ける最も重大なる意義を發見しようとし、"Saufen und Huren" の生活に從屬する總ての生活情調に陶醉しよう」とするところがあるのだ。また、何處に予の所謂「藝術の本質を閑却して、常に彫琢の末技をのみ趁はうとする」ところがあるのだ。また、何處に予の所謂「通と呼び粋と稱する人間生活の技巧化が、洗錬されたる人間生活の藝術化と同視せられ」てゐるところがあるのだ、——以上の諸點中、たゞその一點だけを見ても、田山、正宗諸氏の作品を到底予の所謂遊蕩文學中に包括しえないことが明白ではないか。況んや武者小路、里見諸氏の作品に於いてをやである。然るを何ぞや、萬更それが分らないほどの氏でもなささうなのに、態と予の論旨を歪曲してかれこれ誣妄の言を弄するのは、取りも直さず、讀者を瞞着して、予の言ふところが如何に暴論愚說であるかを信ぜしめんがために案出した氏獨自の苦計である。その心事の陋劣鄙吝、正に唾棄すべき限りである。

二

さらに予が小山内氏の「姦譎」を證する事例として指摘した第二の事實に就いて云ふと、氏はその駁論に於いて恰も予が作者の態度乃至人を問題とせずして、單に資料のみを問題としたごとくに曲解し、「要するにどんなことを經驗して、どんなことを書いても構はないのです」とか、「遊蕩が惡いのではありません、人間が惡いのです」とか云つてゐるが、これまた相手の武器を盗んで自己の武器とする氏一流の奸策に出たものである。何故なれば、予は予の該論文に於いて、予の所謂遊蕩文學こそ極力これを排斥したが、毫も藝術資料としての遊蕩生活を排斥したことはない。その證據には、予の所謂遊蕩文學とこれに類似の傾向を有する諸文學（例へば、モーパッサン、シュニッツレル、ワイルドなどの作品）との異同等差を説明するために、予は果してどれだけの言辭を費してゐるかを考へて見たらいい。さうすれば自然予の云ふところが作者の人乃至態度の問題に歸する所以をも了解することが出來よう。（この點に就いては今悉しく説明する餘裕がない。心ある讀者は先般「時事新報」紙上に掲載した予の論文「藝術資料としての遊蕩生活」を參照して欲しい。）從つて、予は「一體、赤木氏はみんなの作品が惡いと云つてゐるのか、みんなの態度が惡いと云つてゐるのか、みんなの生活が惡いと云つてゐるのか、みんなの態度が惡いと云つてゐるのか、或は全體が惡いと云つてゐるのか、」といふ氏の質問に對し、何の躊躇もなく「勿論全體が惡いのだ」と斷言することが出來る。この斷言に對しては、氏に何の異議もあらうわけはない。見よ、氏は自ら明白に懺悔してゐるではないか。「赤木氏の說をまつまでもなく、吾々の生活、吾々の人物、吾々の作品は實に憫れむべきものです。」と。これだけの自覺がありながら、氏はどうして

「今日の赤木氏などにあなた方が撲滅される理由は、如何なる方面から見てもありません。」などと強辯するのだらう。それだけ惡かつたら、何と云はれてももう言分はないわけではないか。

上述のごとく、小山内氏の所論は殆んどその總てが「驕慢」と「衰論」とから生れた「曲解」と「捏造」とに立脚するばかりでなく、氏の所論に幾分の正當理由(ジャスチフィケーション)が存在するところも、要するに大局の論旨に何等の關係もない「揚げ足とり」の議論に過ぎない。況んや氏自身が予の所謂遊蕩文學の無意義、無價値を明白に自認してゐる以上、氏の駁擊に對する予の反駁は、これ以上にもう一歩も踏み出す必要はない。(玆で生田長江氏に一言する。氏は九月の「新小說」誌上で予等の論爭に容喙し、予の幼稚なる思想と薄弱なる論理とは、小山内氏の駁論で見事に「粉碎」されてゐるといふやうなことを言つてゐるが、何處がどう「粉碎」されてゐるのか、氏から親しくそれが聞きたいものだ。聰明なる氏が果してどういふ風に堅白異同の辯を弄するかは、蓋し天下の見物であらう。)

予がいくら考へて見ても分らないのは、小山内氏のごとく自ら自家の生活なり、人物なり、作品なりの低劣さ加減を知つてゐながら、また、自家の作品が予の所謂世道人心に害ある所以をも暗に默認(氏は予の所謂遊蕩文學の作品が予の云ふごとく賣れないとは云つてゐるが、一言と雖も世道人心に害なしとは云つてゐない。)してゐながら、氏は何故予の批難に抗辯しなくてはゐられないのか。氏は自ら稱して「義憤」だといふが、一體「義憤」などといふ言葉は、さういふ場合に使ふべき言葉だらうか。「義憤」とは讀んで字のごとく「義」に對する憤である。「義」とは「正」である、「善」である。然るに自らも何等採るべきところがないとまで愛憎づかしをした自家の生活なり、人物なり、作品なりに對する正當な批難に向つて、どういふ理由で「義」に對する「憤」が發せられるのか。一體、氏の意味する「義」は欺僞師道德や泥坊道德の間に存する「義」なのか。「惡」や「不正」を擁護することが「義」とすれば、氏の奉ずる道德は欺僞師道德や泥坊道德なのか。予はこの點に對する氏の明答が聞きたい。

元來、主義思想に關する爭ひは公明なるべき筈である。從つて、予は予の該論文に於いてどれだけ激越過酷と見ゆべき文字を聯ねるときも、一言對者の私的生活乃至私的問題に就いて觸れたことはない。(觸れれば隨分觸れべき點もないではないが。)然るに小山内氏の態度はどうだらう。鬼面以て人を嚇す底の虛勢と威壓とはまづ容すとしても、その駁論の冒頭から態々不必要なる予の身分調べを行ひ、予が出世して警視總監になればどうとかかうとかいふやうなことを云ひ、全文の調子に云ふやうもなき揶揄譏弄の態が見えるのみならず、また自家の主張に對しても、殆んど「義憤」らしい眞摯も誠實も露れてゐない。さういふ心掛けでは、その駁論の末尾に於いて、折角氏が利いた殊勝らしい口も、終に「浮の空の念佛」に過ぎなくなりはしないだらうか。要するに、予は氏の駁論に現れた氏の態度を醜陋卑劣の極とするものである。

三

小山内氏と殆んど等しい根據に立つて、予の所論を駁撃すべく現れたのは本間久雄氏の論文「所謂遊蕩文學と現在の文壇」（本誌前號所載）である。

實際、本間氏の議論は小山内氏のそれから暗示を受けて書いたとしか思はれないほど小山内氏の議論に酷似したものであるが、たゞ一つ兩者の間に存する相違は、小山内氏が予の所謂遊蕩文學そのものの價値に就いては殆んど何等の抗議も提出してゐないに關らず、本間氏は作品そのものゝ價値に就いても、大體予と異つた見解（隨分不徹底なものではあるが）を吐露してゐることである。故に、予は本間氏の所論の一たる所謂遊蕩文學の限界に關する問題に就いては、これを予の小山内氏の所論に與へたる批評と、「時事新報」所載の「藝術資料としての遊蕩生活」なる論文とに委付して、玆に又々同一事を繰返すの愚と面倒とを省き、殘るところの一つに就いてのみ予の所見を語つて見やうと思ふ。

本間氏は云ふ。「赤木氏が名指したやうな現文壇の作家たちの作品は、果して遊蕩文學の名に値するものだらうか。これらの人の作品が果して善藝術の發達を阻害したり、又は所謂世道人心に害毒を流したりするものであらうか。江戸末期の頽廢文明から生れ、そして又逆に、その頽廢文明を生んだかの人情本や洒落本と同じやうな影響をこれらの人々が現代の文化乃至人心の上に與へつゝあるであらうか。」と。而して、氏はこの自問に答へ、「私はこれに就いても赤木氏とは全く見解を異にする。」とか、「少くも長田、近松二氏の作品について云へば、これらの人々の作品は、何等世道人心に害毒を流すものではないのは無論のこと、何等他の善藝術の發達を害するものでもないのである。」とか云つてゐる。

併し、本間氏は右のやうな斷定に對する理由として、何等傾聽するに値する說を述べてゐない。氏が云ふところは徹頭徹尾それらの作品に「一種別な、情趣の世界が釀し出される。」とか、「そこに描かれたそれら浮華狂燥の世界には決して、所謂世道人心をのみ念頭に置く道學者流の鑑賞を許さない『あるもの』がある」とか、「赤木氏の所謂『婦女子の涙を促す安價なる感激』以上の『或るもの』を與へる。」とかいふ點にあつて、いくらその「或るもの」を繰返したところで、その「或るもの」の本質が闡明されない以上、氏が唯一の理由として述べるところは、要するに漠然たる抽象論に過ぎない。

尤も本間氏は長田氏の作品を評して、「一味の淋しみと、哀れさと、ほろほろしい一味の物悲しさ」とがあると云つたり、近松氏の作品を評して、「實に、一個世紀末的人間の苦惱と懊惱とを藏してゐるといふ意味に於いて高級なる文藝の作品たるものがあるのである。」とか云つてゐるが、それが果して氏の所謂「或るもの」だとすれば、何といふ貧弱な、愚劣な「或るもの」だらう。さういふ「或るもの」では、遺憾ながら予の主張は徹回せられない。先づ、氏よ、考へて見るがいゝ。長田氏の作品が果して氏の云ふごとく、「一味の淋しみと、哀れさと、ほろほろしい一味

の物悲しさ」とを有する（それも極めて初期の作品に限るが）にしても、それがどれだけ藝術的に價値を持つといふのだ。あゝいふ「一味の淋しさ」や「哀れさ」や、「ほろほろしい一味の物悲しさ」は、態々「藝術」と銘打つたる長田氏の作品を待つまでもなく、お三どんの「身の上話」にでも存してゐるではないか。近頃の作品になつては、それすらもないのである。況んや近松氏の作品を以て「一個世紀末的人間の苦惱と懊惱とを藏してゐる。」とか何とかいふに至つては、「寧ろ一種奇怪なる滑稽事である。」

更めて本間氏に問ふが、全體、氏が意味する「懊惱」とか「苦惱」とかいふものは、近松氏の作品に現れてゐるあゝいふ風なものをいふのか。また、氏の意味する「高級なる文藝の作品」とは、近松氏の作品のごときあゝいふ風なものをいふのか。若し氏にして然りと答へるならば、予は無遠慮に氏を評して、氏は到底文學とか藝術とかいふものは分らない人、氏自身の言葉を借りて云ふと、「些かでも鑑賞のデリカシー」を持たない人だと云はう。何故なれば、予等の約束する「高級なる文藝の作品」といふものは、あゝいふ「へつぽこ小說」をいふのでもなければ、予等の意味する「懊惱」とか「苦惱」とかいふものは、あゝいふ「遊冶郎の惱み」をいふのでもないから。――氏よ。そんな馬鹿げたことをいふと、氏の信仰するワイルドが泣きますよ――と云ひたい。

又世道人心の問題に就いても、本間氏は何等確然たる理由を述べてゐない。たゞその唯一の理由とも見るべきものは、長田氏等の作品が「餘りに常識的」であり、「餘りに健全」であるからといふところにあるらしいが、假令「餘りに常識的」であり、「餘りに健全」であるとしても、それだから世道人心に害がないといふ理窟は立たない。寧ろ予から云ふと、氏の所謂常識的が果して「日本在來の安價なる諦め的な現世主義」であるとすれば、それだからこそ反つて世道人心に害があるのだとでも云へる。何故なれば、氏の所謂「日本在來の安價なる諦め的な現世主義」が現代の日本文明に害毒を及ぼしてゐることは、殊に甚しいものがあるからである。

予の所論に對する本間氏の駁論は、要するに、予の論據を覆すべき何等の理由がないにも係らず、强ひて「反對のための反對」を試みたに過ぎないものであつて、殆んど一顧を拂ふ價値だにない。況んや氏自身も亦長田氏等の作品に對して或種の不滿を有し、「これ幹彥氏の作が前にも一言した一味の哀れつぽさと、一味の物悲しさをその底に湛へながら、遂に近代文藝に見るごとき新情緒派たりえず、又所謂遊蕩生活を描きながら遂に官能派たりえないところである。」などと、前に肯定したところを後に否定するがごとき口吻を漏らしてゐるところを見ると、氏の駁論の根據が果して那邊に存するのか、殆んど想像することだに出來ないのである。

四

小山内、本間兩氏とは全く異つた見地に立ち、予の所論に異議を挾ん

だのは安成貞雄氏の論文「遊蕩文學撲滅不可能論」(「新潮」九月號所載)である。

安成氏の論文は、眞面目にかれこれいふだけ馬鹿らしいほど輕佻浮薄の調を帶びたものではあるが、その論旨だけは眞面目らしいから、一言予の考へるところを述べて置かう。――要するに氏の論旨は、予の所謂遊蕩文學なるものが、全然時勢の要求に應じて生れたものであるから、時勢の上に存する缺陷を除去しない限り、到底これを撲滅するのは不可能でもあれば、また、撲滅する必要もないといふのである。大體に於いて予もまた氏の撲滅不可能論には同感する。

併し、安成氏の撲滅不可能論に同感したところで、それとともに氏の撲滅不必要論にも贊成し、遊蕩文學の撲滅を叫ぶ予の態度が間違つてゐると自認するわけにはゆかない。予から云ふと、撲滅出來ようが出來まいが、それはすこしも予の眼中にない。予は予の必然なる「要求」と、予の必至なる「理想」とに依つて、あくまで遊蕩文學撲滅すべしと叫ぶのであるから、予はその「要求」と、その「理想」とに忠なるところに主觀的價値を見出すのであつて、氏のごとく「撲滅出來るかどうかを研究して、然る後出陣致す」ことに意義を見出すのではない。この點は氏と予との實人生に對する態度の根本的相違に基くものであるから、かれこれ口舌を以て爭うたところで仕方がなからう。

殊に、予の所謂遊蕩文學に對する批難は、直接ある一派の文學者なり作品なりに就いての批難であるから、その批難の効果の評定に於いてのみ初めて打算の範圍に入るべき時勢とか何とかいふやうなものを、豫め予が考慮の範圍に入れて置かねばならぬ必要はない。況んや予は氏とすこしく所見を異にし、時勢の要求するものを與へるばかりが善ではない、要求するもの次第に依つては、反つてこれを掠奪する方がいいと信じてゐる。從つて、予は氏の云ふがごとく、「遊蕩文學が世道人心を毒するならば、その根本源因から撲滅する」のも結構であると思ふと同時に、また、遊蕩文學そのものを撲滅しなければならないと思つてゐる。而して遊蕩文學そのものを撲滅することは、ある意味から云ふと、總て氏の所謂「之れに代るものを提供す」ることでもあるのだ。もすこし突込んで云ふと、現在のわが國には、安成氏のやうな成敗利鈍のみを眼中に置いて事を就さうとする人間ばかりがゐるから、一等國とか何とか云つて喧嘩だけは强くなつても、一般民衆は依然として幸福になれないのだ。現在の日本が要求するものは、そんな卑怯な、諦め的な、愚痴つぽい回避家ではなくて、熾烈なる信仰と、眞摯なる態度とを備へた、斃れて後已む的覺悟を有する理想家(アイディアリスト)である。予はさうなれるかなれないかは知らないが、すくなくともさうなりたいと思つてゐる。

八月下旬「時事新報」紙上に掲載された長谷川天溪氏の論文「藝術家の態度を確立せよ」は、予の所論に對する批評らしい批評のうちに在つて最も公平に近い議論であつた。少くとも氏は小山内、本間兩氏のごとく予の所論を誤解若くは曲解することなく、比較的情理を盡して自家の見

解を吐露してゐる。予は氏の議論から敎へられるところのかなり尠くなかつたことを感謝すると同時に、予の立場からすると遺憾ながら氏の所論に對しても、猶ほ幾分の不滿と異議とを有じてゐる。その一つは、予の所謂遊蕩文學の本質に就いての問題である。長谷川氏は今日の所謂遊蕩文學と、安永、天明、寛政頃の花柳文學との相違を論じ、今日の「諸氏（所謂遊蕩文學の作者）は遊蕩のため遊蕩文學を作つてゐるのではない。たゞ花柳社會の間に、眞の生命の流れを探らんとしつゝあるのだ。」と云つてゐるが、予からいふと、どうもさうした傾向は見られない。たゞいい氣になつて、輕佻浮華の痴態を盡し、その痴態を糊塗するために柔麗織美の粉飾を用ひてゐるだけである。併し、この點は人各々見るところを異にするのだから、これ以上に何と云つたところで仕方がない。

もう一つは、長谷川氏が批評家の任務を論じて、それらの作品に「鐵槌を加ふる」よりも「むしろその狙ひ所を世間に紹介する方」がいいと云つてゐる點であるが、そこに行くと、氏と予とは隨分違つた考へを持つてゐる。予の信ずるところに依ると、それが眞に愚劣であり、無價値であると信じたとき、批評家の心裡には、單にその價値を劣等に批評するといふよりも、更に一歩を進めて、むしろこれを絶滅し、破壞し去らうとする感情が涌起する。この感情は慥に公明なる感情であると同時に、批評家の當に持つべき感情ではなからうか。もし、この感情の存在を是認するならば、予の所謂遊蕩文學に對して執つた態度も、また當然是認せらるべきはずであらう。

五

以上縷述するところに依つて、予の「遊蕩文學撲滅論」に對する諸家の批評乃至反駁のうち、その目星しいものに就いての予の所見は、大抵述べ盡されてゐるやうに思ふ。併し、この一文の最後に莅んで、今少しく云つて置きたいと思ふことがある。

元來、予の抱懷する藝術觀は、「モーパッサン論」（一八九四年）を書いた頃のトルストイの藝術觀に負ふところが多い。彼は該論文の冒頭に於いて特に藝術の本質を論じ、作品に對する作者の道德的關係、描寫の明晰（即ち美）及び作者の態度の眞摯を擧げて、その三個の要素だと云つてゐる。併し、實際の場合、一つの藝術品に就いて、その三つの資格を全部求めようとするのは極めて理想的ではあるが、到底不可能なことであるから、予はその一つの資格でも持つてゐる作品を見れば、先づ、その作品の存在だけは肯定したいと思つてゐる。この點に於いて、予の藝術批評の尺度は決して過酷ではない積りであるが、この過酷でない藝術批評の尺度を以てしても、猶ほ予の所謂遊蕩文學のみは、殆んど一つとして採るべき點がないのである。

予の所謂遊蕩文學がトルストイのあげた第一の要素、即ち作品に對する作者の道德的關係が全然瑕缺してゐることは勿論いふまでもないことだが、さすれば第二の要素たる描寫の明晰、第三の要素たる作者の態度の眞摯のうち、たゞその一つでもあるであらうか。この點に至つては予が既

に幾度となく反覆力說した通りであつて、假令あるにしたところであるといふのが恐れないほど貧寒なものである。しかも、さうした文學の存在が毒にも藥にもならないほど微力なものであれば、まだわざわざ遊蕩文學の撲滅を叫ぶにも當るまいが、何人が何と强辯したところで、實際に文壇一般に惡影響を及ぼし、且つ世道人心の上に憂ふべき結果を齎しつゝあるのが明かであるから、予としてはどうも默過し去るわけに行かない。

思ふに、遊蕩文學の諸氏にしても、初めからあゝした作品ばかりを作つたものでもあるまい。それがどうしてあゝいふ傾向に走つたか。どうしてあゝいふ作品を作るに至つたか。――それに就いて考へる毎に、予はまたトルストイがモーパッサンに就いて云つた言葉を思ひ出す。すこし長くはなるが、それを玆に寫し取つて置いて、然る後この一文の筆を擱からうと思ふ。

「モーパッサンがこの傾向（道德的關係の缺陷）を生ずるに至つたのは人氣作者としての名聲一時に高く、既に一家を成した時である。蓋し彼も亦當代知名の作者殊に彼のごとき讀者を牽引する力ある作者の免れざる誘惑に陷つたのである。誘惑の一は初期に於ける小說の成功、新聞雜誌の稱讃、社會殊に婦人社會の阿諛追從等であつて、一は收入の增加である。併し收入の增加は決して經費の增加と併行して進むものぢやない。更に進んでは出版者が强て其作を要求するに至つたことである。彼等は名ある作者の作なら諛辭百方爭うて其原稿を買ひ取らうとするのである。作の良否は最早問はないのである。知名の作者の署名さへ得れば、代作でも構はないのである。この樣な誘惑は遂に作者を邪道に陷れなければ止まないのである。」（葛西文學士譯「モーパッサン論」より）

モーパッサンの場合は知らず、わが遊蕩文學の作家の場合に就いてはこのトルストイの警告が小氣味よきまで適中してゐるではないか。

（大正五年九月十七日）

中秋の明月を仰いで

黒頭巾

其一

●今年、中秋前二夜、吾輩、成田に在り。此の日、旅館の浴衣を著けたる儘、筆を載せて飄然、宗吾線の電車に搭じ、宗吾祠畔に來る。宗吾は、義民佐倉宗吾なり。吾輩、彼の義勇を懷ひ、秋風月明に、彼の英靈を

招いて、筆を執つて、彼を傳せん事を期したればなり。

◉此の日、疾風、沙塵を捲き、林木、悉く聲あり。吾輩の理想は、祠畔の旗亭に登り、先づ一杯を傾け、陶然たる微醉を齎らして薄暮の涼野に散策するに在り。

◉風は、吾が理想を吹き散ず。樓上に坐し、窓を開けば、風塵、卓に滿ち、窓を閉づれば、殘暑人を惱ます。此の如き閑雅の僻村、若し煉瓦の好建築あらしめ、大なる硝子窓を透して、飽くまで、風荒るゝ郊野の明月を見るを得しめば、感興如何ぞや。然れども此の地此の好境遇を得るに由無し。薄暮、筆を收めて成田に向つて歸る。

◉吾輩、停車場に來つて、電車を待つに、電車が後れて來らざる間に、日暮れ、風も亦た落つ。夕涼、水の如く、明月を捧げて浮ぶ。計らず稀觀の詩境を得たるを月に、感謝せずんばあらず。

其二

◉宗吾祠畔の停車場は、東郊に臨み、邱陵起伏して、月下に、限り無く東に連なりて見ゆ。近く相對して、林樹の陰影、殊に濃やかなる處、隱者の家にても有る乎、燈火、閑かに漏れて輝く。其の附近に、喜四郎稻荷ありといふ。燈火は、此の稻荷の燈明には非ず。

◉喜四郎稻荷といふは、昔は、喜四郎といへる百姓の家祭の稻荷祠にてもありしならん。兎に角、當年、繁盛の流行神(ハヤリカミ)たりしやに傳ふ。喜四郎の家も亦た稻荷を離れて隣里に移轉し、彼の裔孫なるべし。今、喜四郎と稱する小百姓停車場の南、三四町に在り。

◉或は、詮索を好める者あり。其の說に曰ふ、喜四郎稻荷の盛んなりし頃、宗吾は僅に、古墓を存せしのみ。宗吾俄然、流行の盛を極むるに至り、喜四郎稻荷は其の全盛を宗吾に奪はれ、世間、復た喜四郎を說く者無し。今、午の日、多少の參詣者あるに過ぎずと。吾輩此の說の信僞を保證せず。或は、眞實なるやも知れず。

◉喜四郎といふ者、今に至つて、傳說さへも詳かならず。森の中に、百姓家の燈火のかげに、稻荷の神威を支へつゝあるのみ。宗吾、榮え、稻荷は衰ふ。世事、啻に、月に盈缺あるが如きのみに非ず。月界の神は、果して如何。地上の神は、榮枯、盛衰を免かるゝ能はず。明月が萬古、地上を照らしつゝあるに似る可くもあらず。

其三

◉來る可き電車は、終列車なれば、停車場の茶店も既

に閉ぢられ、月光天地を覆ひ、天地極めて閑靜に、月光は、波濤に注がれたる油の如く、日中の風勢を鎮靜し、すべての風塵、騒響、林木の音、悉く月光の中に溶け去りたる乎。澄める月夜の靜かなる秋風は、萬斛の凉味を以て、吾が滿身を沐浴せしめつゝあり。

◉線路の東は、畦を為して郊壑に臨めり。畦に沿ひ、櫻樹を植えたるが、此の頃の秋風に、裊々たる細枝は搖曳しつゝ、黄葉、掀飜して、月を環つて、暫くも靜止せず。櫻の枝間より望めば、明月、奔るが如く、樹下に、蟋蟀のガチャ〳〵と啼く。櫻樹を離れて月を望めば、皓々として靜かに照りまさりつゝ少しく隔て、低く、遠き草叢に、松蟲の鳴く。

◉月下の蟲聲は、月下の水聲の如し。月下に、蟲聲、水の如く吾が肩に濺ぐ時、月明に扁舟を放つて急灘を下るの氣分無くんばあらず。暗夜の蟲聲は水聲に似ず。月明らかなれば、則ち蟲聲、水聲を生ず。蟲聲の中に立ちて明月を望めば、水聲の中に月光を仰ぐが如きなり。

◉吾輩は、終列車を待つ間に、何の幸か、車の延著したるが為に、悠々、月下の凉風を樂しむを得たり、浴衣の懐も、脊中も、袂も、すべて凉味にふくらみつゝ。

而して蟲聲を浴びつゝ立てば、眞に、水沫を浴ぶるが如く、露氣、自から肌を浸すを覺ゆ。仰げば露は明月より滴たり落つるなり。吾輩は明月を仰いで徘徊し、夜を徹して月下に冥想せん事を希ひ、ひそかに、或は電車の來る、一刻も遲からん事を祈りたり。

◉電車來る。右に、車窓に、郊野を踰えて明月を望みつゝ、風に御して冷然として行く。吾身は、月に向つて、天空に溯りつゝあるなり。限り無き郊野は黒ずみて擴がり、月は漸く高く登りゆく。薄金色の纖雲、月光を溶かしつゝ恍として、月下に、光明海あるを想ふ。明月には、全く、雲無からんよりも、却つて薄き纖雲あるを可とすべし。

其四

◉中秋の前日、吾輩、荅雲と共に、成田を發して東京に歸る。驛前の酒舗に於いて、イブセンの幽靈を購ふ。飜譯の小冊子なり。車窓の讀物として恰適なるべし。車中に入つて直ちに耽讀す。

◉此の日、風また烈し。終日、吾が三層樓の後庭の公孫樹を吹いて、綠葉をして亂舞せしむ。薄暮、風力、漸く弱く、尚ほ息まず。成田を發し、松崎を經て安食

に到る。冊子を膝上に措いて、印旛湖の波光飄蕩して車窓を打つを見る。

◉車窓に、正面に、印旛湖の甚兵衛渡を望む。渡の左は水神森、十數株の老松、翠色掬すべし。右は、吉高の花嶋山、其の頂は展望絶佳。弘法大師、護摩壇を築きし處といふ。別に國見邱あり、景行天皇行幸の故蹟と傳ふ。

◉古人、國見邱に登臨し、王者と雖、千年の後、僅に一片の遺址を留むるのみにして、動もすれば湮滅に歸せんとするを慨嘆し、深き感觸に沈みし者あり。

◉甚兵衛渡は、印旛湖中、第一の風光。吾輩も亦た嘗て、文學に見えたる宗吾の背景を歷訪し、此に一遊す。吾輩の所見を以てすれば、此の地尤も觀月に宜し。仲秋の好景想像するに餘あり。

◉景行天皇は、國見邱に登りて、東に「霞の郷」を望み玉ひき。今の霞浦は則ち霞郷の處なるべし。此の遼遠たる昔には、利根川未だ此の地を流れず。天皇の見玉ひしは常陸の海なり。而して印旛湖は深くして、恐らくは川を爲して常陸ノ海に注ぎしなるべし。水神森の喬木は、未だ生れず、然れども甚兵衛渡は、水聲潺々、月光を碎きて流れしを、邱上より帝は望み玉ひし乎。

◉花島山は島なりしといへども、今は陸地に續きたり。蘆葦茫々、山を環ぐり、蘆花散る時、月蒼々として、山上の護摩壇と、江上の舟を照らすらん。印旛國の在りし頃、恐らくは此の山、國中第一の好風景地、印旛國造は、月明を賞しつゝ此の山に登りし事もあらん。此の如き勝景なるを以て、大師は、此に護摩壇を築きしなるべし。

◉此の島山の風景、靈地としては高野山に若かず。然れども大師、此に護摩を修する時、月明に江水を俯瞰し、其の刹那、留魂地と爲すに足ると憶ひし事は無かりしや。

◉印旛國造の墓は、湖水を隔てゝ、此の島山と相去ること半里許、此の墓と宗吾の家とは遠からず。宗吾の父祖は湖畔の埋立に盡力したりと傳へらる。今の印旛湖の形狀は、彼等に依つて幾分の變遷を來せしといふを妨げず。而して渡守の甚兵衛といふは、果して實在の人なるやを詳かにせず。今に至つて撲訥なる渡守、月明にも渡舟を漕ぎつゝあり。

◉印旛湖の月光、嘗て、王者を照らし、聖者を照らし、國造と義民とを照らし來る。王者、聖者、國造、義民

皆有らず。而して江山滄桑の變、此の如し。王者、聖者、國造、義民おの〳〵月明を仰いで各樣の感想を爲せしもの、今、一も存するなし。或は、宇宙に存ずるやも知れざるも、此を知るに由無し。唯だ、變ぜざるものは、明月、萬古、つねに此の如し。暮凉、漸く車窓を襲ひて、中秋前夜の大月、地平線上に現はれ來る。

其五

◉吾輩は覺えず、小冊子に讀み耽りて、月の登れるを知らず。我孫子に來れば、月光、窓外に滿つ。馬橋に到る時、恰も小冊子を讀み畢る。乃ち卷を投じ、窓外の明月を仰ぎつゝ行く。

◉イブセンは、舊思想、舊信仰を蛇蝎視せり。彼は人類の惡性は、單に父母の遺傳のみならず、尚ほ舊思想舊信仰といへる無形の亡靈に依つて隨伴し來る事を論ぜり。實に、彼の所説の如し。舊思想、舊信仰より離れ去らんとも思はざる人々は、譬へば妖怪に魅れて生血を吸ひ盡されつゝあるが如し。人の生血を吸ふものは必ずしも狐狸の靈のみに非ず。イブセンの所謂舊思想、舊信仰の亡靈は人の生血を吸ふものならずんばあらず。

◉是等の無形の亡靈を呪ふ事を知らざる者は、仰いで明月を看よ。明月の前には、陳物無し。すべてのもの新らし。月に對して詩情を發するは、月が人を新らしくすればなり。月は人に詩を與ふ。詩は「新」なり。「新」ならざれば、詩を爲さず。

其六

◉吾輩は、馬橋を發車するの後、車窓より顏を出し、兩の掌を向ひ合せてブラ下げ、自由に、凉風の吹くに任かせつゝ、明月を眺めつゝ行く。明月と相對しつゝあれば、吾、月に語り、月も亦た吾輩に語らんとするに似たり。

◉古來、中秋の良夜は得難しといふ。理想の實現し易からざるを意味するなり。今、中秋の前夜、二夜、續いて稀有の良夜を得る。明夜の中秋、明月、豫め期す可からず。須らく眼前、今夜の明月を樂まん事を要す。

◉吾輩は、車窓より、澄める凉夜に、吾が髮を吹かせつゝ、月と語りつゝ行く。吾輩は、右に、月は左の空に、低く殘れるが、汽車の發する時、吾輩の別れ去るをば、明月は、情を含んで佇立して送る。

◉發車の時、明月は町の家を踰えて半空に懸りつゝあ

り。町は盡き、汽車、水田に沿ひて奔る。線路に近く、小川に、田の溝に、すべて水ある處、月を宿さゞるは無し。眼下の月光を樂みつゝ、仰いで明月を望む。

●吾輩の汽車の、右に奔りつゝある間、左に遠く、明月は、伸び上り〳〵脚を空にして行く人を追掛け來る。吾輩は窓に倚りて、吾が躰に、汽車の進行の震動を感觸しつゝある刹那々々に、明月は、伸び上がりつゝあるを思はずんばあらず。而して汽車、次驛に著し、停車しつゝある間、月も亦た靜かに、停車場の空に懸りて、車窓に倚れる吾輩を俯瞰しつゝあり。

●汽車の線路の迂曲する爲に、月と吾輩と、つねに、互に方位を同じくせず。松戸に到る。月は正面に來り車窓より見る吾輩と相對して在り。發車に隨ひ、月は吾輩と相對して、右へ、右へ、奔りつゝあり。停車場ごとに、月は、吾輩と、相對の方位を變ず。而して明月は、吾輩と伴つて、江戸川を渡り、中川を渡り、荒川渡をり、東京に歸る。

●疾走しつゝある汽車の車窓より見る明月は、行く人を慕ひて、伸び上がり、追掛けつゝ、凝視する間に、月は中天に騰りつゝ、吾輩に接近し來るを覺ふ。かくの斯く印象しつゝある間、人と月と、情緒纒綿、刹那々々に、濃情を加へつゝあり。

其七

●車窓より瞰下する沿線の屑屋、すべて月下に開放されて、妻子眷屬、團欒して晩餐の卓に坐するが見ゆ。胸當(ムナアテ)ばかりしたる裸の小兒も其の中に在り。彼等は、明月に對して箸を執りつゝあり。「明月の、御覧の通り屑屋哉」の句を憶出す。

●然れども明月の下には屑屋無し。屑屋といふは、日中に見たる印象なり。明月の下には、光景すべて畫卷を展開す。屑屋は殊に畫趣多し。明月も亦た或は、屑屋を好むにやあらん。

●汽車北千住に來れば、月下に近く燈光の燦爛たる帝都見え、月も既に田舍の月に非ず、漸く都の月となる。淺草、千住の燈光に縁取られたる三河島の低地に、明月の映ずる美くしさよ。

●月は冲天に來る。月下に、片雲湧き、月を繞つて搖曳しつゝあり。淺草の空に、高く、大なる黑雲の千切れて廣がりたるが、活動寫眞の怪猫の怒れるが如くに月に向つて、月を搾らんとするの勢を爲す。

●此の如き偶然の雲樣、容易に得難し。明月、此の如

く、而して仲秋の前夜なるを以て、感興殊に深し、淺草の月下に游覧する者幾萬人、此の雲様に耽視したる者幾人ぞや。然れども此の夜、吾輩と同じく、靜に月と語り、明月の一夜を眺め明かしたる者、必らず少からざらん。

◉汽車、上野に著く。改札口に、吾輩の小兒女十歳と八歳となるが、俥を驅つて來り、吾輩を待てり。兩兒女の齡を併せて「お月樣の年」にも足らざるが、月下に吾輩に伴つて、良夜を散策せん事を樂めるなり。

◉吾輩は、兩兒女を伴ひ、上野より山手線に搭じ、駒込に向ふ。再び車窓に凭りて、明月を仰ぎつゝ行く。先きに吾輩は右に、月は左に殘りしを、此の行、汽車の線路と略ぼ逆行し、吾輩は左に向ひ、右手に月を見る。月は依々として、情を凝らして吾行を送る。

◉秋月に對して、悲感を催ふすといふは、イプセンの所謂亡靈の一なるものならずんばあらず。小兒女は、明月の前に嬉々として樂しむ。吾輩も稚心を去らざるやも知れずと雖、明月は悲觀を誘はず、却つて樂觀を誘ふ。

◉李太白が、杯を擧げて明月に問ふは、極めて樂觀なるに似て、實は極めて悲觀なるなり。彼は、人生の須臾なるを感じ、明月に向つて、暫らく豪懷を寄するものにして、彼の人生觀、及び宇宙觀に依つて生ずる無限の苦悶を、月の前に慰安するに過ぎず。月は悲感を催ふすものと思へる人は、李太白の亡靈に捕らはれたるなり。

◉「月見れば、千々にものこそ悲しけれ」の歌意は、我が國の、月見る人の頭中に、一大亡靈となりて宿りぬ。仲秋無月の語にも悲觀の氣分あり。願くは月と悲感とを結合せしむる事莫れ。月の前に歌へ、月の前に創作あれ。而して明月を仰いで、思索に耽るは可なり。明月を仰いで、人生を觀じ、宇宙を觀ずるは、悲無くして樂多し。

◉吾輩は駒込に下車し、兩兒女を携へ、月に向つて微吟しつゝ、南行す。此の行、更に、山ノ手線と逆行するを以て、明月はが吾前方の天に在り。倚中の喬木のかげを行くに、月は、恰も吾が家の中天に懸り、嫣然、吾等の歸るを待てり。蓋し我孫子を發して吾家に歸るの間、僅に二時間餘。其の初、吾輩を追ふて走りし明月、吾輩よりも早く歸りて、却つて吾輩を迎へつゝあるの感無くんばあらず。

其八

●中秋の夕、天陰りて月無し。此の夕、吉江孤雁、佛國に留學するを東京驛に送る。電車にて、夕刊を求むるに、今夜、曇、然れども更深く天晴、月を見るを得べしと記するものあり。今夜、明月、願くば東海道に於ける遠征の孤雁を照らせ。

●先月、月の頃、吾髯、中秋山人と共に孤雁を誘ひ、利根川の月を見たり。彼、佛國に到るの途 海上、明月を仰いで、東京の月、利根川の月、信州の月、而して東海道の中秋を憶起すや。山間の明月、可なり。大海の明月、特地に可なり。甲板に、椅子に凭つて明月に對す。人生の感興の、尤も高潮に騰る時ならずや。

●吾髯、南船北馬して、到處、月前に感懷を寄す。富士山に登りて、明月を見たる時、感興、今に忘れず。吾髯、未だ海外を見ず。他日、大洋を航過して、明月に對せん事を思ふ。此の意味より言へば、孤雁が中秋の良夜を以て、渡歐の途に上るは、欣羨するに足らずんばあらず。

●吾髯、中秋山人、萬里居士と相携へ、東京驛を出で來れば、鶴陵山人、驛前に待てり。乃ち四人相携へて散策を試み、神田を過ぎ、此の夜を記念して、共に杯を擧げて健康を祝す。神田橋を過る時、暫らく雲破れて、明月を仰ぐ。想ふに、孤雁は、此の月を、品川、大森の邊、東京灣の上に見たるならん。

●此の時、道灌山、愛宕山などに集りて、月を待ちし者も少からざるべし。雲破れ、蟲聲湧いて、月出る時彼等は、無我、無念、純ら明月の美感に打たれしなる可し。

●吾等は、繁華場裏、蟲聲を聞かず。旗亭に上るも、月色を見ず。薄雲、月を蔽へり。尤も醉へるは中秋山人なり。偶、街上、新内を流し來る。山人樓上より金を投じて、一曲を彈ぜしむ。蓋し、唯だ、月夜の氣分を味ふのみ。惜哉、此の良夜、月、隱れたり。明月に凄婉の一曲、三絃を流させばや。

其九

●月前に向つて「吾身一つは元の身にして」を歌ふてと勿れ。明月の前には、人事の變遷を說く可らず。遼焉たる今古を涉りて、變ぜざるものは、月に非ずや。

●ソロモンの榮華、何處にか在る。昔の王者、聖者國造、義民。今、月前に存するもの無し。野の百合の花も、三千年來、三千回、開落して、昔の花と、今の花と異なれり。吾が國民が、中秋の明月に捧ぐる薄、萱にも、多少の變遷あるべし。ひとり變化無きものは、月に非ずや。

●天文學者の說くところに據れば、潮汐摩擦は、地球

の自轉を遲くし、他方に於て、月の公轉週期を長くしつゝあり。然れども摩擦は甚だ小にして、隨つて週期の延長も非常に小さし。過去二千年の間、其の變化といふは、一秒の百分一に足らずといふ。

●此の說に據れば、吾が建國以來、三千年、月の變化といふは、公轉週期に於て、一秒の百分の一を長くしたるに過ぎず。宇宙齡より見れば、一呼吸なるべし。人間より見れば、三千年は太だ長し。人間の歷史に於て、繼續したる一國家にして、月の變化を見るを得たるものは、世界、唯だ日本あるのみなり。日本人は、須らく中秋の良夜に於て、明月に向つて、三千一系、無二の國體たる所以を誇榮せずんばある可らず。

●一秒の百分一の變化は、人間の眼には領解せられず。一分時の變化を見るまでには、二千年を百倍以上し、更に、之を六十倍するを要す。若し、月が、今より、公轉週期に、一分の差を生ずる頃、人間は果して如何。

●地球が自から大變化を生ぜざる間は、人間は地上に榮ゆ可し。人間は、無窮に繁榮するを得可きや。人間の文明は那邊まで發達するを得可きや。

●人間は宇宙を變化せしむるの力を有せず。人間の文明は、地球の表皮上に、色を染むるに止まる。譬へば皮膚病の黴菌が、人間の表皮を侵しつゝあるが如し。疥癬の力は、人間の骨肉に徹らず。

●地球の運命は懸つて月に在り。則ち人間の運命も亦月に從ふ。運命は旣に定まれり。悲觀するを要せず。明月に向つて、悠遠なる宇宙の生命と、人間の使命とを冥想する時、明月、亦た情あり、人に共鳴するの態度無くんばあらず。

其十

●落花流水、相思ふ。魚心ありと雖、水心無くんば、水魚の情を成さず。人、月に對し、月と人と、相憐むの情あり。人心、月魄、相照らすと見ゆる所以のもの、明月、果して人心と投合するの因緣ありや。

●明月を明鏡に比する者あり。明月、必ずしも明鏡と相似ず。鏡面には陰影無く、月顏には陰影あり。詳かに望遠鏡中より望めば、月球には、地球と同じく、海山江湖あり。多數の火山あり。火山を環つて放射線あり。火山は悉く休火山なり。湖海は形勢のみにして、一滴の水ありとも見へず。月球は地球と同じくして、水と火と共に無し。則ち月は、死したる地球ならずんばあらず。

●地球より見たる月球は、其の火山に火を噴かしめ、

凹處に水を湛へしめば、形勢、地球と異なる事無く、一箇、可憐の小地球を現出すべし。火あり、水蒸汽あり、此の小地球の表面に、草木動物を生ずべし。今の月球には、火無く、水無く、三界萬靈無しと見ゆ。

◉月球は小地球たる事疑無く、随つて、沼々たる太古に三界萬靈ありし事を想像するを得る。果して人間ありしやを知らず。假令、人間ありしとするも、地球上の人間と同様の文明を有せしやを想像し易からず。

◉月は、元と地球の一部分にして、約五千四百萬年以前に、地球より離れて飛び去り、別に、小地球を成したるものといふ。則ち、月球を組成する實質は地球と同じ。恐らくは三界萬靈、地球と相似たるものありしならん。

◉今日に於て、月球の表に、一切の生物の存在を認む可きよう無く、生氣全く無しといへど、恐らくは太古の生物、身死して、靈のみ存する爲ならん。則ち、月球は眞に、「靈の世界」ならずんばあらず。

◉天文學者は、月球に見ゆる火山の主なるものに、命名するに、偉大なる科學者の名を以てせり。例へばニユートン山、コペルニカス山、プラトー山といふが如し。此の如きは月球の靈より見れば、案外の事なるべし。是等の偉大なる名は、此の如く記念されたればとて其の靈、月球に到る可きよう無し。

◉然りと雖、月球の死火山には、月球萬靈の雄者、尙ほ存するあらん。地球の科學者の名は、則ち其等の靈に命名されたりと見るも妨げず。譬へば人間が神に名を附すが如し。

◉ピタゴラス、星界を攀ぢて星の音樂を聽くの詩あり。吾が近世にも祇園南海に、相似たる漢詩一篇あり。此の詩は、世間に多く傳唱せられざりしも、日本人の詩に現はれたる思想の尤も幽玄なるもの丶一たるを失はず。而して南海とピタゴラスの詩とは固より偶合なり。

◉ピタゴラスや南海や、眞に、星の音樂を聽きしやを知らず。然れども星界に、殊に、月に、萬靈磅礴すとせば、神秘なる音樂の聞ゆること無くんばあらざる可し。而して明月の下に、地球上の人心と、月魄と相照らすと見ゆるもの、是等の萬靈、月魄となりて、靈と靈と相應ずるものならずんばあらざるなり。

◉靈魂は光と同じく、宇宙の間に往來、存在するを得可し。然らざれば地上の靈魂、月魄と相感應する事を得ざるなり。

其十一

◉天文學者は、地球の分身たる月球が、將來再び地球

に合一せらる丶の時來る可きを豫言しつ丶あり。月が地球と合一するの時は、則ち地球破滅の時にして、地球の開闢以來、蓄積したる、一切の人間の文明及び人間は破滅すべし。

◉合一以後の地球は、月の如く死したる世界となる可きや。全然「靈の世界」となる可きや。將た地球の新生命を生ず可きや。

◉美しき月よ。月は地球の敵に非ずや。輝く月は、將來に於ける地球の破滅を標榜しつ丶あり。若し地球上の靈魂は地球より遠く行く事無しとせば、地球上の靈魂は、假令、不滅なりといふとも、地球破滅の後、靈魂また蘇するの期無し。人間は月を呪はん哉。

◉然りと雖、地球を破滅せしむるものは月に非ず。月球、地球の過去に於ける分離、將來に於ける合一、ともに宇宙の理法の命ずる處なり。生者必滅、會者定離は、地球も、月も星も、皆、免かる丶能はず。人間の存在も亦た宇宙の理法なり。何んぞ月を呪ふ可んや。

◉觀じ來れば、地、月の離合も、筆を驅つて此の論を書くも、同じく宇宙の理法の現示に外ならず。而して人間の所謂「永遠」、「不朽」といふは、地球、月球合一の時に到るまでに外ならず。而して地、月合一の時は、彌勒菩薩の出現よりも遲かる可し。

其十二

◉仰いで明月を見て、月が地球に及ぼす大勢力、大功德を思ふ。月が一年間に地球上に及ぼす光熱の總量は太陽が僅に、三十秒の間に、地球に送る光熱の量に同じといふ。則ち月は地球に及ぼす勢力は此の如く大ならず、而して地球上の人間に及ぼす功德は廣大無邊なるべし。

◉月は、人と、すべてのものを眞化し、善化し、美化す。人間をして詩あらしめ、理想あらしめ、人間をして向上せしめつ丶あるものは、月なり。

◉仰いで明月を見よ。月の前には、歷史も無く、不老長壽も無く、惡事無く、政略無く、あらゆる宗敎は、月の前には、悉く、餘りに小さし。明月は、限り無く美しき慈愛の玉顏を以て、宇宙の理法を說きつ丶あり。

◉人間、若し唯一の日あり、月無く、晝は明るく夜は暗かりせば、人間の文明は漂白劑無くして衣を著くるに似たらん。人間有りてより人間滅するに到るまでの間、人間の伴侶たり、人間の慰安者たるものは月ならずんばあらず。唯だ月を愛せよ。人間は月に活きつ丶あり。

◉月は中秋を尤も美なりとす。仰いで明月を見よ。明月に對して「月魄」を冥想せよ。

今年中秋の後、三四夜續いて雨、月無し。昨夜、澄空、明月を望む。乃ち稿を續けて此の篇を畢る。九月廿日夜、黑頭巾再記

葭町哀話　桃奴の母、小春の母

大窪逸人

▲あつさりした栗きんとんの、優しい風味、柔くこくりと砕ける、歯ざはりの佳いところを、家の自慢にしてゐる、淺草の古いお料理屋、と言へば、それは辨天山の「總菜岡田」のことであらう。

日本橋にも一軒、同じ名の總菜岡田といふお料理屋がある。これは、葭町の、大阪町に軒並の一構へであり、人はまた時々「濱町岡田」とも呼んでゐる。

こゝに書かうとするのは、その「濱町岡田」の隣りにあつた『梅初音』といふ藝者家の、うす暗い土藏の二階に、何時からとはなく隱れてゐた物語である。

▲

遊藝の巷のうらには、總じて物ごとの、吉凶を擇ぶ緣起、禍福の兆、物忌み、呪禁などに賴らうとする、女の低い驚異のこゝろが、今も尙ほ、餘ほど力づよく流れてゐる。

梅初音の女主人の、小久といふ人は、氣性の毅いので、とほつてゐた。さうして、濱町岡田の隣りの空家には、何かは知らず不思議があると、人傳へに聞かされると、小久は直ぐに、

『それは好い。緣起も吉いし、場所柄も惡るくはないし、わたしが其處に越して行かうぢやないか』といふことに、即坐に心をきめてしまひ、それから間もなく、梅初音の家中が、そこの空家に、引越して行くことになつた。

梅初音の家は、その時分、かなり多勢でゐた。

小久の母にあたるお德。娘ぶんの芳江。子供のお榮、お靜。姐藝者の久松。妹藝者の〆千代と桃奴。半玉の

藤香。箱屋のお米、お富、それに女中のお松――謂はば、それ者の果、それ者、それ者の雛や卵子や、それ者の屬きものなど、男の情で生きて行く、その道の女ばかり十二人が、引越車の前や後に纒ひつきながら、引越しの騷ぎを、手傳つたり手傳はれたりして、賑やかに、濱町岡田の隣りの家に、面白く越して行つた。それは六年まへの、七月二十九日のことであつた。

　小さな鈴が着いてゐて、音の好い格子戸を、氣もちよく片手で開くと、二尺の幅もないやうな、狹い三和土があつて、左のその隅に、古い下駄箱が置いてあつた。そこの上框の正面は、直ぐに六疊になり、右を見れば三疊になつてゐた。六疊を上つて行けば、その奥に、臺所の細長い板の間が續いてゐた。

　引越車の着くより前に、女主人の小久は、半玉の藤香一人を連れて、今から引越してくる空家のなかに、先づ第一に入つてきた。

　二人が臺所まできたときに、敷居の際に佇むで、板の間のうへから、流しもとのあたりまでを、眺めわたした小久は忽ち、

「おや、ようちやん、御覽な」と、後に随いてきた藤香に言ひかけた。

「なあに、お母さん」と、應へながら、結つてきたばかりの唐人髷を、小久の袂のそばに傾けて、澤のない板の間のうへを、同じやうに眺めた藤香の瞳に、大きな出刃庖丁が一つ、捨てられたやうに、横になつてゐるのが、直ぐに映つた。

「お庖丁だわ」と、藤香は小さな聲で言つた。

　小久は足袋を敷居のそばに脱ぎすてゝ、裾を端折りながら、こまかい埃のたまつてゐる、板の間のうへを、素足の爪先をたてゝ、出刃庖丁のあるはうに歩いて行つた。

　藤香は敷居のそばに一人になつて、小久のするのを眺めてゐた。

　眉をよせて、出刃庖丁を、左手に拾ひとつた小久は、柄のさきを摘み提げると胸を上げて、直ぐ右側にある幅の廣い戸棚を、すつかり開いた。

さうして、日ごろから心自慢にしてゐる七つの翡翠を根がけにかけた、まだ瑞々しい銀杏がへしを、戸棚のなかに差しいれて、上下を視まわしてゐた。やがて右手の袖ぐちを、口に啣えて、纖白い二の腕までも、捲くりあげると、ずつと臂を伸ばして、戸棚の奥から、黒く錆びきつた鎌を一挺、長々と摘みだしてきた。

「ふうちやん、こらね、鎌もあつたよ。すてきに縁起が吉いぢやないかね」と言つて、小久は瞳を輝かしながら、右手に鎌を、左手に出刃庖丁を、墨繪を描いた白縮緬の腰まきの兩方に、ぶら／＼提げて、藤香の立つてゐた敷居のそばまで、爪先きばかりで歩いてきた。

　疊のほかに何も無い六疊の片隅に、小久は、鎌と出刄庖丁とを、丁寧に弁べて置いた。さうして、足袋を穿き、藤香をつれて奥の廊下に出た。その廊下は三間ばかり、臺所の横を通つて行けば、右手に大きな土藏があつた。その白壁の彼方に、廊下のつきあたりには、厠の引戸が、此方を向いてゐた。

　小久は厠を開けてみた。藤香も、そつと覗いてみた。眞新しい白いおまるが一つ、蓋をしたまゝ厠の奥に置いてあつた。小久は其の蓋を摘みとつた。おまるのなかには、新聞の紙が、ぎつしりと塞まつてゐた。藤香はそれを見て、初めて笑ひ聲をたてた。小久も頬笑むだ。

　そこに、第一の引越車が、初めて着いて、戸外の方で、はしやいでゐる笑聲が聞こえた。小久と藤香とは、廊下から玄關の六疊の方に引かへして行つた。

　大神宮さまや、お稲荷さまや、金神さまなどの、多くの神棚を始めとして、小久が秘藏の觀音びらきの桐箪笥。お徳が亡くなつた旦那から遺された、丸に橘の定紋いりの黒い長持。それらを載せた車が第一に着いて、それから、皆の箪笥や鏡臺や三味線や、繭玉、歌舞伎人形、犬張子の類まで、續々と移されてきた。

▲

　夜になつて、やつとの思ひで、先づあらまし片付いた中に、玄關の六疊に皆がめい／＼に坐つて、大阪壽司を、大きな臺の物から摘みはじめてゐた。さうして、小久が臺所から提げてきた、出刃庖丁と鎌とに就いて、

誰も彼も、いろ〳〵の勝手な判斷をつけてみては、新奇な思ひと、驚異のこゝろに圍まれてゐた。

その出刄庖丁と鎌とは、今でも梅初音の家に、藏つてある。

▲

引越してきてからは、梅初音の家の家業は、夏のやうにもなく、夜ごと〳〵に忙がしかつた。

「何か不思議がある」と、人傳へに聞いてきた、その家のなかに、何の不思議もあるのではなく、朝夕そのまゝ濟むできた。出刄庖丁のことも、鎌のことも、何時とはなく、皆の心から、人の噂のやうに消えて去つて、それは只だ其れだけの事といふことに成つてしまつた。

しかし、それだけでは濟まなかつた。

九月の初めごろになつて、皆が朝御飯をたべてゐるときであつた。十六になつてゐた芳江が不意に、

「昨夜ねえ、誰か遲くなつてから、「青柳」を彈きはしなかつたこと」と、誰彼に訊ねはじめた。

誰も夜中に、「青柳」を彈いたものはゐなかつた。

「遲くつて、何時ごろなの、芳ちやん」

「さうねえ、二時か三時ごろだつたわ」

「訝しいわねえ、あんた確かに聞いたの」と、〆千代が訊ねかへした。

「たしかに聞いたわ」

「誰の絲だつたか、わからなかつて」と、久松が復た訊ねた。

「それがわからないの。聞いたことは、たしかに聞いたの。唄つてたんですもの」

「まあ唄つてたの」と、藤香が愕いて、皆の顏を視た。

「誰の聲だつて、芳ちやん。お言ひなさいよ」

「聲もわからないの。でも唄つてたわ」

「いやだはねえ、わたし」

「訝しいわねえ」

「訝しいわねえ」

「訝しいわ、ずゐぶん訝しいわ」

「どの邊で唄つてたの」

「なにしろ唄つてたのよ」
「この家のなか？」
「さうよ、家のなかは家のなかだわ」
「まあ、わたしいやだわ」
　瞳が光り、小さな唇が、めい〳〵に物を言ひながら、誰の動悸も、亢くなつてゐた。
「そんなことを、何だよ、お座敷で決して言ふんぢやないよ」と、小久が若狹塗りの纎長い箸を、朱檀づくりの箸箱に収めながら言つた。
「えゝ――」と、皆が同じやうに答へた。
　その日の夜に、お座敷から歸つてきたものは、着換えをすますと、直ぐに六疊に集まつてきた。さうして、睡むがつてゐる芳江を中心にして、復た「靑柳」の唄の聲と絲の響きに就いて、いろ〳〵に訊きなをしてみたけれども、芳江は朝御飯のときの話のとほりを、くりかへすばかりであつた。

▲

　そのまゝ三日ばかりすぎた夜のことであつた。
　小久は何うした動機であつたのか、自分も知らぬうちに、癇が亢ぶつてきて、どうしても寢つかれなかつた。それも寢ぐるしいといふのではなく、氣ばかりが冴えてきて、じつと仰むけになつたまゝ、さま〳〵な思ひと思ひとが縺れあひ、華やかな追懐や忌々しかつた思出などが、まざ〳〵と心に浮いて、しやうがなかつた。
　その夜、歸つてこないことになつてゐるのは、〆千代ばかりで、他の妓は、それ〳〵家の枕に着いてゐた。土藏の二階には、桃奴と、母のお德と、子供のお榮とお靜とが寢てゐて、そのほかのものは階下に寢てゐた。小久も六疊で寢てゐた。
　二時を過ぎたと想はれるころであつた。
　幽かに爪びきの、二上りの小唄の調子が、小久の鼓膜の奥に、あるかなきかの響をつたへた。小久は、はつと思つて、寢ながら鬢の髮を、いそいで撫であげた。
　絲のひびきは、爪びきながら確かな音じめを、なめらかに捌かして、やがて嫋々しい聲がつゞいてきた。

「…青柳の、影に誰やらゐるわいな、……人ちやござんせぬ、……朧ろ月夜の、かげの星……唄ひをさめて、彈いてしまふと、後は只だもとのやうに、ひつそりしてゐた。

小久は聽いてしまふと、につこり笑つた。芳江にはわからなくつても、絲の調子と、まして唄聲の喉が、小久には直ぐに解つた。彈いてゐた三味線までも、家の何の棹、誰の棹といふことが、小久にははつきり分つてゐた。小久は復たあらためてにつこりした。

▲

その翌朝の御飯のときには、「青柳」の小唄のことを、言ひだしたものはなかつた。小久のほかのものは、皆よく眠つてゐて、前夜再び聞こえたそれを、聞いてゐたものは誰もなかつた。やがて歸つてくる〆千代が、また例の何時もの、たまらなく烈しいおのろけを言ひだしたときには、今日はどうしてやらうなどゝいふことに、皆が興じあつては御飯をたべてゐた。その皆の頭のうへの、多くの神棚に、お燈明の炎が、幾つも靜かに燃えてゐた。

御飯がすむと、小久は桃奴を呼んで、土藏の二階に登つて行つた。

土藏の二階は、八疊と四疊とに成つてゐた。その八疊のはうに、高い窓が一つあるばかりで、それも金網が張つてあるところに、光澤消し硝子が穿めてあつた爲に、部屋の中は、いつも仄暗かつた。

小久は桃奴を、自分の直ぐ前に坐らせて、

「桃ちやん、お前決して隱すことはいらないからね。お前昨夜、「青柳」を彈いてたね。いつたい誰に逢ひたいの」と、徐かに言つた。

桃奴は默つて俯向いてゐた。それでも、やがて、次の意味のことを、途ぎれ〳〵に話して行つた。

――逢ひたい人と逢ふために、桃奴は三つのお呪禁を、人に訊いて知つてゐた――

――ちようど電燈のつく時分に、部屋のなかに獨りで坐つて、逢ひたい人のゐる方角に向き、その人の名を、七度唱へて、來てくださいと心に念じるならば、

その眞ごゝろは、必ず先方の其の人に通じて、逢ふ瀬ができるとのお呪禁。そのお呪禁を桃奴は、もう幾度か折をみては、くりかへして念じつゞけてみたけれども、先方の其の人からの音信もなければ、噂さへも聞かなかつた――

――お座敷に行つて、一座が賑かに囃やいでゐる最中に、「桐の雨」を人知れず三度彈く。人に唄はれないうちに、また自分の名を呼ばれないうちに、何にも邪魔をされずに、首尾よく「桐の雨」を三度彈いてしまふことができたならば、逢ひたい人が、きつと來てくれるとのお呪禁。このお呪禁も桃奴は、二度ばかり、多勢のお座敷の皆のなかに交つて、首尾よく「桐の雨」を三度彈きつゞけてしまつたけれども、それでも逢ひたい人は、何處のお座敷に呼ばれて行つても貰はれて行つてみても、遂に姿を見せなかつた――

――二階にあがる階段の、上からちようど三段めに、夜ふけてから腰をかけて、「青柳」を彈いて唄ふならば、待人が嫌でもきつと來るとのお呪禁。これこそは能く利くと、髪を結いに行つたときに、音なしい松夫姐さんから、極く内所に聞かされて、桃奴は思ひあまつてゐた折からに、此の前の夜と、一昨日と、昨夜と、土藏の二階の上から三段めのところで、逢ひたい逢ひたいと念じながら、「青柳」をほんとうに靜かに彈いたのであつた。それを、前の夜は芳江に聞かれ、一昨日の夜は、誰にも聞かれずにすむだけれども、昨夜は小久の耳にはいつた――

これだけの意味のことを、桃奴は漸く言つてしまうまで、俯向きつゞけてゐた。言つてしまうと、顏をあげて、小久の顏を仰いで覗めてゐた。

「青柳」の小唄の呪禁を、小久は若い時分から、聞き覺えてゐた。さうして、今、眼のまへに坐つてゐる桃奴が、それほどにしてまでに、逢ひたがつてゐる男のことが、當然に聞きたかつた。桃奴は其のとき十八になつてゐた。

小久から訊ねられるまゝに、桃奴が自分のことを答へたのは、然し次のやうな哀しいまじめな話であつた。

▲

桃奴は其の人に、只だ一度だけ、會つたばかりであつた。それは、桃奴が何時か二三度ばかり呼ばれてゐて、一寸したお馴染になつてゐた古川さん(變名)といふ、兜町の人の御座敷から掛けられて行つた時に、古川さんに連れられてきた人であり、桃奴には初めての人であつた。お客は其の二人ぎりで、どちらも、三十を越えたばかりの、同じ年配の人たちであつた。

その初めての人は、古川さんと餘程睦まじさうな仲に見えてゐた。二人とも、すつかり寛ろいでゐて、同じやうな口調で、その場かぎりの他愛のない與太ばかりを、互ひに負けずに隙間もなくお喋べりをしてゐた。さうして、その座に呼ばれてゐた一龍と桃奴とを、間斷なく笑はしてばかりゐた。

そのうちに、古川さんとその人との話は、實子と養子といふことに移つて行つた。その時に、その人は古川さんに、次のやうなことを、急にまじめになつて話した。

「實をいへば僕は養子であつて、生れて九月の時に、實家から養家に貰はれて行つた。實家の親たちと、養家の親たちとの間に、餘ほど堅い約束が結ばれてゐたものとみえて、實の親も、義理の親も、僕が養子であるといふことは、何方も嚴重に隱してゐた。僕は養家が、自分の生れた家だとばかり思ひきつてゐた。また實際に今から思つてみても、養父母は僕を心から可愛いがつてくれたし、僕は隨分と我儘そだちに育てられてきた。養家に子供といつては、僕一人なのであつた。

「實家と養家とは、三丁ばかりしか離れてゐなかつた。僕は何時も實家に遊びに行つた。さうして養家のはうが實家よりも、少し格式が上だつたので、僕の實父母も、二人の姉も、一人の兄も、僕を「お坊ちやま」と呼んで、丁寧な言を使つてゐたし、何ごとにも鄭重にもてなしてくれた。また僕は生みの親に對しても、姉にも兄にも、皆を一段眼下に見て、自分はお坊ちやまだといふ心から、我ながら鷹揚に振るまつてゐた。さうして、十四の年まで育つてきた。

「十四の年の八月であつた。僕の大きいはうの姉が、病院で亡くなつた。その通知が、實家から養家にきたときに、僕は臺所で、その使ひの口上を立ちながら聞いた。何とも知れぬ或る鋭い氣配が、ひしゝと僕のこゝろを捉へた。僕は其の氣配に襲はれて、我にもなく戸外に駈けだした。そして、實家に駈けつゞけて行つた。

「實家の玄關から奥の方に、默つて通つて行つたときに、中の茶の間に、實の母がすわつてゐた。母は僕の姿をみとめると、實に痛ましいほど悲しさうな顔をして、「死骸になつて歸つてきたんだよ」と、僕に言つた。その母の口調は、今までと全く違つた言づかひのほかに、烈しい情味を含むでゐた。僕ははつと胸をうたれて、母のまへに我知らず佇むだ。母と僕とは強い力で凝と視つめあつた。その母の瞳が、僕の心を何とも知れず悶えさせた。すると、母は顔を伏せて、そこに泣いてしまつた。僕は實に言ひやうのない心を抱いて、そのまゝ奥の間に入つて行つた。

「奥の間の屛風のかげに、亡くなつた姉が横になつてゐた。顔に白い布をかけて、横を向いてゐた。その枕もとに、兄と次の姉とが、默つてすわつてゐた。兄は僕をみると、死んだ姉の顔の布を、直ぐにとつた。さうして、「この葉で唇をぬらしてやつて下さい」と僕に言つた。僕もそこにすわつた。死んでゐる姉の眠つてゐるやうな蒼白い顔を、僕はしつかりと視た。さうして、兄から渡された茶碗の水に、樒の葉をつけて、姉の唇を濡らした。僕のさうするのを、眺めてゐた兄と次の姉とが、俄かに泣いた。僕にはそれでも涙が出てこなかつた。その亡くなつた姉の名は、澄子といふのだつた。僕はたゞ「可愛がつてくれた澄子さんが病院で死んできた」と思ふばかりであつた。その姉の葬式にも行きながら、僕は未だ氣がつかなかつた。やはり「澄子さんのお葬式」とだけ思つてゐたばかりであつた。

「十六の年になつて僕は試驗の結果から、廣島の學校に入ることになつた。その出發の三日まへであつた。僕は實家に遊びに行つた。その時に、母が僕を奥の間に連れて行つた。そこに、父も兄も姉も坐つてゐた。

さうして、母は初めて、それと僕にうち明かした。「私の子」といふ言を、僕は聞いた。母も泣き、兄も姉も泣き、僕も泣いた。父は僕の養子入籍屆の寫しを見せた。母はやがて僕の臍の尾を出してきて見せた。佛壇の扉が開かれて、お燈明がついてゐた。僕は香を焚いて、二年まへに亡くなつた姉の位牌に向つて、改めてその冥福を祈つた。それは父が僕に言ひつけたのであつた。

「父は更に、僕が養子に行つた時の前後の事情を、くわして僕に聞かせた。何も彼も僕にはもう全く新しい生れて初めてのことばかりであつた。父の言に、母が傍から何くれと言ひたしては、涙を拭いてゐた。兄も姉も僕を視つめてゐた。父はまた、僕が初めて他に旅立つのに就いて、樣々の心得を、言ひきかせてくれた。さうして、皆で夕御飯を一しよに食べて、僕は養家に歸つてきた。

「養父の顏、養母の顏を、僕は生れてから初めての心もちで、改めて新しく眺めた。しかし、實家で堅く言はれてきた爲に、すべて默つてゐた。さうして、廣島に發つて行つた。

「一年たつて、夏休みになつて、僕は養家に歸省した。僕のその當時の心は、どう考へてみても、實の親よりも、養家の親のはうに、深い親しみがあつた。それでゐながら、僕が歸省して一年ぶりで、養父の顏をみた刹那に、僕の唇は我知らず「伯父さん」と動きかけた。僕は愕いて言を止めた。十六年間も「お父さま」と呼びなれてゐたものが、たゞの一年會はないでゐたうちに、僕の唇が「伯父さん」と本當のことを言ひかけた。それは自分ながら實に不思議であつた。僕はその不思議さに我ながら愕いた。さうして、其の日に實家に行つて、生母の顏をみたときには、また「伯母さま」とは如何にも呼びにくゝつて、どうしても「お母さん」と言ふはうに、唇が動き易かつた。しかし、僕の氣では、やはり養家の親のはうに、まだ〳〵溫い情味を覺えてゐた。

「養子は決してするものではない。親身の血といふものは爭はれない。僕は今までに成つてきたが、それから段々と年のたつのにつれて、養家の親のこゝろと、

實の親のこゝろとは、やはりどうしても差別のあることが、分つてきた。養子を育てるのは、無理をするのだといふことを、つく〴〵思ひ知つた」

以上の話を、古川さんを始め、一龍も桃奴も、しんみりと聞いてしまつた。やがて、桃奴は別のお座敷から掛かつてきて、古川さんのお座敷を貰つて行つた。

さうして、桃奴自身は自分の父を知らなかつた。母とも九つのときに、生別れをして、養家の家に貰はれてきた爲に、ぼんやりと覺えてゐるのにすぎなかつた。それでゐながら、古川さんが連れてきた人の話を聞いてから、全く知らぬ父はともかくも、生みの母には、ぼんやり覺えてゐるだけに、しんから逢へたいと思ふこゝろに、つまされてきた。しかし、お正月とお盆のときばかりに、梅初音の家を訪ねてくる義理の母に「ほんとのお母さんに逢はしてください」と、頼むことはできないものと、むりに諦めてはみたものゝ、養子に行つて十六年も知らずにゐた人に、もう一度呼ばれて行つて、その人が生みの母から親子の名のりを、初めてうち明けられたときの心もちを、もつとよく聞かしてもらひたかつた。

そのために、桃奴は先づ古川さんに逢ひ、そのお連れの人に逢はして貰ひたかつた。さうして、遂にお呪禁をするまでに、母に逢ひたさのこゝろから、その人に逢ひたい思が募つてきた。

▲

桃奴の話を、小久は聞いて不憫な思ひにとざされた。さうして、桃奴には知らさずに、その翌日に使ひをやつて桃奴の養母にきてもらひ、その義理の娘の桃奴のまじめなこゝろを、こまかく割つて話した末に、生みの母の現在を知らせてやつてくれるやうに、事わけて頼みこんだ。しかし、桃奴の養母は、嘆息をついて、「あの娘の實のお母さんとは、もう五六年も音信不通」といふ意味を、くど〳〵と答へて、小久を落膽させたのにすぎなかつた。

▲

「青柳」の唄の主を、小久は誰にも祕しておいた。桃

奴も、それぎりでお呪禁をやめた。

それから一週間ほどたつて、小久の母のお徳は、孫のお榮とお靜とをつれて、例年のやうに、伊香保の千歳館に湯治に行つた。さうして、土藏の二階には、久松と藤香とが寢た。桃奴は下の六疊で、小久のそばに寢た。

夜ふけて、窓のあたりに、何かの音がしたと覺えて、藤香は眼をさました。

おぼろげな薄い明りが、窓にさしてゐるのに、戸外の燈だと思ひながら、藤香は何氣なく寢がへりした。そこに、藤香は怪異を見た。

襟あしのながい鼻の隆いお婆さんが、結城紬の袢纏をきて、杖を雙手につきながら、段の上りぐちに佇むでゐるのであつた。

「あ」と、藤香は聲をたてた。眼をとぢて、隣りの久松を激しく突きおこしながら、

「ちよつと、ちよつと」とばかり藤香は小聲で呼んだ。

「起きてるのよ、默つて、默つて、知つてるよ」と、久松も小聲で答へた。

そのまゝ默つて、藤香は久松の背なかに、しつかりと獅嚙みついて、夜のあけるまで、二人は息をつめて、蒲團の中で起きてゐた。

▲

久松と藤香とが、夜があけると直ぐに、二階から一しよに下りてきたのに、階下で熟く睡つてゐた皆は愕かされた。

怪異の話は、久松の口から、小久に傳へられた。皆が起きて、小久の枕もとに集まつてきた。

「襟あしの長い、鼻の隆い」といふのを、桃奴は耳にとめて、幼ごゝろに殘つてゐる生みの母の顏を、思ひだしてみた。しかし、母の襟あしも、鼻のかたちも、桃奴の儚ない記憶にはつきりとは殘つてゐなかつた。小久の話を聞きながら、ぞつと心を慄はして、桃奴は猶ほ幾度か、母の昔の記憶を、私かにくりかへし〳〵努めて考へなをしてみても、桃奴の自分の覺えは、どうしてもぼんやりしてゐた。それでも他ならぬ娘の自分

が三晩も「青柳」を彈いた爲に、「もしかすると、ほんとうのお母さんがきたのではあるまいか」との深い畏れに襲はれて、桃奴は齒の根が浮くまでに、猶ほひどく心を惱はせた。また、「さうしたらば、お母さんは死んでゐるのではなからうか」とも、思ひついて、畏しさと悲しさとに、桃奴は自分をわすれて、一時に泣聲をたてゝしまつた。女中のお松が、

「まあ桃奴さん、ずいぶん臆病ね」と言ふのを、小久が直ちに制へて、

「餘計なことを、お言ひでない」と、たしなめた。

桃奴はそのまゝ少時く涙につかつてゐた。

その後は土藏の二階に、寝るものはなくなつて、それから五日めに、梅初音は復た他所に引越して行つた。

▲

それから六年たつた。

名をかへて別の家から出てゐる桃奴は、六年まへに、古川さんに連れらてきて、自分の養子の話をした人にある宴席で再び會つた。さうして、もとゐた梅初音の家の話――以上の物語を、その人に聞かせた。

その人の直ぐそばに、幽靈話の極く好きなMが恰もゐあせた。桃奴の話を傍聽すると彼は非常に悅んで、その翌々日の夜、葭町通の人を訪ねて往つた。

「濱町岡田の先代のときに、小春といふ女がゐた。小春は、なか〳〵の稼ぎ手であつた。さうして、お金を蓄めてゐながら、一人の母を激しく虐待しつくした。そのために小春の母なるお婆さんは、ある夜に井戸に身を投げて、溺れてしまつたことがある。

「濱町岡田の先代は、その井戸に蓋として鍵をかけて稻荷の社を、その傍に建立した

「幾年かの後に、その古井戸を埋め、稻荷の社をも壞してしまひ、その跡に建てたのが、梅初音のゐた家の土藏であると、葭町界隈に言ひつたへられてゐる。」と、葭町通の人が、Mに答へた。

Mはまた以上の話を、新橋通の人に聞かせた。

「桃奴の母か、小春の母か、とにかく梅初音の土藏の二階で、姐藝者の久松と一しよに、お婆さんの怪異を

みとめたといふ半玉の藤香は、今は新橋に出てゐる。さうである。松日の家の八重龍といふのが、その藤香である。」と、新橋通の人が、Mに教へた。さうして、猶ほ「新しい新橋怪談もいろ〳〵ある。支那の革命黨の陳其美と、雙方から深くなつてゐた福松本の巴彌は、その後久吉といつて葭町に出て行つたが、間もなく旦那に引かれて、今は築地の澤屋といふ待合のそばに圍はれてゐる。陳其美が上海で暗殺された日に、巴彌は横に斃れてゐる陳其美の姿を見たといふし、今までも陳其美に購つてもらつた大きな人形を巴彌は記念にもつてゐるだらう

「それから、烏森の五番地の松樂といふ待合の二階でも、朝潮關が、紅梅色の腰まきをした女の、胸から下の姿を見たといふし、まだその他に、隨分有名なところでいろ〳〵の怪談が確かにある」と、新橋通の人がMに言つた。

　桃奴の現在は、彼女の望によつて、書くことを控えて置かう。猶ほ桃奴は、未だ其の生母に逢はずにゐる

新畫壇の中堅と花形

▽新畫壇の中堅と花形

黑田鵬心

栖鳳と廣業とは、今年の文展に如何なる製作を發表するか知らないが、院展に於ける大觀と觀山とはあまり振はなかつた。これを以つて猶大觀や觀山の値を上下する事は出來ないが、新畫壇の中心は既に、其等の大家から移つて新進の作家に在る。花形と目せらるゝ作家が大家に非ずして若い連中に在る事も無論である。今それらの作家について一言するのに、東京と京阪とを區別して述べるのを便とする。

東京に於いてまづ第一に頭に浮ぶのは安田靫彦である。靫彦の技倆は既に第一回文展の「豐公」に於いて認められてゐたが、性來蒲柳の質なる彼は、多く製作する事能はず、第六回文展に於いて久しぶりに「夢殿」を出し、玆に確かなる位置を中央畫壇に得た。それから一昨年第一回院展に「御產の禱」を出し、今年第三回院展に「項羽」を出し、其の史的題材を捉えて、確乎たる手法により、人物の精神を表現する技倆に於いては、他人の追縦を許さゞるものがある。彼に次で擧ぐべき今村紫紅が既に逝いてゐない今は、前田青邨がある。青邨は第三回文展に「竹取」を出だして、其の著想の凡ならざるを思はしめ、第六回の「御輿振り」に至つて大に進歩の跡を見せ、一昨年の院展に至つて、「竹取物語」に於いて、從前から覗ひ來つた歷史畫の完成を見せ、別に「湯治場」を出して、寫生的技巧にも卓拔なる手腕あることを知ら

しめた。而して昨年の院展の「朝鮮巻」では新しき題材を舊き形式に盛つて成功した。今年の院展の「京名所八題」はあまり感心しないが、又別種の方面を開拓せんとする努力は買ふ事が出來る。靫彦、青邨を擧ぐれば次は小林古徑を擧げねばならぬ。古徑は第六回文展に「極樂井」を出してやゝ注目され、第七回には不幸にして入選しなかつたが、一昨年の院展には「異端」を出して、巧に漂渺たる情調を現はし、昨年の院展には「阿彌陀堂」を出して、同じ傾向に一歩を進めた佳作を見せ、『美術新報』は昨年度の賞美章を贈つて表彰した。今年の作品は間に合はなかつたと云ふが既に花形として活躍し、最も將來ある畫家の一人である。ついでに美術院に屬する者を擧げると、長野草風がある、彼は文展の第一回に三等賞を得て以來、文展では第七回に「朝と夕」とを出して、清新の手法を見せ、一昨年の院展に於ける「布晒」は、單純なる配色に成功したが、去年と今年はあまり振はなかつた。石井天風は第六回文展の「日映」が一寸よかつたが、其後はあまり振はず、今年の「木曾谷所見」も、部分的にいゝ所はあるが、全體としてはあまりよくない。其の他荒井寛方、西村齊郎、大智勝觀、牛田鷄村、堅山南風、中村岳陵等も、未だ畫壇の中心とは云へまいが、花形たらんとしつゝあるものと云ふべきである。其の内誰れが最も早く畫壇の中心人物となり得るかは、未だ遽に斷言し難い。無論各自が努力と研究とによつて天才を發揮すれば、其の日は早く來るであらう。文展側に於いて、既に中心を成せる畫家としては、まづ鏑木清方がある。其の美人風俗畫は既に第四回文展の「女歌舞伎」に於て著しく技倆を高め、第八回の「隅田川舟遊」、第九回の「はれゆく村雨」に至つて、其の位置は動かざるものとなつた。池田蕉園も比較的早くから巧みで、文展の第一第二第三第四回と續けて三等賞を得、第七回の「ねがひ」、第八回の「中幕のあと」、第九回の「かへり路」など、別に大した進境もないが、美人畫家としては既に中心に入つてゐる。其の良人池田輝方も結婚前は蕉園に一籌を輸してゐたが、第八回文展の「兩國」、第九回の「木挽町の今昔」に至つては非常に進歩し、細君より上に達したやうである。結城素明は、第五回文展に「鷄」を出して裝飾畫に優れた技倆ある事を知らしめ、第六回文展には「甲ふたる馬」で同傾向に一歩を進め、第七回の「相思樹下把金絲圖」では、他人の追從を許さゞる域に入つた。平福百穂は從來輕妙な畫材を比較的小幅に示してゐたが、第八回文展には「七面鳥」を出し、其の巧妙なる手法は一躍、畫壇の中心人物たらしめ、去年の文展の「朝露」も清新の佳作であつた。山村耕花は、第七回文展の「お國と三左衞門」、第八回の「お杉お玉」、第九回の「春」などで既に認められてゐたが、今回は院展へ「燊火と寂光の都」なる大作を出し、花形の内に入つたと云つてよからう。猶東京の畫家として、山内多門、平田松堂、池上秀畝、水上泰生（今秋から東京に來たいま迄は福岡にゐた）、松岡映丘などあるが、其の花形たり中心人物たるは、將來に俟たねばならぬ。

京都では、まづ中心として確固たる位置を保つものに菊池契月、木島櫻谷がある。契月の第六回に於ける「茄子」、第七回の「鐵漿蜻蛉」、第八回の「ゆふべ」、第九回の「鵜鳥」など、皆佳作たるを失はぬ。櫻谷の第六回

に於ける「寒月」、第七回の「驛路の春」も亦優れてゐた。併し二人とももはや花形といふ時代は過ぎたやうに見える。花形としてはまづ土田麥僊がある。其の第五回の文展に出した「罌」は既に注意を惹いたが、彼れが第六回に出した「島の女」は、其の題材と云ひ、手法と云ひ、ゴーガンを思はしめると云はれた程の奇拔にしてしかもいゝものであつた。第七回の「海女」は更に其の大作で、値もずつと優つてゐた。而して、第八回には「蓮華」を出してやゝ穩和に美しい給を見せ、第九回には又新味ある「大原女」を出し問題となつた。其の典麗の色彩と大膽の手法とは、確かに花形中の花形と云はねばなるまい。平井楳仙は第四回文展で「大佛炎上」を出して注意を惹き、第六回の「こさめの朝」も亦重ねて注目させたが、第八回に於ける「遼河の夏」と「宮苑」とによつて一躍花形の中に入つた。第九回の夏(驟雨、眞晝、夕日)も亦佳作で、其の手法は斷新である。橋本關雪も第二回文展から出品してゐるが、認められて來たのは、第八回文展に於ける「南國」である。其の熱帶的氣分は、第七回に於ける土田麥僊の「海女」にも優る强い色彩を以つて描き現はされてゐた。「南國」の外、「後苑」といふものもあつたがこれは穩やかなものであつた。而して第九回の「獵」にはあまり進歩を見せなかつた。宮田淡仙は、第七回文展の「沈篭容膝」で飄逸な手法を認められ、昨年の院展には、「宇治川の卷」を出し、今年の院展には「沖繩三題」を出し、其の得意の手法を以つて、一種の表現を作つてゐる。小村大雲は第六回文展に「釣日和」を出し、海の寫生的手法で人を驚かしたが、第七回には「放ち飼」に於いて、馬の寫生に努力を見せた。又第八回には「憩ひ」、第九回には「東へ」を出し共に相當の佳作であつたが、あまり進歩はないやうである。猶京都には上村松園、川村曼舟、都路華香の三人が大家として許されてゐるが、中心人物と云へるかどうか、又花形と云ふ程若くないやうに思ふ。却つて西山翠嶂、小野竹橋、松村梅叟、榊原紫峰等が、將來花形たり、又中心人物たる人々であらう。

大阪の花形は云ふまでもなく北野恒富である。其の第五回文展に出した「照日前」は、構圖と云ひ、女の形と云ひ、色彩と云ひ、場中の佳作で、一昨年院展に出した「願の糸」も亦艷に優れ、昨年は文展に「暖か」、院展に「鏡の前」を出し、何れも濃艷人の目を奪ふもので、大阪の女をよく美化して描いてゐる。次に島成園がある。第六回文展に「宗右衛門町の夕」を出して一躍花形として迎へられた。其の舞妓の描法は中々巧みて、構圖も優れてゐた。第七回文展には「祭のよそほひ」を出し、第九回には「稽古のひま」を出し、大して進境もないが、花形たる評判は落さないでゐる。野田九浦は寧ろ花形たる事を通り越して、畫壇の中心人物である。第一回文展に二等賞を得て以後振はず、第七回には「天草四郎」、第八回には「梅妃楊貴妃」、第九回には「發願」を出してゐるがあまり優れたものでない。大坂はまづそんなものである。

以上東西の畫家の中から、新畫壇の中堅と花形とをざつと擧げたのであるが、其の一々の批許は到底許された紙面では出來ないから、簡單に一言して筆を措く事とするが、以上多く述べた内で、まづ文展側では、

東京に清方、素明、百穗、京都に麥僊、栲仙、關雪、大阪に恒富があり、院展側では東京に靫彦、青邨、古徑、京都に溪仙がある。即ちこれを見ると文展の側の中心、花形は東京より寧ろ京阪に多く、院展側では中心、花形が東京に多いと云ふ事になる。而してすべてを通じて、人物畫家、殊に美人畫家と歴史畫家とが多く、自然物畫が少い事は、注意すべき點である。畫壇の中心や花形が、五年位で變りかけ、十年たては一變する事は、十年前と今日と比べて明かにわかる。即ち今日から五年前と、今日から五年後とは又一變するであらう。批評家、鑑賞家として長い月日の變遷を觀てゐるのは興味の多い事である。

▽京都の少壯畫家

文學博士　松本亦太郎

京都の畫家は想念の自由並に製作の自由を大に尊重し個々の畫家は各自己の趣向に從て進んで居る、然かし外部から京都の畫界を眺めると其畫界には脈絡統一があつて個々の畫家が必しも游離孤獨に活躍しては居らない。

京都には南畫の方で二三老練なる畫家が居るが、將來の畫運を開拓する樣な少壯畫家は南畫家中には之を見出し難い。京都畫の主潮は、四條、圓山に其源を有し、其後種々の發達を遂げ、又發達しつゝある畫系にある事は、何人も首肯する所で、京都出の文展審査員は悉く此系統に屬して居る。是等審査員は前代の畫風を繼承すると共に、之を一段發達進展せしめた人々である。

文展審査員を今日の大家とすると、其の後繼者は如何なる畫家であるか、直接の後繼者として今後の京都畫界を負ふて立つ者は木島櫻谷、菊池契月、橋本關雪の諸君であらうとは過去の文展に於ける是等諸君の作品の上から見ても直ちに推斷せられる。櫻谷君は一度審査員になつた事もあつて、今日では最早大家になつて居るが、まだ此大家中に列するには年が若か過ぎる。櫻谷君が敢て奇を求めず、危に近よらず、自ら守る所に據つて、而かも諸方面に堅實に開展して行く所は君子の風がある。櫻谷君は一方に秀逸して、他の方を犧牲に供すると云ふ流ではない、花鳥、人物、山水何んでも描く、櫻谷君の畫は人に好まれぬ事はあるだらう、然かし人に侮られる樣な畫では無い、畫工として櫻谷君の如く大成すると云ふ事は容易で無い、京都畫界の大立物として、押しも押されもせぬ頑丈な位置に立つ人であるが、たゞ櫻谷君の畫風は既成であつて、其の想其の技が將來の畫界に清新の氣を鼓吹すると云ふ事は豫期されない、少壯の畫家や批評家が君の作品に随喜しないのは恐く此點にあるのだらう。今尾景年翁の門下で大家の資格のあるのは今日では先づ櫻谷君丈けである。

菊池芳文君の門下には山田耕雲君や川北霞峰君の樣な相當の腕前があつて立派に世渡りをする畫工が比較的に多く出て居るが中央畫壇の人物と云ふ可きは言ふまでも無く菊池契月君である。契月君は櫻谷君の如く

多方面でない。餘程主觀的であつて、自家の棲息せる主觀的境界を畫面に表現する。手法に於ては隨分古畫も研究し、自然描寫からも種々工夫を凝らして居るが、因襲や模倣に束縛さるゝ所が無い、獨創的である想に於ても人の豫期せざる所に出づる、餘程詩的である、畫盛の趣が、あつて、其作品は人の想に訴え、情操に訴え、頗る高品である。人の感覺を喚り、感情を促すと云ふ如き手段には決して出でない。過去十年間に於て契月君は隨分深山の作品と世に公にして居るが、現在の契月君にはまだ未知數が潜んで居る、契月君の將來に對し多くを期待する事が出來ると余は思つて居る。次代の大家として最も奥床しい所のあるは契月君で畫界の明星として異彩を放つ人である。契月君は廣く俗衆に持て囃さるゝ畫工では無い、具眼の畫家や批評家に深く考量せらるゝ畫家である。

橋本關雪君は以前に竹内栖鳳君の塾に居つたと云ふ事であるし、又最近京都を根據として居らるゝから、假りに京都畫壇の人の中に數へたが、久しく東京に住んで居つた事もあるから、東京畫家としても可いかも譯らない。其畫風には京都風は確にあるが、東京風も鮮くない。人物山水を描くに達者である、其勢や時に猛烈であつて、一寸京都の樣な閑寂の都に落着きさうな柄では無い畫風かと思はれる。京都畫の賽内に於ては、關雪君は彗星の如きものだらう。關雪君はまだ發展の最中だから其歸着する點は何處にあるかよく譯らない。

京都畫界に於ける位置から見、或は技倆から見て契月君と同列に數へらるべき一壯年畫家がある、夫れは西山翠嶂君である。翠嶂君は栖鳳門下の高足である。其筆の洗練されたる事や、其作品の上品なる事に於て翠嶂君の如きは京都に於ては稀である。既に文展に於ても相當の成績を示して居るし、即座に筆を揮つて、直ちに畫成るの妙に至ては契月君の及ぶ所でないのであるが、多くの人の注意する所とならない。これは翠嶂君が餘り京都式に地味になつて仕舞つて、大望（アムビーション）を懐いて居らない爲めである。翠嶂君の程度に達した人にして、若し研究的の熱誠と製作上の努力とが加つたら、日本の畫界に雄飛する人となるのはさう困難な事では無いのであるか、九仞の功を一簣に缺くの趣あるは惜しむべきことである。

京都畫界は甚だ幸運であつて次代の次に來る時期に大家となるべき見込のつく少壯畫家が既に其頭角を顯はして居る。川村曼舟、土田麥僊、平井楳仙の諸君は今日より數へて三代目の京都畫壇を天下に重からしむる人々である。

山元春擧君は後進を誘掖するに於て深切である。春擧君は技巧の熟練を重んじ、徒らに新奇に走るを戒むる、從て春擧君の畫風が門下生を風靡する度が餘程強く、畫の考や手法のみならず、畫題まで一轍に出て居る樣な趣はあるが、概して言へば春擧君の門下には庄田鶴友君を始め相當の技倆のある少壯畫家が比較的に多い。就中異彩を放つて居るのが曼舟君である。曼舟君の得意とする所は山水にある。山水に對する受感性が頗敏であつて殊に山水の沈鬱なる趣致を描き出すに於て獨特の妙處に

出入する。横川の雨後や、夕月の兩作の如きは曼舟君の代表的作品である。彼の樣な大い山水によく自巳の情趣を投入して何等斧鑿の痕を留めしめざる技倆は珍とすべきである。曼舟君は過去に於ける悟人の緒を失はずに進展していつたら必ず山水畫家として大成するであらう。但し大家になる事を餘り急がぬ方が可いと思ふ。

京都の少壯畫家中で京都は勿論、中央の畫壇に問題となり、製作家や批評家の議論の種となつて居るのは土田麥僊君である。麥僊君は繪畫專門學校第一期の卒業生であるが、由來栖鳳君門下の風雲兒である。左顧右眄瓦全を期するより、寧ろ自己の趣く所に向つて玉粹するを欲すると云ふのが麥僊君の遣り方である。男らしく心地がよい。麥僊君の研究は東西古今の繪畫に出入し、殊に自然を如何に描寫す可きかに就ては非常なる苦心をして居る。京都に畫家は多いが、手法の研究に麥僊君の如く骨を折つて居るものは尠い。而して現時代を觀る明に於ても他の畫家に秀て居る、多少は先見があるとも謂へる。隨分包容のある地嚮を基礎として自家の藝術を築いて居る、契月君に比して、其將來に畏る可らざるものにあるに於ては優るとも、劣つては居らない。而して麥僊君の藝術には天空海闊の趣がある。

平井楳仙君は京都の美術工藝學校を卒業してから、獨自に其手腕を鍛錬した、楳仙君の描いたものには山川、草木にしても、人物にしても抒情詩的の趣があつて、悠揚迫らざる所がある、其手法は自然界の深い觀察から工夫したる獨創的のものがある、且つ一方に於て南畫や洋畫の投點描法を自然に還元して自家藥籠中のものとし之を用ひて多大の成功を收めた、自然界の特色を捉えるの鋭利なるに於て、又之を表現するの深刻なるに於て他の企及し得ざる所がある。然かし楳仙君の手法は近來硬化せる趣があり、動もすれば千篇一律的ならんとし、人をして其習癖に倦ましむる嫌が無いとは謂はれない。自繩を裁斷して、手法敗得の範圍を擴める事が楳仙君の大をなす爲めに必要なる事ではあるまいか。

以上舉げたる所は京都の畫界の繼承者となる壯年或は少壯有爲の畫家で、藝術界一般から注目せられて居る人々であるが、なほ此外に今日から見て第三代目の大家となり或は第四代目の大家となる風格を幾らか具備して居ると思はるゝ少壯畫家が尠く無い。年齡に於ては麥僊君と相前後して居る畫家中で既に嶄然頭角を顯はして居る者に小村大雲、村上華岳、榊原紫峰、星野空外、山下竹齋等の諸君がある、文展に於ては何れも三等賞級の位置を得た。玉舍春輝君も矢張同等の格に立つて居る。就中大雲君の進程は確實なるものがある。而して是等の畫家と殆ど同等の段階に達して居るのは、大村廣陽、廣江霞舟、小野竹橋、松村梅叟、榊原苔山等の諸君てある。數年を經過するうちに是等の少壯畫家中より拔群の者が出るのであるが、今日では三等或は褒狀級に潛伏して居る。

京都には上村松園女史を筆頭として女流畫家が多少ある、松園女史は、榎谷契月君などゝ同格で寧今日本に於ける第一流の女流畫家であるが、近き將來に於て此格まで進むであらうと思はるゝ女流作家はまだ心當りが無い。

京都出の文展審査員は五十四五歳を首にして居る、而して今日有爲の少壯畫家は二十四五歳である。或は意外に若い人で、名を成す人が出るかも知れぬが夫れは恐く例外であつて、今後二十五年間位は上に擧げたる畫家が京都の畫運を進展させ、而して又日本の畫界に花を咲かせる事になる、然かし夫等畫家の趣向から推すと京都の畫風は今後の二十五年に於て甚しく變更しやうとは思はれない。矢張今日進んで居る所を漸次發展生長させる事になり、堅實なる進歩を現して行くのであらうと思はれる。

▽私の期待した、又は期待してゐる日本畫家

林田春潮

十年前に、日本畫の青年作家に對する期待といふと、誰でも安田靫彦氏に眼を注いだものである。それ程、氏はその頃に於ての日本畫の寵兒であつた。然し、今はその期待に對する負擔を拂つてゐる時である。氏にして病氣でさへなくば、そして美術院に居なければ、今頃は文展審査委員の中にその名を見出されてゐたかも知れない。然るに、それが病氣である爲めに、或は美術院に居る爲めに、世間的に注目されないで、僅に一部の畫家、鑑賞家の間だけに推讃されてゐるのは惜いことである。私は、その病氣を惡むよりも、その運命を呪ひたい。

安田氏の輪廓の小なるものに小林古徑氏がある。氏の形式の整理に於ける技巧的能力は、人に超えたものであるが、その作の上に流るゝ冷たい理智には、私をして戰慄させることがある。氏が第二の安田氏であるか否かは、玆に問ふ必要はない。氏には意志の强さがある。私は、それが氏の未來に光を齎らすものだと思ふ。

前田青邨氏も、小林氏と同樣に美術院の誇であらう。氏の筆の運用に關する伎倆は、富田溪仙氏のそれと共に日本畫の異彩であらうが、それが、孰れが大に名を成すかは、今のところ、タイムに對する謎であらねばならぬ。美術院には尙ほ大智勝觀氏がある。私はこの人に眼を離してはならぬと思つてゐる。

鏑木淸方氏、池上秀畝氏、田中頼章氏、松林桂月氏、結城素明氏、津端道彥氏、小坂芝田氏、尾竹竹坡氏、町田曲江氏、そして野田九浦氏、文展で二等賞を取つた是等の諸君は、文部省から、また世間から、未來を豫約された人達である、然し、その中には最早文部省を、世間を、裏切つた人があるかも知れぬ。又、期待さるる程の資格がないのに、何かの機會で豫約さるゝやうになつた好運兒もないではなからう。それだけに私は、諸君の總てに期待を寄することには躊躇されねばならぬ。私は、この標準を離れて、私だけの眼に映つた人々を擧げて見る。

鏑木淸方氏は、最近一二年の間に慌だしく世間に押出された人であるが、それは氏の經歷からいつても、伎倆からいつても、決して分に過ぎ

たことではない。たゞ、氏は、これから挿畫の方を如何するか。取るか、捨てるか、その取捨如何が氏の未來に運命の色を分けるであらう。私は鏑木氏のことを考へる時に、何時でも山村耕花氏を想ふ。また北野恒富氏を想ふ。山村氏が裝飾的に向つてゐるのと、北野氏が感覺的の行き方を執つてゐるのとは浮世繪畫家の面白い對照だと言へる。結城素明氏は、その美術學校助教授といふ社會的位地からしても知らるゝ通りに、今では最早既成品である。私は文展審査委員として氏を見る時が遠いことではあるまいと思ふ。結城氏がかうした華やかな道を歩いてゐるのに、氏と雁行してゐた平福百穗氏が、世間的に酬はれないのは、どうした譯であらう。氏は天分を有つた有望なる畫家である。私は、そのペンで描かれた挿畫にさへも愛着を有つてゐる。美術協會派の作家では、私は小坂芝田氏を採る。また松林桂月氏も、この派では注意すべき人である。尾竹々坡氏は、氏ほど文展を利用したものはなからう、同時にまた、氏ほど文展から迫害されたものはあるまい。私は氏と文展との交渉を考へる時に、文展の功罪といふ問題が浮んで來る。餘りに多く期待されて、その爲めに却つてその期待を裏切るやうな結果を餘儀なくされてゐるのは町田曲江氏である。然し、私は、氏の素質からして、その期待に報ゆる時が必ず來るに相違ないと思つてゐる。野田九浦氏は既に大家である。然り、上方に於ては。

京都では、私は先づ土田麥僊氏を擧げたい。氏は、その作が常に研究的であるのと同樣に、その態度も据いてゐるが、その天分に惠まれた優越せる才能と、熾烈なる藝術的欲求とは、確かに未來の光榮を暗示するものである。氏と並んで私に注目さるる小野竹橋氏は、土田氏よりも鋭さがあり、シニツクはあるが、氣局は、力は、土田氏程に大きくない。平井楳仙氏は常識化された小野氏であつて、榊原紫峰氏は裝飾化された平井氏であらう。若しそれ、文展で二等賞を取つた諸氏に至つては、私は、僅に菊池契月氏と川村曼舟氏とに、期待すべき多くの優越性を有つてゐることを認めてゐるだけである。

終に、私は行樹社の水島爾保布、小林源太郎、小林波之輔の三氏を擧げる。水島氏の惡魔的、小林(源)氏の自然主義的、小林(波)氏の標徴的、私は日本畫の思想的水準は、まだ此の三人の脚下にもとゞいてゐないやうに思ふ。

▽彼等の進んで來た路

澤村胡夷

注意の水準を破つて、忽然として頭角を擡げ來つた作家に對しては、一般の期待は意外に大きく、また意外に深いものである。この事は彼が比準の外に立つて伸上つて來た所の、異常な力量に伴へる一個の特權であるが、而かも亦一面に於て悲痛なる制裁ともなる。之を實際に徵しても、當初極めて華々しく出立した作家が、彼の實力以上に大なる期待

をうけたが爲めに、忽ち凋落してゆくことは其例に乏しくない。而して其の出立が華々しかつただけ、その凋落も亦た一層早い場合が多いのである。

かゝる作家、或意味に於て物好きな世間にかつぎ上げられた此種の作家が、自己の突如として變轉した内外の生活の爲めに、前後を忘じて、自分自身の力量を顧みず、また自分自身の修養をも忘れて、遂に藝術的生涯を自ら葬つて了ふやうな事は、隨分有勝ちのことである。此種の作家の凋落の徑路に就いては、固より一々の場合に於て異つたものがあるのだが、之を考察すると二樣に分かたれる。一は彼れの放恣な反省なき内的生活の爲に、粗漫の作風に陷つて、遂に自らは救れ難くなつて了ふものである。即ち彼が粗漫の作風にあつて自らは天賦の才力をたのんでゐる裡に、自己の眞の力量の不足の爲めに凋落して行くのである。二は之れとは正反對に、彼れが自己の見地を自覺して、彼れに對する一般の期待に悖らざらん事に汲々として、爲めに心意の緊張を來たし、其製作の緊縮を來たすものである。此二方面よりする苦がい經驗をもたずに、自己の道を行き得るものは、眞に實力ある作家たることは云ふまでもないが、要するに彼は自己の力量を充分に測定しつゝ、一歩一歩、正確健實に其道程を辿り來つたものと見なくてはならぬ。現時、少壯畫家として其名を知られてゐる者のうちには、無論健實な道程を辿り來つた者もあるが、また可成不自然な過程をとつて來た者もある。從つて現に華やかな製作を見せてゐても、其未來に於ては暗黑なあるものを想起せしむるやうな作家も少くないのである。かやうな事實と結びつけて、現時の少壯作家を考察したならば何うであらう。固よりその作家達が今後何ういふ方面を取つて行くか、と云つたやうな事は、自分の關知する所ではない。けれども彼等がこれまで取つて來た方向だけは、明かにする事が出來るのだから、此點に於て作家の各は、現に如何なる道程にあるか云ふ事を見たならば何うか。此問題に就いて先づ鏑木清方氏を考へて見んか。鏑木氏は他の多くの若き作者達よりも、何れかと云へば、質素な路を取つて來てゐる。若き人々の中には一躍して名を成したやうな人も少くないのだが、氏は寧ろ名を成す事に於て少しく後れた感がないでもない。然しながら氏の畫家としての道程は、多少の動搖を有つてはゐたが、比較的に健實であつた。其倦まず撓まず、專念に美人畫を圖してゐる努力は、遂に何物かを作り出さねば止まない概があるやうである。

予をして、若し予一個の好惡と云ふやうな事に基いて判斷せしめるならば、鏑木氏の美人畫は、予の好まない所である。又かゝる感情を除外して考へて見ても、氏の美人畫に就ては、幾多の不滿足な點を有してゐる。けれども、かゝる問題を離れて考へると、氏が自己の信ずる路を健實に進んで來たことは、やがてまた氏の將來に對しても大なる囑望をなすものであらう。最近一兩年に於ける氏の作を見ると、一昨年の文展に於ける『隅田川舟遊』、昨年に於ける『晴れゆく村雨』の如きは、幾多研究のあとが見える。けれどもその研究は、單なる技巧の問題に過ぎないのではなかつたか。即ち氏の進路は是等の時期に於ては多く形式上に止

まつてゐたのであつて、內容の問題には餘りに接觸してゐなかつた。唯々最近に於て見た所の『港の女』に至つては、漸く內部的研究の方面に觸れて來たことを示すものゝやうであつた。けれども之れとても、尙ほ充分なる研究とは云はれないことは無論であるが、氏がとにかく其研究を一步宛深くしてゆく事は、氏の藝術的生涯の上から見て最も興味あることゝと云はねばならない。氏の健實なる、寧ろ平板なる道程に比べて、一層波瀾に富むものは土田麥僊氏であらう。土田氏はその出立點に於て鏑木氏よりも內部的に煩悶を重ねてゐた。吾人がやゝ氏の將來に就いて興味を有ち初めたのは、氏が『海女』を文展に出陳した頃からであつて、それ以前に於ける『髮』の如きは寧ろ注意を惹かなかつた。『海女』はたしかに謂ひ知れない苦悶を藏してゐたものゝやうであつて、當時にあつては其作法は寧ろ破格に近いものであり、尙ほまた氏自身に於ても幾多の不安がその底に流れてゐたかのやうに思はれたのたが、とにかく其大膽なる試みは、氏が新らしい道程の第一步であつた。然しながらその翌年に於ける『散華』は氏の前途に疑團を投じたものとしか思はれなかつたもので、寧ろかの作の如きは、氏の藝術が如何やうにでも變轉し得る一基點であつたのである。昨年に於ける『大原女』は、確かにこの基點から躍進して、新らしい世界を打開したものと云はるべきだが、然し氏の藝術は固より尙ほ未だ完成せられたものではない。此點に於ては鏑木氏の藝術よりも氏のものは尙ほより多量の變易性を有つてゐる。より多量の不安を藏してゐる。即ち彼の藝術的生涯がやゝ普通の水準を破つて初まつた觀があるだけに、そこに氏の將來が依立し得ると共に、そこに亦氏の蹉跌も潛まねばならない、乃ち氏が其前途を如何に啓いて行くかゞ、今後の登場に於ける一個の大なる案件である。

土田氏に比べて、多少その徑路の類似してゐる者として、前田靑邨氏がある。前田氏はもと古土佐の研究に耽り、その結果を以て新技巧と新意想との問題を解決して行かうとしたものである。土田氏は前田氏とは稍々其趣を異にして、寧ろその製作に於ける研究上の焦點を近世に向けてゐる。即ち或は光琳宗達の方面に、或は桃山時代に於ける諸家に向つて、その研究點を向けて行つたのである。而して屛風のやうな大畫面に向つて意想を練つて行つたのだが、前田氏は畫卷物に向つて其研究をつゞけ、從つて亦此方面に特殊なる興味を發見したやうである。而して前田氏の研究は可成大和繪の實質に觸れてゐたのであつて、その結果も亦他の在來の土佐派の畫家輩の企及すべからざるものであつた。殊に氏は、古土佐の畫法を研究した手腕を以て、濃厚なる賦彩をなし得るは勿論、更に好んで水墨を用ひ、之を以てかの古畫法を行つて、新趣味を出ださんとしてゐるのだが、是は慥かに或度の成功を告げてゐる。けれども氏の技巧は細巧なる方面に向つて展開して行かうとし、其藝術は漸く一個の局限を畫かうとしてゐるのであつて、氏が伸びて行くか否かと云ふ事は、自ら之を破毀する力があるか、何うかと云ふ事に依つて決定せられるであらう。此點に於て氏は明かに土田氏とは正反對の狀態を示してゐるやうだ。而して氏の製作上の缺點は、動もすると、氏が自己の達者

なる手腕の爲めに累せられて、技巧上に機智を弄せんとする風のある事である。從つて氏の作品には輕妙なる點に於て、他の及び難き特色があるけれども、到底深刻なるものを捉へ難くある。例へばかの『竹取』に於ても『朝鮮の卷』に於て、或はまた『湯浴場』に於ても、或は最近の『京名所八題』に於ても、輕妙洒脫の點に於ては、何人も企及すべからざる妙所を有してゐる。從つて氏の作品より得る印象は、主として淡白な情趣である。而して同時に強い大きな精神ではなく 細い鋭い、而して垢拔けのした氣持である。然し、そこに少しも靜かな世界は表出せられてゐない、絶えず動き流れてゐる世界が表はされてゐるのである。之れに比すると、安田靫彦氏の如きは確かに沈着な氣分をその作品に示してゐる作家である。

安田氏はかの土田氏の如く、强烈なる内省から出發してゐない。けれども氏は必ずしも靜寂の境のみを嗜んでゐるのではない。また土田氏の如く藝術的煩悶を表面に表はさうとするものではない。また前田氏の如く其才分を露骨に極端に投出して了はうとする者でもない。氏の『夢殿』の如きは、深き反省と其可成古畫に對する深い研究とをもつてゐたに拘らず、其形式に於ては少しも場中を壓倒するやうな、また他を威赫するやうな誇張を認めなかつた。一昨年に於ける『お産の褥』の如きはやゝ其形式に於て、誇張はあつたけれども、倚ほ氏の靜かな反省が加はつてゐた爲めに甚だしい燥裂の弊を見なかつた。賦彩に就いての氏の手腕に至つては、現時少壯畫家中に於ても類例の少いことを認めねばならないのだが、此點に於て氏の作品には他の企及し難き味ひを以つてゐるのである。氏の作品には必ず一種の感傷的(センチメンタル)な氣持が湛へられてゐるが、此點に於ては稍々前田氏と似た所があり、而して土田氏とは多少其趣を異にしてゐるやうである。然しながら最近に於て見た所の『項羽』は、賦色に於ける氏の手腕を示してゐることは爭はれないが、全局に於て氏の伸びやかな、而して豐かな空想的素質を滅して了つた觀がある。而して感傷的なる點はあるけれども、そはすべて人爲的な性質に近かく、自からなる力を認め得られないやうである。想ふに是は技巧上の興味にのみ囚はれて了つた結果ではなからうか。何れにするも、氏の製作が一歩宛煩悶の境界に進みながら、而かも明るき世界を顧みないかのやうな傾向を示してゐるやうである。

思ふに彼等の道は、すべて廣く自由であるべきだが、而かも彼等は自己の道を決定すると共に、自ら之を狹めてゆくやうである。假令狹めて行くにしても、其路は明るき世界へ向ふものでなければならない。予はこの四人の作者達を考へながら、彼等の未來に就いても多少考へて見ないでも無い。けれども此場合それは餘計な事である。それでなくても予は、未だ言ひ殘したものが、二三有るやうに思はれてならないのである。

(五、九、一九)

▽東西兩京畫壇の中堅と花形

笹川臨風

東の安田靫彦は院派の最も重なるもの丶一である。高邁の識見と、非凡の手腕とを兼ね備へ、古藝術に對する造詣も淺からぬ。一體の調子には柔味があつて、傳彩は極めて上品である。其藝術的良心は實に驚くべきもので一紙片縑も苟もせぬ。若手ではあるが優に大家の列に入つてゐる。小林古徑前田青邨は院派の中堅で、東京畫家の花形であるが、一は極めて摯實に、一は才氣横溢する。古徑は色彩の美を發揮して、青邨は用墨の妙を示す。古徑には稚拙の處があり、青邨には精悍の趣が見える。古徑は靜で、青邨は動である。古徑はのんびりとしてゐるが、青邨はせせこましい。古徑の調子は弱いが、青邨は潑剌としてゐる。之を古繪卷に例すれば、古徑には隆能源氏の趣があり、青邨は伊大納言繪卷の面影を偲ばせる。其差は質と才との相違である。正は古徑に望むべきであらう、奇は青邨の特色である。

京都畫家の中堅なる、菊池契月と木島櫻谷とは既に成熟の期に入つてゐる。技巧の妙は兩者其堂に上つてゐる。之より進むべきの路は其室に入るにある。土田麥僊が寫實を離れて理想を描かんとするは、最も嘱目に値する。其の大まかなる筆致は將來の發展刮目して待つべきものがある。川村曼舟橋本關雪平井楳仙等も亦今一段の工夫を積まば、更に其前途の洋々たるものがあらう。小村大雲の技巧は歳とともに次第に觀るべきものがある。此人をして技巧以外に、其路を開かしめたらば、頗る望を囑すべきものがあると信ずる。富田溪仙が、京都の多くの畫家中に獨り院派の爲に孤壘を守るは、一奇觀で、其奮鬪の狀も思ふべしである。逸宕の筆致は技巧萬能の間に異彩を放つてゐる。此他京都の少壯畫家中には猶觀るべき、將來望を屬すべきものが少くない。

▽青年西洋畫家短評

小杉未醒

青年の西洋畫家――詰り我々仲間の中で、私の頭腦に浮んだ丈けの人の事を極く簡單にお話して見ませう。

梅原君は官能は珍らしくデリケートだと思ふ。そして感情は非常に冷靜な人と思ふ。あの人は西洋には時々出ろ人だらうけれども日本には殆んどあの人一人しかないやうな珍らしい所のある人と思ふ。

有島君は私共から見れば非常な歐化主義の人のやうに思つてゐたけれども、此間支那を旅行して來て支那の美術工藝について頻りに面白がつて褒めてゐた。支那のものを、例へば私などが褒めたとしても當り前にしか聞えないが、それが有島君を經て聞くと、又支那趣味と云ふものが、更に新しい興味を有つて來る。

留守の中に文展審査員になつた和田君がどうやら一向歸りさうにもないけれども、あれでずうと其儘歸らずに今年を經過したら可なり面白からうと思ふ。和田君のこつたから或はさう云ふ奇拔な芝居を打つかも知れない。鋭鋒の猛烈な事和田君の如きは少ないと思ふ。常に崇拜的追隨者を率ゐてゐたのは死んだ靑木君とそれから和田君であつた。畫家としての性格でない、何處か違つた强味とチャームとを有つてゐた小英雄とでもいはうか。

石井君の頭腦には一つの摂子も緩るんでゐない。頭腦を器械とすれば實によく造られた器械だと思ふ。あの人の藝術も處世法も何物にも一つの矛盾もない。私はまだ石井君の昂奮した所を見た事がない。だから彼の疲れた所も見た事はない。

森田君は長い間の親友だが、あの人は洋行して繪が巧くなつたよりも餘計人格がエラクなつたと思ふ。セザンスが繪に影響したよりは、もつと頭腦に影響したともいへる。

凡そ山本鼎君位藝術の苦しみの多い人はあるまいと思ふ。私などは見切りを附けると云ふ事を進歩の一階段にして行く積りだのに、彼は百年の壽命があつても解決されさうにもない問題と勇敢に四つ相撲を取つて居る。或時は彼は我々の爲めに煩悶苦心の選手となつてゐるやうにも見える。

同じやうな年輩の靑年畫家でも日本で仕上げてそれから洋行した人と、西洋で仕上げた人と割合に容易に分類が出來るやっだ。それは前の連中が洋行の日數が少く、後の連中が洋行の日數が多いと云ふ時間の差の問題ばかりではないだらうと思ふ。

全數の割合からは、日本畫家よりは西洋畫家の方に有爲な若手が多いかとも思ふ。然し死んだ今村紫紅君のやうに、所得を捨てる事の勇猛だつた種類の人は西洋畫家に少い。蛇は年に一度皮を脫ぐけれども、今村は蛇以上に皮を脫いだ。

前に云つた連中の外に安井君と南君とを數へたいけれども、南君とは會つた事が無し、安井君とは話した事が無い。人間を離れて藝術のみを見ゐては面白くない。人に安井君と長谷川君とを相對比して話す場合がある。然し長谷川君のは未だ動いて止まず、安井君は略ぼ安井君を成してゐる。健康の勝れない人はどうしても自己の完成に急ぐ傾があるやうだ。此點日本畫の安田君なども例にはなるだらうか。

靑木や今村は健康がさう氐くないとは思つてゐなかつた。彼等の最後は殆んど發死の如きものであつた。だから彼等の藝術は斷層面をなして居る。

坂本君が巴里の我々に寄越した手紙の中に彼は例の如く、御宿で牛を描いてゐて、世人や友人と話をするよりは牛の腹の下に寢轉んでゐる方が餘程氣樂だ、牛は實によい話相手になると云ふやうな意味の文句があつた。坂本君は身體が極く小さい人だけれども、彼の沈着と寡默とは恰度牛のやうにドッシリと重々しい所がある。

年齡は或は靑年でないかも知れないけれども、長原氏と滿谷氏とは、

動いて止まず、求めて厭かない其態度で、時々青年以上に活潑だ。長原氏の現在の藝術は元からあゝ云ふ風で、それが今になつて認められたと云ふ譯ではないだらうと思ふ。然し靜に考へて見ればあの人の年々の進歩が思ひ出されて來る。

滿谷君が巴里のアトリエで今までの慣用手段を振り捨てゝ新らしき樣式に移らんとしたその當時の煩悶苦心は、恰度近所にゐて長い間の交際(つきあひ)ではあるし私共にも見えてゐた。勿論今の滿谷君の新樣式には少からぬ問題はあるが然しあの巳にある點まで達した聲名と年齡とに顧慮しないで、猛然として自己革命を遂行した元氣を飽くまでも我々は買はねばなるまいと思ふ。そこの所の苦しみは今村の元氣横溢な蟬脱よりも苦しかつたには相違ない。

青年畫家と云つても、もう大抵世を超した連中だ、然し其連中に廿代から誰も認めてゐた連中で、殆んど落伍者なく今に及んでゐる連中である。後から突進して來る新らしい勃興者は今の所餘り見當らない。（談話筆記）

▽新畫壇の中堅と花形

紀 星峯

こゝに新畫壇と謂つても、廣く洋畫界には渉らない。たゞ専ら新日本畫家に就いて云ふのであるが、其等の人々とても甚だ多く、その畫壇の範圍も隨つて廣い。けれど其等新畫壇の人々に、近時概觀せらるゝ著名な一事象は、彼等は直接にはさして時勢に敏ならぬが、時勢の產んだ文展に對しては非常に鋭敏となつた事である。これは主として文展は彼等個人に名譽名聲を與へ、公衆は彼等の作品審査格、二等賞格、入選格などゝ階級を附して、觀賞し、賣買するに至つた爲めである。そして名譽にも物質にも活きねばならぬ彼等が、必然的に文展に强く死活問題を感ずるに至つたことゝ、從來各畫會の一大事業とし生命としてゐた展覽會の有形無形の效果が、官營の文展に依つて更に倍加された事などの結果、（一）各畫會の基礎が動搖し、その獨立が危くなつた。（二）畫壇の中心が移動した。（三）益々入賞の競爭心を刺戟し、畫壇の花形プリマドンナの榮枯盛衰が劇甚となつた。歷史を有てゐる美術硏精會や、會員の多數な巽畫會でさへ、今は不況に苦んで、たゞ昔日の盛觀を憧れてゐる狀態である。多數は少數に、大團體は小團體に、或は分裂し、或は結束して、種々の小畫會となつたものゝ如き、其の存在すら人に知られないものもある。たゞ僅に再興美術院が洋畫の二科會と共に、文展に對して反抗の聲を揚げて居るのを多とするに過ぎない。そして人物の去就と共に會の中心點も移動するし、去秋一時に名聲を歌はれたプリマドンナにも比すべき花形も、今秋は早くて失脚して世に忘れらるゝほど、變轉が劇しくなつたから、今の畫壇の中堅や花形に就いて確たる事は言ひ難い。

けれど文展は今や畫家に唯一の登龍門となつた。苟も今日刀を揮ひ筆

を執り畫布に親しむ程の者で、この門を憧憬せざる者はない。實に文展は我が現代美術界の中心點となつてゐる。けれど文展には中堅と認むべき者がない。若し強いて求むれば審査員であらうが、然し幾多の審査員中人格に於て藝術に於て中軍の將たり得る唯一者は勿論、團體と見做さるゝものも、有るとは聞かない。從來の如く審査員の變更と合議制と採點法とが並び行はるゝ限りは、文展に中心の彩色が見え惡くからう。昔て學者批評家と畫家とが審査員であつた時には、個々畫家の審査員等が東京對京都新派對舊派と對抗の態度を取つたとしても、必ずや同時に公平な第三者のあるべき筈である。たとひ現今の如く畫家本位とするも、その中何人が最も中心人物たり得るかは思惟し難い。

然し手腕ある畫家は文展を年々出世の晴舞臺としてゐる。そして事實一躍して花形の名聲を得らるゝのである。尾竹竹坡、野田九浦、堅山南風氏等の如きはその好例である。今秋の文展には如何なる人が花形の名聲を得らるゝか、勿論判る筈がないが、現在では文展の花形が少なくはない。即ち京都の畫家中では、木島櫻谷、菊池契月、橋本關雪、土田麥僊 平井楳仙の諸氏、及び上村松園女史などがその人であらう。そして此等の諸氏に注意すべきは、櫻谷松園女史の外は青年たることゝ、契月氏は京都繪畫專門學校の助教諭、麥僊氏は同校の卒業生、楳仙氏は京都美術工藝學校の出身なれば、京都の花形の半數は、學校教育に關係あることゝ、麥僊、關雪、楳仙及び松園の諸氏が竹内栖鳳氏の影響を受けたることなどである。櫻谷氏の師は今尾景年氏、契月氏は菊池芳文氏の養子、そして栖鳳芳文と並稱せられ、且つ共に文展審査員たる山元春擧氏の門下生は見えない。更に此等の花形を藝術の方面より觀ると、何れも想よりは形、殊に筆と色と種々の試みに苦心してゐる。又何れも努作をする。

大阪には北野恒富氏が居る。文展の第五回にその「日照雨」が喧傳せられてから、大阪新畫壇の中心人物と仰がれ、その門から島成園女史の如き若き花形を出した。

文展に現はれた東京の畫家の態度は個々獨立てある。東京美術學校には寺崎廣業、小堀鞆音、川合玉堂、結城素明、松岡映丘氏等の教授及び助教授があるが、此等の中に中心力もなく、卒業生中に文展の花形も少ない。而も個人としての此等の諸氏に記すべき事がある。個人としての寺崎廣業氏を中心として、野田九浦、町田曲江、水上泰生及び閨秀畫家河崎蘭香、栗原玉葉の諸氏がある。たゞ九浦氏は文展第一回に早くも二等賞を贏ち得た以來、更に進境なく、曲江氏は嘗てフランスに遊學したが、今にその實力が窺はれない。小堀鞆音氏は嘗て安田靫彦氏の師であつた。而も靫彦氏は岡倉氏に導かれ、美術院同人となつて意義ある人となつたのである。川合玉堂氏の長流畫塾は山内多門氏を文展に送つた。そして氏は文展の山水畫家として、一時は社會の寵兒であつた。けれど今は同門井澤蘇水、今中素友氏等と共にその中軸たるに過ぎない。結城素明氏は文展の花形であつて、文展にその出身校たる美術學校を代表してゐる人である。川端玉章に學んだよりも、より多く自己の研究に依つて努作をしてゐる。松岡映丘氏も近來文展で名を揚げた。傍畫に洋畫の

様式などを加味した努力の新作を出して。

更に流派の邊から觀ると、文展で聞えた倭畫畫家に松岡映丘氏よりも一層クラシツクな髙取稚成氏がある。三等賞を二回得てから、衰微した新派の恢復が氏に期待されて來た。南宗派には中堅がない。個々の作家中小室翠雲氏の名跡に聞える。山岡米華氏の歿後、審査員に推され、師田崎草雲の遺墨展覧會があつて、人氣が更に加はつたのである。翠雲氏に對し池上秀畝氏がある。南北合派を標榜とした荒木寛畝の門下生、所謂二等賞格の花形である。風俗畫家としては鏑木清方氏及び池田輝方同蕉園の二氏が東京の花形である。池田夫妻は川合玉堂氏にも就いて居るが、清方氏と共に水野年方を師とし、浮世繪の系脉を引いて居る。尾竹竹坡氏の花形時代は去つて既に久しい。

文展に對し、京都派に對し、様式に傾向に最も分明に中心點を示して居るものに美術院派である。こゝでは横山大觀、下村觀山の兩大將の下に、木村武山氏副となり、今や第三回展覧會の旗を押立てゝ、文展に先駆の名乘をしてゐる。花形の若武者には安田靫彦、山村耕花、小林古徑、前田靑邨、川端龍子氏等がある。今村紫紅氏に歿し、照山南風氏頓に衰へたが、長野草風、鴨下晁湖氏等の若殿原が後陣に控へてゐる。今回の院展入選の唯一の女流畫家鈴木けん子氏も、文展の栗原玉葉女史と共に女子美術學校出身の花形である。諸氏の中靫彦氏は最も傑出して居る。菱田春草以來院中第一の花形である。氏を最として以上の諸氏は京都の花形と同じく何れも若い。けれど京都の花形と違ひ、多くは學校出身者ではない。それに今こそ美術院の花形であれ、多くは他より來つた異分子である。靫彦、古徑、靑邨、晁湖氏等は紅兒會員、耕花氏は巽畫會員である。耕花氏の師は尾形月耕氏、靫彦氏の師は、前にも云つた如く小堀鞆音氏、晁湖氏の師は松本楓湖氏、古徑氏の師は今は不遇な病畫家として同情せらるゝ梶田半古氏である。今日では師弟の關係はその人に直きを偽さず、且つ月耕、鞆音、楓湖、半古氏等は、皆〻美術院の會員であつた縁故から、其等の弟子が今や院の花形となつたとて怪しむに足らぬが、然し太觀、觀山氏にはその師橋本雅邦や、京都の竹内栖鳳、菊池芳文氏の如く、純門下生がないのである。此等美術院の花形を、更に藝術の方面から概觀すると、京都の花形が技巧形式に苦心するに反し、寧ろ着想を尙んで居る。彼等の寫實派の傾向に對しては、此等はロマンチツクであり、理想派的である。彼等の作には多く流派師弟の關係が示され、此等の作には先輩との精神的交感が現はされて居る。

我が新畫壇を綜觀すれば、今や中心の歸着點は區々である。けれど大觀すれば、新畫壇は益々東西二京に區劃され、二京各々核心を形成して居る。そしてその核心は日に日に發展して、年々幾多の花形を現はすべき運命で努力して居る。

▽有望なる日本畫家

愛畫樓主人

美術院派の若手では青邨靫彦などは誰が見ても動かない所でせう。青邨は如何にも才筆で、働いて居る。靫彦は何時でも眞面目で、静かだ。青邨は落附いて居る事が出來ない。思ひ切つて筆を揮はねと滿足しないと云ふ風がある。繪の上から云つても靫彦は動かない繪を描く。ジッとして居る間に何かを捉へる。青邨は動いて居る所を描く。技巧で云へば青邨は筆の人、靫彦は色の方に長所がある。此二人を合はしたらよいだらうと云ふ考が始終出る。今度の靫彦の「項羽」は「お産の祷り」に劣る。「お産の祷り」の方はお産の研究もあり、新らしい試みもあつて面白かつた。今度のも傾向は同じであるが、イキ〳〵とした所が缺けて居る。あれは何だか人形を並べた感じがする。之は技巧に屈托し過ぎた爲めではないかと思ふ。項羽の顔の表情もあんまり平凡、背景も單調で奥行が無く、畫面として深み(デプス)がない。青邨の「京名所八題」も青邨のものとして餘り出來のよい方ではない。此前の「湯治場」も同じ筆法のもので、あれ以上にはどれ程も進歩して居らぬやうだ。然し「清水」と「鞍馬」などはよい。「上加茂」は感心せぬ、我々のあの土地に感じるのと大變違つた感じのものだ。

それから川端龍子の今度の作は面白い。之れから先き、どれ程成功するかは勿論未知數である。けれども洋畫を研究して、それを可笑しくなく日本畫に調和して用ひた事は面白い。十年ほど前からもあつた事で、且つ此頃の洋畫家で日本趣味のものを書く人も可なり多くなつたが、今度の龍子のは目新らしい試みである。

文展の方は種々雜多で何が何やら殆んど分らぬ程だ。然し美人畫では清方は動かぬ所でせう。あの人は近年非常に進歩した人だ。私があの人の畫を初めて面白いと思つたのは、元祿風の男女の遊戯を描いた屏風である。其時にあの人の大分進歩した事を認めた。其以前には小說の挿畫などを見た丈けで、あの位の腕のある人だとは知らなかつた。それから以後漸然進歩した。一昨年の「隅田川」も昨年の「晴れゆく村雨」でも文展では確かに佳作である。優品である。只今の所では題材の範圍が如何にも狹い。もう少し眼界を廣くして新らしい方面の研究をせぬと、或は行き詰りはせぬかと心配する。尤も昨年あたりの畫を觀ると、あの邊はなか〳〵よく描いてあつて背景などにも苦心經營の跡が見えるから當人も氣がついて居るかも知れぬが、只特殊の美人畫のみに局限せず、もつと廣い範圍に歩を進めた方がよからうと思ふ。廣い範圍に歩を進めると云ふ事を詳しく論ずれば餘程細かい所まで云はぬと分らぬが、簡單に其一端を云ふと、美人畫を描くにしても美人ばかりで描いて居つたんでは型が極つて了つて行詰るものである。一つには背景の研究、又一つには矢張り男子も描き、又歴史畫なども描いて、人物描寫の諸方面に通達して而して後に美人畫に臨めば、其美人畫にも精彩が生ずる。現に古い浮世

繪の大家になれば決して美人ばかりで腕を鍛つたものでない。清方にも此點に留意せんことを希望する。今迄の所では技巧の人と云ふ事は出來るが新らしい考の人とは許し難い。

輝方も力はあるが今迄の文展の出品で見れば清方に劣る。然し輝方も近年は上手になつた。然し此人も矢張り狹い。どうも文展本位になると新らしい危い試みよりは、一番やり易い、得意の方面ばかりで名聲を維持しようとするから、何時でも同じ調子になつて困る。

蕉園は近頃一向進境を見ない。あの人の名聲を博したのは東京博覽會の「花見」であるが、あれから多少繪の具の遣ひ方などの巧くなつた丈けで近年は大した進境を見ない。それに比べると流石に京都の松園は渾熟してある。東京の蕉園の畫はまだ纏つてゐない。

北野恒富は極めてセンシュアルな繪を描く。自然主義を極く皮肉に發揮する方だ。なか／＼面白い所はあるが實際、畫家としての實力があるかといへば疑問だ。然し兎に角立派な才を持つて居る。今迄の作品は今の世の自然主義的風潮に投じて或一部の青年などに喜ばるゝ、或意味でいへば場當り的のものであつたが、今後の努力次第では相當に面白いものが描けるかも知れない

それから文展には桂月、秀畝など云ふ人があるが、今の所では清方に比べると一段落ちる。二人共舊式の畫で、まだ本當の意味の新らしい生命を捉へて居らぬやうだ。然し桂月の方は畫品も卑しくないし、且つ非常に勉強努力して居るやうであるから、今後に家を爲し得るかも知れない。

京都の方で契月と棲谷とは文展で名を成した人で、今でも其スタンダードを維持して居る。然し昨年の契月の「湘島」は非常の失敗の作である。あゝ云ふ邪徑に陷つてはいけぬ。その他關雪とか麥僊とかいろ／＼の人もあるが話が餘り長くなるから、こんな斷片的なお話で御免を蒙る。

▽文人畫家風の四天王

——未醒、柏亭、百穗、素明——

健堂生

其一

今、東京の畫壇に於て、洋畫家たると、日本畫家たるとを問はず、文人畫家の氣分を有する者は、未醒、柏亭、百穗、素明の四人を擧ぐ可きであらう。此の四人は、其の人物、境遇、畫風ともに各、特色を有して居るが、ともに、未來を有し、畫壇の花形たるを失はぬであらう。其の中、素明は、如何に、また如何なる行程に向つて發達す可きやは、殊に問題とす可きである。

素明に顯はる可くして、久しく著はれ無かつた。彼の著はるゝのは、

其の實力に比して、少しく遲れて居た。併し、一旦、摩名を得てから、後ちの發達は速かであつた。急足の進歩を以て、進んで來た。彼は、將に、第一流者の壘を摩せんとして居る。未だ第一流に非ず。然れども第二流には非ず。要するに、彼の位地は、第一流と第二流との間を彷徨して居る。眞に、彼は、彷徨して居るので、彼の席次は未だ定まらぬ。彼も、腰を卸して居らぬ。腰を卸すべく、徘徊、顧望して居る態度である彼は進んで第一流に入る可き乎、安んじて第二流に坐す可き乎。此處、數年間の勉強に由つて、彼の位地は自ら定まる可く、彼に取つて、今日は、其の、尤も際どい時であると、吾輩は觀察して居る。

素明自から其位地と、天分とを識認しつゝ、相當の覺悟を有して居るに相違無い。近來の彼の畫を見れば、此の意味から、藝術上に於ける彼の煩悶が歴々として見へる。或は、煩悶の結果、彼は自箇の行く可き針路を踏み違へては居らぬかと疑はるゝ點も無いでは無い。

其二

藝術の過路には、必らず煩悶がある。有らねばならぬ。煩悶は、努力である。此の四人の中で、今、煩悶の途に立つて居るのは、素明である併し、他の三人にも煩悶が見える。煩悶の無い者は前路の望が無い。然れども常に起りつゝある煩悶は、煩悶といふよりも研究である。

素明と百穂とは、本來、日本畫家たるが故に、隨つて對照の興味を生ずる。一見したところで、此の二人は、性格の相違が其の風貌の上に現はれて居る。百穂も、其の實力に比しては、世上に知られる事が遲い。彼は、天分の豊かなる點より見れば、日本畫家の中では、有數の人であるかも知れぬ。彼は、平福穂菴の子。穂菴は天才で、四十餘才で早世した人である。百穂は其の父に比すれば、才華の絢爛たるは到底及ばない然れども彼には其の父よりも樸雅な氣分がある。巧は父に若かざるも、剛健は決して父に讓らず。而して彼の畫には浪人的氣分が現はれて居るのは面白いところである。

其三

柏亭は、江戸兒である。彼は舊幕臣であり、吾輩も、彼と、松浦武四郎の事など語り合つた事もある。彼の家に、武四郎は屡々、訪ねて來たのだといふ。此の如くして、柏亭が武四郎のみならず、或は江川坦菴など、舊幕末の人物に興味を有して居るのは、彼の出身から來るのであるが、彼の畫と對照して、何となく感興を覺ゆるのである。

柏亭が江戸兒であるといふ事は、彼の藝術及び趣味の一切を象徴して居る。江戸兒は多趣味で、奇警で、輕妙を特色とする。蜀山人とか三馬とかいふのが、江戸兒文學の典型であつた。江戸兒の畫に於けるも亦た同樣である。勝海舟の批評、多方面的で、寸鐵であるのは、全く、批評に現はれる江戸兒を代表して居る。江戸兒は氣が利いて居る、口は惡るい。其の惡口は趣味が有つて、奇警で、輕妙で、惡口が自から文學を爲して居る。江戸兒の文學には、漱石の如きは破天荒である。然れども

漱石にも、矢張り江戸兒の面影が浮ぶて居る。紅葉山人は、江戸兒の代表者であつた。彼は、氣に入らぬ事があると、其の門人に小言を言ふのであるが、小言が深入するに隨つて、奇警、輕妙、彼は怒つて居るのか小言に調が乘つて居るのか分らぬ。ますく面白くなる。聞かされて居る門人は、餘りの面白さに、始は恐縮するが後には却つて可笑しくなり、覺えず笑ひ出す。然すると紅葉は益怒つて、愈、奇抜な、輕妙な惡口、小言を言出したといふ。柏亭は如何にも氣の利いた人であるが、少しく吃であるから、巧い事を言ふ筈であろうが、思ふ樣に言はれぬ。併し、彼の奇警、輕妙、諧謔は、悉く彼の畫に流露して居る。彼は、畫ばかりせは無い。文章を書かせても、氣の利いた文を書く。畢竟、彼は江戸兒の頭を以て、江戸兒の口を有たぬ。口よりも手が、ものを言ふ人である。

其四

十年前に刊行された未醒の漫畫一年と、一昨年歐洲から歸朝後の畫筆の跡との二册を比べて見ると、彼の變遷、進歩の痕跡は著るしいものが見へる。漫畫一年は、彼が廿五六才、其の筆端に、才氣煥發して、獨歩や戯雲に愛讀せられた頃の漫畫を集めたものである。技巧は今日とは非常な相違であるが、趣味は貫いて居る。「雀の踊は百まで」、今の彼の畫には、矢張り漫畫一年の面影は認められる。青年が中年になつた丈けの相違である。其の上に、彼が天狗倶樂部に入つた天狗趣味、則ち武俠世界の武俠趣味が、「漫畫一年」に附加へられて今日に至つたので、西洋から歸つて、美術院に入つた頃から、舶上の趣味が、漸々、擺脫しつゝあるが、未だ洗ひ落されては居ない。洗ひ落されないのが可いかも知れぬ。また洗ひ落される時は來ぬかも知れぬ。彼は才人である。小山正太郎の不同舍の出身で、太平洋畫會の一頭目であるが、太平洋畫會の唯一の才人である。不同舍に於ても固より第一の才人であるかも知れぬ。併し彼は不同舍に學ぶ事長からず、又た多からず。不同舍出身の第一先輩は中村不折で、師として師匠の人物、氣風、畢竟、小山正太郎の衣鉢を傳へて居るのは、石川寅次である。彼は不同舍の門人としては氣の利かぬ方である。

其五

未醒の才、往くとして可ならざるは無し。唯だ彼の能くせざるところは書ばかりである。彼の畫に比して彼の落款は釣合はぬ。昔から日本畫家の中にも落款の巧い人は少い。但し大雅堂は別物である。現代では、書畫双絶は芋錢である。未醒たる者、謡曲に浮身を窶す傍、書道に潜心せん事を勸め度い。

彼の漫畫は着想を以て勝さる。彼は俳句を試みても巧い。才氣が見へる。漢詩の素養は無いらしいが、確かに漢詩人たるを得るの大分を有して居る。文章も甘い。彼の書く中では、漢文調が尤も精彩を有する。彼の書いた中では、美術院の網飾三條が傑作である。彼は柏亭と共に、畫家中の文章家であるが柏亭とは全然、其の趣味、調子を異にして居る。

柏亭の奇警、輕妙な、氣の利いた點は、未醒は迚も及ばない。

其六

此の四人の中で、畫の基礎技術から言ふと、尤も乏しいのは、未醒であらうと思ふ。併し、畫は一番巧いかも知れぬ。譬へば、彼は舞踊の素養は少くして舞踏技藝も度胸も勝さつて居るといふ具合がある、松井須磨子に似たところが有る。併し吾聲は、此の二人の天分を比較するのでは無い。

未醒は才に任かせて、餘りに才を發揮させ過ぎるかも知れぬ。彼の才が悉く彼の畫に流露して、蘊蓄が少い。柏亭も才氣煥發するが、未醒とは趣が違ふ。四人の中では、素明が、才氣を蘊んで居る。彼は天分豐富といふよりも、其の努力に依つて今日の地歩を占めたといふ可きであらう現在も彼は頗る努力して居る。百穗の畫才は無器用に發揮される。其の無器用な點が彼の長所である。天然の妙趣である。言ふ可からざる雅味が出て來る。此の雅味を未醒に有たせ度い。未醒は自覺しつゝ、此の雅味を畫に現はさうとして居る。百穗は、自覺せずして自然に出て來るのである。

或老人が未醒を半可通だと評した事がある。半可通は酷評である。併し、或は、半可通であるかも知れぬ。其の材料は、舊るい話であるが、日露戰役の時の事である。彼は、侯小村を而忠に、ウキッチを岩永に見立て、ポーツマス談判を漫畫にした。其の畫に、阿古屋が、琴を逆に彈いて居る。或老人は、此の畫の事をいふのである。此の畫は、確に、未醒の失策である。何といはれても仕方は無い。然れども彼は年壯、今日漸く三十六七、四人の中でも尤も若い。それで趣味が廣く、趣味を逐ふて行くのであるから、稀に半可通になる事もあらう。併し、彼が、趣味經驗、年と共に加はり、渾然として大成するの時ある事を、吾聲は堅く信ずるのである。

吾聲は、未醒の失策を素破拔く積りでは無かつた。併し右の漫畫は、新聞に載せたのであるから、記憶して居る人も少くはあるまい。昨夜吾聲は新富座に、我童の阿古屋を見て、頗る興味を催ふした。歸つてから不圖、未醒の阿古屋を憶出したのである。

其七

四人の中で、事務の出來そうに見へるのは、柏亭と素明とである。素明は眞面目な人だから、其の態度が、かく思はせるのであるが、柏亭は眞箇、事務が出來る。彼には事務の才もあり、經營の才もある。彼は、全く畫壇に於ける器用にして重寶なる人である。故に彼は、現今に於ても、文展を除く外、二科會、太平洋畫會、其他、いろ〳〵の會に干係して、到處に幹部になつて居る。珍らしい人である。

百穗と柏亭の畫とは、小品が多い。百穗は、時々、大幅も畫き、筆力渾厚、人を驚かす事がある。然るに從來、文展に出品した彼の畫は皆小さい。一體、文展の畫の跡仕末を如何するかと杞憂して居る人もある。日

本の家では懸ける物も、飾る事も六ケしいようなものばかりである。柏亭と百穗とは、此の點から言へば誠に好適なもので、懸[illegible]、懸物にするには宜しいが、文展では引立たぬ。柏亭は洋畫でけある丈尙ほ可なり。百穗のは全く見すぼらしく見える。併し、百穗が、是丈けの事を承知して居るであろうが、それでも平然として、毎時も、百穗式の小畫を出して居る。譬へば大きな、燦爛たる造花の花環の列べられた間に、草花を出すような態度である。

百穗は文展式の畫家では無い。未醒去り、柏亭去り、若し百穗も亦た去らば、文展に於ける壯年有爲の花役者は、素明一人が踏留まる事になる。

畫家としての素明の態度には中々可いところがある。彼は多作せず、濫作せず。愼深いところが散見する。今日、彼の畫が聲價を維持して居るのは、彼が此の態度を持續して居るからである。吾輩は、彼の畫は、紙本の墨畫が好いと思ふ。他日、彼の傑作は、必らず此の中から出て來るであろう。

其八

日本畫、洋畫といふ區別をする必要は無い。此の四人は、早くから此の見地の上に立つて、進んで來た。美術院が、此の見地を標榜して旗を揚げた事は、世間に對して有力であつた。大觀觀山等の日本畫家を中心とした中へ、未醒が一人飛込んで居た事を吾輩は、美術院の隆興に際し、尤も意味深き一つの事實であると思ふ。此の事實に於て、其の人は未醒であつても無くても、他の有爲な洋畫家であつても、此の事實が藝術史上に於ける價値は變らぬであろう。併し其が未醒であるといふ事は、一入、感興的である。

此の四人は、皆、いづれ劣らぬ漢文趣味である。其の中、列仙傳と水滸傳との趣味を交へて居るものは未醒である。彼の水滸傳が武俠趣味になるのである。列仙傳趣味は、彼が芋錢から誘發されたの乎。或は彼の趣味が、芋錢と投合したのかも知れぬ。併し彼が、兎に角、芋錢から趣味を啓發された事は疑無いのである。而して彼は仙味に於て、遠く未だ芋錢には及ばぬ。雅味に於て百穗にも及ばず、素明にも及ばず、洒脱は柏亭にも及ばず。未醒の畫には覇心が有る。所謂風雲の氣が動いて居る。此の點、列仙傳水滸傳に風雲の氣が動いて居るのは、彼と芋錢と相似て居る。但し、芋錢の畫は風雲の氣を沒して居る。畢竟、固有の地力を拔いて居る。技の至れるものである。未醒は、未だ地力を拔いて居らぬ。力が現はれて居るのが、則ち彼の畫に覇心の見ゆる所以である。吾輩の知るところでは、彼の畫を啓沃したものは、第一、先師五百城文哉、次に芋錢、次に大觀、而して故紫紅が進取蟬脫の力が、彼を刺激した事も少くは無かろう。

終りに、吾輩は言ふ。此の四人はいづれも、現代の畫壇に於ける文人畫家の氣質であるといふは、彼等が東洋趣味であり、浪人趣味であるといふ事に歸着する。其の人物と畫と、四人に取る可きところは此に存するのである。筆を擱くに臨み、四君の健康を祈る。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

再版

日露協約紀念刊行

露國研究

露國の内面的解剖

世界の大勢に通ぜんとする者は讀め

露國を識るは刻下の最大急務也

正價金壹圓　送料二十錢

東京神田區鈴木町十六
同文館雜誌部
振替東京三一六七七

好評嘖々たる本書の姉妹篇

四版 **獨逸研究**（全一冊 紙數五百頁）正價金壹圓 送料十八錢

再版 **支那研究**（全一冊 紙數五百頁）正價金壹圓 送料十八錢

（中付三ノ一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

楚人冠 杉村廣太郎君著

最近新聞紙學

送料金拾貳錢

◁半價版▷

□慶應義塾出版局發行 □四六判紙裝 □五四六頁 定價九拾五錢

本書は新聞紙に關する各般の事項を極めて平易に詳述したる本邦唯一の良書にして發行以來好評嘖々たり。今この書の普及を圖るは一般公衆の新聞紙に對する知見を高め延ひて新聞紙の發達改良を促す所以のものたるを思ひて、此にその半價版を發行し原版の半價を以て廣く世の需用に應ぜんとす。半價版といふと雖も小形に印刷したるのみにて内容は一切原版に異ならず別に原版の誤脫に嚴重なる校訂を施し新に卷尾に周密なる五十音索引を加へたる特色あり。

賣捌所 東京神田區表神保町 東京堂 電話本局一二三番 振替東京二七〇番

(中付三の二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■著者が最も專念苦心に成れるものにて我出版界唯一ッの著述■

稻毛詛風新著

((最新刊))

批評論

思想界の混沌今日の如く甚だしきはなく批評の力に俟つ所今日の如く切なるはなし著者玆に見る所あり批評の研究に專念すること多時。今や漸く體を得て『批評論』一卷を成す。勿論本邦最初の著述たり。斯くして批評乃至批評家の意義價値及び職能始めて明白となる而して本書の特色は批評の體系的研究にあるは勿論なるが更にいふ所の研究が在來の文藝批評といふ如き一面に偏せず。又單に索漠なる論理的形式的考案に執せず。最も廣汎にして根底的なる立場より見ると共に生ける生活に綜合して論議する點に存す。此の意味に於て本書は正に批評主義的見地に立てる著者の生活態度を明にせる一個の哲學觀乃至倫理觀なりといふを得べし。隨て專門批評家は勿論苟くも自覺的に卽ち批評的に生活せんとする人は必ず本書を一讀して確實なる根底と正しき標準とを得るを要す。敢て薦むる所以なり。

四六判上製美本箱入
全壹冊紙數四百卅頁
正價金壹圓
郵稅金八錢

(中付三の四)

日蓮宗大學講師
『法華』編輯主幹
文學士 小林一郎先生新著

日蓮主義講話

四六版上製美本
全壹冊紙數五百頁
正價金壹圓卅錢
郵稅金八錢

最新刊■

日蓮主義は現時の思想界に勃興せる新勢力なり。本書は從來の宗派を離れたる自由の見地より日蓮上人の事蹟と教義とを平易の語を以て講述し日本國民信仰の歸著點を指示せるものにして未だ信ぜざる者は之によりて新なる生命を得べく既に信に入れる者は之により て現今の時勢と宗教との關係を領解し得べし。特に青年の人々に本書の熟讀を勸む。

■■現代的解釋に成れる聖日蓮の教義は之れ■

東京市神田區表神保町七番地 ■大同館發行■ 振替貯金口座東京八七貳番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

評論

支那政界の大觀

法學博士　古川學人

（一）昨今の支那は我國今日の政局と酷似す

近頃政界を騒がして居る三派合同が首尾よく出來上り、其結果一兩年の間に、加藤子を総理とする内閣が出現して、而かもよく官僚派の底意地の惡い壓迫にも堪へ得れば、我日本でもいよ／＼政黨政治が最後の勝利を占むることになるだらう。然し斯くの如き機運に世の中が餘程向いて來ても、政黨政治主義が常に十分の成功を見る能はずして動ともすると挫折するのは、政黨者流の間に内訌反目が絶へないからである。政友會にとつても同志會にとつても、もと官僚は其共同の敵とするところでなければならぬのに、彼等同志の間に動もすると主義主張以外の感情の爭ひに耽ける惡癖があるので、彼等は常に官僚派に乘ぜられて居る。今や三派合同によつて日本の政黨は將に二大黨派對立の形勢に進まんとして居る。官僚派が勝つか、政黨主義が勝つか、我國の政界は今や正に東西何れの方向を取るかの分水嶺に立つて居るかの觀を呈して居る。

今日の支那の政局はまた恰度之と趣を同じくして居るものがある。袁世凱の在世中は、各種の勢力は皆共同して彼を敵とした。然るに袁の死していよ／＼民間黨が中央の勢力とならんとするや、昔から國民黨系進步黨系の反目は再び復活して、今や半年以來堅き提携の許に協力し來りし革命黨は截然として二派に分れんとして居る。是に於て段祺瑞に代表せらるゝ官僚派はこゝに乘ずべき好箇の機會を見出して、得たり賢しと舊勢力の維持擁護を企てゝ居る。段も袁に死なれた當座は一時途方にくれて、民黨の言ひ分を夫れから夫れと聽いて居つたが、此頃は其内部の反目暗鬪を見濟まして、頓と鼻息が荒くなつた。舊官僚から戴かれて居

あるのか、或は自ら進んで之を操縱して居るのか、何れにしても彼は陰性的に案外の潜勢力を有する舊官僚、舊軍人の一派を後援として、頻りに國會に蟠踞する民黨の鼻柱を抑へんとして居る。

民黨が勝つか、官僚派が勝つか、今日の所形勢は全く混沌として居るが、我々政治の研究に從事するものに取つては、支那今日の政局は日本のそれと共に極めて興味多き問題である。譬喩は精密に當らぬけれども議會に比較多數を占めて居る舊國民黨系の未だ過半數を制するに至らずして頻りに焦つて居るさまが、恰度我が同志會に似て居る。政友會とも見るべき舊進步黨系は、矢張り民論の代表を標榜して居りながら舊國民黨派の勢力獨り隆々たるを嫉視して、チヨイ〳〵と官僚系に秋波を寄せて居る。之に乘じて段一派は、官僚の外更に軍閥をも抱き込んで、流石に大勢の飜かすへからざるを察して袁のやうな惡辣な手段には出でないけれども、時々懷中より匕首を閃めかして、年少口舌の民黨連を脅かして居る。兩方共金がないので、何方に動いても捗々しい運びはない。形勢の混沌として居ることは、殆んど我國の狀態と同樣である。折角革命を遣つても、內訌倒れとなつて、下らぬ結末を見るやうでは、誠に殘念である。然し之を以て支那人の能力を疑ひ、彼の當初の決心を非議するものがあるならば少くとも我々日本人としては頗る僭越なる批評である共同の强敵を前に置きながら、內輪喧嘩に肝腎の時間を空費して居るのは、堂々たる我國の政治家でも同じことだ。歷史的に見れば、實は斯うなるのが當り前だとも言へる。何故なれば、同じやうな道は先きに革命後の佛蘭西も踏み、又歐洲の先進國中には今猶矢張り此同じ路を踏んで居るものも少からずあるからである。只支那人にどれ丈けの政治的能力ありやを確實に判斷せんとならば、今後彼等が此問題を如何に切り拔けるかを見るの外はない。日本もうつかりして居ると支那に對してあんまり大きい顏が出來ないかも知れぬ。

要するに今日の支那は大觀すれば、民黨派と官僚派との爭ひに忙殺されて居る。或は大總統と國務院との爭とか、國務總理と國務員との爭とか、又は國會と軍閥との爭とか、箇々の問題を數へ上げれば際限もないが、根本の點を二大勢力の競爭といふことに置いて、さていろ〳〵解剖を下して行けば大抵問題の本質が明かになり、其落ち付く先の見當も大方は附くだらうと思ふ。

(二)支那政界に於ける勢力の分派

細かい問題を說く前に、先づ現に政界の表面に立つて居る諸勢力の政治上の色別を観よう。

第一に最も目覺しく活動して居るものは、言ふまでもなく今度の革命の主動者の連中である。南北妥協といふ目今の形勢から言へば、此一派のみが政界の主人となつて居るのではない。けれども第一革命の時の妥協は、袁を主とし孫黃を客とせるものであつたのに反し、今度の妥協は南方を主とし北方を客とするものであるが故に直接革命を誘起した一派の勢力は、今日政界の表面に最も高く傑出して居る譯である。

尤も今度の革命を實際に擧行したものは、唐繼堯を中心とする雲南の軍人である。此等の連中は、蔡鍔の如き何れかと言へば梁啓超などに近いものも居るけれども、主としては舊國民黨に直接間接の關係を有つて居る人々である。其後革命が各地に蔓延するに及んで國民黨系に屬する各方面の人々が專ら直接に其運動に與かつた。然しながら、今度の革命をあれまでに成功せしめたについては、進步黨系の盡力も亦之を無視することは出來ない。何故なれば、國民黨系の有力者は多く外國に亡命して居つた爲めでもあらうが、帝政問題の起るや逸早く之に反對の聲を擧げて、遂に全國に反袁氣分をあれまでに激昂せしめたのは、全國に散在して居つた進步黨側の人々の力であるからである。中にも今度內務總長となつた孫洪伊の如きは、此方面に於ける第一の殊勳者である。して見れば、今度の革命は、大體に於て進步黨の開拓した地盤の上に國民黨が實際の經營をなしたものと言ふことが出來る。されば革命の步が進んで、主なる中心が雲南から上海に移るや、玆に兩派の頭目は相提携して、討袁の共同目的の爲めに協力することとなつた。此際北采配を取つて居つたものには、第一には唐紹儀があり、之に續いては湯化龍、梁啓超など之に參畫し、追々は張繼等多年外國にあつた者も皆集つて來た。當時我々は此狀態を觀察して、兩派はこゝに多年の反目を忘れて、革命といふ大目的の爲めに快然共同提携したものと觀察したのであつた。

然しながら昔からの沿革を觀ると、此兩派は本來容易に合同し難き因緣がある。國民黨・進步黨の分立は一つには急進主義と漸進主義との對立であり、更に遠く遡つては、孫黃一派の民主共和論と康有爲一派の君主立憲論との爭に因緣して居る。此等の點は今茲に詳說す

るの暇はないが、兎に角、廿年來の舊き歴史を背景として二つの傾向が對立抗爭して來たのである。之に加ふるに第一革命後に於ける兩派の見苦しき暗闘は、益々其間の乖離を來たし、之に個人的感情の疎隔なども加つて、一時は到底相和すべからざるものゝ如く見られたのである。故に此兩派は、强大なる共同の敵の存在する間こそ、僅かに一致を保つて居つたけれども、袁の死と共に敵が倒れ、今や彼等自ら積極的の一大勢力として表はるゝといふ段取りになつては、本來の素質がこゝに再び露出せざるを得ない。況んや南方の勢力は、比較的强勢なる國民黨系によつて專ら代表せられんとする傾がある。進歩黨系の自ら不安と不快とを感ずるのは亦止むを得ない。斯くて梁啓超は第一着に寢返りを打つて黎段に通じた。續いて薄志弱行の評ある湯化龍も亦軟化の色を表はした。茲に於て兩派分立の端は開かれ、比較的少數なる進歩派は、官僚系でも、帝政派でも、來るものは拒まざるの態度を取り、多少其主張を灰色にして、勢力の擴張を計つた。尤も進歩黨の全部が舊國民黨に背いたのではない。實は第二革命の前後から、舊進歩黨の中には、袁世凱に反對した國民黨の一貫したる態度を是認して、暗に之に款を通ずるものがあつた。即ち孫洪伊等の代表する進歩黨中の少壯派は、國民黨に餘程接近して居つたのである。今年の初以來上海に於ても、國民黨の谷鍾秀と進歩黨の孫洪伊とは、常に密接の連絡をとつて行動を共にして居つた。從つて、今日の新らしき分裂の形勢に於ても、舊國民黨と孫洪伊の一派とが一所になり、之に對して、進歩黨系の殘黨は他に種々雜多の分子を網羅して、一つの對抗的勢力を作ることになつて居る。而して此對立は、最近憲法の研究を表看板とする憲法商榷會及び憲法研究會の對立となつてあらはれた。憲法商榷會は八月央頃より谷鍾秀、孫洪伊の計畫し、下旬から九月初めにかけて、多數同志の間に話が纏まり、九月十日を以て成立したものである。發起人としては前記兩名の外、張繼、吳景濂、王正廷等の名がある。所屬代議士三百名と稱するけれども、實際は二百五六十名位だらうといふことである。憲法研究會は九月十二日の相談會で極つたもので、實は八月末から九月初めにかけて出來上つて居つた憲法研究同志會と憲法討論會(後に憲法法案研究會と改められた)との合併したものである。前者は孫一派を除く舊進歩黨系を結束したもので、參議院議長王家襄、衆議院副議長陳國祥等

が牛耳をとつて居る。後者は湯化龍を中心として作られたものである。之には帝政派軍人派の一部も關係ありと言はれて居る。此新團體が所屬代議士二百名を數へて居るところを見れば、或は各種の分子を集めて居るといふ説は事實であるかも知れない。而して憲法商榷會は、何處までも國會中心主義をとり、國會の承認する内閣に實權を有たしめて、聯帶責任を以て國政に當らしめんとして居る。之に反して憲法研究會は超然内閣説を主張し、國務院に權力を集めて、出來得る丈け國會の勢力の侵入を防がんとするのである。兩方共に袁世凱時代に於けるが如き大總統專制の制を排斥することには一致して居るけれども、只政治上の實權を超然内閣の名の下に段祺瑞の一手に置くか、又は責任内閣の名の下に國會の多數黨におくかゞ、議論の分るゝところである。

以上は國會に於ける二大勢力の對立である。然るに今日支那の政界には、此外に國會内部の政黨對立の分類に入らざる他の有力なる獨立の官僚團體がある。之等の一派は今日尚官界の大部分を占め、而して國會の勢力以外超然として永く其地位を維持せんと欲して居る。此勢力が、一面に於て國會内部の反目を利用して舊進歩黨系を操縱し、他の一面に於て又各省の舊官僚を操縱して、少くとも外觀上偉大なる勢力の後援あるかの如くに装うて居る。最近十三省聯合とか、五省聯合とか、頻りに飛電を發して國會を脅かして居るのは即ち此一派の策略であるらしい。

官僚的勢力の一分子たる各省の官僚、殊に軍閥の勢力は、中にも今日案外に重きをなして居るやうだ。一體に支那に於ては地方官は古來、我國などでは想像の出來ない程の大なる勢力を有つて居つたものである。國土が廣く、中央の命令が十分に行はれないところであるから、地方官に大なる勢力を與ふることは必要であり、地方官が又自然と中央の監督の外に大勢力を養ふに至るのも當然である。所謂尾大掉はずといふことは、支那に於ける常則にして、國家の統一といふ點から觀れば、地方の勢力といふものは古來常に一つの大なる煩であつた。故に何人でも確實に支那の天下を自分の掌中に占めんとせば、先づ地方を確實に自分の手に入れなければならない。袁世凱の成功の一つの原因は此點に深き用意を用ひた結果であつた。革命黨も亦此事を忽諸にせず、地方に自黨の地盤を築き上げる事には隨分骨を折つた。雲南擧義に續いて貴州兩廣を連

ねて軍務院を作つたのも此爲めである。獨り之ばかりではない。着々一省々々を手に入れて、民黨勢力の確實なる基礎を作り上げんとして彼等は非常に苦心したのである。無論之には個人的利慾の念といふものも加はつて居たに相違ない。自分一個の地盤を作つて置いて、革命成功の際にうまく割込まうと云ふ魂膽から事を起したものも少からずあるやうだ。湖南の長沙で湯鄉銘を追つた後一時に數名の都督の現はれたなどの醜態は畢竟之から來る。湖北の武昌では八月央ば過ぎ數回革命的の暴動があつたが（此中二十五日の暴動には九人殺された外十五人の捕縛を見たが、其中に三名の日本人があつた）之もあはよくば此肝要の地を民黨の手に占めんとの計劃の一端に外ならない。四川では陳宧を逐ふた後、周駿、劉存厚の勢力爭ひがあり、蔡鍔の成都入城によりて一旦は收まつたが、彼の病を以て去ると共に部下の羅佩金と劉存厚との爭になつたと云ふ事も、山東に於て、吳大洲の周村に據り、居正の濰縣に據れる、皆個人的慾望と革命主義の地方的地盤の開拓との混同によつてあらはれた現象である。此種の現象の一番矢釜しかつたのは云ふ迄もなく廣東に於ける龍濟光と岑春煊・李烈鈞との爭であらう。此問題の裏には、李烈鈞・廣東を以て自己の地盤とせんとするの野心もある。が然し、主としては民黨と官僚との爭と觀るべきものであらう。何故なれば、民黨としては龍を廣東から逐はなければ南方の地盤が確實とならない。官僚から云へば、龍をあの儘にして置けば非常に南方の勢力を牽制する事が出來る。從て岑春煊の方では如何にもして龍を逐はんとし、段祺瑞の方では暗に極力龍を助けた形勢がある。七月下旬英國總領事の斡旋あるも平和の解決を見ず、八月五日には張勳、倪嗣沖等各省將軍連をして連署して李烈鈞討伐の請願書を呈せしめたけれども、未だ解決が着かない。九月初めに至て新任省長朱慶瀾と海軍の薩鎮冰との仲介によつて漸く妥協の端を開き、李烈鈞は北京に入りて參謀總長の任に就き、龍濟光は督軍の印綬を朱に引渡し、軍隊解散費として多額の金を得て而かも一部の軍隊を引率ゐて海南島に退去し、而して新任督軍陸榮廷は朱より更に督軍の引繼をうけて廣東に入城すると云ふ事に落着いたのである。之れで大體民黨の勝利に歸したやうだけれども、龍濟光を海南島に置く以上は、之より多大の牽制を蒙る事は結局免るゝことは出來ない。

斯くの如く各省の勢力といふ問題は、官民兩派によ

つて頗る重大である。而して革命派は機會ある毎に着々官僚系を押退けて自分が之に代らんとして居る。是に於て各省の官吏としては、自分の地位の安全と云ふ事から考へても默視する事が出來ないことになつた。何故なれば、差當り自分達が民黨の排斥の的となつてゐなくとも彼等にして若し中央に志を得ん乎、彼等は早晩自分達を排斥するといふ方針を採るに相違ないからである。且又此等の舊官僚より觀れば、所謂民黨が國民の名に於て我は顏に振舞ふのは甚だ片腹痛い仕業と謂はねばならぬ。何を以て國民の意志と見るか、支那の如き國に於ては何人も之を明白に知る事は出來ない。然るに彼等は一個白面の青年に過ぎずして、國事を云爲することすら鳴呼がましい。況んや實際の狀勢を云ふならば、永年の惰性に基く舊官僚の勢力こそ寧ろ國民を代表する地位に居るといふべきをや。急激粗暴なる青年が、一知半解の智識を振廻して國民の名の下に我は顏に跋扈するのは、惟ふに舊官僚の眼には憤懣の種とならずんば少くとも極めて滑稽に見えたであらう。中には固より青年の思想を危ながつて眞面目に之に反對する氣になつた者も少からずあつたらう。此等の事情よりして、各省文武の高官、中にも實際の兵力を擁する督軍連中は、遂に猛然として民黨の勢力に對抗するの態度を採るに至つたのである。各省中今日已に民黨の勢力の下に歸したものは雲南貴州、廣西、四川の四州に過ぎない。廣東と湖南とは形勢未だ明白ならず、山東は混沌として陝西は已に軟化した。其他の諸省に至つては全部官僚派であつて、皆民黨の排斥する事の上に利益を感じて居る所である。然れば此等各省の督軍連中は、中央政府が將に民黨の掌握に歸せんとするを見て、茲に一個の防守同盟を結ぶに至つたのも事物當然の理である。而して此團結の張本人は張勳と倪嗣沖で、袁世凱の直參たりし段芝貴、陸建章之を助け、山東の張懷芝、江蘇の楊善德、江西の李純、湖北の王占元、陝西の陳樹藩、河南の趙倜、奉天の張作霖、吉林の孟恩遠等皆之に加つて居る樣である。獨り馮國璋が之にどれ丈けの關係あるかは多少疑になつて居る。彼は例によつて首鼠兩端を持し、最近南方派にも餘程接近して居るから、此聯盟に加はつた所が、形勢の推移如何によつてはまた何れに轉ずるか分らない、尙又此等の軍閥同盟は必ずしも此丈けの人間が文字通りに總べての問題について常に堅く連結して居るといふ譯でもあるまいし、中には此間の張、倪の爭の

如く問題によつては反目嫉視するものもあらう。が然し大體に於ては民黨と云ふ共同の敵に對抗するといふ點に於て一致したものと見える。八月五日には已に述べた通り連署して李烈鈞の討伐を宣言し、八月の十九日には南昌に各省の代表者を集めて將軍李純の下に十三省攻守同盟を密議したと傳へられた。最近に至つては、此等の連中は頻りに電報を發して國會を威嚇して居る。然し彼等の威嚇も畢竟は紙の上に止つて武力を集めて現實に民黨を壓迫するといふ事は出來まいと思ふ。彼等が兵を北京に集め、段をして國會を威嚇するに之を用ひしむる事になるを得ば問題になる。けれども、彼等自身は何れも皆足元の危ない連中である。彼等の城下には殆んどすべて革命派の陰謀連中が行き亘つて居る、ウッカリ兵を割くの結果如何なる珍事を生ずるか分らない。現に武昌に據つて南北を睥睨して居る王占元ですら、省内を匪族の跋扈に委して討伐の爲めに手兵を割き得ないではないか。されば彼等の威嚇も畢竟は空威張りに終るの外はないだらう。然しながら民黨としてもまた彼等を無視する程未だ勢力が固まつてゐない。故に民黨の爲に計るに、政府と國會との關係を順潮にし、政府に相當に自由なる行動を許しつゝ愼重に自家の職務を採り、徐ろに勢權を集むるの策に出づるの外はない。斯くして愼重の態度を執りつゝ官僚の勢力に對しては、常に先手に出でゝ行くなら、漸進的に最後の勝利を期する事が出來やう。けれども今日の如く喧々擾々淺薄なる空論に時を費やして居るのでは、或は官僚の乘ずる所となり了るかも分らない。

尙支那の將來を見るについて一つ大事な問題は段祺瑞一身の安危である。今日官僚派と軍閥とを包容して民黨に對する一敵國を作つて居るのは、主として段の聲望にある。段若し中途にして死することあらば誰か之に代るであらうか。惟ふに民黨の勢力は、人を代へても大した變動はあるまい。大總統の地位には代つて立ち得る人は幾らもある。獨り段の地位は、容易に其代りを見出し難い。果して然らば、段の一身に異變あるの時は、即ち中央に於ける官僚系が其中心點を失ふ時、地方の軍閥が據つて以て中央に活躍し得たりし根據の喪失する時である。其結果舊勢力の散裂沒落を見るか、或は民黨に對する時の絕望的反抗を見るか、何にしても政局の形勢今の儘で進むのでは、段一身の存亡は何等かの政變を來さずしては已むまいかと思はれる。

（三）官僚民黨二派の暗鬪

南北妥協後第一の問題たる舊法舊制の復活については大體南方派の說が通つたが、次に內閣役割の問題に至りて行悩みを生じつゝあつた事は已に之を說いた。

此行悩は前にも述べたが如く段祺瑞と唐紹儀との懸引きから來て居る。已に舊約法が復活し、舊國會が其儘再現するものとすれば、舊國民黨系の連中が國會の多數を占むべきは言ふを俟たない。斯くては國會と段祺瑞の官僚主義との對抗となる事も亦明白である。そこで段は民黨の二三子を入閣せしめ、之によつて議會操縱の便を得んとしたのである、然るに唐は其手は喰はぬ、議會多數の後援がある以上、飽くまで官僚系を排けて、純白な民黨內閣を作らうと云ふのが彼の腹である。當初彼は頑强に北上を拒んで段の投げ出すのを待つて居つたのであつた。

然るに玆に突如として地方の軍人連中が活躍を初めた。彼等の蹶起は唐に起たれては自分等が困ると云ふ自發的の考に出でたものか、又は唐を制する爲めに段一派から利用されて起つたものか、よく分らないが兎に角民黨內閣を不便とする點に於ては皆一致したものと見えて、之等軍人派は猛然として起つて段を後援するの態度に出でたのである。是に於て段の勢力は俄然として强くなつた。斯くてウッカリして居れば、超然內閣が成立して爲めに民黨の攪亂せらるる事袁世凱時代の二の舞を演じはすまいかを恐れねばならぬ事になつた。是に於て民黨はまた俄かに態度を一變し、今度は進んで段の內閣に入らんとするに至つた。是れ斯くして一方には敵の懷ろに自派の根據を堅め、他方には斯くして實權を收めた後段の聲名を利用し地方の軍人を制するの得策なるを考へたからであらう。斯くして七月の十九日には孫洪伊、張耀曾が入閣を承諾した。廿四日には范源濂も承諾した。尙之は少し後の話であるけれども、張國淦が黑龍江省長に轉じた結果、谷鍾秀が代つて農商總長に任ぜらるる事になり、南方派が更に又一人を加へた。獨り唐紹儀丈けは尙自重して就任を肯んじなかつたのである。

斯くして民黨は、深く現狀の打破を爭ふ事なくして實質上國會にも政府にも相當の勢力を占め漸次一切の實權を握るの希望は多少見へた。初め北京に於ける優勢の見極めが付かずして北上を躊躇して居つた議員達も、廿日頃より續々上京した。上海に於ける國會議員通訊所も廿八日を以て閉鎖した。やがて國會は北京に

開かるゝ事になつたのであるが、當時民黨の策略は、開會劈頭先づ副總統の選擧を問題とし、段を此空名の地位に祭り込んで、其代りに唐を擧げんとしたのである。元來段の一派では副總統には徐世昌を擁し、自らは國務總理を以て陸軍總長を兼ね、以て依然實權の地位に居る積りである。其爲めに國務員承認案を先づ提出し、段內閣を認むるや否やを最先に決定せしめんと企てゝ居つた。民黨側は即ち此計畫の裏を掻き、副總統選擧案を劈頭第一の問題としようとしたのである。是に於て段も默つては居られなくなり、自派の策士を語らつて大に活動を初めた。第一に彼は自分は假令副總統に擧げられても陸軍總長の職は止めないと宣言した。第二に彼は北京在留の外國人に乞うて、唐が民國第一次の總理として四國財團を出し拔いたと云ふ古疵を名義として、彼の總理就任に反對するの意見を公表せしめた。更に第三に又彼は各省の督軍連を促して頻りに唐內閣反對の電報を發せしめたのである（廿九日）此頃實は、彼は一旦辭意を公にして瀬踏みをやつて見たのであるが、之に對して內外人の間より唐の總理就任の反對の聲が擧つたので、私に計畫の圖に當れるを喜んだのである。斯うなれば民黨にしても今更唐を押立てる譯にも行かなくなる、要するに此狂言に於て、形勢は幾分段にとつて有利に發展した爲めに唐には益々北上するの機會がなくなつて來た。段は表面頻りに唐の北上就任を求むるの態度を裝ひ居りしも、心中實は彼の到來を欲しなかつた事は固より言を俟たない。

（四）國會の成立と國務院の承認

七月末議員は大抵北京に集り、殆んど定足數に達した。廿八日兩院議員茶話會を開いて下相談をなし、八月一日午前十時を以て愈々正式に開院式を擧げた。參列するもの參議院からは百三十八人、衆議院からは三百十八人とある。

當時國會の形勢は、舊國民黨系が多數であるけれども、素より未だ過半數には達しない。上海で活動して居つた時代は、進歩黨系も一所になつて北方と爭つて居つたから、官僚系に對しては優に恐るべき一大敵國であつたけれども、いよ〳〵北京に來て見ると、進歩黨系の嫉視、段の操縱、民黨側の獵官運動等が因をなして結束が破れて居る。此事は前段に於ても已に述べた。而して官僚に對する民黨の結束の如何に弱くなつたかは、最も露骨に八月八日の衆議院本會議に於ける臨時議長の選擧に明かである。議長湯化龍は喪に服し

て暇を請ひ、副議長陳國章は未だ來着せず、そこで假りの議長として吳景濂が擧げられたが、彼の得票は出席議員全數三百二十八の中百九十票に過ぎなかつた。會に之ばかりではない。兩派分立の爭端は一兩日後、陳副議長の來到に接して復た起つた。即ち吳の當選を有効として、依然議長の地位に居らしむるか、又は吳の地位は陳の來到と共に消滅し陳をして代つて議會を主裁せしむべきかといふ問題に於て爭はれたのである。下らない問題ではあるけれども、議論の上ではなかく激しかつた。幸に吳の自ら當選を辭するによつて此爭は自然に消滅した。

斯くの如き形勢であつたから、國務員承認の問題の如きも、當初隱便には解決しまいと思はれた。初めの形勢では、國會は承認權を利用して官僚系の大臣は全部排斥し、止むを得ずんば少くとも許世英と程璧光と丈けは、何うしても斥くるといふ積りであつたらしい。段の總理は承任するの外ないとして、國會の權限を以て彼の羽翼は出來る丈け切つて了はうといふ考であらたつう。然るに此計畫に對して進歩黨系は同意しない。彼等の同意なくしては、當初の計畫に成功の見込の立たないのは知れ切つて居る。若し十分に成分の見込なくして而かも當初の計畫で突進しては、彼等は徒らに時局を紛糾する者との譏を招くことになる。そこで彼等は怨を呑んで全部政府の原案に盲從することに決した。之より先き黎大總統も此點を心配して、八月十日在京兩院議員全部を招待して哀願するところがあつたが、此頃は己に民黨側の考は決定して居つたのである。

八月の央、國務各員の承認を求むるの案が議會に提出された。先づ以て總理承認の案は、二十一日四百十三票の中四百七票の多數を以て衆議院を、二十三日百九十三票の中百八十七票の多數を以て參議院を通過した。次に國務各員の承認案は三十日の本會議に於て問題となつたが、大總統の諮文中に「陸軍總長は國務總理の兼任だから特別の承認を求むるを要しない」とあつたので、之を不當とする論が高く、修正を求むるの意味を以て之を政府に突き返した。九月一日に改めて議に上り、全部原案のまゝ通過し、參議院も亦四日を以て通過した（各員の得たる信任投票の數には固より多少の差はある。）之れで政府も何うか斯うか成立した。只唐紹儀丈けは外交總長に擬せられながらなほ依然として就任を承諾しない。

國務員九名の中、勿論民黨側は多數を占めて居る。

けれども未だ官僚派を十分に壓するに足らざることは言ふまでもない。況んや唐紹儀を缺く以上、他は皆靑二才の集合なるに於てをや。故に北京に於ける政界の主人公は、斯くても矢張り段であると言はねばならぬ。民黨の靑年如何に焦つても、段の地位に動搖を來たさない以上は、官僚系は先づ安心して居ることが出來るのである。

（五）府院權限の爭議と國務院職權問題

民黨の理想は、實權を國務院に收め、國務院をして責任內閣の實を擧げしめんとするにある。國會を手に入れて居る以上、彼等が此考に出づるのは當然であるが、而して斯くの如きは彼等の昔からの考であつて、之に反するものとは常に極力爭つて來たのである。袁世凱在世の時代は、彼は大總統專制主義を振翳したるが故に、民黨は忽ち之と衝突した。今日の總統は袁の如くではない。けれども其代り今や國務總理が先きの大總統の地位に代つて實權を一身に壟斷せんとする。茲に於て民黨は再び段と爭はざるを得ざることになつた。八月の末より九月初めにかけて矢釜しかつた府院權限爭ひや、國務院職權の問題の如きは、皆總理專制の傾向に對する民黨の挑戰に外ならぬ。

府院權限の爭議は、國務總理秘書長徐樹錚排斥の形を取つて表はれた。段は國務院と大總統との中間に、總理の秘書長の一職を置き、大總統の承印を得べき一切の國務は、悉く腹心の徐をして之を取扱はしめた。共結果徐は國務總理の名にかくれて、時としては國務會議の議を經ざる事柄に大總統の承印を求めたり、又時としては國務會議の決議を經たものを自分勝手に握り潰すことなどもある。之に對して總統府の秘書長丁世鐸は第一に故障を言ひ出した。一つには徐の勢力を嫉視するといふ個人的感情に出でた點もあらう。表向きの言ひ分は徐が國務總理秘書長の微官を以て直接大總統に面謁するを不可なりと唱ふるに在つて、八月三十日彼は自ら國務院と大總統府との交涉に關する一つの新案を提議したのである。此中には、大總統は議決には加はらないけれども國務會議に出席するを得るとか、國務員は何時でも大總統に面謁して國務を商議することが出來るとか、國務院秘書長は直接大總統に謁して共承印を乞ふことを得ずとか、又大總統の承印を求むるには先づ當該事務所管の總長の副署を要する（從來徐は各所管總長を無視して只大總統の承印のみを得て居つたのである）と言ふやうな規定がある。之れ明

白に徐の排斥を意味するものである。是に於て徐は大に怒り、此案は總統專制の昔に復つて、實は丁自らか專權を欲まにせんとするの野心に出づるなどゝ誣いた偶々地方官の任命について、內務總長の副署なき文案を通過して來たので、丁は之を徐に衝き返しなどして兩者の確執が段々露骨になつて來た。世間の議論も亦從つて矢釜しくなる。之が色々論議された結果、結局國務員は每金曜は總統府に合同、國務を協議して後大總統と食事を共にするとか、諸法令は國務員の副署を先にして大總統の承認を後にするといふやうなとに定められた。斯くして丁の意見が大體に於て勝つた形になる。其結果國務總理が大總統を無視して專權を行ひ得るの途が塞れた形になる。

國務總理の專權を防がんとするの趣意よりして、國務院其物にも亦內部から問題が起つた。元來民黨連の主張は、責任內閣の制、即ち國務各員は連帶して共意に任じ、重要なる國務は强て會議によつて之を決し、一人の獨斷專行を許さないといふに在る。然るに從來徐の遣り方は全く此趣意に反して居つた。而して彼の專橫に對して內部から第一に非難の矢を放つた者は內務總長の孫洪伊である。八月の央徐の失態を責むるに都合のよい問題が二つ起つた。一つは吉林省長郭宗熙の任命問題である。省長はもと大總統の特任である。從來は總理が勝手に人選して大總統の同意を求むるに止めて居つた。然るに孫內務總長は「北京丈けの內務總長でない。地方官の選叙に內務總長の全く干知せざるは不都合である。責任內閣の本趣から言へば、我亦此問題に與り、任命の沙汰書に副署をするの權限がある」と、いきまいた。次には福建省長胡瑞霖の查辦案といふものがある。彼に劣蹟ありとて、參議院で問題になつたのを、徐は孫を差措いて勝手に胡を曲庇するの答辯を作成して、之を參議院に送つた。之に對して亦孫は非常な激昂の色を示はし、地方官の一身に關する問題について、我を斯くまで無視するならば辭職すると言ひ出した。此事が矢釜しい問題となつて、結局之れも九月初めに至つて「國務院は國民及び各外部に完全なる責任を負ふ」。「各省より申來る事務は各省にて十分審查の上、之れを國務院に送り、國務院にて十分審議の上、先づ當該總長の副署を求めて大總統に進達する」。「國定員は副署拒絕の權があるなど」といふやうな規則を務めて解決がついた。九月四日には國務會議章程なるものゝ發布を見、國務會議は每週三回開會するとか、決議事項は國務總理及び出席國務員署名捺印あるとか、共決定は會議に於て選定するところの一國員より大總統に進達するといふやうなことに定められた。

務斯くの如くにして、段は此等の問題については詰り

大勢に押されて漸次民黨側の意見に屈服したものである。然し此等の規定によつて實權が民黨側に歸するや否やは、之等規定の運用の仕方次第である。只斯んな規則を作つた丈けでは、實權はまだ〱段を離れないそこで民黨側は益々奮闘を續ける、續ければ續ける程段は亦只管防衛を怠らない。

(六)官民兩派更に活躍して勢力を爭ふ

最近になつて此兩派の爭は益々激しく表面にあらはれて來た。今新聞にあらはれたところによつて、主なるものを數へ上げると、先づ民黨側では第一に唐紹儀を促がして俄に北上に決意せしめた。唐が自ら進んで來たのか又は左右から迫られたのかはよく分らないけれども依然就任承諾の意を表せずして、九月十四日上海を出發し、故らに途を海上にとつて天津に向つたのは、如何にも底意地の惡い遣方である。十七日の夜天津に到着して暫らく足を玆に留めるといふことである而して唐の來着が南方派の勢力の上に、百萬の援兵にも等しいことは言ふを俟たない。民黨は玆に大に力を得て、近々南方派大會を天津に開き、新たに勢揃へをして堂々と北京に乘込まんとして居る。唐自身に在ても、此等の同志を後援として一旗擧げんとするの意思あることは、十二日の發電が、彼が數ヶ條の就任條件を段に提出したといふ報道によつても分る。其中には外交官の任用、外交方針の決定は外交總長の自由裁量に一任せよとか、國際借款は必ず外交部の同意を得よとか、軍事上の計畫についても外交總長の參與を認めよとかの條目がある。軍事上の要求は誤報であるといふ後よりの取消もあつたが、何れにしても斯の如きは段に對する降伏の要求に外ならぬ。第二に民黨側は各方面に有力な反對あるに拘らず憲法會議に於て頻りに省制を憲法中に規定せんことを主張して居る。憲法會議とは新憲法制定の爲めの會合である。南北妥協の結果復活されたものは所謂臨時約法であつて、正式の憲法ではない。袁世凱時代已に委員を擧げて正式憲法の起草に當らしめ、それが民國二年の秋草案の形に於て完成し、今や將に之を上下兩院議員の合同より成る憲法會議に下附せんとする間際、突如袁世凱のクーデターに遭遇して廢案となつた。今や約法の復活と共に憲法起草委員亦復活したのであるが、八月七日、廿五名の委員が集まつて起草の業は已に終つた我々に殘つてゐる仕事はないと決議したので、廿日前後參議院並びに衆議院の兩方に於て各々憲法會議速開の動議が起り其結果として正式の國會と相並んで九月五日から憲法會議が開かるゝことゝなつたのである。此會議でいろ〱の事が問題になつたが、最も激しく兩派の間に爭

はれたのが省制の問題である。何故に此問題が矢釜しいかと云へば、之を憲法の中に規定すれば、省長は民選となり、省軍も亦省議會の支配の下に置かるゝの恐あるを以てゞある。即ち地方文武の行政が官僚の手に殘るや、純然たる民黨の手に移るやの大事の問題である。問題が大事な丈け憲法會議其者の間に於ても容易に決定を見難いのだけれども、官僚派は心中密かに冷々として居る事は疑ない。第三に民黨の活躍はまた日本資本家との實業借欵の締結に現はれて居る。陳財政總長谷農商總長と我興亞行司との間に九月九日五百萬圓の借欵契約が調印された。期限は所謂善後大借欵の成立を見ば三ヶ月、然らざれば三年と云ふので、獨立の借欵ではあるけれども大借欵が成立すれば自然消滅すべきものである。公司は大借欵の成立に盡力するを約し、若し成功せば報酬として湖南の水口鎮、安徽の太平鑛山の合辦權を得る約束なさうである。此借欵契約については議會に於ても又民間の論客の間に於ても矢釜しき問題になつて居る。鄭家屯事件と關聯して之を排日的論議に利用するものもあり、又何とはなしに之を政爭に利用せんとして居るものもあるやうだ。何れにしても矢釜しい物議を釀しては居るが、然しながら民黨側の大臣が此れ丈けの借欵を日本から得たと云ふ事は、少からず彼等の勢力を張る所以である。斯くして彼等は最近大に活躍を初め、ヂリ〳〵と官僚派の本壘に攻め寄せて自派の力を以て結局統一の功を全うせんと擬して居る。

此形勢を見て段の一派も油斷なく之に應ずるの策を講じて居る。第一に彼の執つた方法は、各省督軍を誘つて國會を威嚇せしめた事である。此手段は以前からも取つて居つた。けれどもいよ〳〵憲法會議が開かれたと云ふ九月五日の當日に、此等の軍閥は聯合の力を以て次のやうな意味の電報を北京に送り、豫め年少論客の決定せる憲法には承認を與へないといふ態度を示して居る。曰く、憲法の制定は國家の前途に大關係がある。然るに國會議員は何れも年少の學生で、久しく外國にありて法理の研究はつくしたらうけれども、母國の風俗習慣に就いては何等の知識もない。政府は宜しく各省督軍に命じて本國の情勢に精通せるものを選拔せしめ、其の上京して陳述する所の意見を參考に供すべきである云々。更に十五日には十三省の代表者は徐州張勳の宅に會合して、「國會議員は國家の根本を忘れて騷擾を事として居るが故に、之が改造を企つる必要がある。それ迄の間は無能なる國會に代つて、我々が政府監督の任に當り、徒らに騷擾を事とするもの共を取締らう」と云ふ樣な決議をしたと傳へられて居る是れ皆、假令將軍連の發意に出づるものとしても、段に取つては此上もない援軍である。段の之を利用して

國會牽制の具に供して居る事は疑ない。第二に段は唐の上京を聞いて急に借款を急ぎ出した。南北妥協後の政府の財政に苦しんで居つた事は久しい話である。初め陳總長は米國から借り出さうとしたけれども皆成功しない。五國財團にも非公式に頼んでは見たが又埒は明かない。國務院成立し財政當局者も正式に定まつたので、九月四日初めて陳は日・英・佛・露の代表者と半公式の交渉を初めた。九日頃の電報に依れば、話は餘程進んだけれども、尙擔保について外國側は鹽稅剩餘金の外に、も一つ地租か何かを要求したとかでまだ色々行惱んで居つた。然るに九月十四日に至り突然唐が上海を出發したと云ふ報道に接した。彼が乘込んで來ては、世間の注目が專ら彼に集るのみならず、借款の相談も皆唐の所に集まるに極つて居る。斯くては實權自ら彼に歸するの恐あるが故に、彼の先に廻つて己の手で此問題に成功を收めて置かうと云ふので、段は卽夜急に國務會議を開き、十五日の午後に至り忽卒として一千萬磅借入の正式なる申込をなした。抑も金の歸する所は卽ち勢力の歸する所、此大借款が果して誰の手で纏まるかは、今後政局の發展に至大の關係がある。第三に段の一派は又いろ／＼小さい問題について南方派の小股を掬はんとして居る。八月の央上海に起つた阿片密輸問題を楯として、各省聯合の名を以て新法相張耀曾の排斥を需請せしめた如きも其一例である。日本と關係のある事件では靑木中將傭聘の故障といふ問題がある。中將を軍事最高顧問として傭聘するといふ事は、八月の末に相談が纏まり、九月上旬には總統府秘書長より允許の電報を發したのである。然るにいよ／＼契約條項を議する際になつて、卽ち十二日の國務會議は、中將に與ふべき權限の範圍に關して非常な矢釜しい議論を惹き起した。官僚派は出來る丈け中將の權限を狹からしめんとし、民黨側は出來る丈け之を廣からしめんとする。中將と革命派の諸子との關係を觀れば、民黨が中將を押立てゝ軍閥を抑へんとするの魂膽は、之を想像するに難くない。官僚派は卽ち中將の權限を狹くする事によつてこの民黨の壓迫を刎ね返さんと欲するのである。

要するに今や官民兩派は、正に鎬を削つて一進一退勢力の擴張を競爭して居る。其結果如何に發展するやは、尙ほ之を今後の經過に見なければならぬ。（九月二十日）

附記。段祺瑞彼自身の地位に關しては今日多少の疑問がある。一説には彼は必ずしも官僚軍閥を率ゐて民黨と爭はんとするものではない、出來得べくんば兩派を連繫して所謂舉國一致主義の實現を見んと腐心して居るのだけれども、其結果兩方に多少の義理が生じて板挾みとなつて苦んで居ると觀る者もある。併し乍ら少くとも彼は官僚軍閥より推戴せられて我が黨首と目せられて居ることは明である大勢趨向の觀察としては暫く彼を舊勢力の頭目と觀ても大した不都合はあるまいかと思ふ。

天下獨歩の自習書
面目を一新して出づ

文學博士 芳賀矢一先生 杉谷代水先生 共著

（最新發行）

縮刷 書翰文講話及文範

縦五寸七分 横三寸四分 布製美本一册
特價金壹圓四拾錢（正價金壹圓六拾錢）
郵税内地八錢 其他十二錢

縮刷 作文講話及文範

縦五寸七分 横三寸四分 布製美本一册
特價金壹圓參拾錢（正價金壹圓五拾錢）
郵税内地八錢 其他十錢

本書は著者兩先生が獨特の妙技を揮はれ、實用を本とし、雅俗を問はず硬軟を論せず、如何なる文章如何なる手紙でも自習自在に草し得べき細大の方法を、極めて懇切に平易に常識的**斬新の仕組**に由つて説明され、古今内外の代表的模範文を最も豐富に完全に敷陳評釋してある。兩書共に發行以來天下獨味の自習書の名を擅にして二十版以上を重ねたるが、今や嚴密なる改訂を施し、縮閲携帶共に至便なる四六四十截判とし鮮明なる新式活字を以て縮刷し、價亦破格の低廉を以て江湖の便用に供することにした。試に本書を繙られよ。一度通讀した許りでも作文の技倆忽ち上達して、**手紙といふ手紙、文章といふ文章が面白いやうに書けて來るに驚く**であらう。

芳賀博士校閲 富山房編輯部編纂

最新刊

書翰文講話及文範別篇 現代名家書簡集

書翰に熟達するには殊に吾人に親みの深い現代名家の活きた文例を多讀するのが第一である。本書は此要求に應じたもので、作家の多方面に亘つて興味最も饒かなると部門の多種多様で應用最も自在なるとは本書の特色である。「書翰文講話及文範」の讀者はまた此書一部を座右に備へて玩味利用すべきである。

從五寸七分横三寸四分布製美本一册
特價金八拾錢（正價金壹圓）
郵税内地八錢

（中付四の一）

見本進呈（往復葉書申込） 東京神田 **富山房** 振替五一〇 全國各地書店 賣捌

秋季特別號

婦人公論現代女ぞろひ

特價三十錢 郵税二錢 中央公論社

● いよく出ました。現代婦人の權威!!!

● 人知れぬ妻の悲しさ樂しさ

軍政文外實 人治家交業 家者官家

▼涙を飲んだ秘密の出征……外岡中將夫人
▼警視廳に呼び出されて……小久保代議士夫人
▼苦しい原稿生活の半面……小山内薫氏夫人
▼良人に從つての外國行……井上侯爵夫人
▼捨る前に一度使ふ心懸……櫻田助作氏夫人

新時代の婦人の思潮

▼男女性的道德論……平塚明子
▼若き友へ……與謝野晶子
▼古き新しい女……下田歌子
▼婦人同盟論……西川文子
▼女、人、母……山田わか
▼自由離婚論……西川松子
▼女子大學入學の要求……岡田幸子
▼若き命に理解なき保護者……原田皐月
▼無用視さるゝ主婦の語學……櫻井靜枝

家庭改良意見

（全國各地の四十名の主婦が實際に嘗めた經驗談に苦心談）

私の好きな

戀もの語り

▼戀の女王……田村俊子
▼住吉物語……長谷川時雨
▼好きな戀二つ三つ……尾島菊子
▼私の好きな戀のヒロイン……小野美智子

（附錄）

いよく出で愈々面白い連載小說体載するに忍びず附錄として載す

▼捨兒……森田草平
▼兩國の秋……岡本綺堂

趣味ある女の讀物

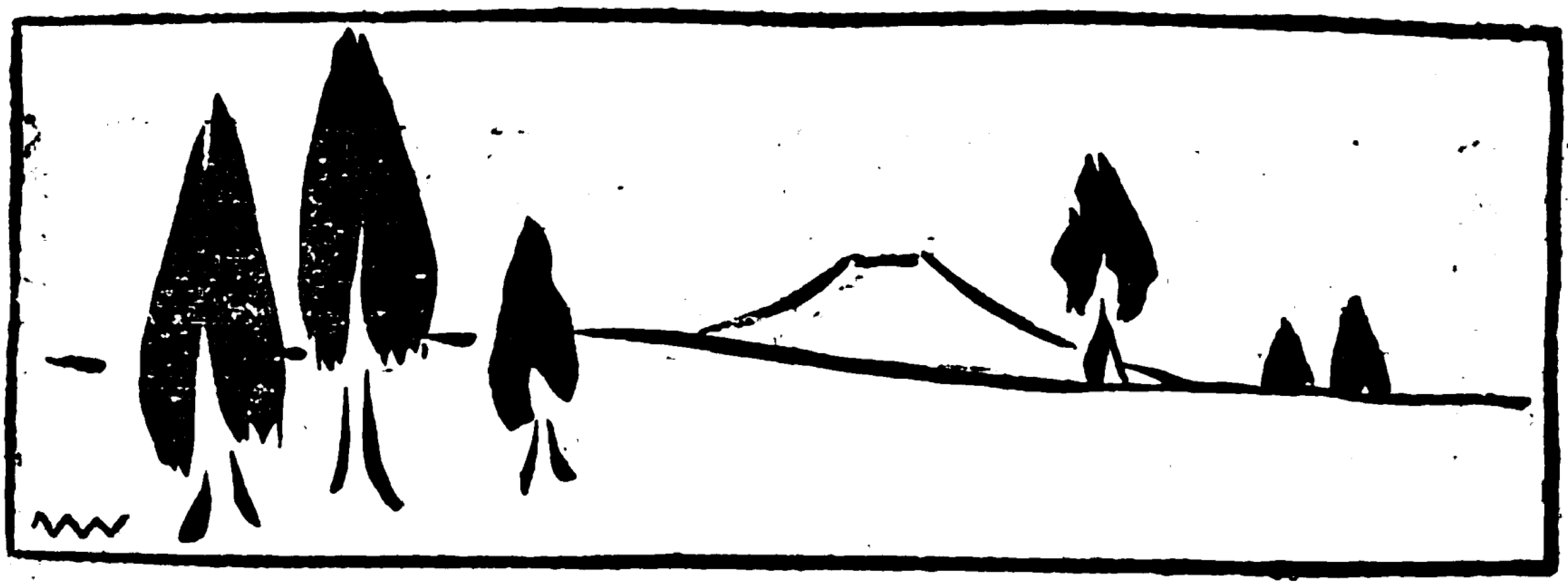
▼姑と別れるまで……日向きむ子
▼私のカチューシャ……松井須磨子
▼畫家の妻の觀たモデル女……岡田八千代
▼男は斯うして女を誘惑する……中平文子
▼私の鍵をかけない家庭……三宅花圃
▼上流婦人界の話題……某博士夫人
▼奥樣の藝妓に學ぶべき點……相馬良子
▼女の觀た女の心……磯村春子
▼美人となるの法……小口みち子
▼人物評論現代女百人……吉野花子

●●● 文學者 書家 女醫 樂家 女優 音

にならうとする婦人へ

田村俊子
池田蕉園
吉岡彌生
久野ひさ子
森律子

● 中央公論と共に是非愛讀を賜へ!!!



伊香保土産

正宗白鳥

特等室もぎつしり詰まつて、汗臭い暑さに息苦しかつたが、電車が澁川の町を離れる頃から、車窓に吹入る風が刻々に涼味を増した。私の側に腰掛けてゐる赤ら顔の老人は、高崎を出た時から私のために頻りに伊香保の說明をしてゐたが、山に差掛ると、彼方此方と指差して、近傍の地勢を敎へて呉れた。廣い裾野を曳いてゐる赤城山が右手に鮮やかに見えた。利根川に懸つてゐるといふ色の白い板東橋も明かに顧みられた。久しく山氣に觸れたことのなかつた私は、足を勞せずして山を登れるのを喜んで、煩さ過ぎるほどの老人の話をも快く耳に留めて、爽かな左右の眺めを貪つてゐた。榛名は薄墨色をして左に右に聳えてゐたが、やがて鮮明な姿を見せて目の前に立つた。

「あれが相馬ヶ嶽です」とか、「あの土の崩れてゐる崖が見晴しと云つて眺めの潤いところです」などゝ語りつゞける老人の言葉に、私は最早耳を貸さな

くなつて、連れを促して下車の仕度をした。車中では別れ〳〵でゐて殆んど言葉をかはさなかつたゝめ華美な裝ひをしてゐる女達を、汚れた仕事着のまゝの風體の見窄らしい私の仲間とは、今まで老人には氣づかなかつたらしく、それと知ると、不思議さうに見廻はした。

妻と妻の母と妻の妹と、私を合せて四人の湯治客は、他の湯治客のするやうに、先觸れの電報によつて出迎へに來てゐる宿の男衆に數箇の手荷物を托して、俥で旅館へ向つた。幸ひに今朝空いたばかりの二階の二室つゞきの上等部屋へ通された。

「いゝ景色ね。なんて凉しい所だらう」女達は部屋に入ると、異口同音に云つた。

目の下の庭には一面に秋草が咲いてゐた。杉林の上には白い雲が漂つてゐた。私は外の景色を一瞥したゞけで、直ぐに貸浴衣に着替えて湯殿へ急いだ。男湯の方には誰れも入つてゐなかつたので、私は湯口に身體を寄せて、肩を打たせ腰を打たせ、腹や手足を湯で揉ませて、いゝ氣持になつてゐた。やがて女湯の方でも母や妻やが賑やかにお喋舌をしてゐるのが夢のやうに聞えた。

十日も滯在するつもりでこんな溫泉場へ來るなんて、二三年前の私の身には夢にも見られないことだつた。妙な廻り合せでかういふ贅澤な眞似の出來る身分になれたのは、有難い仕合せには違ひないが、貧しかつた昔を懷しむ思ひは、理窟でどう壓えつけても頭から去らなかつた。……湯の中は別々だから何を考へてゐやうと勝手だが、此處を出ると自分の氣儘は出來にくいので、自分一人うつかり鬱いだ顏なんかしてゐやうなら、直ぐに母の目が光るに違ひない。……惡意のないことは分つてゐても、何故だか周圍の目が私には目ざはりになつて仕方がないのだ。

熱湯で逆上せたのか、頭がくら〳〵し出したので、湯殿を飛出して冷水で顔や頭を洗つて、座敷へ戻つて長椅子に弛るんだ身體を投掛けた。杉木立の間や萩などの草叢の間を、派手な日傘を翳して往來してゐる美しさうな女姿が頻りに私の目を惹いた。ふと簾で仕切つた隣の廊下を見ると、同じ電車に乘つて來た男女が欄干に寄つて立つてゐた。女の方は色が白くて度外れに大柄であつた。此方を顧みたので私は些つと目禮したが、女は無愛相に目を外して部屋の中へ入つた。

「あゝいゝ氣持だ」と母の聲を先に、三人がぞろ〳〵歸つて來た。

「此處の湯に入ると肌が滑らかになるんですつて」と、私は黑いのは黑いなりに湯光りのしてゐる皆んなの顏を顧みて云つた。

「何ですかね。箱根なんかとは異つて少し濁つてるけれど、身體には利きさうですよ」母は上機嫌で手荷物の仕末をして女中や若い衆への心付けもしてから、「昨夕は碌に眠らなかつたから、兎に角一休みしませう。お前達も橫におなりよ」

「私些つとも眠かあないわ。此處の空氣をよく吸つてゐると、頭がすーつとして來るんですもの」妹のお藤は何時までも立つて向ひの山を見入つてゐた。

母や妻は裾の方へ着物を掛けてごろ寐をした。その寐息に誘はれて私も長椅子に凭れたまゝ假寐をした。どのくらゐ眠つてゐたのか、ふと目を醒ますと、驟雨が爽快な音を立てゝ降頻つてゐた。

「ふうちやんは一人起きてゝ退屈だつたらう。もう何時ごろか知ら」

「時間はいくらも立たないのよ。皆んなの寐顏を見てると面白いわね」。

妹の言葉がこの時の私の耳には皮肉のやうに聞えた。妻の寐相は見つともよくはなかつた。金鍍金の前歯で下唇を嚙んで骨太い手を邪魔物のやうに投出してゐた。

「夕御飯を食べてから金彌を迎へに行つてやらうかね」と云つて、私は念のために電車の時間表を調べた

「出迎へなんか止した方がよ御座んすよ。雨は降つてるし。……私、金彌が來るまでに飽きるほど此處の景色を見て置かうと思つてるのよ。あれが來ると屹度騷々しくなつて落着いちやゐられないでせうから」

「賑かでいゝぢやないか。どうせ勉强に來たのぢやないしさ」

「私先つきからさう思つてたのよ、一人々々別々の部屋にゐたらいゝだらうつて。そして、御飯時なんかに時々一緒になることにしたらよかあないか知ら」

「何故そんなことを云ふの？」私は自分の思つてゐることを妹が云つてゐるやうな氣がした。

「折角山の中へ來てゐながら、馬鹿騷ぎして暮しちや詰らないと思ふわ。それぢや東京にゐると同じことですもの」

「馬鹿話をして寐たり起きたりしてゐるのが湯治場の有難いところなのだよ」

　私は年頃のお藤が何か不平を有つてゐるのか、氣取つてゐるのか、稍々もすると人と化さないで自分だけ超然としてゐたがるのを可笑しく思つてゐたが、表面で柔しく取合つて同感したり反對したりしてゐると、私一人を理解のある話相手のつもりで、小說本の中の女の云ひさうな事を口にしたりするので一種の慰みになつた。容色はさうよくなくても若い女から「兄さん〳〵」と、親しげに呼ばれるのは、

惡い氣持はしなかつた。

生來嚴つい目をしてゐる私も、屋代家へ來てからは、つとめて笑ひを浮べるやうにしてゐたが、お藤に對する時には殊にわざとらしい媚びが見えるのか、妻から一二度厭味を云はれたことがあつた。今もそれを思出して、ひそかに興がりながら、お藤を長椅子の側へ呼んで煙草に火を點けさせて、

「杉林に雨の降りかゝつてる景色は何とも云へないぢやないか。寐てゐる者にはこれが見られないんだね」

「日の照つてゐる時よりも、雨に打たれてゐる方が秋草も美しいのよ。御覧なさい、蝶々が飛んで、揚羽の蝶もゐますよ」

「家の庭へも萩を植ゑやうかね」

私はお藤とすれ／＼に腰掛けて、目の下の七草を見分けながら、どれが藤袴か吾木香かと無邪氣さうに言合ひなどしてゐた。

「筆菜のやうな形で、淡黑いやうな色をしてるのが吾木香よ。去年天野さんとこへお月見に行つた時に、生けてあつたから、私よく知つてゐるわよ。兄さんはよく物を知つてらつしやるけど、花のことゝ女の着物のことにかけちや全く盲目ね。ダリアを知らなかつたりして」

「どうせ私は野暮な骨頂ですもの」

「でも兄さんのやうに絹も木綿も一緒こさに思つてる人が本當に通なのかも知れないわ。……兄さんは見かけが野暮でお腹の中が通なのね」

「はゝゝ」私は揉られたやうに感じて噴出した。人の身や世の中の裝飾にかゝはつたあらゆる物に些しも訓練されてゐない私が、そんな物を生命としてゐる家庭の人となつた不調和が可笑しかつた。下の貸別莊から番傘を差して出て來た脊のすらりとした女中の身裝を批評して、際立つて目につく帶の黃金色の太い筋を、あれは一本獨鈷といふのと敎へられて、「ぢや、筋が二本なら二本獨鈷といふのか」と云つて笑はれたりした。

「來年の夏はふうちやんと一緒に避暑になぞ出られなくなるのだから、そのつもりで入らつしやい」と私は思はせぶりの口を利いた。

「何故さ……」お藤は私の肩を搖ぶつて、「兄さんはまさか小樽の支店へ轉勤なさりやすまいしね」

「北海道へなら行きたいね、行くかも知れないよ。だけど、今僕の云つた譯はふうちやんの身の上に關係した大事なことなの。大抵想像がついたでせう。……そのことで私からゆつくり貴女に話したいと思つてゐるの。何時か二人きりで散步にでも出た時に話すことにしようね」

「えゝ。……何のことだか私には些とも分らないけど」

お藤は空呆けてゐた。雲を摑むやうな有振れた緣談の一つで、事々しく當人の意中を索る必要もないことなのだが、十日間の滯在の無聊を慰める餘興の一つとして、不意にこれを思ひついたのだつた。

人には聞かれぬやうに、いゝ具合に私達の話を打消してゐた驟雨も次第に霽れ模樣になつて餘沫が冷たい風に吹かれて私達の顏を嬲つてゐる時分に、眠つてゐた二人は前後して目を醒ました。

「雨の音を夢現で聞いてゐたよ。も一度お湯に入つて來ませう」

母は行李の中から皆んなの着替えを出して置いて、女達を誘つて下りて行つた。

末弟の金彌は、私達が平生の慰勞として招待した親戚の同太郎氏と連立つて豫定の時刻にやつて來た。で、私達は町の散歩を明日に讓つて、私は新客の酒のお相手をした。客は額際が禿げかゝつてゐる中老人で、私の妻の叔父分に當るのだが、皆んなから「同ちやん」と呼ばれてゐた。この人が一人加はつてゐると、私も何となく氣が樂になるのであつた。

同ちやんは今こそ貧乏はしてゐるが、私などゝは違つて、若い時分には道樂をしつくした男で、唄も唄へれば一寸した踊くらゐは踊れた。玉突も少しは心得てゐるし、弓術にかけても少しは腕に覺えがあつた。

「私は湯治場に五日や十日一人でゐたつて退屈はしませんよ」と、自慢げに云ふと、

「貴下は道樂にしても一つに凝つてれば、それを本職にして立派に世が渡れたらうにね」と、母は冷かした。

「なあに藝が身を助ける境涯にやなりたかないのでね、どんなに零落れても心持は殿樣でさあ」

「お蔦は三味線を持つて來ればよかつたね。さうすれば久振りに殿樣の踊りを拜見するんだつたのにね」

「いやなこと」妻は眉を顰めた。

「同ちやんの道化踊りの地を彈くなんて御免だけど、湯上りに浚つて見たいわね」と、お藤が云つた。

「止せ〳〵三味線なんか。僕は花札を持つて來たよ。……同ちやん、いゝ加減で酒を止して花合せをし

ませう」と、金彌は信玄袋を開いた。花札や懷中電氣や兩眼鏡などが入つてゐた。

賭事でもないたゞの遊び事には、同ちやんはあまり氣乘りがしないらしかつたが、でも首は振らなかつた。「ぢや、もう一杯頂いて」と、私の酌で收めの杯をぐつと呑干してから、花札を手にした。電燈の下で皆んなが車座になつた。私もお突合ひに仲間に加はつたが、勝負けはどちらでもいゝので、心は外の方へ散つてゐた。義太夫の流しや新内の流しやバイオリンの音などが取かへ引かへ宿の周圍に聞えてゐた。妻は札を手にしながら、口三味線で外の流しに間を合はせた。

「ぢや貴下一人で行つて入らつしやい。私そんな西洋人の乘るやうな籠に乘つて、皆んなに顏を見られるのは厭です。貴下は私を見せ物にしても平氣なんだから」隣室の女の甲走つた聲がふと私の耳に入つた。

「誰れがお前を見せ物にするものか」男の方は聲が低かつた。「お前は重くつて二人ぢや舁げないんだから仕樣がないぢやないか」

「見つともない、四人の駕籠屋に舁かれたりして。第一不經濟です」

「分らない女だね。普通の駕籠だと、重い者には一人扣えの駕籠屋を附けなくちや駄目なんだ。それよりやも一人増して腰掛けて行つた方がどれほど氣樂でいゝか知れない。たつた一人前一圓の相違ぢやないか」

「一圓でも無駄に費つちや詰らないぢやありませんか。貴下は不斷私に經濟觀念がないと口癖に云つてゐらつしやる癖に」

「何を云ふ？。……お前が榛名を見たいと云から……」

「いゝえ、行かなくつてもよ御座んす。貴下お一人馬に乘つて遊んで入らつしやればいゝんですよ」

妻は私と目を見合はせて冷笑を浮べた。が、私は心の中ではこんなたわいのない爭ひを嘲つてゐなかつた。男を憐れむやうな羨むやうな氣持が徂徠してゐた。

「姉さんは兄さんと打合せをしてるよ。目付が怪しいなあ」と、金彌が云ふと、お藤は顏を上げて迂散臭い目付で二人を見比べた。母は微笑しながら煙管を叩いた。

「さあ、皆んな泰然自若としてやりたまへな」と金彌は前を合せて膝坊主をかくした。

「高慢ちきなことをお云ひでないよ、子供のくせに」妻は弟の云つた見當外れの言葉に不快を感じてゐたのか、つんけんして云つた。

「何だい。二十二になつたつて大人ぶつた顏をするない。僕だつてもう六年立ちや二十二にならあ。歳といふものは自然に取るものだからなあ」

「はいはい左樣で御座い」同ちやんは道化師の口調を眞似た。そして、これを機會に面白くもない花遊びに終りを告げやうとした。

「おや、謎々でもやりませうか」と、私は持つて來た遊藝雜誌を出して、隱句や謎の問題を出した。金彌の頓興な答へは皆んなに腹の皮を縒らせたが、中で一番機敏であつたのはお藤であつた。云ひ當てると昂奮した得意な色を顏に現はした。

「當節は謎までがハイカラだから私などには一寸察しがつかない」

同ちやんは問題が出るたびに思案にあまつてゐが、やがて自分で問題を出した。

「どうです、この一座の中に始終考へてる人間がゐるが誰れでせう」

「可笑しな問ひね。母さんか知ら」

「私が始終考へことをしてゐるやうに見えるのかい」

「さうでなければ外にないわ」

「いゝえ、名前の上から判斷するんです」と、同ちやんは言足した。

皆んなの名前が持出された。昔は高塚健一で今は屋代健一と呼ばれてゐる私の姓名判斷もされた。私自身も考へても見たが、私の名には物を考へてゐるやうな分子は含まれてゐなかつた。後の姓の方が前のよりも語呂がいゝ。……私は高塚の姓にまつはつたことを知らず〳〵回顧してゐた。

「分りませんかね。それは拙者ですよ。同太郎どうだらうと始終考へてるぢやありませんか」

同ちやんはさう云つて聲高く笑つたが、他の連中はあまり喝采をしなかつた。

翌朝は皆んな揃つて石段の町を上つて湯元まで散歩した。誰れも伊香保は初めてなのだから、昔風の遊廓式の宿の造りが面白く思はれた。二間間口に仕切られてゐる部屋から浴客が頭を並べて往來を見てゐる樣子が馬小屋に似てゐると同ちやんは冷かした。枕に就いてゐる女の頭を氷嚢で冷して介抱してゐる男もあつた。婦人向きの温泉として名高いほどあつて、女客の多いこと〳〵。下の方から振返ると坂の行止りの伊香保神社まで洋傘と洋傘とが擦れ〳〵につゞいてゐた。都でも見られぬやうな華美な姿

が狹い通りに群がつてゐた。

「かう贅澤になつちや手輕に湯治には來られなくなりますね」と、私は艶めかしい顏や身裝に氣を取られながら云ふと、

「全くさ。これぢや亭主もやり切れませんや。うつかり女房を連れて來られませんよ。今の顏に薔薇倅のある年增を御覽なさい。あの歲をしてどうです。娘の差すやうな派手な縫模樣の傘を差して、指環を三つもそれに帶留の金具にもダイヤか何か光らかして、足の物まで引くるめて大した金目になりますぜ。」と、同ちやんは勢ひ込んで云つた。

「そして、容色のいゝ女が多い。さう拙い面は見あたりませんね」

「女護島へ來てるやうな氣持がするから悅しい。……だが、此處は諸式が高いやうだから貧乏人の來るところぢやなさゝうだ。先つきに湯元のロハ臺に休んでゐた東京者らしい老婆がこぼしてましたぜ。金を棄てに來るところだ。喉を締めて財布をふんだくられに來たやうなものだつて。言草が面白いぢやありませんか。親指ほどの海苔卷一つが三錢につくつてね」

「お止しなさいよ、そんなさもしい話は」と、妻は佛頂面して云つた。

同ちやんは恐れ入つて苦笑して、お喋舌を止めた。母は早くも土產物を選擇をしながら左右の店先に目をつけてゐた。金彌は空腹を訴へて甘い物や菓物をしこたま買込んだ。それから金彌の發起で八千代園の樂燒へ行くことになつたが、妻だけは公園の入口から一人だけ道を外れて宿の方へ急いだ。

私にだけは妻の態度が多少氣になつたが、皆んなに隨いて松林の中を下りて行つた。冴えた夏らしい

日は木の間に洩れてゐたが、清凉な氣は脳天の心までも侵した。撓な萩の露は素足に快く觸れた。振で肩に滑らかに着こなしてゐるお藤の縮緬の浴衣の袖が白萩の上を辷つて行くのが繪のやうに見えた。生中な髪結ひさんよりも遙かに上手だと云はれてゐる母が、娘可愛さの丹誠籠めて結つてやつた銀杏返しはふつくらと一糸亂れず、猪首もさう目立たなかつた。……馬子にも衣裳とけなす氣になれないどころか、無風流な私も、華美な裝ひに心惹かれて、貧乏臭い身裝をして側を通つてゐるものを、見下して自分達を誇るやうな氣持がした。私は口笛を吹いた。學生時代に愛誦したエンディミオンの二三句を口すさんだ。"A thing of beauty is a joy for ever, its loveliness increases" ……が、その口笛もその詩吟も下宿屋にゐた時分の口すさみとは異つて、今の贅澤な身の上を謳歌する聲であつた。……「お母さん。紀念にこの公園を背景にして寫眞を撮りませうかね」と、私はお調子に乘つて云つた。お母さんの御機嫌はよかつた。

樂燒場には可成りの人が寄つてゐた。私達は器用無器用の差別なく文字だの繪だのを湯呑や一輪差しや盃やめい〳〵皿に書きちらした。そしてそれ等が赤い焔や靑い炎を吐いてゐる竈の中に入れられるのを見てから宿へ歸つた。金彌と同ちやんとは宿の庭を素通りして、貸馬の溜りへ馬を見に行つた。

妻は部屋の障子を締切つて、長椅子に仰向けに寐て、ハンカチーフで顔を蔽ふてゐた。着物はそのまゝだが伊達卷を纒つて、帶や足袋や腹帶は亂雜に拋り散らかしてゐた。

「お蔦は加減が惡いのかい」母の顔は些つと險しくなつた。が、妻は眠つてゐる振りして返事をしなかつた。

「鹽原よりも此處の方が遊び場所が多さうですね」母はお蔦の方は打遣つて置いて、湯元道の景色を褒めなどしながら、着物を着替えて、お藤を連れて、湯殿へ行つた。

私は妻が何が氣に觸つて狸寐入をして拗ねてゐるのか見當がつかなかつた。母が出て行くと、妻は寐返つて腕枕をした。まだ顏にかけてゐるハンカチーフは太い息でふは〳〵動いてゐる。私は取合はないで湯に浸つて來やうかと思つたが、今朝の散歩で私の心の憂欝な影は一時吹消されてふは〳〵とお目出たくなつてゐたので、氣がねなしにじやれて見たくなつて、つと側へ寄つて、突如にハンカチーフを取除けた。……案外にも妻の頰には涙が傳はつてゐた。

「貴下は彼方へ行つてらつしやい。私一人でいゝのよ」私が何も訊かない先に、妻はかう云つて、骨太い手で輕く私を突いた。

「可笑な女だね。何が悲しいのだい。理由もないのに旅へ來て泣いたりして、皆んなの興を削ぐやうなものだよ」

「ぢや、私一人今直ぐにでも東京へ歸ります。お藤もゐるし同ちやんもゐるのだから、貴下は一月でも二月でも遊んでゐらつしやいまし」

「歸るたつてお母さんが許しやしないさ。何ならお母さんに聞いて御覽な」私はこゝでは母を笠に着た。なだめる道具に使つた。

「母さんが何ですよ。私些とも怖かあないことよ。貴下は母さんに悅しがらせを云つて喜ばせて置けば私のことなぞ構はなくつてもいゝと思つてるんだわ。……母さんは老人だから何時死ぬか知れないの。

有合はせの小說や講談を讀んだりしてゐたが、讀み物はさしたる興味もないので、ところ〴〵見るばかりで、後は妻や妹に讓つた。

長椅子に足を伸して、山野の潤い眺めを恣まゝに眺めて、眠氣させば眠つて「健さんお午餐には何にしませうね」などゝ母に訊かれる時、贅澤な口を利いてゐられるのは、勿體ないやうだが、慾には限りがないのか、事業の上でも財產の上でも自分の實權を揮はれないのが、今のやうな暇な時に考へてゐると物足らなかつた。そして、どうせ追出されやすまいから我儘をしてやれ、裸一貫になつても衣食に窮するやうなおれぢやなし、女にも不自由するやうなおれぢやないと力んで、さうなつてからの生涯の波瀾を空想したりして、食に飽き眠りに飽いた後のつれ〴〵を慰めてゐた。

同じ旅館にゐる人々の樣子も、私自身の目擊や女達の細かい注意によつて日に〳〵明かにされた。七八人連れで杵屋の師匠も加はつて、毎日長唄のお浚ひをしてゐるのもあつて、その部屋の前には同宿の者や通りすがりの浴客がよく立留つてゐた。ある日は娘達の踊りがあるといふので、女中が見に行けと勸めた。

「お母さん、見て入らしやい」と、私が勸めると、遊藝好きの母は、見物するよりもどれほどに踊れるか批評してやるやうな口吻を洩らした。

「貴下は踊りなんかに趣味を有つてゐないから駄目ね。ふうちやんは行かない？」と妻は云つた。

「私蟲齒が痛くつて」

「ぢや、お醫者に診てお貰ひな。兄さんに連れてゝつて頂くといゝわ」

「少しの間我慢してれば癒るわ」

今まで何ともなさゝうだつたのに、お藤は急に口を歪めて痛さうな顏付をした。母と妻とは頻りに治療を勸めて置いて、三味線の音のしてゐる方へ出掛けた。

「痛むのかい。藥を差して貰へば直ぐに癒るよ」私は座を立つて直ぐに醫者へ連れて行かうとした。

「いゝのよ。そんなでもないの」

「ぢや、踊り見物の代りに腹こなしの散歩でもして來るか、ようちやんはまだこの後の山へ上つたことがないだらう」

「えゝ」

秘密で私が話したいことがあると云つたのを、お藤は思出して聞きたがつてゐるに違ひなかつた。素直に私の命に從つて私に隨いて出た。出かけに賑かな部屋を顧みると、瘦せた男が扇子を開いてしやなしやな踊つてゐて、母と妻とは見物席の中に畏つて座つて熱心に見惚れてゐた。

「男の踊りは厭らしいね。溜らないねあんな腰付をして」私は憎て口を利いて通り過ぎたが、お藤は未練らしく頻りに顧みて、唄聲にも耳を留めてゐた。

橋の側から山へ上りながら、私は女がせい〳〵息を切らして隨いて來るのを面白がつて、暫く道を急いだ。樹木の蔭は深く、人にもあまり會はなかつた。小さい石の鳥居のある石段に腰をかけて、後れて來るお藤を待合はせながら、私は戲れの趣向を考へた。

「あゝ苦しい。こんなだと來るんぢやなかつた」お藤は石段によろけかゝつた。

「ふうちやんは姉さんより身が輕いから、弱つたら僕が負ぶして上げやう」

「まさか、赤ん坊ぢやあるまいし。……私、これでも姉さんとさう違はないのよ。胴が太つてるから」と、お藤は波打つてゐる浴衣の上から胸を撫でゝ見せながら、「初めの間は兄さんを脊の高い人とばかり思つてゐたけれど、見馴れたせいか、この頃はさう高い方ぢやないわね」

「ふうちやんなぞに虐められるから低くなつたのかも知れないさ」

私は見え透いた戯談らしくさう云つて、相手が無邪氣に否定するのを待受けてゐたが、意外にもお藤が

「本當にさうかも知れないわ」と眞顔で同意したのに驚かされた。

「嘘だよ。……戯談だよ」と、私は直ぐに取消した。

「兄さんは遠慮深いからいけないのよ。兄さんが金彌にまで氣をかねてゐらつしやるのが私にはようく分つてゐますよ。あの子は母さんが甘やかして、生意氣になつていけないから、兄さんが嚴しい仕付をして下さればいゝと思つてるんですのに」と、お藤がつゞいて大人振つた口を利くのが、私にはますます意外であつた。

「金彌ぐらゐの時代には我儘をさせとく方がいゝんだよ。吝々した眞似はさせないで鷹揚に育てたいとお母さんも云つてゐらつしやつたよ」

「無駄遣ひをするくらゐなことはどうでもいゝけど、まだ十六やそこいらで隨分生意氣よ。昨夕も新内の流しを座敷へ呼んで語らせてゐた時、新内は少し離れて聞くに限るなんて、自分だけ階子段の側まで

行つて後向きで聞いてゐたでせう。私何だか歯が浮くやうな氣がしてよ」

なあんだ、そんなことが癪に觸つてゐるのかと、私は拍子拔けがした。あのしよぼ〳〵目の干からびた顏した婆さんや爺さんの新内なら、私だつて側で聞くのは溜らなかつたと、むしろ金彌に同感しながら、

「東京にゐても此處にゐても、大勢一緖にゐるんだから」私は讓步して睦じく暮さねばならないことを敎師めいた口吻で說いて、更にお藤を促して、樹木に遮られて見えない山の頂まで足を運ばせやうとしたが、お藤は動かなかつた。

「運動はもう澤山よ。私、此處で兄さんのお話を聞いてゐればいゝのよ」と、私の云ふことは殊勝らしく聞いてゐた。

「僕も修身の講義をする筈ぢやなかつた。ふうちやんに聞かせるもつといゝお話があるんだよ……察しがついて？」

上の方から流れて來た靄は二人の身體を包んで、周囲は朧ろに見えた。

「緣談でせう？。屹度さうだわ」

お藤が平氣なために私の思はせ振りは何にもならなかつた。

「緣談は緣談でも、ふうちやんに一圖に迷つてる男があるんだよ。僕の知人だが、家へは滅多に來ない人だ。……その人を見たければ先方へ知られないやうにして見せて上げるよ」

「……そして、その男の人が今伊香保へ來てるといゝわね。……兄さんも隨分つくり事がお上手ね」

八月も末になつてゐたので、日に〱浴客の減るのが目についた。石段の町にも華美の色が褪せて、涼しい夕風にも山の湯の淋しい秋が感ぜられた。毎日謡ひを謡つてゐた客も去り、三味や踊で賑はつてゐた部屋は跡片付の女中の拂塵や箒の音で騷々しかつた。

このくらゐで切上げて歸りたくもあるし、もつと湯の利目が見えるまでゐたくもあるしと云つたやうな氣持が、女達の言葉のはし〱に現はれてゐた。新聞で見る東京の暑氣は毎日九十度近かつた。

「伊香保にも飽いた」と、私は妻の側で呟いた。

「連れが二人減ると急に淋しくなつたわね」と、妻は云つて「貴方は玉突でも大弓でも稽古なさるといゝわ。今は何處も空いて來たから、極りの惡い思ひをしないで、ゆつくり稽古が出來るでせう。さうすれば退屈醒ましにもなるし、貴方の身に藝がついて一生の得になるのよ」

「さうさね。僕もかう無藝ぢや幅が利かないから、何かやるかね。いつそお前やふうちやんをお師匠さんにして、長唄でも習はうかな」私はいくらか本氣でさういふ氣になつた。

「母さん。兄さんは長唄が習ひたいんですつて」と、妻は聲高く吹聽して笑つた。

「結構ね……」煙草を吸ひながら、お藤と土產物のことか何かでひそ〱話をしてゐた母は取合つて呉れなかつた。

「だけど、男が長唄なんか習ふと浮氣ものらしくていけないわ。同ちやんのやうに唄つたり踊つたりすると、男も安つぽく見えるぢやないの」

「矢張自分は肱枕突いて人の唄ふのを聽いてゐて、お祝儀でも投げてやるのがよささうだね」

向ひの山の麓に一點の燈火が微かに光つてゐた。底の深い濶い夜に手頼りなげに光つてゐるその燈火を見下しながら、私は幾萬の燈火で眞晝のやうに明るい東京の市街を心に浮べてゐた。

「此處のお湯に入ると子供が出來るんですつて。だから夫婦連れで來て永く逗留してる人があるんですつて。女中がさう云つてゐてよ」と、妻は云つた。

「迷信だらう」

「でも實例がいくらもあるんですつて」

「ぢや、此間からぞろ〳〵山を下りて歸つて行つた若い奧さん達は皆んな伊香保のお土産に子種を持つて行つた譯だね。迷信にしてもさう思つて見ると面白いね」

「兄さんも何かお土産を買ひなさるでせう」

母がふとさう云つて此方を顧みたので、私達は目を見合はせてくす〳〵笑つた。母は怪訝な顏して、

「何が可笑しいの」と云つたが、自分も口元に微笑を浮べた。

蟲の音のみ繁くて、あたりは寂としてゐた。(完)



錦之助

長田幹彦

午過ぎから少しづゝ曇りだした空は、日が翳(かげ)りはじめると一緒に漸次と雪催ひになつて、薄氣味の惡い鼠色の雲が何處からこんなに湧いて來るのかと思はれるばかりに煙の白い底光りを帶びて東からも北からもしつきりなしに流れて來る。家並の陰には濃い隈が出來て、そこから黄昏がかすかに滲み出て、空には寒い風が吹いて通るのか電信柱にとまつた鴉の姿も薄寒さうに肩を縮めてゐる。小待合や藝者屋の軒をつらねたこの一筋の街は、仲の町の通りからゝ電車通りからもまるで懸け離れた一廓のやうに、湯島天神の樹立をすぐ脊なかに背負つて、宵々ごとにはいかにも色町らしい風情をみせてゐるのである。廣くもない路の面は眞白に乾ききつて、門々の敷石を洗つた殘り水のあとだけがところどころに黒く浮いて、もう粋な軒燈や御神燈が暮れやらぬ四邊に白く點つてゐる家もあつた。そして客を待つ妓の三味線の連れ彈

きが何處からか賑やかに聞えて來る。

丁字家の門口のところにはそこの〆太郎と隣りの春柳の小福、それに向ふ隣りの桔梗家の花駒、その三人の雛妓がかたまりあつて、先刻からもう二十分ばかりも何やらごとごと饒舌り續けてゐるのである。いづれも身じまひを濟まして、拔けるほど白く化粧つた顏を格子先から射す御神燈の光にほのめかせながら、平常から仲のいゝ同志なので極めて熱心に話の筋を追つてゐるが、三人ながら襟のかゝつた平常着に細帶をぐるぐる卷きにしたその樣子が宵の口だけに艶めかしく美しい。

「それで、どうして？　あんたその儘歸つて來ちやつたの？」花駒は手の先のさゝくれをそつと剝きながら云つてゐる。

「そりや誰れだつて怒るわよ、そりや姐さんのこつたからそれくらゐなことは我慢してゐなきあいけないか知れないけど、私厭だわ。いくら私たちが雛妓だつて、そんなにまで馬鹿にしないだつていゝと思ふわ。」〆太郎は一番年嵩だけにこましやくれた口をきく。

「そりやさうだわ。うちの姐さんもよくそれを云ふのよ。お座敷へ出りや誰れだつて五分々々なんですものねえ。それに蝶吉姐さんなんざあ、この土地へ來てからまだ一年にもならないんぢやありませんか。そりや淺草ぢやどんないゝ姐さんだつたか知らないけど、こゝぢや私たちの方が先輩だわ。」

「先輩だつて、ほゝゝゝ。」小福は花駒の顏をみてくすくす笑ふ。

「だつてさうぢやないの。一月でも二月でも先へ出てゐるものの方が先輩だわ。」

「そりやさうだけど、先輩つてえと何だか變だわねえ。」小福は〆太郎の方を向きながら云ふ。

〆太郎はちよつと上眼で花駒をみて、

「そりや仕方がないわ。花駒さんはお仕込みが違ふからね。ほゝゝ。」

「好かないねえ。」

三人は顔を見合せてくすくす笑ふ。

その途端に、横丁の突當りのところから、突然テヽンテンと浮いた小太鼓の音が此方へ曲つて來た。とみると、それは此の土地へ二日置きには必ず廻つて來る猿廻はしで、もう長い年月の間、雨の日風の日を除いては殆んど一度も丁場を缺かしたことのない律氣な物貰ひなのである。かうした色街は從つて貰ひも多いので、彼にとつては大事な得意も一軒や二軒ではなかつたが、そのうへ彼の連れてゐる小猿が並すぐれて悧巧者で、藝もよくするし、人の云ふこともよく聞き分けるので此の近邊では雛妓や下地子や時には若い姐さん達にまでひどく可愛がられて、「花ちやん」「花ちやん」と字名までつけられ、一介の畜類としては身に餘る榮燿に浴してゐるのであつた。したがつて猿曳きまでがその身のうへを妙に與次郎の物語りに引き附けられ、下谷の三の輪から來るといふことが藝者や雛妓の單純な頭にあの「堀川」の家を想像させ、家へ歸れば年老つた母親がゐでもするやうに、見て來たやうな嘘を吐く人の口から到頭あらぬ親孝行といふ噂さへ立つてゐたのであつた。無智な猿に藝を仕込んで、市川錦之助と藝人らしい名までつけ、それをその日の命の糧にかうして廣い東京の町々を練つて歩く猿曳きにはそんな噂が勿怪の幸ひになる場合が多かつた。

太鼓の音が漸次と近づいて來ると、話に耽つてゐた三人の雛妓は一樣にそつちを振向いて、なかでも

〆太郎は、
「あら、花ちやんが來てよ。」と、さも嬉れしさうに云ふ。
「ま、ほんとに、今日は大變遲いのねえ。」と、花駒はうつとりそつちをみながら云つたが、小猿の花公はもうちやんとこの町を覺えてゐると見え、猿曳の脊中の箱のうへゝちやんと納まつて、眼をくるくるさせながら彼方此方の御神燈をのぞいてゐる。
丁字家の前へ來ると、猿曳きは日に燒け黑んだ顏をくづして、平常は花ちやんが被つてゐる紅い帽子を自分の頭から取りながらの愛想らしく、
「へい、姐さんがた。今晩は。へゝゝゝ。これ、花ちやん。さ、お前もそこへ降りて、姐さん方に御挨拶を申上げな。」と、云ひながらやつこらさと脊中の箱を門口の石疊みへおろす。
花ちやんはそれも待たずに猿曳の肩からぴよいと地面へ降りて、いきなり三人の雛妓の前へ行つていつて、ぴよこぴよこお辭儀をする。
三人の雛妓はいぢらしさうに笑ひながら見てゐたが、やがて〆太郎はふと思ひだしたやうに、
「あ、さう云へばそれ此間のちやんちやんこはどうしたかしら。もう出來たでせうねえ。」と、云つて、いきなり後の格子戸をからりと開け、
「姐さん、花ちやんが來ましたよ。」と、大きな聲でなかへ聲をかける。
と、なかでは、細目に開いた上端の障子に銀杏返しの影がさと映つて、丁字家の姐さんのお勝がきりりと引緊まつた顏を出す。それと一緒に櫺子窓からは抱妓の〆奴が雨袖を肩へのつけて、後から箱屋に

帶をしめて貰ひながらこれも顔を出す。

猿曳きは

「今晩は。」と、皆に低く辭儀をして、扨て小太鼓をテレンテンと刻んで叩きながら、花ちやんにいつもの藝をさせやうとして節面白い唄を中音に唄ひだす。近邊の小兒や、子守兒などはその太鼓の音にそゝられて、瞬く間に繩飛びや、鬼ごつこをやめて、丁字家の前へ集まつて來る。

花ちやんは唐子の着るちやんちやんこのやうなものを着せられて、きよとりとした顔をしながら雛妓達の前でちよんきなみたやうな踊りを踊つてゐたが、一旦奥へ引込んでいつた姐さんが今度は友禪の寄せ布でつくつたちやんちやんこを持つて出て來たので、うつとりその顔を見て踊りの手をやめてしまふ。

「これ、錦之助さん、太夫さん。お前さん怠けちや可けませんよ。さ、早く踊りをおどつて。さあさ、踊つたり踊つたり、塞の磧で石つんで、……」

姐さんはそのまゝ下駄を突懸けて格子先へ出て來て、又踊りだす花ちやんをみてゐたが、

「ほゝゝゝ。あの格好はどうだらう。もうこれを貰ふつてえことをよく知つてるんだねえ。」

と、云つて、猿曳きの顔をみながら、

「ねえ、お前さん。こりや家の妓が皆して布を出しあつて作つたんだから、花ちやんに着せてやつて下さいな。さうして今日はもう藝なんかさせなくたつていゝわ、遲いから。」

猿曳きはそれを聞くと太鼓をうすくかすらせて腰を二つに折りながら

「へえへ、どうも毎度有難う御坐います。さ、花ちやん、ちやんとお辭儀をして、結構なお着物を頂戴す

るんだよ。なんです。その足は、は丶丶丶。どうもお行儀の惡い太夫さんですねえ。」

花ちやんはさう云はれると金壺眼をくるくるさせながら、ちんと膝を揃へてぺこぺこお辭儀をする。

「ほ丶丶丶。可愛いゝねえ。」と、云ひながら姐さんがちやんちやんこをその小さな毛むくぢやらな手のところへ持つていくと、花ちやんはそれを引奪るやうにとつて、自分で斜つかいに着ながらちよこちよこと猿曳きのところへ驅けてゆく。

皆はその格好が可笑しいと云つて、聲をあげて笑つた。前を通る着飾つた藝者達も、

「今晩は」などゝ挨拶しながら立止つてのぞいてゆく。

猿曳きはやがて花ちやんの脊からそのちやんちやんこをぬがせて、幾度か姐さんの方へ禮をしながら、

「どうも毎度結構なものを有難う御坐います。これ、花ちやん、太夫さん。これはお前さんがお嫁さんを貰ふ時に着るのですよ。それまで大切にしてお藏へしまつとくんだよ。」

花駒はそれをきくとぷすりと噴笑して、

「あら、厭あだ、お藏だつて。ほ丶丶丶丶。」

「へ丶丶丶丶。この太夫さんは男振りがいゝもんで御坐んすから、此節は晩にちよくちよく家をあけて困りますよ。」

花ちやんはけろりとした顔をして膝のうへへ手を突いて坐つてゐる。

皆は又腹を抱へた。

姐さんは家のなかをのぞきこんで、

「これ、お春、あのいつものお寶と、それからさつきのお芋を持つて來て花ちやんにお造りよ。」と云ふなかゝらは十五六の小婢が襷がけのまゝおひねりと、大きな薩摩芋をもつて出て來た。それが花ちやんの手へ渡されると、彼は又幾度か有難うをして愛嬌を賣る。そしておひねりだけを猿曳きへ渡して、芋は早速兩手に抱へて白齒をむきだしながら貪るやうに喰ひだす。

「ほゝゝゝ食べものが出ると色氣がないねえ。」姐さんも笑へば、雛妓達も笑つた。

花ちやんは芋をたべてしまふと、今度はどうしたものか俄かに噪ぎだして、眩ろしいやうにそこらを驅けて廻りながらしまひには門口の四ツ目垣へつかまつて、ぶらんこをはじめたりした。皆はそれを面白がつてげらげら笑つてゐた。

と、その時、又横丁の突當りのところから喇叭の聲がして、

「豆腐い、とうふい。」と、賣聲をたてながらやつぱりこの土地を廻つて歩く源さんといふ豆腐屋が來た。いつものやうに天秤棒へ豆腐桶と油揚げの籠とをさげて、よちよちしながら此方へ歩いて來る。

花ちやんは喇叭の聲に聞き耳をたゝてゐたが、やがて怪訝さうに源さんの姿をみて、今度はつかつかと往來の方へ出ていつた。そしてふらふら右左へゆれる荷を小首を傾げてみてゐたが、何と思つたか、ついと後の方の籠へ飛び乘つて、片手で荷綱を握りながら意氣揚々と四邊をみまはす。

豆腐屋の源さんは天秤で中心をとつて歩いてゐるので、すぐ籠が重くなつたのを感じていきなり後を振顧つた。と、そこには花ちやんが小生意氣な顏をして乘つてゐるので、彼はその場合むかむかッとしたらしく、大聲をたてゝ、

「こん、畜生、何んだつてそんな處へ乗りやあがるんだ。」と、叫んで、恐い眼をして花ちやんを睨んだ。
周圍に見物してゐた者は誰れも彼れも花ちやんが一生懸命に愛嬌を賣つてゐるものと思つて、げらげら笑ひながら見てゐた。その笑ひが一層源さんに腹を立てさせたものとみえ、彼はそのまゝ放り投げるやうにそこへ荷を置いて、天秤棒をぬくが早いか
「畜生ッ。」と、云つて、その先で力一杯に花ちやんを突いた。
花ちやんははづみを喰つて、たわいもなくころころと地面のうへゝ轉り落ちたが、そのまゝ、キヽと異樣な叫び聲を立てゝ猿曳きの方へ遁げてゆく。
源さんは手もなく花ちやんが遁げていつてしまつたので稍力ぬけがしたやうに少してれてゐたが、此の近邊でも豆腐は旨いが意地惡で通つた彼のことゝて、やがて肩を聳やかして相手を嚇かすやうな格好をしながら云ひがゝりをつけはじめた。
「やい、猿曳き。そりや手前の猿か?」その言葉は火のやうだつた。
猿曳きは今迄笑つてゐた顏を急に臆病らしくして、相手の顏色を讀むやうに見ながら、
「へえ、左樣です。」と、腰を低くゝして答へる。
「へえ、左樣ですもねえもんぢやねえか。何んだつて俺の荷の上へ猿をのつけやがつた。口あけの荷に猿なんかのつけやがつて縁喜でもねえ、何んとか挨拶をしろやい。」
「どうもまことに濟みません。何も分らねえ畜生のことつてすからどうか御勘辨を願ひます。」
「なんだと、何んにも物の分らねえ畜生だと、嘘を云ひやがれ、手前はそれを賣りもんにして商賣をし

てゐるんぢやねえか。」

猿曳きは揉み手をしてぴよこぴよこ頭をさげながら、

「まことに濟みません。何も惡氣があつてしたんぢや御坐んせんからどうか御勘辨を。」と、頻りにあやまりながら今度は花ちやんの頭へ手をのつけて、

「さあ、花ちやん。お前さんが惡いんだ。どうか御勘辨を願ひますつてあの兄さんに謝んな、よ、さあから手をついて謝るんだ。」とまるで我が子にでもさとすやうに云ふ。

花ちやんは突かれたところが痛いのかしきりに肩の下のところを甜めてゐたが、さう云はれるとその言葉を聞き分けて、石疊みへ手をついて譯も分らずにぺこぺこ頭をさげる。その樣子がいかにもいぢらしいので丁字家の姐さんも、雛妓達も皆默つて感じ入つたやうに見てゐる。

豆腐屋はあんまり小器用に猿が働くので却て馬鹿にされてゐるやうな氣がしたとみえ、又かつとして、

「畜生、小面の憎い猿だ。人間を馬鹿にしてゐやがる、どうするか覺えてゐろ。」と、云ひざま、今度は天秤棒でその頭を厭といふほどどやしつけた。

花ちやんはキヽと消魂しい叫び聲をたてヽ猿曳の股倉のところへ逍げ込んで、そのまヽ死んだやうに丸くなつて隱れてしまつた。

姐さんは吃驚して、

「あら、まあ、可哀さうに。源さんもう勘忍してやつたらいヽぢやないか。たかヾ畜生のこつたもの、そんなに酷い目に逢はせないだつてよさヽうなもんだ。」

「ほんとにねえ、何處か怪我しやしないかしら。」雛妓のひとりは猿曳きの方へ寄つてゆく。
豆腐屋の源さんは天秤棒を斜に突いて、まだ腹が癒えないやうに蒼くなつてぷりぷりしてゐる。
猿曳きは恨めしさうな顏をして、その樣子をみてゐたが、花ちやんの方をみると悸乎としたやうに、
「お、花ちやん、どうした、どうした。」と、云つて、彼を股のなかゝら抱き上げた。と、花ちやんは打ちどころが惡かつたと見えて、蜂谷の毛の間から紅い生血をしたゝらせて、氣を失つたやうに眼を細くしてぼんやり空をみつめてゐる。
それを見ると猿曳きは眼を丸くして、
「こりや大變だ。大怪我をしてゐる。」と、叫んだが、今度は自分がおろおろしだして、慄へる指先で創をしらべてみた。それは大して深い創にはなつてゐなかつたが、それでも天秤棒の金𢈀が打當つたものと見え五分ほどの丸い打撲傷になつてゐる。
「ほんとに酷え、まあ、あれほど謝まつてるのに、又打つなんてお前さんも隨分ぢやねえか。」猿曳きは猿と豆腐屋とを等分に見ながら云つたが、その眼には臆病な憤怒が燃えてゐた。
源さんは又猛りたつて、
「何を。打つたのが惡いけえ。惡けりやどうでもしてくれ。さあ、どうでもしてくれ。」と、猿曳きの方へ詰め寄つてゆく。
猿曳はぶるぶる體を慄はして、眼に涙を一杯溜めながら豆腐屋の顏をきつと見てゐたが、やがて、
「いや惡いつて譯ぢやねえが、まあ、考へてみて下さい、こんな畜生がちよつと荷へのつかつたからつ

て、それでこんなに怪我までさせなくつてもよさゝうなもんぢやねぇか。」と、一生懸命に云ひながら、さも氣がゝりらしく花ちやんの樣子を伺つてゐる。

花ちやんは時々痙攣するやうに皓齒をむき出すだけで身動きもしない。

雛妓達は心配さうに眼を丸くしてその顏をみてゐる。

源さんは一旦握りしめた天秤棒を荷の上へ置くには置いたが、もう一足猿曳の方へ詰め寄つて、

「口あけの荷へけちをつけやがつたから擲られるのは當然ぢやねぇか。それに文句があるてぇなら聞かうぢやねぇか。え、さ文句があるなら聞かうぢやねぇか。」源さんはひとつには何かしら引込みがつかなくなつてしまつたので、心にもないことを態と虛勢を張つて云つてゐるやうにもみえた。

猿曳きはあんまり源さんが執拗いので、到頭腹を据ゑかねたか、自分も眞蒼になつて、

「そりや文句を云やあいくらだつて私の方にも云ひ分はあらあね。畜生が手をついて謝まつてるのに、それが分らねぇやうな奴あ人間ぢやねぇ。」と、いらいらした聲で云ひ放つ。

「なんだと、默つて聞いてゐりやつけ上りやがつて、人間でねぇたあ、よくもぬかしやがつた。こん畜生。」と云ひざま、彼はいきなり螺のやうな拳をかためて何か云はうとする猿曳きの頰桁をぽかりと撲つた。

急に猿曳きの顏はねぢ曲げられたやうに眞黑になつた。そしていきなり猿をそこへ放り出して起ちあがつた。

見物人はぱつと傍へ退く、雛妓達は、

「あれ、あれ。」と、云ひながら丁字家の格子のなかへ遁げ込んでしまふ。四邊は色街のなごやかな宵に

似つかはしからぬ殺氣を帶びて來た。

丁字家の姐さんはさすがに見兼ねて、兩人の間へ割つて入りながら、

「まあお前さん達は何んだね、人の家の前で喧嘩を初めちや人立ちがして困るぢやないか。止めておれよ。自體源さんの方が惡いんだ。人を揶つたりして、……」

と、云つて引止めようとしたが、二人はそれを突きのけて到頭取組合ひをはじめた。猿曳は根がひよひよした男なので手もなく押伏せられて、ぽかぽか意氣地もなく撲られてしまふ。

花ちやんは石疊のうへゝちよこんと足を投げだして眼をしばたきながらその樣子をみてゐたが、その時何と思つたかむつくり起き上つてちよこちよこ二人の方へ匐つていつていきなり源さんの足へがぶりと喰ひついた。よく馴らされた小さな花ちやんもその時、初めて野獸らしい形相を見せた。

「あッ、痛えッ」と、叫んで源さんは猿曳きを抑へつけたまゝ喰ひつかれた足を無闇に動かして猿を蹴放さうとする。花ちやんはまるで木の枝へでも噛りついたやうに手と足でしつかり源さんの足を抱いて蹴られる度に彼方此方へ踏みにじられながら噛みついた脚胖を離さうとしない。しばしの間は宵闇のなかで人と猿とが異樣な呻めき聲をたてながら三巴になつて揉み合ひへし合ひしてゐた。

その騷ぎを聞きつけて丁字家からは箱屋が飛び立して來る。橫丁の細路次からは二番組の半纏を着た火消しの若い者が出て來る。なかには座敷へゆく藝妓、待合へでも上らうといふやうな若い客、そんなものも集まつて來て、見る見るそこらは黑山のやうな人立ちになた。

丁字家の姐さんは花ちやんの忠義振りですつかり興奮していきなり若い者へ聲をかけながら、

「ちよいと、菊さん。お前さん手をかしてその豆腐屋の源公を抑へてやつとくれよ、ほんとに憎らしいつちやないんだ。」

二番組の半纏は人込みを分けて取組み合つてゐる二人の方へ寄つていつたが、いきなり源さんの襟がみをつかんで、引起しながら、

「やい、源公。よせやい、大人氣もねえ。」と、云つて、組合つてゐる猿曳きを離させようとした。源さんはやつと起き上つて夢中で喰ひついてゐる猿を痛いまぎれに首を攫んでさんざん打つたが、猿曳はさうはさせまいとして又源さんの方へ泣き聲をたてゝ攫みかゝつてゆく。花ちやんはその隙にもうぐたぐたになつてよろよろ人の足の間から石疊みの方へぬけだして、そこにあつた箱の傍へ打倒れてしまふ。

若い者はそれを見ると、

「やあ、可哀さうに。花ちやんぢやねえか。もう眼を落としてゐやがらあ。」と、云つたが、そこへ姐さんはしやしやり出て來て、今の一まきを口早に饒舌る。その言葉の裏には豆腐屋の源さんに對する憤怒があらはに見えてゐた。

片方では源さんと猿曳きとが又取組み合ひをはじめた。

「うぬ、まだかゝつて來やがるか、性懲りのねえ野郎だ。」ぽかりと撲る音がいたましく聞えて來る。

若者はそれをみると急に勇肌な口前になつて、

「やい源公。いゝ加減にしろよ。可哀さうにこんな畜生を半殺ろしにしやがつて、この喧嘩を俺に賣る氣か。」と突如源さんの片腕をつかんで此方へ引き寄せる。

源さんは眼を引釣らせて、

「さう云ふ譯ぢやねえが、口あけに猿は緣喜が惡いぢやねえか。」

「聞いた風なことを云ふねえ。そんなに緣喜が惡けりやかうしてやらあ。」と、云つたかと思ふと若い者はつかつかと源さんの荷のそばへいつて、突如足をあげて桶も籠も一緒に溝のなかへ蹴込んでしまふ。桶の水はさつとこぼれて、柔い肌をした豆腐がどろどろと溝泥のなかへ落ち込んでゆく。

さつきからむかむかしてゐた見物達は、小氣味のいゝその仕業で溜飲をさげたか、わッと囃したてる。

源さんは呆氣にとられたやうな顏をしてみてゐたが、やがて又カッとして人の見境ひもなく、

「な、なにをしやがるんでえ。」叫びながら今度は若い者に喰つてかゝつていつた。

二人の間には火花の出るやうな格鬪がはじまつた。そして源さんは今度はあべこべにひどく撲られて鼻血を出したが、何と思つたか「覺えてゐやがれッ。」と、凄い捨て臺白を殘して、人込みを蹴散らすやうにさつと分けて何處へともなく驅けていつてしまつた。

若い者はその後を追はうとしたが、苦笑ひをして、

「ほんとに仕樣のねえ野郎だ。弱え癖に腕だてをしやがつて。」と勝ち誇つたやうに云つて「さ、みんな立つんぢやねえ。立つんぢやねえ。」と、そこらの見物人を追つた。

石疊みのところでは猿曳きがもう精も根もぬけはてたやうに肩で息をしながら、

「どうも有難う御坐んした。私や殺ろされるかと思ひました。」と、眞顏で云つて幾度か頭を下げたが、若い者はその傍へ寄つて

「花ちやんはどうした？　死にやしねえか？」と、心配さうに云ふ。

その時花ちやんは猿曳の懐へ入つて甘えるやうにクンクン云ひながら小さくなつてゐた。息は通つてゐても、白眼がちに眼があがつてゐるところを見ると、ひどく體の工合が惡さうだつた。時々兩方の手をぶるぶると痙攣させる。その都度に猿曳きも體を慄はしてゐる。

姐さんは眉を顰めて、

「ほんとに大丈夫かねえ、菊さん、お前が來てくれなけりやきつと花ちやんは殺ろされてしまつたんだよ。まあ、よかつたねえ。」

「はゝゝ。人助けでなくつて、猿だすけだねえ。」若い者は得意らしく鼻で笑つてゐる。

そこへ近邊の藝者屋の姐さんや抱妓がひと騒ぎ靜まると集まつて來て、いづれも

「まあ、花ちやんですか。可哀相にねえ。」などゝ云つて、いろんな菓子やら芋やらを持つて來てくれたが、花ちやんはそれを取らうともしなかつた。

猿曳きもすつかり氣を落として途方に暮れたやうにぼんやりしてゐる。

そこへ又横丁の方からは大勢の人の足音がして、そのなかに巡査の佩劍の音が聞える。

若者は耳敏くそれを聞きつけて、

「や、畜生、巡査を呼んで來やがつたな。構ふことはねえ、こつちが正當なんだからうんと云つてやんな。」と、猿曳きの方を向いて力をつけるやうに云ふ。

やがて源さんは泥にまみれた半纏のまゝ一人の巡査を連れてやつて來た。そのあとから近邊の惡たれ

どもが彌次馬になつてぞろぞろついて來る。
巡査は丁字家の前まで來るとふと猿曳をみて、靴音高く止まりながら、
「お前か？」と云ふやうに彼を睨む。そして手帳を出して、いきなり權柄づくに
「おい、こら、お前の家は何處だ。」と訊問をはじめる。
猿曳きはおどおどしながら下谷の三の輪にある自分の家の一千何百といふ番地をいふ。そして花ちやんの藝名の市川錦之助まで律氣な調子で云ふ。
巡査はそれをつけてしまふと、今度は猿曳きの傍へ寄つて、道路法を楯にこんな往來で何故猿を舞はせたといつて頻りに彼を叱つた。そして喧嘩のさばきになると一も二もなく猿曳きが惡いやうに云つてそれで又二十分ほど口汚く彼を罵つた。
その時猿曳きは眼に一杯涙をためて、吃りながら、
「旦那、私が惡う御坐いました。どうか御勘辨なすつて下さいまし。」と、極めて卑屈な態度で云つたがやがて、「かう申しちやお上へ楯つくやうで御坐んすが、どうか私の方ばかりお叱りにならずに、豆腐屋さんの方へも何とか仰有つて下さいまし。私はこんなしがねえ猿曳きはして居りますが、今まで何ひとつ曲つたことをした覺えはねえんです。それにこの猿めが一寸荷へ乘つたからつて、こんな半殺ろしの目に逢はせられちや全く埋まりやしません。可哀さうにこの花公が眼を落としてしまやあ、この私までが明日から御飯にはなれなきあならねえんです。旦那方にとつちやこんな畜生でも、私にや命の親なんで御坐んすからなあ。」と、云つて、しほしほした眼からぼろりと涙をこぼした。そして袖口を嚙んでは

花ちやんの創から洒いて來る血を拭いてやりながら我が子のやうにいたはつた。
それをみると丁字家の姐さんは我慢が出來なくなつたやうに口を出して、
「あの差し出がましう御坐んすけど、ほんとにこの人が惡いんぢや御坐んせん。この前交番に被居つた瀧本さんもよく御存知ですが、この人はもう四年も五年も此の土地へ入つてゐますんで、誰れに聞いて御覽なすつても身性はすぐに分ります。今の喧嘩も全くあの豆腐屋の源さんの方から賣つたんで、決して此の人が惡いんぢや御坐んせん。」と、彼をかばつてやつた。
巡査はそれを聞くとさばきに困つたやうな顏をして、
「お前ははじめつから見とつたのか？」と、云ふ。
「え、見てゐたどころぢや御坐んせん。この妓もあの妓もみんなみてゐましたんです。」と云つて姐さんは事の一伍十什をすつかり話した。
巡査から叱られるのは今度は源さんだつた。今日の商ひのもとをすつかりふいにしてしまつたうへに怪我までして、そのうへ彼は巡査から散々に叱られたが、さすがに相手が相手なので返す言葉もなかつた。
見物人は又溜飮をさげた。
そこへ向ふ隣りの桔梗家から小婢がとことこ驅けて來て、
「花駒さん、お座敷ですよ。」と、頓狂な聲をかける。
それで張り詰めてゐた場面は急に轉換して、巡査は彌次馬を追ひ拂ひながらやがて又もと來た道の方

へ歸つてゆく。
宵闇はいつの間にかすつかり夜になつてしまつた。そして見物人はひとり去り二人去りして、盛り場だけに集るのも早いかわりに散るのも早かつた。
源さんはまだ餘憤が去らないやうに仁王のやうな格好をして突立つてゐたが、丁字家の格子先には若い者の菊さんが立つてゐるので、猿曳きにかゝつていく譯にもいかず、到頭しまひには根負けして、ぶつぶつ口小言をいひながら散々になつた荷をかたづけていつの間にか歸つていつてしまつた。喇叭を吹かないので、ふと氣づいた時には天秤棒にきしむ荷綱の音だけが横丁を曲つていつた。
姐さんはそれを見送つて、
「ほんとうにいけ好かない豆腐屋だねえ。どうかしてこの土地へ來られないやうにしてやり度いもんだ。」と、云つてゐる。
猿曳きは〆太郎が持つて來て吳れた白木綿でやつと花ちやんの頭に繃帶をしてやつた。そしてさもいとしげに今丁字家で貰つた友禪のちやんちやんこを出して着せて、
「どうだ、しつかりしなけりや可けねえぜ。お前に病ひつかれると俺あ明日からお飯が食へなくなるからなあ。ほんとにしつかりして吳んなよ。」と、傍にゐる人も眼に入らないやうにやさしくいたはつて、手足を撫でゝやる。
花ちやんはじつとして首を垂れてゐた。生き死にの不安がそのまはりに淡く漂つてゐた。
姐さんが一圓はづむのをきつかけに〆太郎が五十錢、誰れが三十錢といふ風に花ちやんと猿曳きに對

する同情金は瞬く間に四圓ばかり集まつた。

姐さんはそれを紙へ包んで猿曳きに渡しながら、

「あのこれは少しだけど皆して集めたんだから是非持つてつてお呉れな。ほんとに私の家でそんな目に逢はされたも同じなんだから、もつとどうにかしなけりやならないんだけど、又、何か不自由なことでもあつたらいつでも云つておいで、どうでもしてあげるから。」

猿曳きは嬉れしさに涙ぐんで、

「どうも毎度御親切に有難う存じます。へえ、もうこんなにして頂いて、もし花ちやんが畜生でなけりやどんなに喜ぶか知れやしません。有難う御坐います。」と、幾度か禮を云つて、その紙包を懷のなかの花ちやんの鼻の先へ持つてゆきながら、

「これ、花ちやん。しつかりしなよ。姐さん方からこんなに澤山お錢を頂いたんだぜ。さ、有難うつて御禮を申上げな。」と、云つて振つてみせたが、彼は眼をくるくるさせるだけで手も出さうとはしなかつた。

「こりやほんとに體が惡くなつたに相違御坐んせん。困つたことになつたもんだ。私も長年猿曳稼業をしてゐますが、こんな性のいゝ猿は初めてゞ御坐んした。それにつまらないお話しをするやうで御坐んすけど、私にや女房もなし子もなしするもんですから、人一倍煩惱がかゝりましてなあ。」と、又ほろりとする。

姐さんも貰ひ泣きして、

「ほんとにねえ、猿にはお醫者様はないのかしら。」
「あるにはありますけど、根つから駄目で御坐んす。手鹽にかけて育てただけにこつちの煩惱の方が强う御坐んすからお醫者様の療治を默つて見てゐられねえんで御坐んすなあ。この鹽梅ぢや明日つから又當分商買を休まなけりやなりません。」
さう云ひながら猿曳きは石疊みのうへの箱をとつて肩にかけ、花ちやんはそのまゝ懷へ入れて、厚く禮を云つて歸つていつた。肩寒げに俯向いて懷のなかの花ちやんをのぞきながら歩いてゆくその後影は御神燈の薄闇を縫つてやがて廣小路の方へ消えてしまつた。
姐さんはそのあとを見送りながら、
「ほんとに可哀さうにねえ。」と、呟いたが、それまで格子先に突立つてゐた菊さんは、
「人間ぢやあゝはいかねえ。猿だけに人情がうつるねえ、姐さん。」と、しんみり云つた。
「あら、お前さん、まだそこにゐたの。まあ、なんだね。」と、姐さんはにつこり笑つてみせる。
「はゝゝゝゝ。とんだ愁嘆場だつたねえ。」
「笑談ぢやないよ。お前さんはさしみち悟助つてな役をつとめて呉れたんだから、一寸寄つてお茶でも飮んでおいでな。ほゝゝゝゝ。」
「有難う、まあ預けときやせう。さう云へば私やお風呂へいく筈で出て來たんだつけ。はゝゝゝ。馬鹿にしねえね。」
「ほゝゝゝ。笑談ぢやない。……」

皆は態とらしい高聲で笑つた。

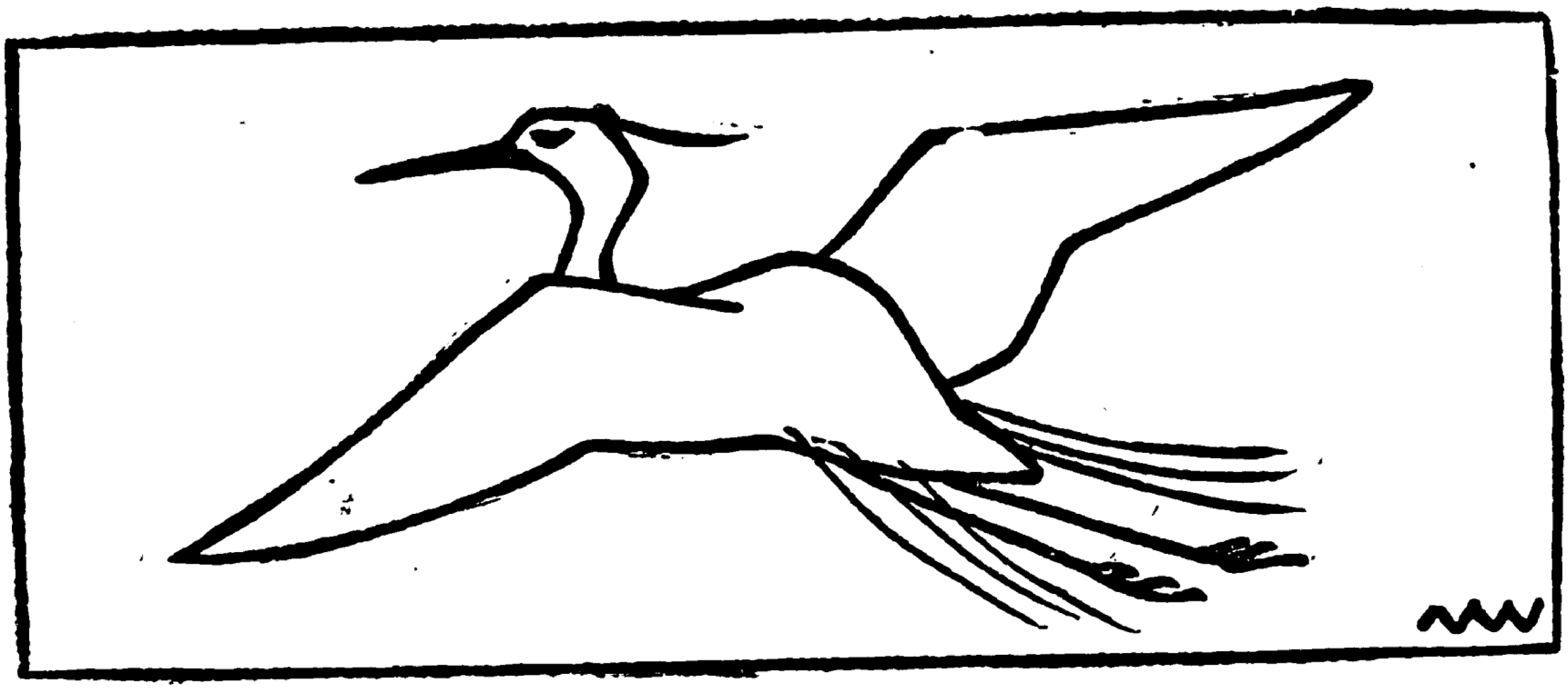
菊さんはそのまゝ空を仰いで、

「うゝ、寒い。寒いと思つたら雪が降つて來やがつた。」と、捨て言葉をいつてやがて半纒の裾をくるりとまくつて頭を包みながらまた横丁の闇へ姿を消してしまつた。

とみると、まるで粉のやうな糠雪がいつの間にか御神燈の灯影にちらちらと落として來た。

それからはもう半年近くなるが、その猿曳はその後ついに一度も姿を見せなかつた。あの花ちやんも怪我がもとになつて死んでしまつたのだらうといふ果敢ない噂だけがその土地の雛妓達の間に殘つてゐる。

夕暮ごとに源さんの喇叭だけは今もなほ毎日々々横丁を眞直に通つていつた。それから後は妙に意地になつてその街では得意の數もがらりと落ちたが、それでもその喇叭の音を聞くと、町の人達は源さんのつくる豆腐の味を思ひ出すのであつた。(をはり)



手巾

芥川龍之介

東京帝國法科大學敎授、長谷川謹造先生は、ヴエランダの籐椅子に腰をかけて、ストリントベルクのドラマトゥルギイを讀んでゐた。

先生の專門は、殖民政策の研究である。從つて、讀者には、先生がドラマトゥルギイを讀んでゐると云ふ事が、聊、唐突の感を與へるかも知れない。が、學者としてのみならず、敎育家としても、令名ある先生は、專門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の學生の思想なり感情なりに、關係のある物は、暇のある限り、必一應は、眼を通す。現に、昨今は、先生の校長を兼ねてゐる或高等專門學校の生徒が、愛讀すると云ふ、唯、それだけの理由から、オスカア・ワイルドのデ・プロフアンディスとか、インテンションズとか云ふ物さへ、一讀の勞を執つた。さう云ふ先生の事であるから

今、讀んでゐる本が、歐洲近代の戯曲及俳優を論じた物であるにしても、別に不思議がる所はない。何故と云へば、先生の薫陶を受けてゐる學生の中には、イブセンとか、ストリントベルクとか、乃至メエテルリンクとかの評論を書く學生が、ゐるばかりでなく、進んでは、さう云ふ近代の戯曲家の跡を追つて、作劇を一生の仕事にしようとする、熱心家さへゐるからである。

先生は、警抜な一章を讀み了る毎に、黄いろい布表紙の本を、膝の上へ置いて、ヴエランダに吊してある岐阜提灯の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量は、ストリントベルクを離れてしまふ。その代り、一しよにその岐阜提灯を買ひに行つた、奥さんの事が、心に浮んで來る。先生は、留學中、米國で結婚をした。だから、奥さんは、勿論、亞米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも變りがない。殊に、日本の巧緻なる美術工藝品は、少からず奥さんの氣に入つてゐる。從つて、岐阜提灯をヴエランダにぶら下げたのも、先生の好みと云ふよりは、寧、奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然る可きであらう。

先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提灯と、さうして、その提灯によつて代表される日本の文明とを思つた。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆、これと云ふ程の進歩も認める事が出來ない。否、寧、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救濟する途を講ずるのには、どうしたらいゝのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論斷した。武士道なるものは、決して偏狹なる島國民の道德を以て、目せらる可きものではない。却てその中には、歐

米各國の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趣を知らしめる事が出來るならば、それは、獨り日本の精神的文明に貢獻する所があるばかりではない。惹いては、歐米各國民と日本國民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は國際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう。——先生は、日頃から、この意味に於て、自ら東西兩洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐる。かう云ふ先生にとつて、奥さんと岐阜提灯と、その提灯によつて代表される日本の文明とが、或調和を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。

所が、何度かこんな滿足を繰返してゐる中に、先生は、追々、讀んでゐる中でも、思量がストリントベルクとは、縁の遠くなるのに氣がついた。そこで、ちよいと、忌々しさうに頭を振つて、それから又丹念に眼を細い活字の上に、曝しはじめた。すると、丁度、今讀みかけた所にこんな事が書いてある。

——俳優が最も普通なる感情に對して、或一つ恰好な表現法を發見し、この方法によつて成功を贏ち得る時、彼は時宜に適すると適せざるとを問はず、一面には夫が樂である處から、又一面には、夫によつて成功する處から、動もすればこの手段に赴かんとする。しかし夫が即ち型なのである。……

先生は、由來、藝術——殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と數へる程しか、見た事がない。——嘗て或學生の書いた小説の中に、梅幸と云ふ名が、出て來た事がある。流石、博覽强記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。そこで序の時に、その學生を呼んで、訊いて見た。

——君、梅幸と云ふのは何だね。

——梅幸——ですか。梅幸と云ひますのは、當時、丸の内の帝國劇場の座附俳優で、唯今、太閤記十段目の操を勤めて居る役者です。

小倉の袴をはいた學生は、慇懃に、かう答へた。——だから、先生は、ストリントベルクが、簡勁な筆で論評を加へて居る各種の演出法に對しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない。唯、それが、先生の留學中、西洋で見た芝居の或ものを聯想させる範圍で、幾分か興味を持つ事が出來るだけである。云はば、中學の英語の敎師が、イディオムを探す爲に、バァナァド・ショウの脚本を讀むと、大した相違はない。が、興味は、曲りなりにも、興味である。

ヴエランダの天井からは、まだ灯をともさない岐阜提灯が下つてゐる。さうして、籐椅子の上では、長谷川謹造先生が、ストリントベルクのドラマトゥルギイを讀んでゐる。自分は、これだけの事を書きさへすれば、それが、如何に日の長い初夏の午後であるか、讀者は容易に想像のつく事だらうと思ふ。しかし、かう云つたからと云つて、決して先生が無聊に苦しんでゐると云ふ譯ではない。さう解釋しようとする人があるならば、それは自分の書く心もちを、わざとシニカルに曲解しようとするものである。——現在、ストリントベルクさへ、先生は、中途でやめなければならなかつた。何故と云へば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の淸興を妨げてしまつたからである。世間は、いくら日が長くても、先生を忙殺しなければ、止まないらしい。……

先生は、本を置いて、今し方小間使が持つて來た、小さな名刺を見た。象牙紙に、細く西山篤子と書いてある。どうも、今までに逢つた事のある人では、ないらしい。交際の廣い先生は、籐椅子を離れな

がら、それでも念の爲に、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはり、それらしい顔も、記憶も浮んで來ない。そこで、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上へ置くと、先生は、落着かない容子で、銘仙の單衣の前を直しながら、ちよいと又、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやつた。誰でもさうであらうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、かう云ふ場合は多く待遠しい。尤も、日頃から謹嚴な先生の事だから、これが、今日のやうな未知の女客に對してでなくとも、さうだと云ふ事は、わざわざ斷る必要もないであらう。

やがて、時刻をはかつて、先生は、應接室の扉をあけた。中へはいつて、おさへてゐたノッブを離すのと、椅子にかけてゐた四十恰好の婦人の立上つたのとが、殆、同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸の單衣を着て、それを黑の絽の羽織が、胸だけ細く剗した所に、帶止めの翡翠を、凉しい菱の形に、うき上らせてゐる。髮が、丸髷に結つてある事は、かう云ふ些事に無頓着な先生にも、すぐわかつた。日本人に特有な、丸顏の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顏を、どこかで見た事があるやうに思つた。

――私が長谷川です。

先生は、愛想よく、會釋した。かう云へば、逢つた事があるのなら、向ふで云ひ出すだらうと思つたからである。

――私は、西山憲一郎の母でございます。

婦人は、はつきりした聲で、かう名乘つて、それから、叮嚀に、會釋を返した。

西山憲一郎と云へば、先生も覺えてゐる。やはりイブセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、專門は確か獨法だつたかと思ふが、大學へはいつてからも、よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹つて、大學病院へ入院したので、先生も序ながら、一二度見舞ひに行つてやつた事がある。この婦人の顏を、どこかで見た事があるやうに思つたのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容するやうに、驚く程、よく似てゐるのである。

――はあ、西山君の……さうですか。

先生は、獨りで頷きながら、小さなテエブルの向ふにある椅子を指した。

――どうか、あれへ。

婦人は、一應、突然の訪問を謝してから、又、叮嚀に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾(ハンケチ)であらう。先生は、それを見ると、早速テエブルの上の朝鮮團扇をすすめながら、自分もその向ふ側の椅子に、座をしめた。

――結構なおすまひでございます。

婦人は、稍、わざとらしく、室(へや)の中を見廻した。

――いや、廣いばかりで、一向かまひません。

かう云ふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷茶を、客の前に直させながら、直(すぐ)に話頭を相手の方へ轉換した。

——西山君は如何です。別段御容態に變りはありませんか。

——はい。

婦人は、つつましく兩手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、靜にかう云つた。やはり、落着いた、滑な調子で云つたのである。

——實は、今日も悴の事で上つたのでございますが、あれもとうとう、いけませんでございました。存生中は、いろいろ先生にも御厄介になりまして……

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釋した先生は、この時丁度、紅茶々碗を口へ持つて行かうとしてゐた。なまじひに、くどく、すすめるよりは、自分で啜つて見せる方がいいと思つたからである。所が、まだ茶碗が、柔な口髭にとどかない中に、婦人の語は、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飮んだものだらうか、飮まないものだらうか。——かう云ふ思案が、青年の死とは、全く獨立して、一瞬の間、先生の心を煩はした。が、何時までも、持ち上げた茶碗を片づけずに置く譯には行かない。そこで先生は思切つて、がぶりと半碗の茶を飮むと、心もち眉をひそめながら、むせるやうな聲で、「そりやあ」と云つた。

——……病院に居りました間も、よくあれが御噂など致したものでございますから、御忙しからうとは存じましたが、お知らせかたがた、御禮を申上げやうと思ひまして……

——いや、どうしまして、

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇をとり上げながら、憮然として、かう云

つた。

——とうとう、いけませんでしたかなあ。丁度、これからと云ふ年だつたのですが……私は又、病院の方へも御無沙汰をしてゐたものですから、もう大抵、よくなられた事だとばかり、思つてゐました。——すると、何時になりますかな、なくなられたのは。

——昨日が、丁度初七日でございます。

——やはり病院の方で……

——さやうでございます。

——いや、實際、意外でした。

——何しろ、手のつくせる丈は、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんものでございます。

こんな對話を交換してゐる間に、先生は、意外な事實に氣がついた。それは、この婦人の態度なり、擧措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。聲も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたのに相違ない。——先生には、これが不思議であつた。

——昔、先生が、伯林に留學してゐた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに當る、ウイルヘ

ルム第一世が、崩御された。先生は、この訃音を行きつけの珈琲店で聞いたが、元より一通りの感銘しかうけやうはない。そこで、何時ものやうに、元氣のいい顔をして、杖を脇にはさみながら、下宿へ歸つて來ると、下宿の小供が二人、扉をあけるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色のジヤケツを着た、十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた、九つになる男の子である。子煩惱な先生は、譯がわからないので、二人の明い色をした髮の毛を撫でながら、しきりに「どうした。どうした。」と云つて慰めた。が、小供は、中々泣きやまない。さうして、洟をすすり上げながら、こんな事を云ふ。

——おぢいさまの陛下が、おなくなりなすつたのですつて。

先生は、一國の元首の死が、小供にまで、これ程悲まれるのを、不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係と云ふやうな問題を、考へさせられたばかりではない。西洋へ來て以來、何度も先生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたやうな心もちは、未に忘れやうとしても、忘れる事が出來ない。——先生は、今も丁度、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを、不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく、第二の發見が次いで起つた。——

丁度、主客の話題が、なくなつた靑年の追懷から、その日常生活のディテイルに及んで、更に又、もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が、先生の手をすべつて、ぱたりと寄木

の床の上に落ちた。會話は無論寸刻の斷續を許さない程、切迫してゐる譯ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。團扇は、小さなテエブルの下に——上靴にかくれた婦人の白足袋の側に、落ちてゐる。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手が、のつてゐる。勿論これだけでは、發見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるへてゐるのに氣がついた。ふるへながらそれが、感情の激動を強いて抑へやうとするせいか、膝の上の半巾を、兩手で裂かないばかりに緊く、握つてゐるのに氣がついた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれてゐるやうに、繡のある緣を動かしてゐるのに氣がついた。——婦人は、顏でこそ笑つてゐたが、實はさつきから、全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて、顏をあげた時に、先生の顏には、今までにない表情があつた。見てはならないものを見たと云ふ敬虔な心もちと、さう云ふ心もちの意識から來る或滿足とが、多少の芝居氣で、誇張されたやうな、甚、複雜な表情である。

——いや、御心痛は、私のやうな小供のない者にも、よくわかります。

先生は、眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠もつた聲で、かう云つた。

——難有うございます。が、今更、何と申しましても、かへらない事でございますから……

婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顏には、依然として、ゆたかな微笑が、たたへてゐる。——

× × × × × × ×

それから、二時間の後である。先生は、湯にはいつて、晩飯をすませて、食後　櫻實をつまんで、それから又、樂々と、ヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時までも薄明りをただよはせて、硝子戸をあけはなした廣いヴェランダは、まだ容易に、暮れさうなけはひもない。先生は、そのかすかな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へのせて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の赤い房を眺めてゐる。例のストリントベルクも、手にはとつて見たものの、まだ一頁も讀まないらしい。それも、その筈である。——先生の頭の中は、西山篤子夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた。

先生は、飯を食ひながら、奥さんに、その一部始終を、話して聞かせた。さうして、それを、日本の女の武士道だと賞賛した。日本と日本人とを愛する奥さんが、この話を聞いて、同情しない筈はない。先生は、奥さんに熱心な聴き手を見出した事を、滿足に思つた。奥さんと、さつきの婦人と、それから岐阜提灯と——今では、この三つが、或倫理的な背景を持つて、先生の意識に浮んで來る。

先生はどの位、長い間、かう云ふ幸福な回想に耽つてゐたか、わからない。が、その中に、ふと或雜誌から、寄稿を依頼されてゐた事に氣がついた。その雜誌では「現代の青年に與ふる書」と云ふ題で、四方の大家に、一般道徳上の意見を徴してゐたのである。今日の事件を材料にして、早速、所感を書いて送る事にしよう。——かう思つて、先生は、ちよいと頭を掻いた。

掻いた手は、本を持つてゐた手である。先生は、今まで閑却されてゐた本に、氣がついてさつき、入

れて置いた名刺を印に、讀みかけた頁を、開いて見た。丁度、その時、小間使が來て、頭の上の岐阜提灯をともしたので、細(こまか)い活字も、さほど讀むのに煩しくない。先生は、別に讀む氣もなく、漫然と眼を頁の上に落した。ストリントベルクは云ふ。——

——私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顏は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それを我等は今、臭味(メツツヘン)と名づける。……

先生は、本を膝の上へ置いた。開いたまゝ置いたので、西山篤子と云ふ名刺が、まだ頁のまん中にのつてゐる。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穏な調和を破らうとする、得體の知れない何物かである。ストリントベルクの指彈した演出法と、實踐道徳上の問題とは、勿論ちがふ。が、今、讀んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と型(マニイル)と——

先生は、不快さうに二三度、頭を振つて、それから又、上眼を使ひながら、ぢつと、秋草を描(か)いた岐阜提灯の明い灯を、眺め始めた。………(九・二十・五)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵劵代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直るに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢（及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正五年九月廿八日印刷納本
大正五年十月一日發　行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印　刷　人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話[illegible]下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

